

五ヶ山Ⅰ

五ヶ山大野遺跡

五ヶ山川口遺跡

五ヶ山網取遺跡

福岡県文化財調査報告書 第237集



1. 五ヶ山網取遺跡全景（南上空から）



2. 五ヶ山網取備蓄銭

序

本報告書は、平成16年度から21年度に五ヶ山ダム建設に伴い福岡県県土整備部河川開発課の執行委任を受けて発掘調査を行った、筑紫郡那珂川町大字五ヶ山に所在する五ヶ山大野遺跡、五ヶ山川口遺跡、五ヶ山網取遺跡の発掘調査報告書です。

五ヶ山大野遺跡では、地元から「お地藏さん」と呼ばれる石組建造物の調査を実施し、その実態に迫ることができました。

五ヶ山川口遺跡では、五輪塔の調査を実施し、この土地に暮らした人々の精神性をうかがう端緒を得ることができました。

五ヶ山網取遺跡では、縄文時代および中世の集落跡を中心とした遺跡であることを確認しました。また、網取では備蓄銭が確認されたことで、古くから中世の遺跡として知られていましたが、今回の調査により、中世の区画溝を伴う大規模な集落が築かれていたことがわかりました。まさに調査直前まで生活が行われていた、五ヶ山網取集落の礎である中世からの変遷を推測することが可能になり、この地域における歴史を知る上で非常に貴重な資料を得ることができました。

本書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の一助となれば幸いです。なお、発掘調査・報告書の作成に至る間には、那珂川町教育委員会を筆頭に関係諸機関を始めとする多くの方々にご協力・ご助言を頂きました。

特に地域の方々には、豊かな五ヶ山の歴史について、沢山の事をご教示いただきましたことを厚く感謝いたします。

平成 25 年 3 月 31 日

九州歴史資料館長
西谷 正

例 言

- 1 本書は、五ヶ山ダム建設に伴い、平成16年度から平成21年度まで福岡県教育委員会が実施した、埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 本書で報告する遺跡は、五ヶ山大野（ごかやまおおの）遺跡、五ヶ山川口（ごかやまかわぐち）遺跡、五ヶ山網取（ごかやまあみとり）遺跡の3遺跡である。
- 3 発掘調査および報告書作成は、福岡県県土整備部河川開発課の執行委任を受け、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。
- 4 本書に掲載した遺構写真の撮影は、調査担当者の飛野博文・今井涼子・岡寺未幾・城戸義廣が、遺物写真の撮影は、北岡伸一が行った。ラジコンヘリによる空中写真は九州航空株式会社に委託し、気球写真による空中写真撮影は（株）空中写真企画に委託した。
- 5 本書に掲載した遺構図の作成は、中山朱美・宮里好子・吉川孝子・渡邊廣子・野北祐子・前田直子・樋之口浩一の協力を得て、調査担当者が行った。
- 6 出土遺物の水洗、復元、実測、浄書作業は、調査担当者ならびに九州歴史資料館および福岡県教育庁総務部文化財保護課太宰府事務所で行った。
- 7 出土遺物および図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
- 8 本書に使用した地形図は、国土交通省国土地理院発行の、1/50,000 地形図「不入道」を改変したものである。本書で使用する方位は、国土座標Ⅱ系による座標北である。
- 9 本書の執筆は、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ－2を今井、Ⅲ－1を飛野、Ⅲ－3は遺構を岡寺が、備蓄銭を佐々木隆彦が、土製品等を岸本圭が、その他の遺物を吉田東明が行い、編集は吉田・岡寺が行った。

目 次

I	はじめに	1
1	調査に至る経過	1
2	発掘調査の経過	2
3	調査組織	2
II	位置と環境	5
III	調査の内容	9
1	五ヶ山大野遺跡	9
(1)	調査の概要	9
(2)	「お地蔵さん」の調査	9
(3)	小結	13
2	五ヶ山川口遺跡	17
(1)	調査の概要	17
(2)	基本層序	17
(3)	遺構と遺物	20
(4)	小結	25
3	五ヶ山網取遺跡	27
(1)	調査の概要	27
(2)	1区の遺構と遺物	27
(3)	2区の遺構と遺物	45
(4)	3区の遺構と遺物	50
(5)	4区の遺構と遺物	65
(6)	5区の遺構と遺物	75
(7)	6区の遺構と遺物	88
(8)	7区の遺構と遺物	89
(9)	備蓄銭の調査	159
(10)	その他の出土遺物	176
(11)	小結	202
IV	おわりに	204

図 版 目 次

- 巻頭図版 1. 五ヶ山網取遺跡全景（南上空から）
2. 五ヶ山網取備蓄銭
- 図版 1 1. 五ヶ山大野遺跡遠景（南西から）
2. 「お地蔵さん」遠景（北西から）
3. 「お地蔵さん」基壇全景（北西から）
- 図版 2 1. 「お地蔵さん」基壇全景（南西から）
2. 同上（北東から）
3. 「お地蔵さん」基壇上面（北西から）
- 図版 3 1. 石垣（北から）
2. 階段付近の石垣（西から）
3. 1トレンチ（南西から）
- 図版 4 1. 2トレンチ（北西から）
2. 墓地検出状況（西から）
3. 「お地蔵さん」石仏
- 図版 5 1. 五ヶ山川口遺跡調査前全景（東から）
2. 五ヶ山川口遺跡全景（東から）
3. 集石 1（北から）
- 図版 6 1. 集石 2（北から）
2. 集石 3（南東から）
3. 土坑 1（東から）
- 図版 7 出土遺物
- 図版 8 1. 五ヶ山網取遺跡 1 区完掘状況（西上空から）
2. 2 区完掘状況（西上空から）
- 図版 9 1. 3 区完掘状況（東上空から）
2. 4 区完掘状況（南上空から）
- 図版 10 1. 5 区完掘状況（東上空から）
2. 7 区完掘状況（東上空から）
- 図版 11 1. 1 区縄文竪穴建物 1・2（東から）
2. 1 区土坑 3（東から）
3. 1 区土坑 4（東から）
- 図版 12 1. 2 区北壁土層断面図（南から）
2. 2 区縄文竪穴建物 1 土層（東から）
3. 2 区縄文竪穴建物 1 完掘状況（北から）
- 図版 13 1. 2 区縄文竪穴建物 1 遺物出土状況
2. 2 区集石遺構 1（東から）
3. 2 区土坑 1（東から）
- 図版 14 1. 3 区土坑 2（西から）
2. 3 区土坑 3（南から）
3. 3 区土坑 6（北から）

- 図版 15 1. 3区土坑7(南から)
2. 3区土坑8(西から)
3. 3区溝2(南から)
- 図版 16 1. 4区土坑3(西から)
2. 4区土坑4(東から)
3. 5区北壁(北から)
- 図版 17 1. 5区土坑1(西から)
2. 5区土坑2(西から)
3. 5区埋甕(南から)
- 図版 18 1. 5区井戸2(北から)
2. 5区井戸2(西から)
3. 5区井戸3(西から)
- 図版 19 1. 6区完掘状況(北から)
2. 6区完掘状況(東から)
3. 7区北壁(東から)
- 図版 20 1. 7区縄文1号住(東から)
2. 7区縄文1号住土層断面(東から)
3. 7区縄文方形土坑6・7(東から)
- 図版 21 1. 7区縄文方形土坑10(南から)
2. 7区縄文方形土坑11(東から)
3. 7区縄文方形土坑14(東から)
- 図版 22 1. 7区溝1 b-b'断面(南から)
2. 7区埋甕(南から)
3. 7区土坑3(南から)
- 図版 23 1. 7区土坑4(北から)
2. 7区土坑5(南から)
3. 7区土坑12(南から)
- 図版 24 1. 備蓄銭再々埋納の祠
2. 祠下層の井戸枠
3. 備蓄銭の埋納状態
- 図版 25 備蓄銭埋納容器類
- 図版 26 1. 各種の古銭
2. 皇宋通寶
- 図版 27 1. 洪武通寶
2. 永樂通寶
- 図版 28 土器・陶磁器①
- 図版 29 土器・陶磁器②
- 図版 30 土器・陶磁器③
- 図版 31 縄文土器①
- 図版 32 縄文土器②
- 図版 33 縄文時代石器

第 29 図	1 区溝断面実測図 (1/40)	40
第 30 図	1 区溝出土遺物実測図 (1/3)	41
第 31 図	1 区ピットその他出土遺物実測図① (1/3)	43
第 32 図	1 区ピットその他出土遺物実測図② (1/3)	44
第 33 図	2 区遺構配置図 (1/200)	45
第 34 図	2 区北壁東西断面図 (1/80)	46
第 35 図	2 区竪穴建物 1 実測図 (1/60)	47
第 36 図	2 区竪穴建物 1 グリッド図 (1/40)	48
第 37 図	2 区出土縄文土器実測図 (1/3)	49
第 38 図	2 区集石遺構・土坑実測図 (1/30、1/60)	49
第 39 図	2 区出土遺物実測図 (1/3)	50
第 40 図	3 区出土縄文土器実測図 (1/3)	50
第 41 図	3 区遺構配置図 (1/200)	51
第 42 図	3 区掘立柱建物 1・2 実測図 (1/60)	54
第 43 図	3 区掘立柱建物 3・柵列実測図 (1/80)	55
第 44 図	3 区掘立柱建物 4・5 実測図 (1/60)	56
第 45 図	3 区土坑 1～8 実測図 (7 : 1/30、他 : 1/60)	57
第 46 図	3 区土坑・溝出土遺物実測図 (1/3)	58
第 47 図	3 区土坑 9～12 実測図 (1 : 1/60、他 : 1/30)	59
第 48 図	3 区ピット出土遺物実測図① (1/3)	61
第 49 図	3 区ピット出土遺物実測図② (1/3)	62
第 50 図	3 区ピット出土遺物実測図③ (1/3)	63
第 51 図	3 区その他出土遺物実測図 (1/3)	64
第 52 図	4 区遺構配置図 (1/200)	66
第 53 図	4 区出土縄文土器実測図① (1/3)	67
第 54 図	4 区出土縄文土器実測図② (1/3)	68
第 55 図	4 区掘立柱建物実測図 (1/80)	70
第 56 図	4 区鍛冶遺構・土坑実測図 (2・3 : 1/30、他 : 1/60)	71
第 57 図	4 区土坑出土遺物実測図 (1/3)	72
第 58 図	4 区ピット出土遺物実測図 (1/3)	73
第 59 図	4 区その他出土遺物実測図 (1/3)	74
第 60 図	5 区遺構配置図 (1/200)	77
第 61 図	5 区東壁・北壁断面図 (1/80)	76
第 62 図	5 区掘立柱建物実測図 (1/60)	79
第 63 図	5 区井戸・埋甕実測図 (1～3 : 1/60、4 : 1/30)	81
第 64 図	5 区井戸出土遺物実測図 (1/3)	82
第 65 図	5 区出土埋甕実測図 (1/4)	83
第 66 図	5 区土坑実測図 (3・5・7 : 1/40、他 : 1/30)	84
第 67 図	5 区土坑出土遺物実測図 (1/3)	85
第 68 図	5 区溝出土遺物実測図 (1/3)	86
第 69 図	5 区その他出土遺物実測図 (1/3)	87

図版 34	土製品等①
図版 35	土製品等②
図版 36	石製品等
図版 37	砥石①
図版 38	砥石②
図版 39	硯・鉄製品
図版 40	鉄製品、他の金属製品
図版 41	鞆羽口
図版 42	鉄滓

挿 図 目 次

第 1 図	那珂川町位置図	2
第 2 図	周辺遺跡分布図 (1/50,000)	6
第 3 図	「お地蔵さん」現況地形測量図 (1/200)	9
第 4 図	五ヶ山大野遺跡調査地点位置図 (1/2,000)	10
第 5 図	「お地蔵さん」基壇実測図 (1/40)	11
第 6 図	石垣実測図 (1/60)	12
第 7 図	2 トレンチ土層図 (1/60)	13
第 8 図	「お地蔵さん」石仏実測図 (1/4)	14
第 9 図	「お地蔵さん」周辺出土遺物実測図 (1/3)	15
第 10 図	五ヶ山川口遺跡土層図 (1/40)	17
第 11 図	五ヶ山川口遺跡調査地点位置図 (1/1,000)	18
第 12 図	五ヶ山川口遺跡遺構配置図 (1/200)	19
第 13 図	集石 1・2 実測図 (1/20)	20
第 14 図	集石 3・土坑 1 実測図 (1/20)	21
第 15 図	出土遺物実測図① (1～4 : 1/3、他 : 1/4)	23
第 16 図	出土遺物実測図② (1/4)	24
第 17 図	出土遺物実測図③ (1/4)	25
第 18 図	五ヶ山網取遺跡調査区位置図 (1/1,000)	28
第 19 図	五ヶ山網取遺跡遺構配置図 (1/800)	29
第 20 図	1 区遺構配置図 (1/200)	30
第 21 図	1 区出土縄文土器実測図 (1/3)	31
第 22 図	1 区竪穴建物 1・2 実測図、遺物分布図 (1/60)	32
第 23 図	1 区掘立柱建物 1 実測図 (1/60)	34
第 24 図	1 区掘立柱建物 2・3 実測図 (1/60)	35
第 25 図	1 区鍛冶遺構出土遺物実測図 (1/3)	36
第 26 図	1 区石組遺構・鍛冶遺構実測図 (1 : 1/60、2・3 : 1/30)	37
第 27 図	1 区土坑実測図 (3 : 1/15、他 : 1/60)	38
第 28 図	1 区土坑出土遺物実測図 (1/3)	39

第70 図	6 区遺構配置図 (1/60)	89
第71 図	7 区遺構配置図 (1/200)	90
第72 図	7 区東南部下層 (縄文) 平面図 (1/200)・トレンチ土層図 (1/30) ..	92
第73 図	7 区竪穴建物 1 実測図 (1/30)	93
第74 図	7 区出土縄文土器実測図 (1/3)	94
第75 図	7 区方形土坑遺構配置図 (1/200)	95
第76 図	7 区方形土坑土層実測図 (1/200)	96
第77 図	7 区縄文方形土坑・土坑実測図 (1・4 : 1/30、他 : 1/20)	97
第78 図	7 区西南部下層 (中世) 実測図 (1/150)	99
第79 図	7 区掘立柱建物実測図 (1/60)	100
第80 図	7 区石垣出土遺物実測図 (1/3)	101
第81 図	7 区埋甕・土坑実測図 (1/30)	102
第82 図	7 区埋甕出土遺物実測図 (1 : 1/4、2・3 : 1/3)	103
第83 図	7 区土坑 1 ~ 6 実測図 (1・4 : 1/60、2・3 : 1/30、5・6 : 1/20) ..	104
第84 図	7 区土坑出土遺物実測図 (1/3)	105
第85 図	7 区溝 1 実測図 (1/200)	107
第86 図	7 区東壁および溝 1 - iv・v 土層断面図 (1/60)	108
第87 図	7 区溝 1 - i 土層断面図 (1/30)	109
第88 図	7 区溝 1 - i 出土遺物実測図① (1/3)	110
第89 図	7 区溝 1 - i 出土遺物実測図② (1/3)	111
第90 図	7 区溝 1 - i 出土遺物実測図③ (1/3)	112
第91 図	7 区溝 1 - i 出土遺物実測図④ (1/3)	113
第92 図	7 区溝 1 - i 出土遺物実測図⑤ (1/3)	114
第93 図	7 区溝 1 - i 出土遺物実測図⑥ (44 : 1/4、他 : 1/3)	115
第94 図	7 区溝 1 - ii 出土遺物実測図① (1/3)	116
第95 図	7 区溝 1 - ii 出土遺物実測図② (1/3)	119
第96 図	7 区溝 1 - ii 出土遺物実測図③ (31 : 1/4、他 : 1/3)	120
第97 図	7 区溝 1 - ii 出土遺物実測図④ (1/3)	121
第98 図	7 区溝 1 - ii 出土遺物実測図⑤ (1/3)	122
第99 図	7 区溝 1 - ii 出土遺物実測図⑥ (1/3)	123
第100 図	7 区溝 1 - ii 出土遺物実測図⑦ (1/3)	124
第101 図	7 区溝 1 - ii 南西端部出土遺物実測図 (1/3)	125
第102 図	7 区溝 1 - iii 出土遺物実測図① (1/3)	127
第103 図	7 区溝 1 - iii 出土遺物実測図② (1/3)	128
第104 図	7 区溝 1 - iii 出土遺物実測図③ (1/3)	129
第105 図	7 区溝 1 - iii 出土遺物実測図④ (1/3)	130
第106 図	7 区溝 1 - iv 出土遺物実測図① (1/3)	132
第107 図	7 区溝 1 - iv 出土遺物実測図② (1/3)	133
第108 図	7 区溝 1 - iv 出土遺物実測図③ (25・26 : 1/4、他 : 1/3)	134
第109 図	7 区溝 1 - iv 出土遺物実測図④ (1/3)	135
第110 図	7 区溝 1 - iv 出土遺物実測図⑤ (1/3)	136

第 111 図	7 区溝 1 - iv 出土遺物実測図⑥ (1/3)	137
第 112 図	7 区溝 1 - iv 出土遺物実測図⑦ (1/3)	138
第 113 図	7 区溝 1 - iv・v 出土遺物実測図① (1/3)	139
第 114 図	7 区溝 1 - iv・v 出土遺物実測図② (1/3)	140
第 115 図	7 区溝 1 - v 出土遺物実測図 (1/3)	141
第 116 図	7 区溝 1 - vi、溝 1 - vii 出土遺物実測図 (1/3)	142
第 117 図	7 区下層溝 1 - i、溝 1 - iv・v 間ベルト出土遺物実測図 (1/3)	143
第 118 図	7 区下層溝 1 - vii 出土遺物実測図① (1/3)	144
第 119 図	7 区下層溝 1 - vii 出土遺物実測図② (1/3)	145
第 120 図	7 区ピット出土遺物実測図① (1/3)	146
第 121 図	7 区ピット出土遺物実測図② (1/3)	147
第 122 図	7 区下層ピット出土遺物実測図 (1/3)	148
第 123 図	7 区遺構面出土遺物実測図 (1/3)	148
第 124 図	7 区下層遺構面出土遺物実測図 (1/3)	149
第 125 図	7 区トレンチ出土遺物実測図① (1/3)	150
第 126 図	7 区トレンチ出土遺物実測図② (1/4)	151
第 127 図	7 区トレンチ出土遺物実測図③ (1/3)	152
第 128 図	7 区その他の遺物実測図① (1/3)	154
第 129 図	7 区その他の遺物実測図② (1/3)	155
第 130 図	7 区その他の遺物実測図③ (1/3)	156
第 131 図	7 区その他の遺物実測図④ (1/3)	157
第 132 図	備蓄銭発掘地点 (1/1,000)	160
第 133 図	備蓄銭容器実測図 (1/4)	161
第 134 図	古銭の拓影① (実大)	168
第 135 図	古銭の拓影② (実大)	169
第 136 図	古銭の拓影③ (実大)	170
第 137 図	古銭の拓影④ (実大)	171
第 138 図	古銭の拓影⑤ (実大)	172
第 139 図	古銭の拓影⑥ (実大)	173
第 140 図	古銭の拓影⑦ (実大)	174
第 141 図	古銭の拓影⑧ (実大)	175
第 142 図	備蓄銭掘方出土遺物実測図 (1/3)	176
第 143 図	縄文時代の石器実測図① (1/2)	177
第 144 図	縄文時代の石器実測図② (1/2)	178
第 145 図	縄文時代の石器実測図③ (1/2)	179
第 146 図	縄文時代の石器実測図④ (1/2)	180
第 147 図	土製品等実測図① (1/2)	181
第 148 図	土製品等実測図② (1/2)	182
第 149 図	土器片円盤実測図 (1/3)	183
第 150 図	瓦実測図 (1/3)	184
第 151 図	石製品実測図① (1 : 1/3、2 ~ 4 : 1/4)	184

第 152 図	石製品実測図② (1/6)	186
第 153 図	石製品実測図③ (1/6)	187
第 154 図	石製品実測図④ (1/6)	188
第 155 図	石製品実測図⑤ (1/6)	189
第 156 図	石製品実測図⑥ (1/6)	190
第 157 図	石製品実測図⑦ (1/6)	191
第 158 図	石製品実測図⑧ (1/6)	191
第 159 図	石製品実測図⑨ (1/6)	192
第 160 図	砥石実測図① (1/3)	193
第 161 図	砥石実測図② (1/3)	194
第 162 図	砥石実測図③ (1/3)	195
第 163 図	硯実測図 (1/3)	196
第 164 図	金属製品実測図① (1/2)	197
第 165 図	金属製品実測図② (1/2)	198
第 166 図	鞆羽口実測図 (1/3)	199
第 167 図	鉄滓実測図 (1/4)	200

表 目 次

第 1 表	五ヶ山ダム関係発掘調査地点一覧	1
第 2 表	備蓄銭一覧	162
第 3 表	備蓄銭の法量一覧	164

I はじめに

1 調査に至る経過

現在建設中の五ヶ山ダムは、昭和41（1966）年完成の福岡県営南畑ダム、昭和52（1977）年完工の福岡市営脊振ダムに続いて二級河川那珂川に建設される三つ目のダムである。重力式コンクリートダムで、堤高約102.5m、総貯水容量は4020万m³である。福岡地区9市10町の水資源を確保し、洪水調節、流水の正常な機能の維持、異常渇水時の緊急補給等を目的としている。ダム軸は筑紫郡那珂川町大字五ヶ山地区であるが、貯水域、影響範囲は佐賀県神埼郡吉野ヶ里町大字松隈小川内地区に及ぶ。

昭和53（1978）～54（1979）年、例年にない少雨のため福岡都市圏は異常渇水に見舞われた。もともと福岡都市圏は人口の増加に伴い水の供給が不足気味であったため水源確保が急務となり、先述の役割を担う多目的ダムとして計画されたのが五ヶ山ダムである。昭和54～57（1982）年度にダム建設に向けての地形測量や物理探査などの予備調査、昭和58（1983）～62（1987）年度に実施計画調査が行われた。平成3（1991）年のダム軸決定を経て、平成9（1997）年にダム事業全体計画が認可された。平成16（2004）年度から付替道路工事が開始され、現在、平成29（2017）年の完成に向けて工事が続けられている。

ダム建設予定地に居住する住民の集団移転の具体化とともに、民俗や建造物等の文化財調査の実施が緊急課題となった。そこで、福岡、佐賀両県から推薦された委員で構成される五ヶ山ダム関係文化財調査指導委員会の指導の下、平成14（2002）～17（2005）年度に、自然、歴史、民俗、建造物、美術工芸の各分野の文化財調査が実施された。

埋蔵文化財に関する調査は、本県土木部河川開発課（現：県土整備部河川開発課）、北谷・五ヶ山ダム事務所（現：五ヶ山ダム建設事務所）及び那珂川町と協議を重ねながら進められた。平成15（2003）年11月5日付「埋蔵文化財の試掘調査の依頼について（依頼）」を受けて、まず、下梶原地区集団移転予定地の試掘調査が行われた。その結果を受け、平成16年度に発掘調査、平成18（2006）年に報告書が刊行された。

その後、ダム建設予定地における埋蔵文化財の調査は、水没地域居住者の住宅移転と建物等の除去が終了した地点から随時行われた。平成14～17年度実施の文化財調査並びに平成15～18年度実施の試掘調査結果を受け、平成16年度の五ヶ山大野遺跡の調査を皮切りに記録保存のための発掘調査が実施されることとなった。五ヶ山ダム建設予定地で、現在までに発掘調査が実施された地点は以下のとおりである。

第1表 五ヶ山ダム関係発掘調査地点一覧

	遺跡名	所在地	調査面積（㎡）	調査年度
1	五ヶ山大野遺跡	筑紫郡那珂川町五ヶ山字大野	160	H16
2	五ヶ山川口遺跡	同 五ヶ山字川口	300	H18
3	五ヶ山網取遺跡（1・2次）	同 五ヶ山字網取	3,000	H19
4	五ヶ山網取遺跡（3次）	同 五ヶ山字網取	2,300	H20
5	東小河内遺跡（1次）	同 五ヶ山字東小河内	2,460	H21
6	東小河内遺跡（2次）	同 五ヶ山字東小河内	2,810	H22
7	尼寺跡遺跡	同 五ヶ山字倉谷	3,400	H23

2 発掘調査の経過

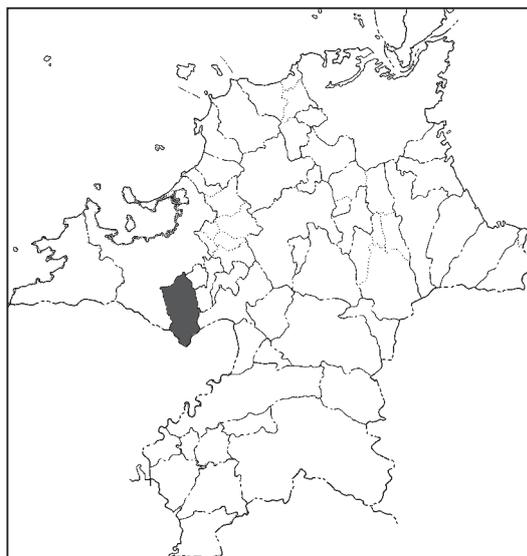
五ヶ山ダム建設予定地において、最初に記録保存のための発掘調査が実施されたのは五ヶ山大野遺跡である。

五ヶ山大野遺跡は国道 385 号線の付替工事が実施された地点である。平成 16 年 8 月 12 日に試掘調査が実施され、発掘調査が必要との所見が得られた。また、試掘調査地点と同じ谷筋の東側斜面で五輪塔が確認されていた。これを受け、平成 17 年 1 月 25 日に発掘調査に着手し、同 3 月 4 日に終了した。

五ヶ山川口遺跡は県道 1 号橋関係の工事が実施された地点で、五ヶ山地区の文化財調査の折に土壇風の高まりの上に五輪塔の部材が散乱していることが確認されていた。平成 18 年 6 月 7・8 日に周辺の

試掘調査を実施するも遺構は確認されなかった。そのため、土壇風の高まり部分についてのみ発掘調査を実施することとなり、平成 18 年 8 月 11 日に着手、9 月 13 日に終了した。

五ヶ山網取遺跡はダム建設に伴う国道 385 号の付替え部分にあたり、平成 19 (2007) 年 4 月 19 日に試掘調査を実施した。遺構、遺物が確認されたため、平成 19 年度の第 1 次・第 2 次調査、平成 20 年度の第 3 次調査の三ヶ年にわたって記録保存のための発掘調査を行った。第 1 次調査は 1・2 区を対象とし、平成 19 年 5 月 9 日に着手、7 月 6 日に終了。第 2 次調査は、平成 19 年 10 月 2 日から平成 20 (2008) 年 2 月 4 日までで、3・4 区の調査を行なった。第 3 次調査は、平成 20 年 6 月 3 日から平成 21 (2009) 年 2 月 27 日にかけて行い、年度前半に 5 区の調査を、年度後半に 6 区および 7 区の調査を行なった。



第 1 図 那珂川町位置図

3 調査組織

平成 16～24 年度の発掘調査・整理・報告に関わる関係者は次のとおりである。なお、平成 23 年度以降は組織改革により、文化財保護課調査第一係が担当していた業務は企画係に引き継がれ、埋蔵文化財調査業務全般は九州歴史資料館に移管されている。

福岡県県土整備部河川開発課

	平成 16 年	平成 18 年	平成 19 年	平成 20 年	平成 21 年	平成 22 年	平成 23 年	平成 24 年
課長	大場 優	井上徳太郎	西田直人	西田直人	後藤俊一	後藤俊一	後藤俊一	岡田裕彰
課長補佐	筒井保臣	江上直治	江上直治	江上直治	鍛冶寛志	鍛冶寛志	鍛冶寛志	木下義之
課長技術補佐	西田直人	後藤俊一	岡田裕彰	岡田裕彰	山本 潔	山本 潔	野上嘉久	野上嘉久
建設係長	野上嘉久	野上嘉久	平川忠敬	平川忠敬	奥村 修	奥村 修	奥村 修	弓削田 仁
技術主査	濱地健吾					篠原誠治	中尾誠二	中尾誠二
							秦 裕二郎	
							神崎孝二	
主任技師	中川順野	中川順野	畑野貢二	畑野貢二	畑野貢二	秦 裕二郎		大籠稔大

畑野貢二	田中快彰	秦 裕二郎	秦 裕二郎	神崎孝二		犬丸博紀
四元秀哲	四元秀哲	四元秀哲	神崎孝二			

福岡県五ヶ山ダム建設事務所

	平成 16 年	平成 18 年	平成 19 年	平成 20 年	平成 21 年	平成 22 年	平成 23 年	平成 24 年
所長	井上徳太郎	西田直人	後藤俊一	後藤俊一	岡田裕彰	岡田裕彰	岡田裕彰	須貝秀樹
工務課長	堤 晴夫	岡田裕彰	鴨打 章	鴨打 章	宇都宮道明	宇都宮道明	森山 衛	森山 衛
副長	奥村 修	龍 啓明						
工務第二係長			原口和也	原口和也	原口和也			
技術主査			尊田誠二	尊田誠二	尊田誠二			
工務第三係長						田口隆二	田口隆二	田口隆二
技術主査						志鶴浩一	志鶴浩一	志鶴浩一

福岡県教育庁総務部文化財保護課 (調整・調査・整理・報告)

	平成 16 年	平成 18 年	平成 19 年	平成 20 年	平成 21 年	平成 22 年	平成 23 年	平成 24 年
	(発掘調査)	(発掘調査)	(発掘調査)	(整理)	(整理)	(整理)	(整理)	(報告)
総括								
教育長	森山良一	森山良一	森山良一	森山良一	森山良一	杉光 誠	杉光 誠	杉光 誠
教育次長	三瓶寧夫	清水圭輔	榑崎洋二郎	榑崎洋二郎	亀岡 靖	荒巻俊彦	荒巻俊彦	荒巻俊彦
総務部長	中原一憲	大島和寛	大島和寛	荒巻俊彦	荒巻俊彦	今田義雄	今田義雄	西牟田龍治
文化財保護課長	井上裕弘	磯村幸男	磯村幸男	磯村幸男	平川昌弘	平川昌弘	伊崎俊秋	伊崎俊秋
副課長		佐々木隆彦	佐々木隆彦	池邊元明	池邊元明	伊崎俊秋		
課長技術補佐	川述昭人	池邊元明	池邊元明	小池史哲	小池史哲	小池史哲		
	木下 修	小池史哲	小池史哲	伊崎俊秋	伊崎俊秋			
参事	新原正典	新原正典	新原正典	新原正典				
			伊崎俊秋					
課長補佐	久芳昭文	安川正郷	中藺 宏	前原俊史	前原俊史	日高公德	甲木 宏	桂木俊樹
庶務								
管理係長	古賀敏生	井手優二	井手優二	富永育夫	富永育夫	富永育夫	桂木俊樹	石橋伸二
事務主査	宮崎志行	野中 顯		藤木 豊	藤木 豊	藤木 豊	伊藤幸子	伊藤幸子
主任主事	末竹 元	瀧上大輔	瀧上大輔	藤木 豊	近藤一崇	近藤一崇	内山礼衣	綾香博充
	秦 俊二	柏村正央	柏村正央	近藤一崇	野田 雅	内山礼衣		加藤敦子
		小宮辰之	小宮辰之	小宮辰之				
主事			野田 雅	野田 雅	仲野洋輔	仲野洋輔	仲野洋輔	
調査・整理・報告								
調査第一係長	小池史哲	小田和利	小田和利	小田和利	吉村靖徳	吉村靖徳		
参事補佐	飛野博文			佐々木隆彦	佐々木隆彦	佐々木隆彦		
				木下 修	木下 修	木下 修		

技術主査	吉村靖徳	吉村靖徳					
主任技師	今井涼子	今井涼子	今井涼子				
	(福岡地域担当)						
	岡寺未幾	岡寺未幾	岡寺未幾				
		(福岡地域担当)	(福岡地域担当)				
調査第二係長	飛野博文	飛野博文	飛野博文	飛野博文	飛野博文		
企画係長						吉村靖徳	吉田東明
技術主査							今井涼子
文化財保護係							
技術主査				今井涼子	今井涼子	今井涼子	

福岡県企画・地域振興部総合政策課世界遺産登録推進室（報告）

			平成 21 年	平成 22 年	平成 23 年	平成 24 年
技術主査						岡寺未幾
主任技師			岡寺未幾	岡寺未幾	岡寺未幾	

九州歴史資料館（整理）

	平成 16 年	平成 18 年	平成 19 年	平成 20 年	平成 21 年	平成 22 年	平成 23 年	平成 24 年
館長							西谷 正	西谷 正
参事補佐							小池史哲	小池史哲
文化財調査室長							飛野博文	飛野博文

発掘調査にあたっては多くの御協力があつて円滑に進めることができました。夏の暑い盛りも、寒風吹きすさぶ中も、山中の厳しい環境にも関わらず熱心に作業にあられた発掘作業員の方々、発掘作業員の手配など様々な面で御協力くださった那珂川町教育委員会生涯学習課文化財係の皆様、記して感謝申し上げます。

II 位置と環境

本書で報告する三つの遺跡はいずれも、筑紫郡那珂川町大字五ヶ山に所在する。

那珂川町は、北及び西は福岡市と、東は春日市、大野城市、そして筑紫野市と、南は脊振山系を境に佐賀県神埼郡吉野ヶ里町と接しており、脊振山系北麓に広がる南北に細長い形状をした町である。南北 14.5km、東西 6.2km、総面積は 74.99km²を測る。町北部は福岡市のベッドタウンとして市街化が進むと共に町の人口も増加を続けており、平成 24 年 10 月 31 日現在、50,000 人を超えている。その一方で、町南部には田園風景と脊振山系の豊かな緑が広がっている。

地理的には、脊振・九千部山系から北へ団塊状に派生する山岳部と、町を南北に貫流する那珂川及びその支流である梶原川によってもたらされた平野部とで構成されている。山岳部と平野部が接する辺りには開析の進んだ丘陵群があり、平野部には河岸段丘や微高地が連なっている。

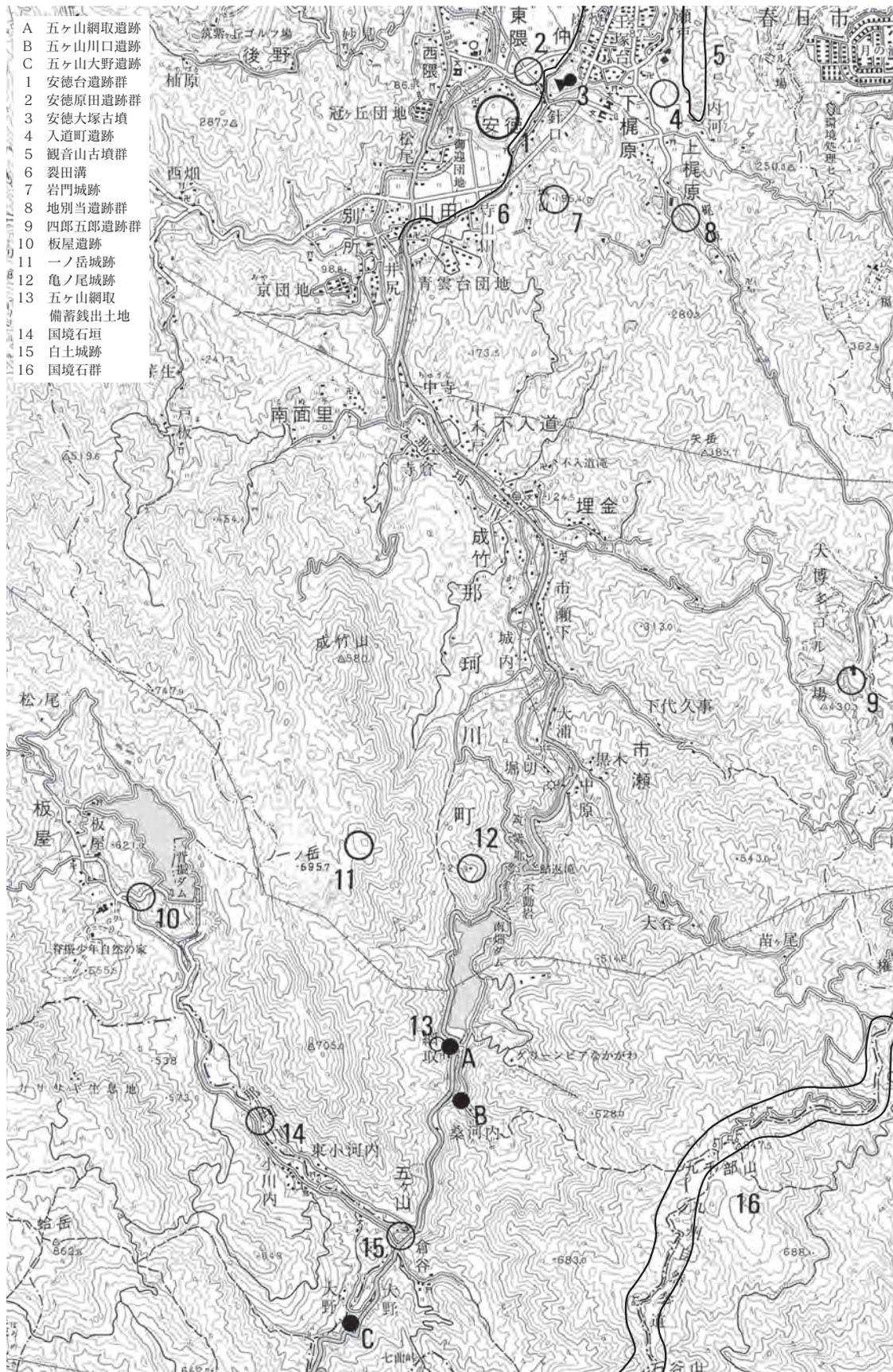
五ヶ山大野遺跡・五ヶ山川口遺跡・五ヶ山綱取遺跡が位置する那珂川上流域の川筋には、旧石器時代および縄文時代の遺跡が分布すると考えられるが、現在のところ確認された遺跡は少ない。縄文早期から前期の押型文土器や曾畑式、轟式土器、後期から晩期の土器のほか、打製石鏃等が採集された四郎五郎池遺跡、溝、土坑、柱穴が検出され、縄文早期の押型文土器、貝殻条痕文土器、サヌカイトの剥片や石核、黒曜石剥片が出土した板屋遺跡にとどまる。一方、平野部の河岸段丘や微高地では、縄文時代早期から晩期までの各時期の遺構、遺物が確認されている。

弥生時代、町北部に広がる平野部は『魏志倭人伝』に登場する「奴国」にふくまれていたと考えられる。鉄戈 1 口、鉄剣 1 口に加え銅鏡 2 面分の痕跡が残っていた 24 号甕棺、棺外に鉄戈 1 口、棺内に鉄剣 2 口が副葬されていた 27 号甕棺を含む特定集団の墳丘墓とみなされる門田遺跡辻田地区、集落と墓地が完結した立地にあり、直径が 14m を超える大型の竪穴住居跡や、棺外に鉄戈・鉄剣、棺内にはガラス製塞杆状製品や大量の玉類、ゴホウラ製立岩型貝輪 43 個をもつ 2 号甕棺墓を含む特定集団の墳丘墓が確認された安徳台遺跡群など有力集団や地域首長の存在をうかがわせる遺跡が知られている。

古墳時代も引き続き、平野部の河岸段丘や微高地に遺跡が展開し、平野部を取り巻く丘陵上に連綿と古墳群が築造されている。4 世紀後半の築造と考えられている安徳大塚古墳は全長 64m、周溝まで含めると 81m を測る前方後円墳である。続いて、那珂川右岸にカクチガ浦古墳群、炭焼古墳群が、左岸には井河古墳群、妙法寺古墳群が造営されている。後期の群集墳は丘陵の中腹や裾部に築かれ、那珂川右岸の観音山北西麓に分布する総数 260 基以上に及ぶ観音山古墳群をはじめとして、町内に 500 基以上が存在したと思われる。

福岡県内の装飾古墳は筑後川流域及び遠賀川流域を中心に分布しているが、丸ノ口古墳群に含まれる 2 基の装飾古墳は、彩色ではなく敲打により同心円などを表現する装飾技法の面で注目される古墳である。

先述の安徳台遺跡群では 7～8 世紀の掘立柱建物跡も検出されている。この台地は迹驚岡^{とどろきのおか}であり、その裾部を流れる用水路は『日本書紀』に神功皇后三韓征伐の折の事績として記述されている裂田溝^{さくたのうなで}であると、『筑前国続風土記』、『筑前国続風土記拾遺』などの江戸時代の地誌類に述べられている。裂田溝の開削時期は明らかでないが、中世、近世を通じて改修を重ねながら利用されたことが判明しており、現在もお農業用水として機能している大変貴重な歴史遺産である。



第2図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

那珂川町、春日市、大野城市、太宰府市の境界となる山塊の北及び東側には、九州最大の牛頸須恵器窯跡群（国指定史跡）が存在するが、山塊の西側では窯跡はほとんど発見されておらず、地別当遺跡群で須恵器窯跡 2 基と土坑が検出されているにとどまる。窯跡は 2 基とも小規模で、8 世紀中頃、一度きりの操業で廃絶したとみられる。

別所次郎丸遺跡は 8 世紀前半から中頃の遺跡で、墨書土器が出土している。土器の組合せは官衙あるいは寺院的であるとされる。

脊振山は古くから山岳信仰の対象として修験道的な神仏習合的色彩を持っており、その宗教的勢力が最も盛んだったのは平安時代から鎌倉時代にかけてである。脊振山領は筑前、肥前両国に広がり、一部筑後国にも及んでいるが、筑前国内は脇山地方に限られる。五ヶ山は所領ではなかったものの、関係する施設があった可能性はある。

中世に入ると、五ヶ山でも遺跡の存在が知られるようになる。那珂川左岸の一ノ岳（695m）にある一ノ岳城は九州探題千葉氏の居城だったが、天正年間に肥前勝尾城主筑紫広門の支城となったという。ここは街道沿いの要衝であると同時に山中の難所で、逃げ込み城の役割を果たしたようである。一ノ岳城の支城である白土城（猫城）は、那珂川本流と大野川、倉谷川の合流地点南西側の高まりに位置する。『筑前国統風土記』に記述があるが、未調査のため詳細は不明である。

若干時期が前後するが、平野部を見下ろす城山（195m）に築かれた岩門城、別名龍神山城^{たつかみやま}も、中世の一次史料に度々登場する山城である。鎌倉時代には少弐景資の居城であると同時に博多・大宰府を守る重要拠点であったこと、南北朝期には九州探題今川了俊方の城、室町時代には筑前守護大内氏直轄の城であった。確認調査の結果、13 世紀後半から城として機能し、16 世紀代まで使用されたと推測されている。

城跡以外に、昭和 30（1955）年に五ヶ山網取において古貨が発掘されている。縦横とも 40cm ほどの素焼の壺におよそ 3000 枚の銭貨が百枚ずつ繋がれた状態で納められていたといい、いわゆる備蓄銭と考えてよいと思われる（巻頭図版）。

江戸期の史料には、「福岡藩領那珂郡のうち」として五ヶ山村が登場し、枝郷として道十里村、桑河内村、大野村、東小河内村が見える。『筑前国統風土記拾遺』によれば、網取、道十里、桑河内、大野、東小河内の五か村があることから五ヶ山の地名がついたといい、田は 13 町余りで、農民は薪、炭を売り、紙をすき、茶を製し、山果を採って市中へ売り捌いたという。このことからすると、五ヶ山村の主体は網取であったのだろう。

また、五ヶ山は筑前国と肥前国の境であり、福岡藩と佐賀藩の藩境である。いくつもの国境の峠があった。那珂川町市ノ瀬から一ノ岳城と亀ノ尾城の間を通る旧道、いわゆる亀ノ尾越の周辺にはところどころ石畳が残り、ここが街道であったことを今に伝えている。江戸時代に国境を巡る争論も度々起きており、争論の裁定を受けて設置された国境石が、現在も山中に点在している。

明治 22（1889）年、南畑村、岩戸村、安德村が合併して町制が施行され、那珂川町が誕生した。筑紫郡は明治 29（1896）年、那珂郡、席田郡、御笠郡が合併して成立した。その後、一部が福岡市へ編入し、春日市、筑紫野市、大野城市、太宰府市の市制施行によって、昭和 57（1982）年以降は那珂川町のみが郡名を負っている。

参考文献

- 那珂川町教育委員会 1995 『那珂川町文化財分布地図』
- 那珂川町教育委員会 1990 『カクチガ遺跡群』 那珂川町文化財調査報告書第 23 集
- 那珂川町教育委員会 1990 『安徳遺跡』 那珂川町文化財調査報告書第 25 集
- 那珂川町教育委員会 1997 『地別当遺跡群』 那珂川町文化財調査報告書第 40 集
- 那珂川町教育委員会 2000 『安徳台』 那珂川町文化財調査報告書第 52 集
- 那珂川町教育委員会 2003 『片縄山古墳群』 那珂川町文化財調査報告書第 61 集
- 那珂川町教育委員会 2006 『安徳台遺跡群』 那珂川町文化財調査報告書第 67 集
- 那珂川町教育委員会 2006 『岩門城跡』 那珂川町文化財調査報告書第 68 集
- 福岡県教育委員会 1978 『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』 第 9 集
- 福岡県教育委員会 1968 『炭焼古墳群』 福岡県文化財調査報告書第 37 集
- 福岡県教育委員会 1994 『別所次郎丸遺跡』 福岡県文化財調査報告書第 114 集
- 福岡県教育委員会 2006 『入道町遺跡群』 福岡県文化財調査報告書第 207 集
- 福岡県教育委員会 2008 『観音山古墳群瀬戸Ⅳ群 観音山古墳群中原Ⅲ群 内河遺跡第 1 次』
九州新幹線関係文化財調査報告書第 11 集
- 福岡県教育委員会 2006 『五ヶ山・小川内五ヶ山ダム関係文化財調査報告Ⅰ』 福岡県文化財調査報告書第 215 集 第 1 分冊

五ヶ山大野遺跡

Ⅲ 調査の内容

1 五ヶ山大野遺跡

(1) 調査の概要

五ヶ山ダム建設に伴う最初の埋蔵文化財調査は、平成 16(2004)年 8 月 12 日の 5 号橋橋脚建設に先立つ試掘調査であった。植林された平坦地でのこの調査では径 0.5m ほどの 2 基の小型土坑を検出したが、出土した磁器片や締まりのない埋土の状況からごく新しいものであろうと判断された。

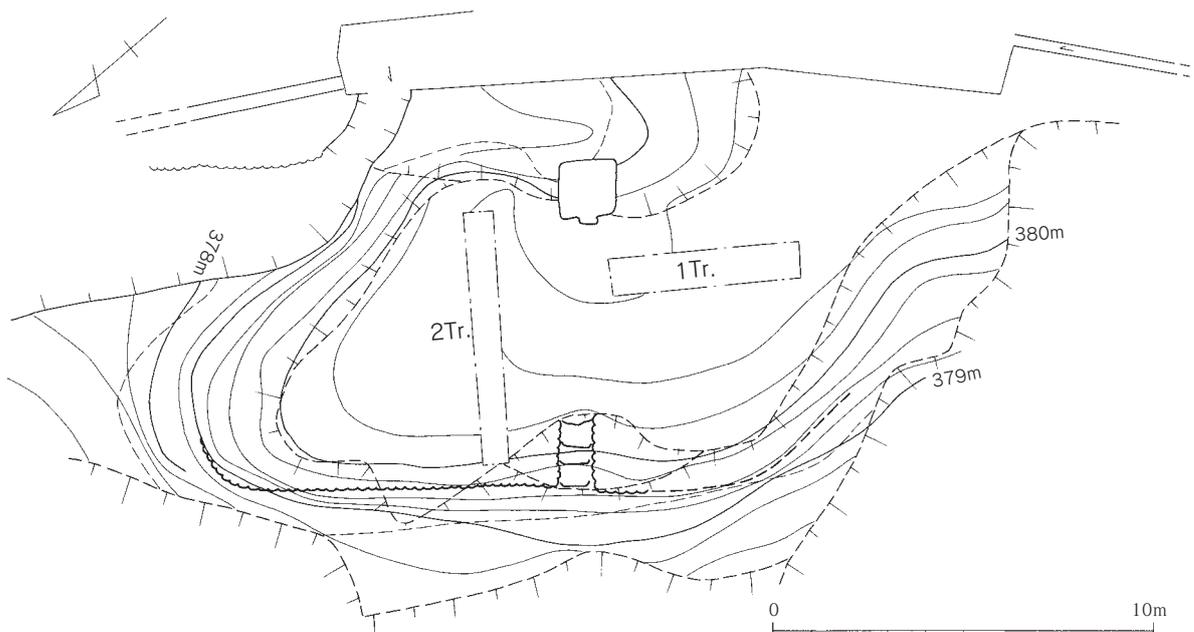
その後、平成 17 (2005) 年 1 月 25 日から同工事に伴って「お地藏さん」と呼称される石組の構造物及びその南に位置する墓地の調査を行った。それぞれの地番は筑紫郡那珂川町大字五ヶ山字中ノ原 36・28 番地で、調査面積は約 160㎡ほどである。墓地については自然石を用いた立石があり、その周辺 2 × 2m の範囲を一段掘り下げて遺構の有無を確認した。その結果、3 基の墓壙と思われる掘り込みを認めたが、これも埋土が軟弱であり、ごく新しいものと判断して調査を止めている（図版 4 参照）。

この報告の主体である「お地藏さん」については、「お地藏さん」本体及び周辺に築かれた石垣の露出と記録作成、「お地藏さん」の祀られている敷地にトレンチを設定するなどして発掘調査が終了したのは同年 3 月 4 日であった。

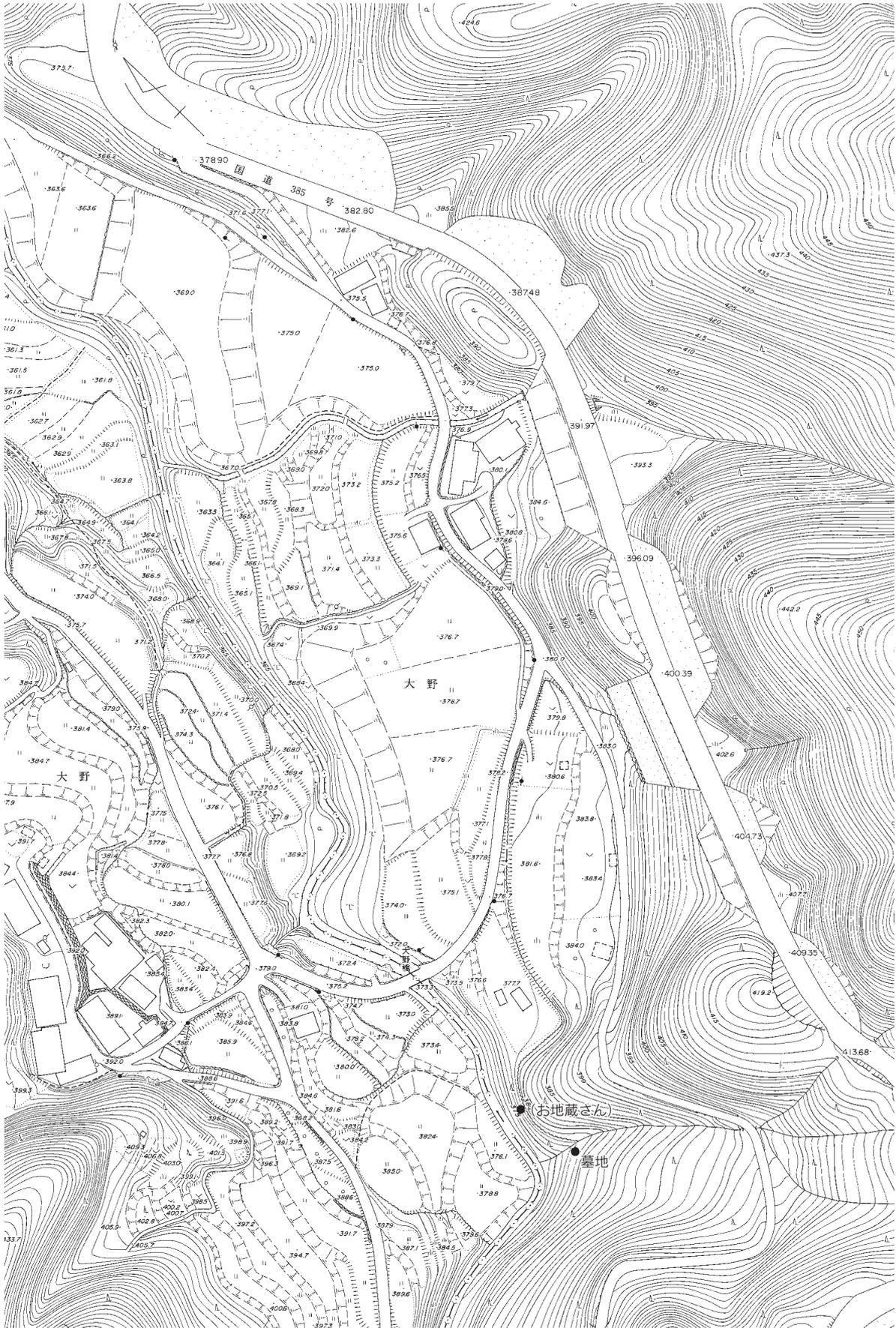
なお、当地は周知の遺跡として登録されたものではなかったが、民俗調査を実施する過程で幾度かの踏査を行って土師器片等を採集しており、板碑や石製五輪塔の一部が「お地藏さん」の周辺に置かれていることなどから、大野遺跡群として発掘調査対象としたものである。

(2) 「お地藏さん」の調査

「お地藏さん」が祀られたところは略南北幅 15m ほど、奥行き 10m に満たない平坦地である。東側（背面）は山裾に水路が掘削され、前面（西側）も削られて里道となっている。また、北側は



第 3 図 「お地藏さん」現況地形測量図 (1/200)



第4図 五ヶ山大野遺跡調査地点位置図 (1/2,000)

東側の水路が地形に沿ってカーブして「お地藏さん」の敷地の北東部をかすめ、南は沢によって区画されている。

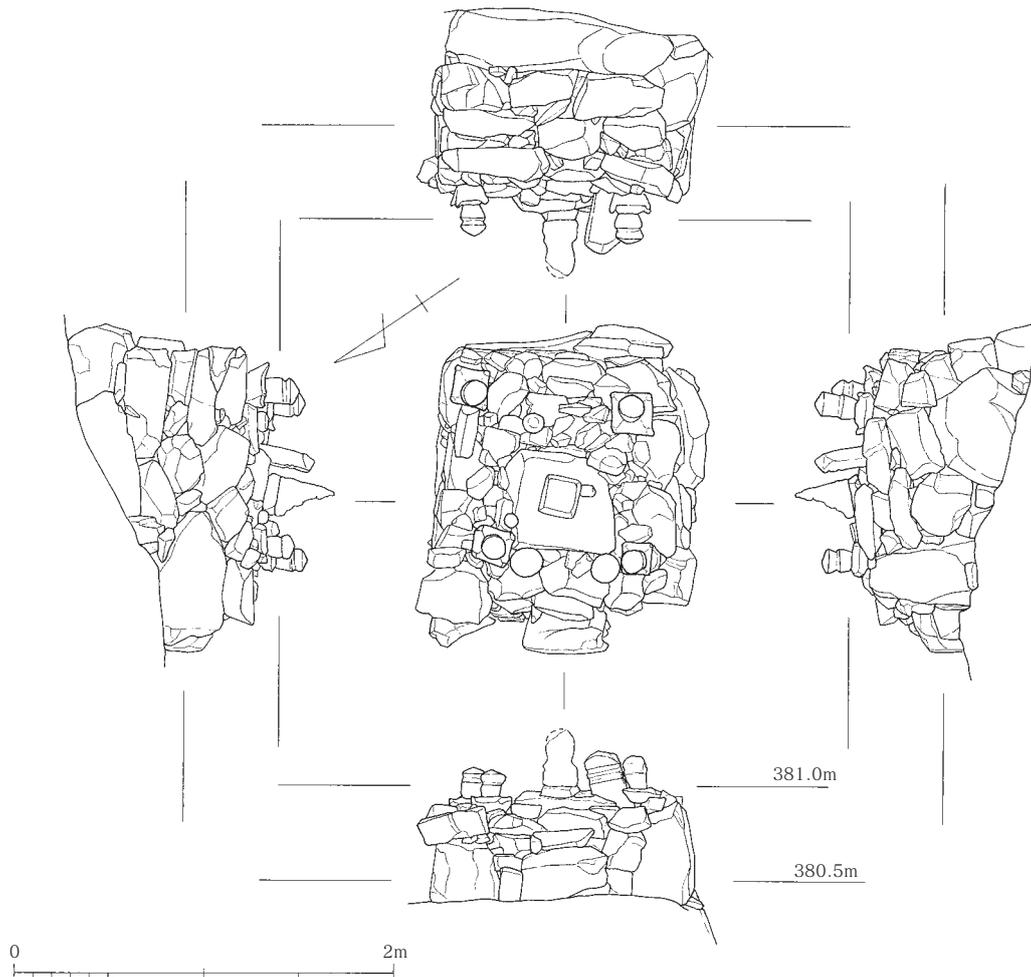
調査は「お地藏さん」の清掃から開始した。その後、西側に覗いていた石垣を検出する過程で、「お地藏さん」の正面に取り付く石敷きの階段が現れた。また、「お地藏さん」が祀られた平坦地にトレンチを開けたところ、これが盛土で形成されていたことがわかった。

「お地藏さん」(図版1・2、第5図)

基壇上に石仏が祀られている。基壇の平面形は一辺長1.4mほどのやや歪んだ方形を呈し、緩い斜面に置かれていることから前面では0.6m、背面では0.9mほどの高さとなる。主として花崗岩の自然石を用いていて、隙間の多い積み方となる。解体していないので、内部構造は確認していないが、隙間から土砂の流出は認められないので、内部も石が詰められているものであろう。

上面に頂部が平坦となる一辺0.5mほどの大型の石材を置いて、その上に一辺0.2m、厚さ0.05mほどの方形の切石を載せて台座とし、石仏を祀っていた。石仏の周囲には五輪塔の火輪・空風輪、板碑などが置かれている。

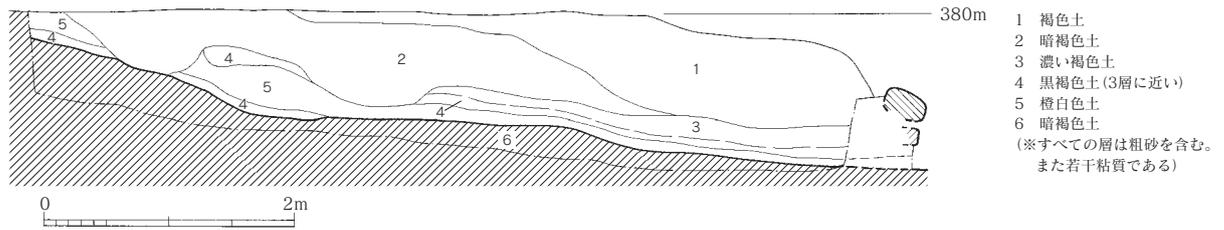
石仏・五輪・板碑はいずれも暗灰褐色の凝灰岩を使用している。火輪は高さが低いため、棟の勾配が緩く、稜線も弱い。北側の二つは端部に珠点を置くような形となる。同じような個体が複数あることから五輪というよりは層塔であろうか。空風輪は風輪部が非常に大きくなっている。



第5図 「お地藏さん」基壇実測図(1/40)



第6图 石垣実測図 (1/60)



第7図 2 トレンチ土層図 (1/60)

石垣 (図版3、第6図)

12mほどの長さにわたって盛土を保護するための石垣が築かれていて、北端の小さくカーブする付近で最高1mほどの高さとなるが、直線部は多くが崩落していた。後述するが、旧地形は南から北へ向かって下降しているために盛土は北側が厚くなる。立面図で見るように、階段最上段と石垣の関係では階段のほうがより高い位置にあり、石垣も本来はこの高さ近くまでであったと思われる。階段のすぐ北側では崩落して基底部付近しか残らない部分があるが、石の積み方が乱雑で、構造的に脆く崩落したものであろう。北端部は曲線を描くことから、直線部分に比して図らずも強化されたものであろう。

石敷きの階段は5段からなる。下位の二石の間は空いているが、各段の高さから見ると本来なかったとしてもよいようである。

トレンチ調査 (図版4、第7図)

石垣に平行(1トレンチ)及び直交(2トレンチ)する2本のトレンチを設定した。1トレンチでは南端付近で地山を形成する花崗岩が現れ、北へ向かって下降する様子が窺えた、2トレンチでは東端付近で浅く、石垣付近で厚く盛土が施された状況を確認できた、いずれの堆積層にも周辺の山を構成する真砂土を含み、地山では旧地表と思われる黒色土も一部で観察できた。

出土遺物

石仏 (図版4、第8図)

凝灰岩を削り込んだもので、台座を含めた全高は29.7cmを測る。光背の上半部、および頭部から顔面にかけての左側が大きく欠損し、顔面・定印を結ぶ手の付近および膝から足先にかけてが摩耗して定かではない。台座部分は背面から側面の一部にかけては丁寧に加工、面をとっているが、前面はほとんど手を入れていないように見える。

一部が残存する頭部にはまったく変形が見られないので、剃髪した様を表現しているのであろう。残存する右側の耳は非常に大きく、しっかりと彫り出されている。両腕は太くほぼ左右対称に配され、両肩から垂れる法衣も同様に左右対称で、前面で結束、前に垂らしているようである。

光背は基部付近で厚さ5cmほどだが、上に行くにつれて薄くなる。その側面は丁寧に、背面も比較的平滑化されているが、前面では仏を中心に放射状に不規則ながら線刻を多く入れている。光背を表現したようである。

全体にしっかりした造作で、頭部の形状から「お地藏さん」としてもよいのであろう。



第8図 「お地藏さん」石仏実測図 (1/4)

土器類 (第9図)

4は「盛土中」出土であるが、出土トレンチの注記が漏れている。これ土器以外はいずれも表土からの出土である。

1～4は土師器皿。1は底部が完存する。灰褐色～灰黄褐色を呈し、数mm～5mmほどの砂粒が見えるが、大部分はごく微細な雲母などを含むもので、精良といってよい。外底面の糸切り痕は非常に粗く、内底面は水引き痕が顕著である。2は底部の1/4が残存。外面は良好に残存し、灰黒色を呈するが、内面は摩滅している。外底面には回転糸切り痕が残り、体部との境はにしっかりとした稜をもつ。3は底部の1/3ほどが残存するが焼け歪む。内外面ともに明灰黄色～黄白色となるが、底部付近では器肉が黒色となっている。外底面には回転糸切り痕が残り、内面は全体に丁寧な横撫でが施される。4は底部の大部分が残存、明るい灰黄色を呈し、胎土は精良。外底面は糸切り。内底面には水引き痕が見える。

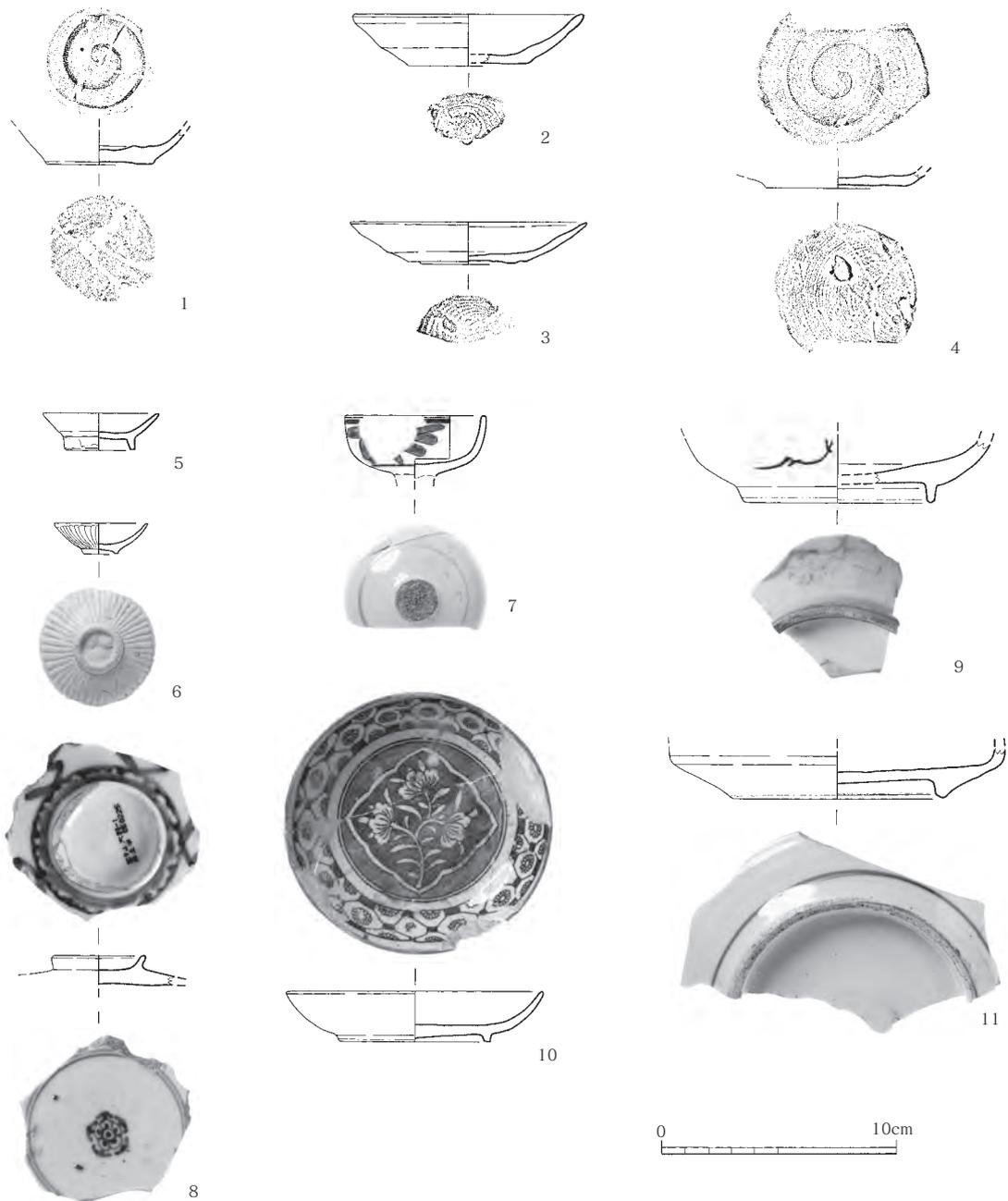
5～11は磁器。5は高台付きの浅い皿状の形態となるが、口径4.9cm、器高1.4cmと非常に小型で、整形も手捏ねかと思わせる趣がある。器形上の特徴は口端部付近で、外面は体部からの形状を続けるものの内面ではごくわずかに内傾する面をもつようになっている点、そして大きさの割に高い高台をもつ点であろう。高台畳付から内側にかけてが基本的に露胎であるが、それ以外の部分には白濁した釉が掛けられる。紅皿であろう。6は通有の紅皿で、型押しで外面に文様を刻む。やや青みを帯びる白濁釉は基本的に内面のみを施す。口径4.1cm、器高1.3cmである。口端部の形状や径口比などから見て、18世紀代を中心とする時期のものであろう。

7は仏飯器片で、外面口縁部下と底面との堺付近に灰赤色（エンジ色に近い）の線を描き、花卉も同じ色で描く。生地は淡灰色、釉は白濁する。

8はつまみが華奢で小さいことから蓋と思われる。内面には古相の五弁花が押され、二重の圏線の内側にニヶ所ハリの痕が残る。つまみ頂部は露胎だが、それ以外は全面に青み帯びる白濁釉を掛

ける。17世紀末～18世紀中頃のものであろう。

9は皿で内面は無文、外面には唐草かと思われる文様がある。畳付け付近のみが露胎で、そのほかは全体に白濁釉を掛ける。10は青色が濃く発色し、色むらがあつて内底面の塗りつぶした部分が線で表現されている。体部内面の文様も口縁部に接する箇所もあれば5mmほど下がる箇所があるなど雑である。高台畳付けは概ね露胎だが、これも釉を掻き取ったというのではなく、焼成時に熔着したものを引き剥がしたといった感である。銅板刷りで施文されたもので明治以降のものである。11も皿で、高台畳付け付近は丸く造られ、この付近のみが露胎となる。



第9図 「お地藏さん」周辺出土遺物実測図 (1/3)

(3) 小 結

「お地藏さん」の調査では、遺物のほとんどが表土出土のものでこの施設が造られた年代を明らかにすることは非常に困難である。ただ、出土した陶磁器では 18 世紀代と思われる資料が数点あり、それらが最も古時期の遺物と思われることから、「お地藏さん」が祀られた上限をその頃と推定してもいいのかも知れない。

平成 20 年(2008)に刊行した民俗文化財調査報告書「五ヶ山・小川内」(『福岡県文化財調査報告書』第 215 集)には、この「お地藏さん」についての記載がほとんどない。伝承も無かったということなのであろう。同書「美術工芸編」では、紹介した石仏および一緒に置かれていた板碑について「江戸時代」に作られたものと記載されている。

大野地区に祀られていた頃から移転した今も「お地藏さん」の管理者である築地益穂氏によれば、由来は分からないが、昭和 40 年代頃までは年に一度お祭りをしていたということである。



平成 16 年度試掘調査で検出した土坑

図 版

1. 五ヶ山大野遺跡遠景
(南西から)



2. 「お地藏さん」遠景
(北西から)



3. 「お地藏さん」基壇全景
(北西から)





1. 「お地藏さん」 基壇全景
(南西から)



2. 同上 (北東から)



3. 「お地藏さん」 基壇上面
(北西から)



1. 石垣（北から）



2. 階段付近の石垣（西から）



3. 1 トレンチ（南西から）



1. 2 トレンチ (北西から)



2. 墓地検出状況 (西から)



3. 「お地藏さん」石仏

五ヶ山川口遺跡

2 五ヶ山川口遺跡

(1) 調査の概要 (図版5、第11・12図)

五ヶ山川口遺跡は、筑紫郡那珂川町五ヶ山川口628に所在する遺跡である。南畑ダムから約0.5km上流、那珂川右岸から流れ込む小河川と那珂川の合流地点で、小河川右岸の傾斜が急な斜面に作られた水田の西端に位置する土壇風の高まり部分である。この小河川が形成する小さな谷筋に展開する集落は桑河内地区で、網取地区の対岸になる。調査地点の西側は切り立った崖で、崖下は那珂川本流である。高まり頂部の標高は約298m。

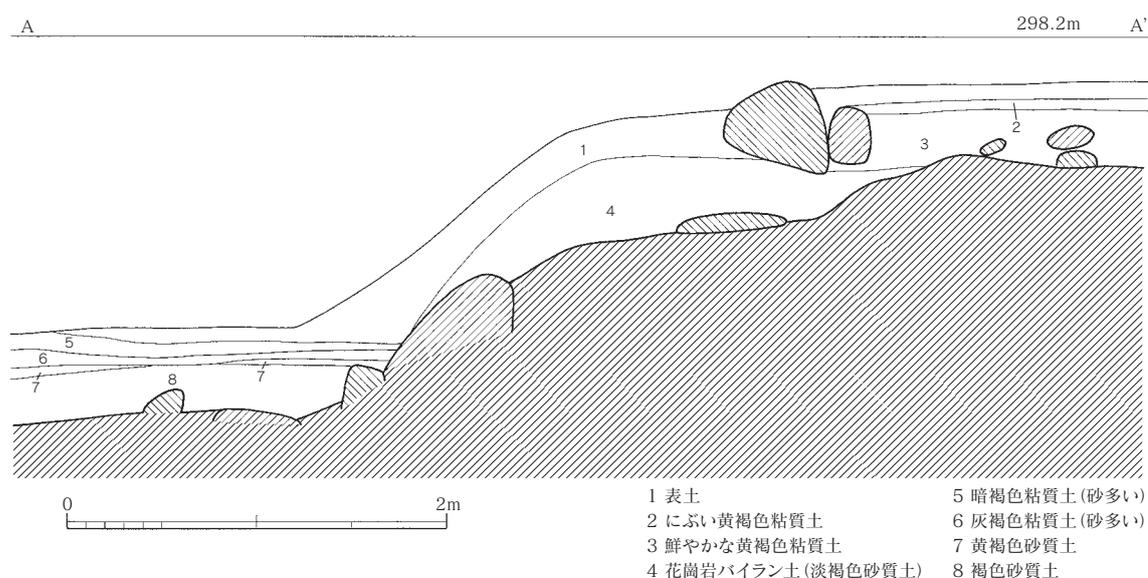
桑河内集落の水田を中心に実施された試掘調査では遺構、遺物は検出されなかった。このため、五ヶ山の文化財調査が実施された際に、五輪塔の部材が散乱することが確認されていた高まり部分を調査することとなった。調査対象面積は約300㎡、調査期間は平成18年8月11日から9月13日。

生い茂る草を刈り、表土を除去した時点で、集石3ヶ所のほか、五輪塔の地輪1点を集石とは離れた地点で確認した。検出した遺構は土坑1基、出土した遺物は土師器3点と五輪塔の部材11点である。

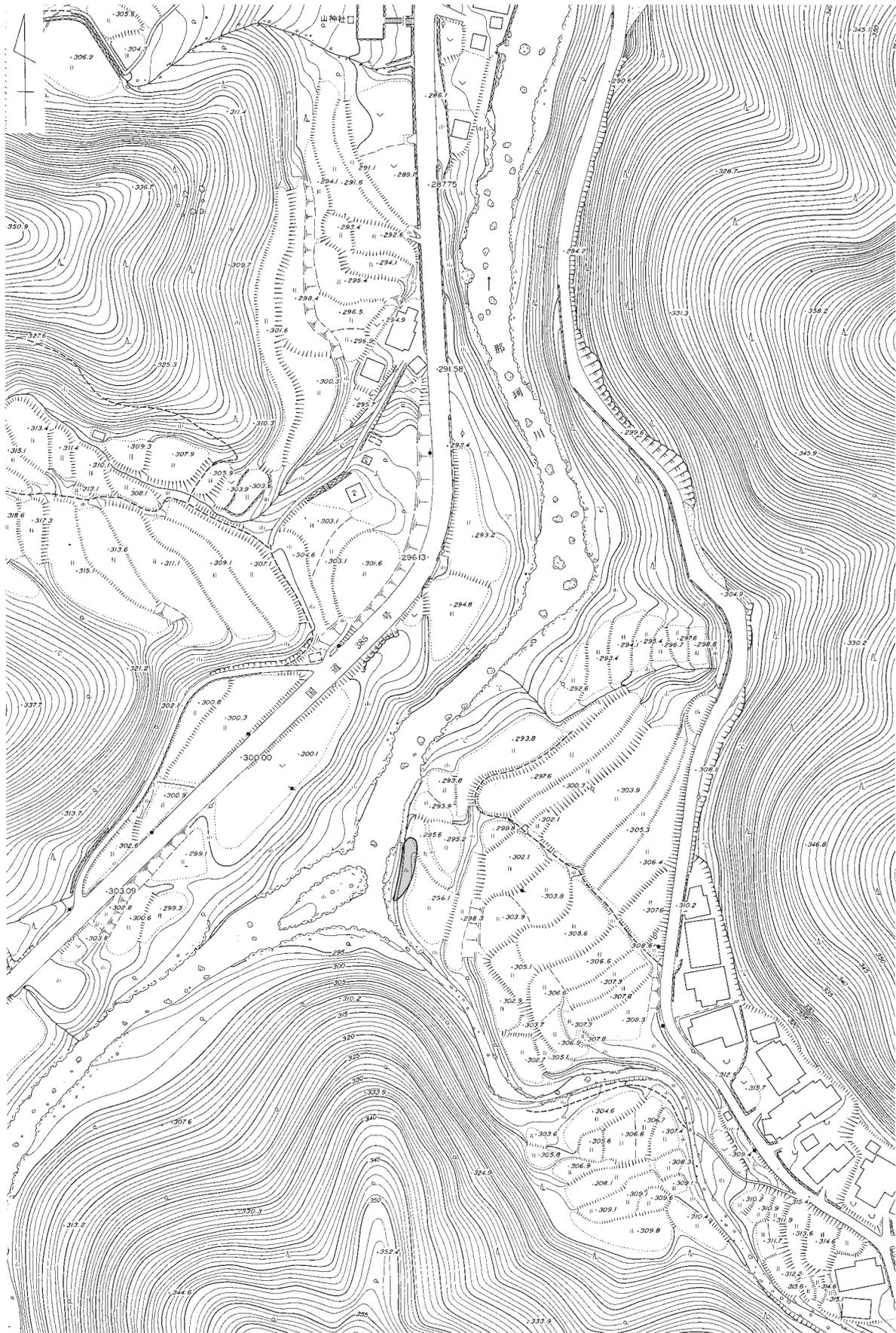
(2) 基本層序 (第10図)

土壇風の高まりは那珂川に沿って南北に長い形状をしており、長さ21m、幅は5m、高まり頂部は長さ16m、幅3mである。高まり頂部は南側が高く、標高298.75mを測り、北側に緩やかに傾斜している。東側に接する水田面の標高は296.75mで、比高差はおよそ2mである。

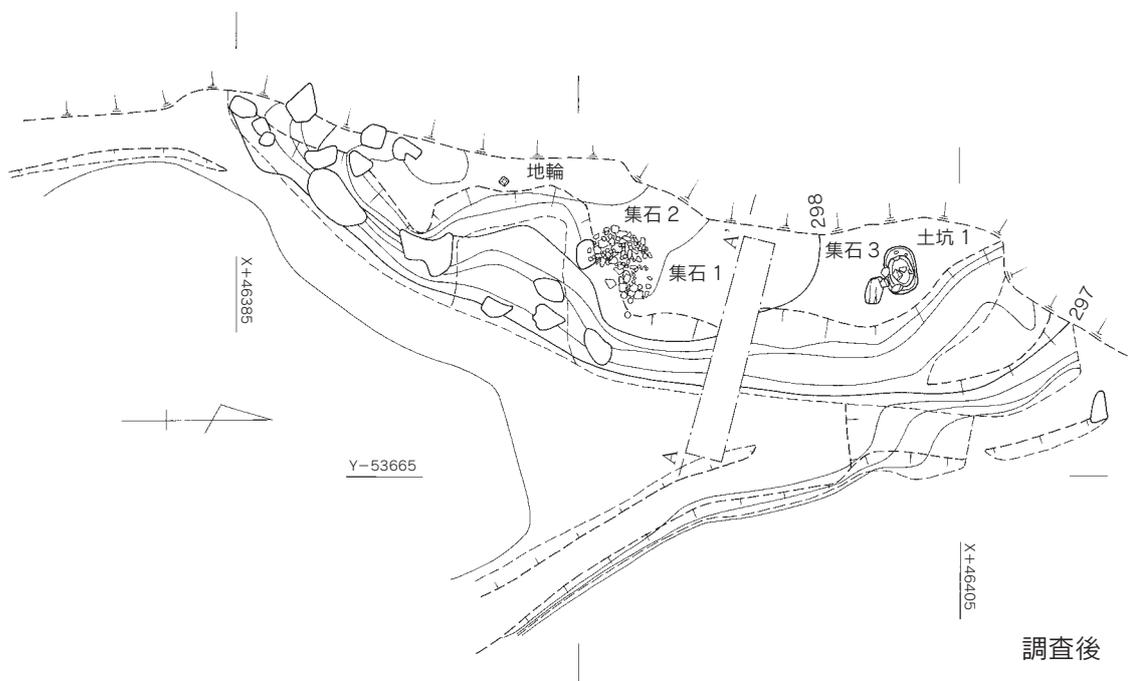
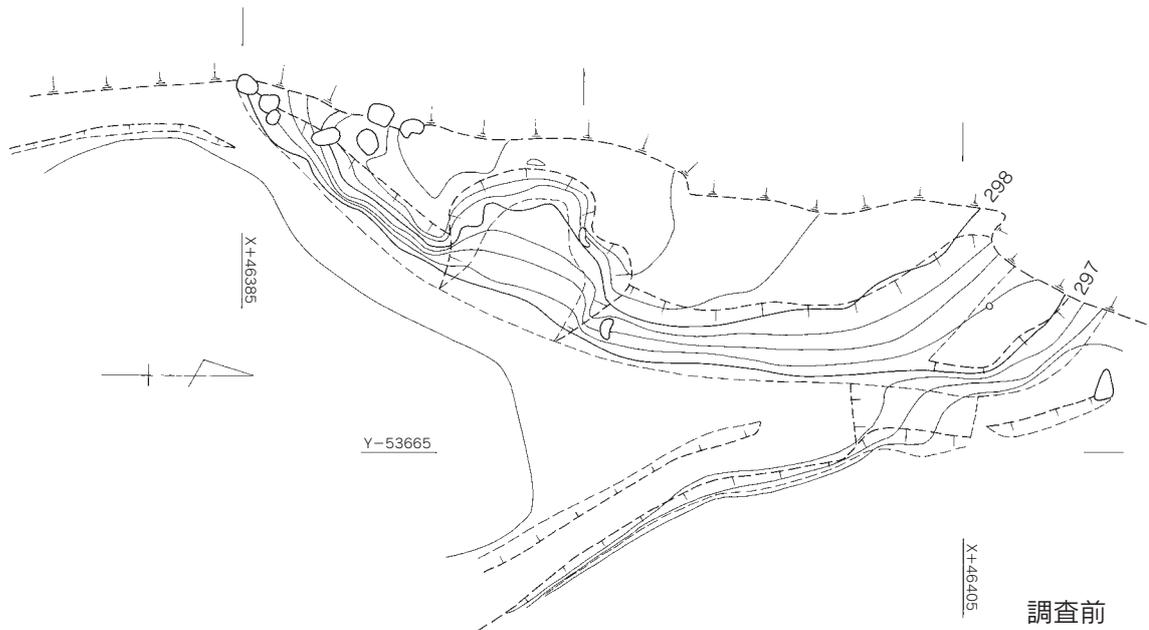
五ヶ山地区の文化財調査時、五輪塔の部材が散乱することから、この土壇風の高まりは人工的に造られた塚ではないかと推測されていた。そこで頂部の幅が比較的広い部分にトレンチを設定し、土層を観察した結果、自然地形であることが判明した。



第10図 五ヶ山川口遺跡土層図 (1/40)



第 11 図 五ヶ山川口遺跡調査地点位置図 (1/1,000)



第 12 図 五ヶ山川口遺跡遺構配置図 (1/200)

黒褐色の表土の下は厚さ 10cm 程度のにぶい黄褐色粘質土、さらにその下層は花崗岩を含む鮮やかな黄褐色粘質土の層で、これが地山である。高まり部分はこの三層で成り立っている。東接する水田部分は、表土下に砂を多く含む暗灰色粘質土、その下層に砂を多く含む灰褐色粘質土の堆積が見られる。これらの層は水田の耕作土であろう。さらに下層には黄褐色砂質土、褐色砂質土と続き、地表下約 40cm で地山に到達する。

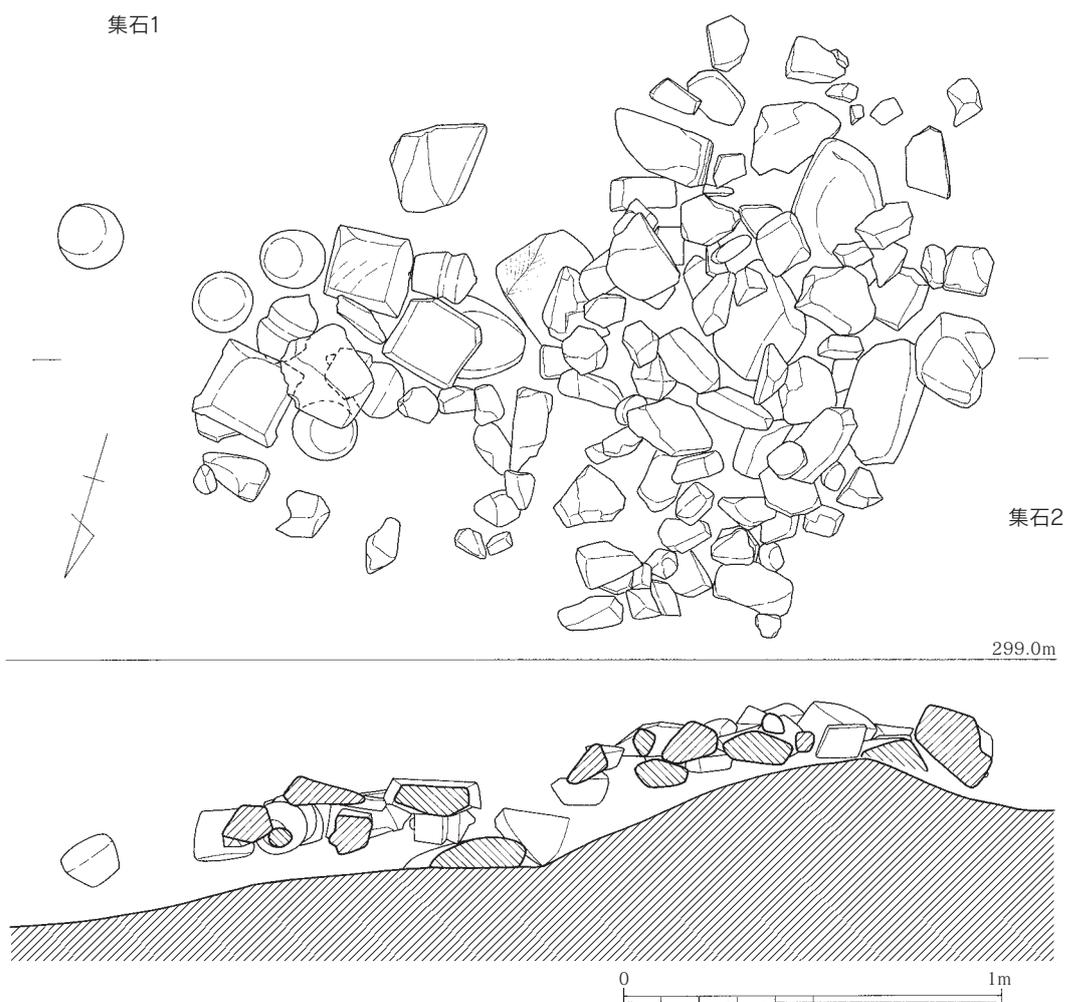
(3) 遺構と遺物

集石 1 (図版 5、第 13 図)

土壇風の高まり頂部の中心やや東寄りに位置する。南北 1.2m、東西 0.9m の範囲に、五輪塔の部材といくつかの自然石が寄せ集められ、五輪塔の水輪が 1 点、この集石地点から転がったかのようにやや離れた位置にある。石の配置等に規則性は全くなく、集石の下部に遺構は検出できなかった。五輪塔の部材を一所に寄せたといったところであろう。

集石 2 (図版 6、第 13 図)

集石 1 と接して、南北 1.7m、東西 1.2m の範囲にこぶし大から人頭大の自然石が寄せ集められ



第 13 図 集石 1・2 実測図 (1/20)

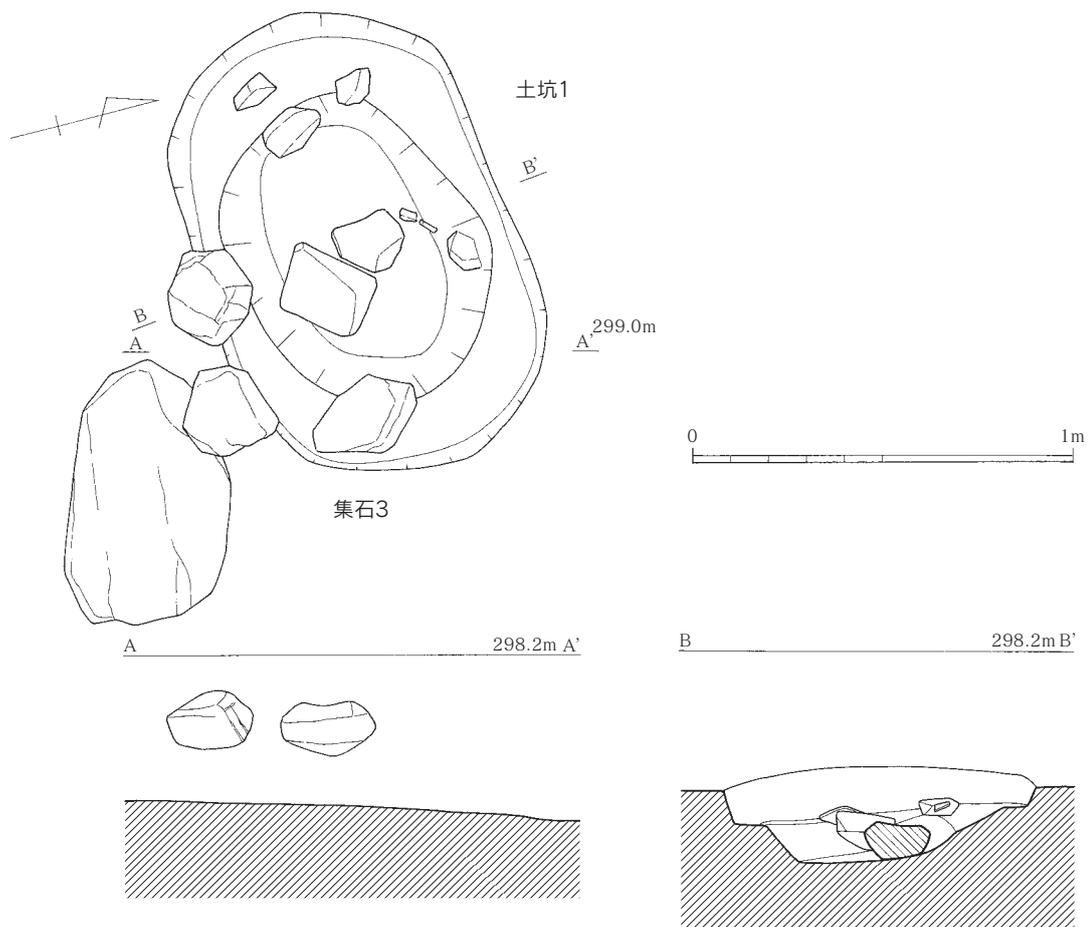
ている。集石1よりも若干高い位置にあり、自然石ばかりで五輪塔の部材は含まない。集石を除去後精査したが、土坑などの遺構は検出できなかった。水田耕作の邪魔になった自然石を一所に集めたものであろう。

集石3 (図版6、第14図)

土壇風の高まりの北端に位置する。70cm程度の大きさの地山に伴う自然石の脇に、ほぼ同じ大きさの自然石が四つ、方形を意識して置かれている。周辺には他に自然石はない。これらの石の上面の高さは揃っておらず、平らな面を意識してもないが、さらに大きな石を据えるための支石とすることは可能と思われる。そこで、石を除去し精査したところ、1号土坑を検出した。しかし、集石と土坑の軸、位置ともずれが大きく、集石に土坑の標識的意味は認めにくい。

土坑1 (図版6、第14図)

土壇風の高まり北端に位置する、楕円形を呈する土坑である。長軸1.25m、短軸0.8m、深さは0.25mである。土坑の底部中心に自然石が置かれている。土師器が出土した。集石3と緊密な関係にあるとは考えにくく、また、規模が小さく浅いことから墓壙とは考えられない。



第14図 集石3・土坑1実測図 (1/20)

土師器 (第 15 図)

いずれも土師器小皿で、1号土坑から出土した。1は口縁部片で、内外ともヨコナデ調整。復元口径は7.0cmである。2は体部から底部にかけての破片である。体部は内外面ともヨコナデ調整。底部内面はナデ調整で、外面は糸切り後未調整。底径4.2cmを測る。3は口縁部から体部にかけての小片。口縁部から体部は内外面ともヨコナデ調整だが、体部から底部にかけての部分は磨滅しており調整不明。復元口径9.9cm、復元器高1.9cm。4は大きく体部が外に開く。内外面ともヨコナデ調整で、復元口径は10.2cmである。

五輪塔 (図版7、第15～17図)

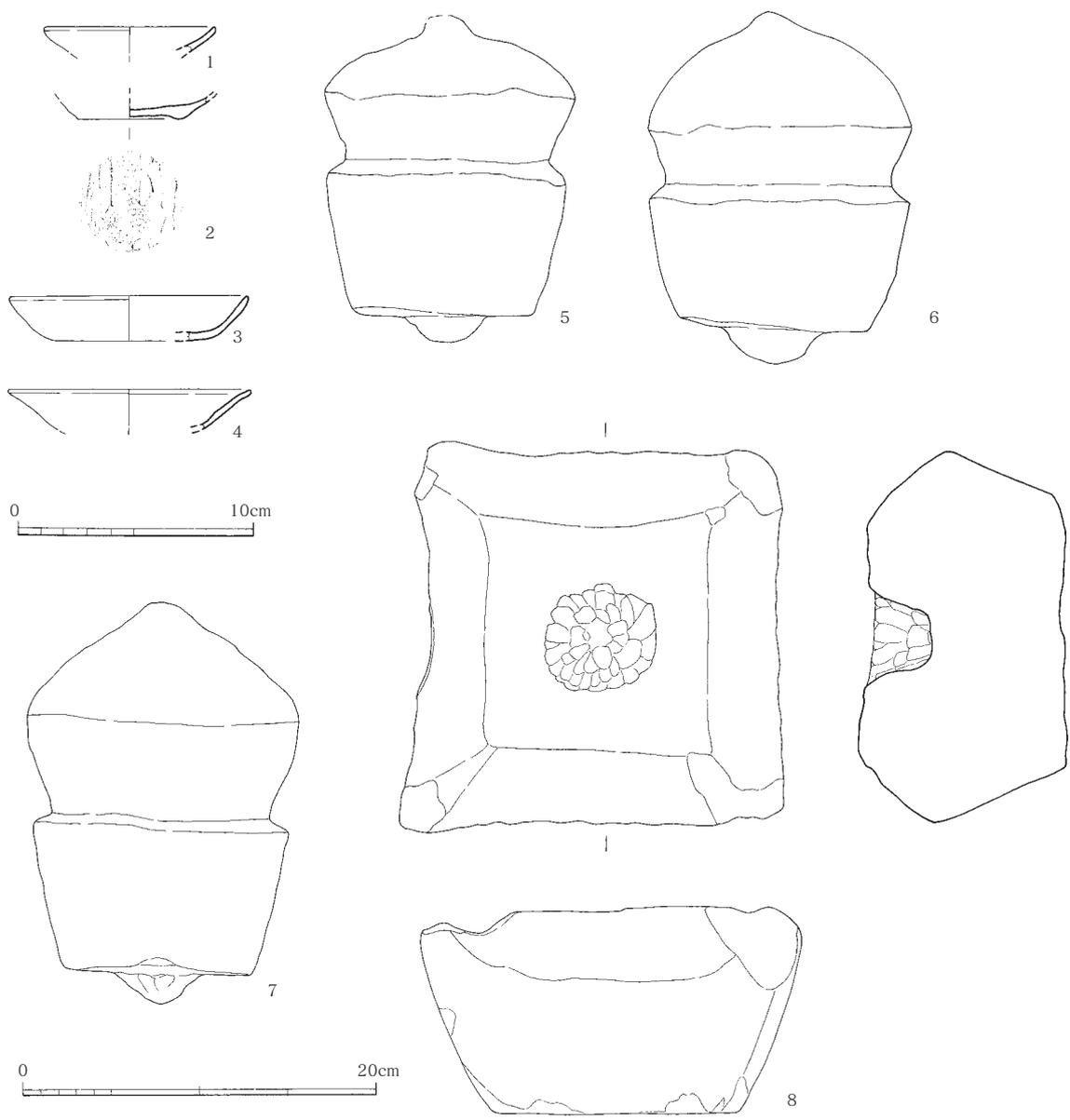
空輪と風輪を一石でつくる四石五輪塔の部材である。空輪・風輪3点、火輪3点、水輪4点、地輪1点である。各部材の数がまちまちで、組合せは定かではない。

5～7は五輪塔の空輪・風輪である。5は横断面形は楕円を呈し、空輪の最大径は15.2cm、風輪の最大径は14.4cm、高さ22.9cmである。風輪よりも空輪の方がかなり高さがあり、空輪の中心からやや下がった位置が最も張る。表面は風化しているが、一部ノミ痕が認められる。凝灰岩製。6は空輪の最大径14.9cm、風輪の最大径14.65cm、高さは20.0cmである。風輪よりも空輪の方が若干高い。空輪は下から1/3の高さが最も張り、はっきりとした稜をなす。比較的細かいノミ痕が認められる。凝灰岩製。7は空輪の最大径14.15cm、風輪の最大径13.45cm、高さは18.5cmである。空輪は扁平で、中心よりもやや下がった位置が最も張る部分で、はっきりとした稜をなす。空輪と風輪の高さはほぼ同じだが、風輪の裾がすぼまっているため、縦長の印象を与えている。表面は風化しているが、ノミ痕が認められる。凝灰岩製。

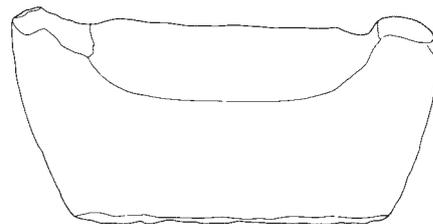
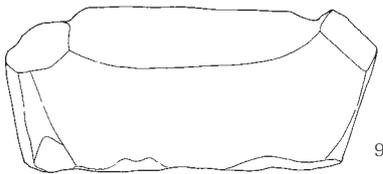
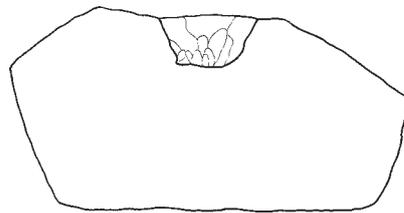
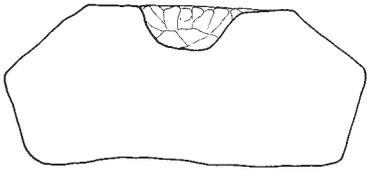
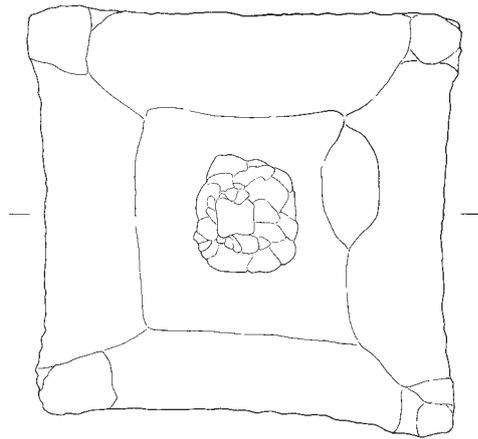
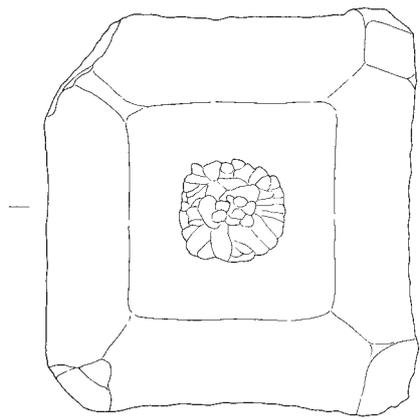
8～10は火輪である。8の平面形は22cm四方の方形で、高さは11.7cm。四隅が欠けたり丸くなったりしてはいるものの、上端が強く反ることがわかる。底面は平らである。風輪との接続部の削り込みは円形を呈する。凝灰岩製。9は、平面形は19cm×21cmの長方形を呈し、高さは8.7cmである。四隅が欠けているが、上端の反りが強いことがわかる。一方、底面の四隅は反らず、平らである。風輪との接続部の削り込みは方形である。凝灰岩製。10は、平面形は22cm四方の方形を呈し、高さは10.45cmである。四隅は欠けている部分もあるが、角がとれて丸くなったようである。上端の反りが強い。風輪との接続部の削り込みは円形。凝灰岩製。

11～14は水輪で、いずれも凝灰岩製である。11は最大径16.1cm、頂部径12.7cm、底面径9.3cm、高さ10.8cmである。上から1/3ほどの位置が最も張る。表面は風化しているが、全体にノミ痕が認められる。12は最大径16.7cm、頂部径14.5cm、底面径11.8cm、高さ11.6cmである。頂部が浅くくぼんでいる。中ほどよりもやや上の位置が最も張るが、張りは弱い。表面は風化しているが、全体にノミ痕が残る。13は最大径17.65cm、頂部径13.8cm、底面径10.0cm、高さ12.8cmである。上から1/4ほどの位置が最も張るが、全体に歪んでいる。これもまたノミ痕が認められる。14は最大径17.1cm、頂部径15.6cm、底面径11.85cm、高さ13.4cmである。上から1/4ほどのところが最も張るが、張りは弱い。頂部はごく浅く凹んでいる。全体にノミ痕が残る。

15は地輪である。平面形は正方形を呈し、頂部は16cm四方、底面は20cm四方である。高さは9.5cmである。凝灰岩製。

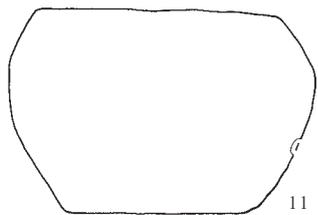
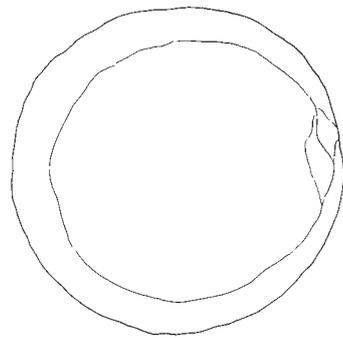
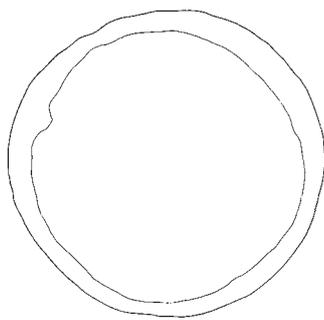
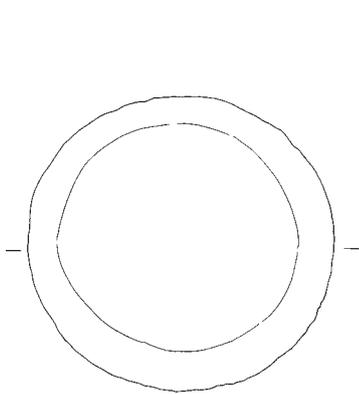


第15図 出土遺物実測図①
 (1~4: 1/3、他: 1/4)

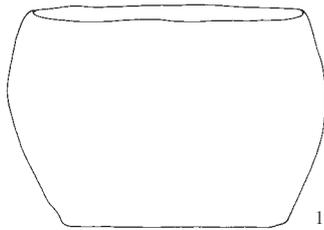


9

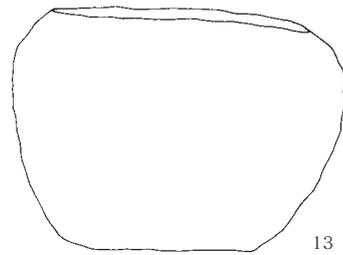
10



11

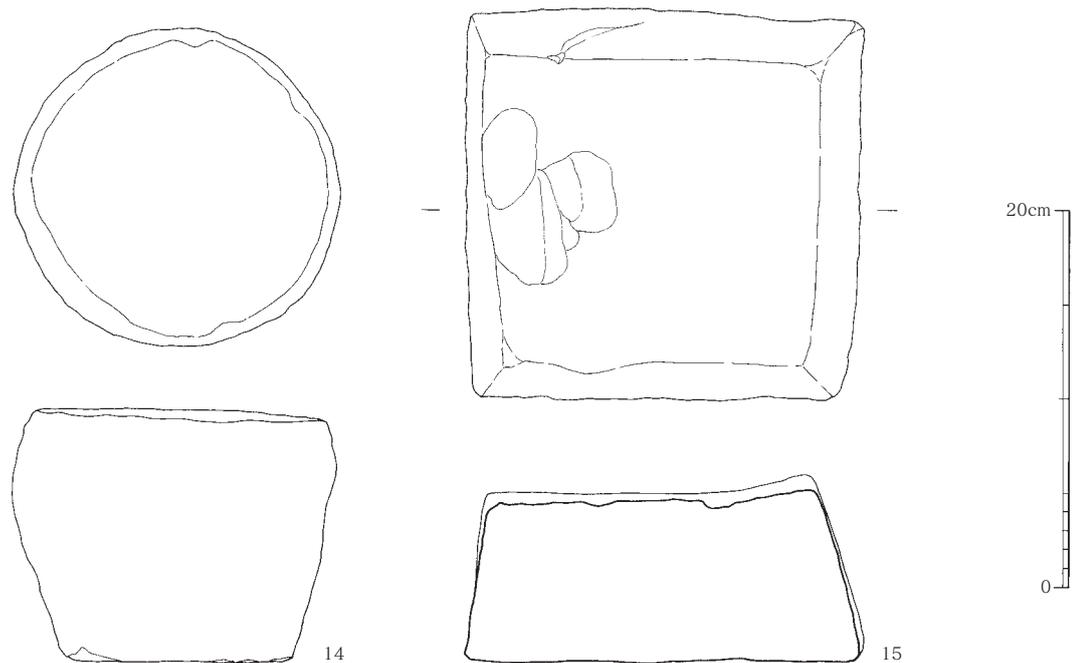


12



13

第 16 図 出土遺物実測図② (1/4)



第 17 図 出土遺物実測図③ (1/4)

(4) 小結

五ヶ山川口遺跡は、初めは塚ではないかと推測されていたが、土層観察の結果自然地形であることが判明した。また、集石の下部に関係する遺構はなく、検出した土坑は墓墳ではない。これらのことから、五輪塔は供養塔として安置されたものと考えられるべきだろう。時期の決め手になる遺構、遺物に乏しいが、土坑から出土した土師器と五輪塔部材から江戸時代であることは指摘できる。

五ヶ山川口遺跡が含まれる桑河内地区は、江戸時代中期には五ヶ山村の枝郷、桑河内村として史料に登場し、わずかながら水田耕作が行われていたことがわかる。桑河内地区が展開する谷筋はごく狭く、村の範囲は現在と大きくは変わらないと思われる。河川の浸食作用と水田耕作の繰り返しの結果土壇状の高まりが形成され、そこに五輪塔が安置されたか、あるいは、高まりが形成される以前に五輪塔が安置され、その場所を避けながら水田の整備、耕作を行った結果土壇状の高まりが形成されたのであろう。

花崗岩の岩塊を多く含む花崗岩バイラン土の土壤、急な傾斜、那珂川と小河川の合流地点であることなどを考え合わせると、自然災害が発生しやすい場所であったと推測される。災害で犠牲になった者に対する供養塔であったのかもしれない。

図 版

1. 五ヶ山川口遺跡調査前
全景（東から）



2. 五ヶ山川口遺跡全景
（東から）



3. 集石 1（北から）





1. 集石 2 (北から)



2. 集石 3 (南東から)



3. 土坑 1 (東から)



第 15 图-5



第 15 图-6



第 15 图-7



第 15 图-9



第 15 图-12



第 15 图-10



第 15 图-13



第 15 图-8



第 15 图-14



第 15 图-11



第 15 图-15

五ヶ山網取遺跡

3 五ヶ山網取遺跡

(1) 調査の概要 (第 18・19 図)

五ヶ山網取遺跡は、筑紫郡那珂川町大字五ヶ山字網取 1091～1094、1101～1106 に位置する。平成 18 年度の試掘調査の結果、遺構・遺物が確認されたため、翌 19 年度当初から発掘調査に着手することで事業課と協議が整い、平成 19 年 4 月 19 日から発掘調査を開始した (第一次調査)。第一次調査対象地は用地買収や施工順序等を検討した上で、1 区及び 2 区を調査対象地に設定して発掘調査を実施した。第一次調査は平成 19 年 7 月 6 日に完了した。

1 区では縄文時代の竪穴建物 2 棟、中近世の掘立柱建物 3 棟、石組遺構 1 基、鍛冶遺構 3 基、土坑 10 基、溝 6 条等を検出した。

2 区では縄文時代の竪穴建物 1 棟、集石遺構 1 基、土坑 1 基、中近世のピット等を検出した。

その後、工事の都合上約 3 ヶ月の間を置いて、平成 19 年 10 月 2 日から 3 区及び 4 区の発掘調査を実施した (第二次調査)。第二次調査は平成 20 年 2 月 4 日に完了した。

3 区では中近世の掘立柱建物 5 棟、柵列 2 条、土坑 11 基、溝 2 条を検出した。

4 区では縄文時代の包含層、中近世の掘立柱建物 1 棟、鍛冶遺構 1 基、土坑 4 基、溝 1 条を検出した。

第三次の調査は、翌年度の平成 20 年 6 月 3 日から、残る 5 区・6 区・7 区の調査を実施することとなった (第三次調査)。これまでの調査に対して 7 区は遺物量が相当量に上り、調査自体にも多少手間取ったが、平成 21 年 2 月 27 日には全ての調査を終了することができ、五ヶ山網取遺跡の発掘調査を完了することとなった。

5 区では、中近世の掘立柱建物 1 棟、井戸 3 基、埋甕 1 基、土坑 7 基、採石遺構 3 基、溝 5 条を検出した。

6 区は丘陵上に位置しトレンチ調査でピット等は確認されたものの、削平が著しく、明確な遺構を確認することはできなかった。

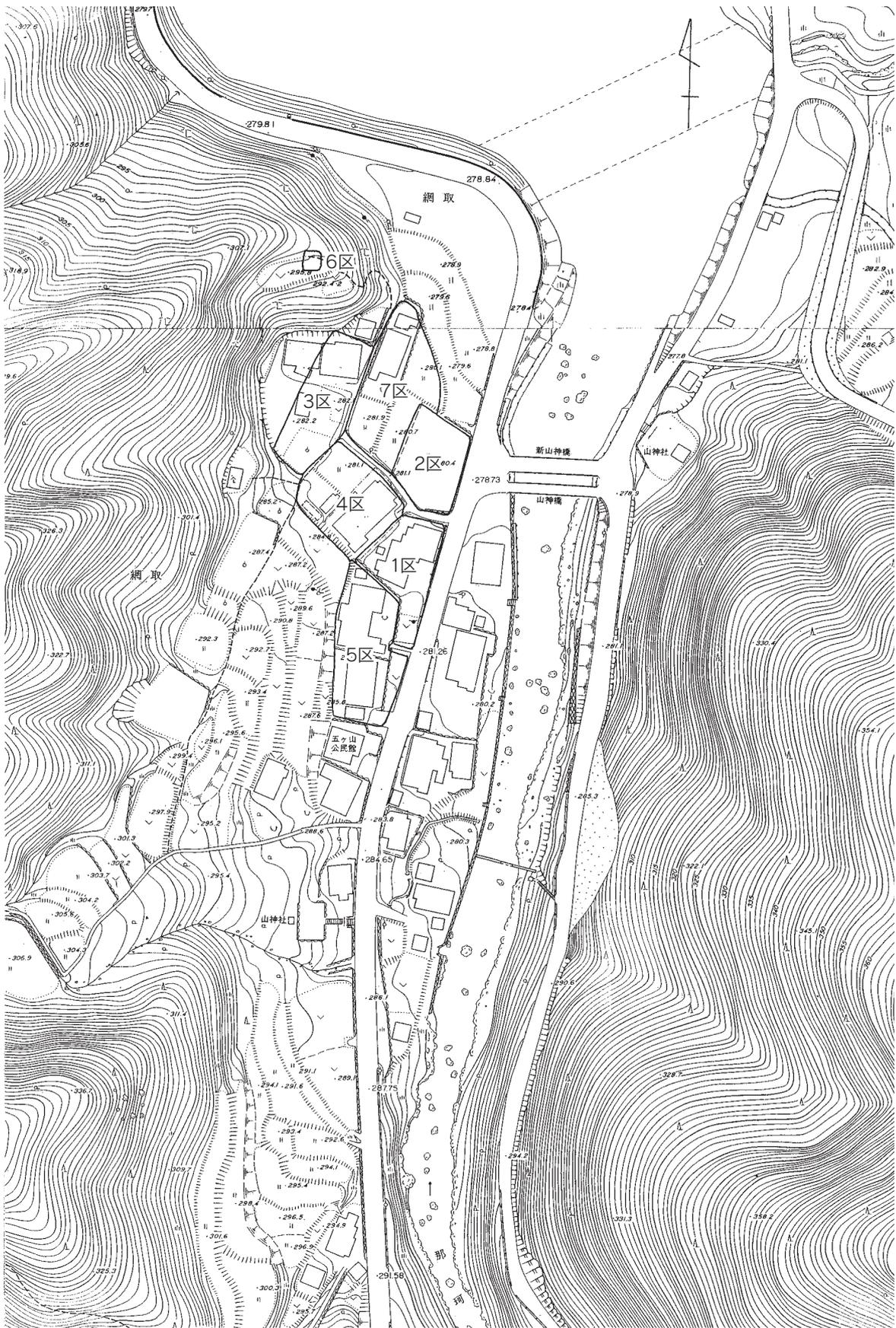
7 区は本遺跡の主体となる調査区であり、中近世遺物の大半はこの区から出土した。縄文時代の竪穴建物 1 棟、方形土坑 14 基、土坑 3 基、焼土を含むピット 2 基、中近世の掘立柱建物 1 基、石垣 1 条、埋甕 1 基、土坑 12 基、数回にわたって掘り直された区画溝 1 条を検出し、特に溝から遺物が多量に出土した。

また、3 区西では、地権者の証言および記録に基づき再々埋納された埋納銭の発掘調査を実施し、3,000 枚を超える数の備蓄銭を検出した。

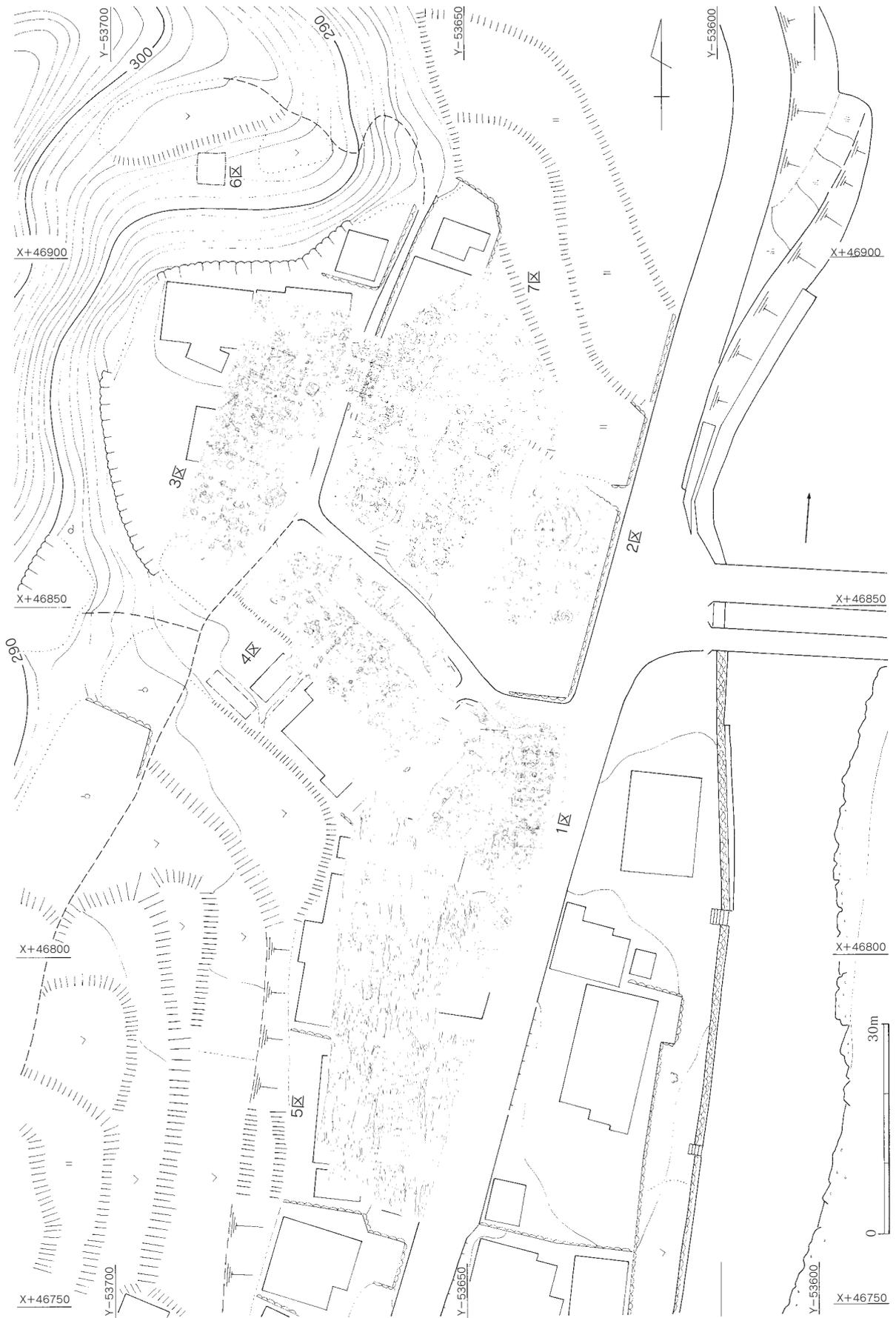
なお、調査成果については、それぞれの区毎に縄文時代と中近世に区分し、遺構や出土土器、陶磁器の報告を行うが、縄文時代の石製品や中近世の土製品、石製品、金属製品は便宜上一括して報告することとする。

(2) 1 区の遺構と遺物 (図版 8、第 20 図)

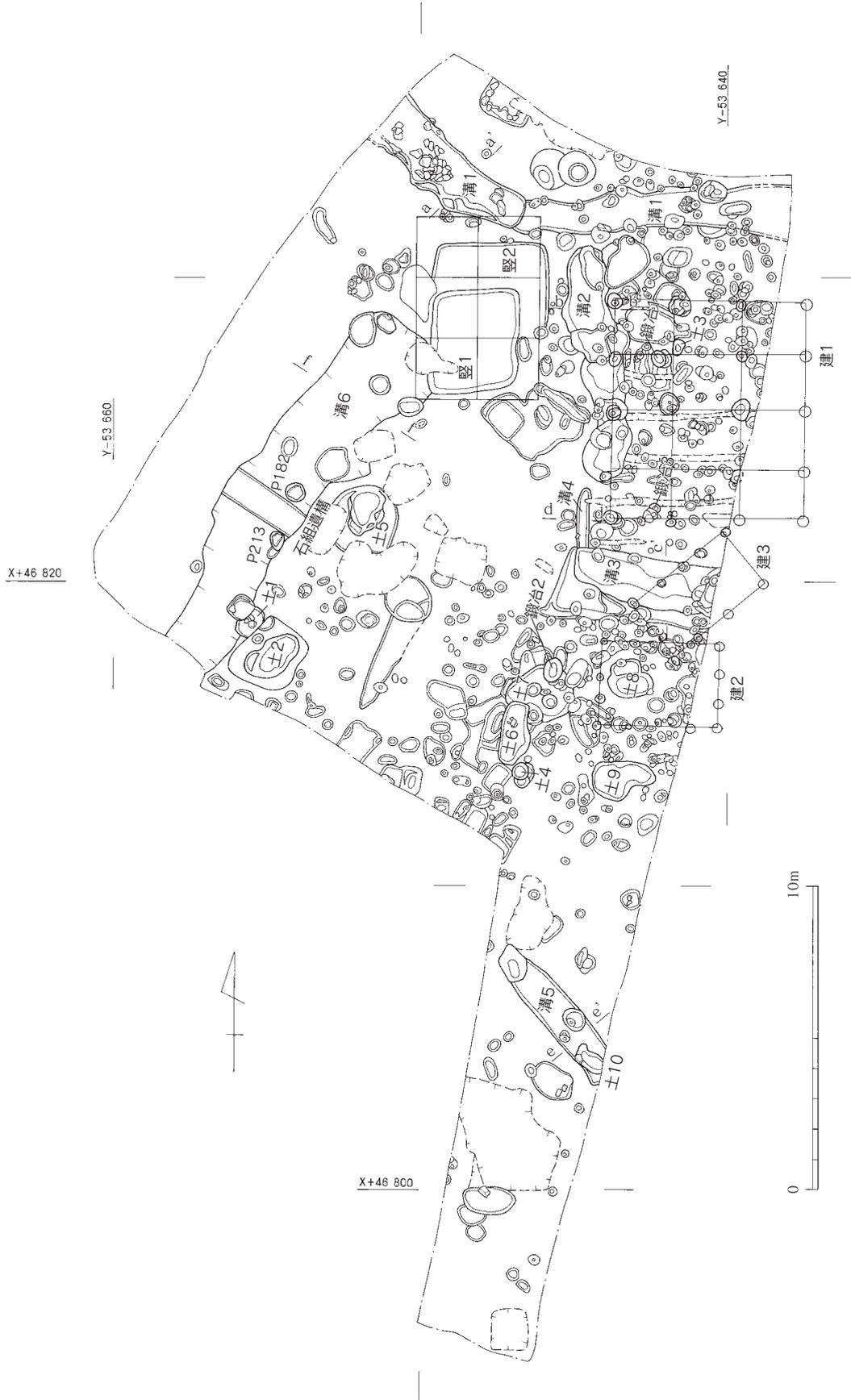
1 区は五ヶ山網取遺跡の西側中央に位置する。調査区東側は道路に面し、すぐ北には、南畑ダムを望む。調査区全体は南西から北東へかけて緩やかに低くなっている。調査区西側東西 3m の範囲に暗褐色土層が広がり、南西隅では 1m 近くの高差がある。中世および近世の遺構が混在して広がり、特に中近世の遺構が多数検出された。



第 18 図 五ヶ山網取遺跡調査区位置図 (1/1,000)



第 19 図 五ヶ山網取遺跡遺構配置図 (1/800)



第20図 1区遺構配置図 (1/200)

縄文時代の遺構と遺物

竪穴建物 1 (図版 11、第 22 図)

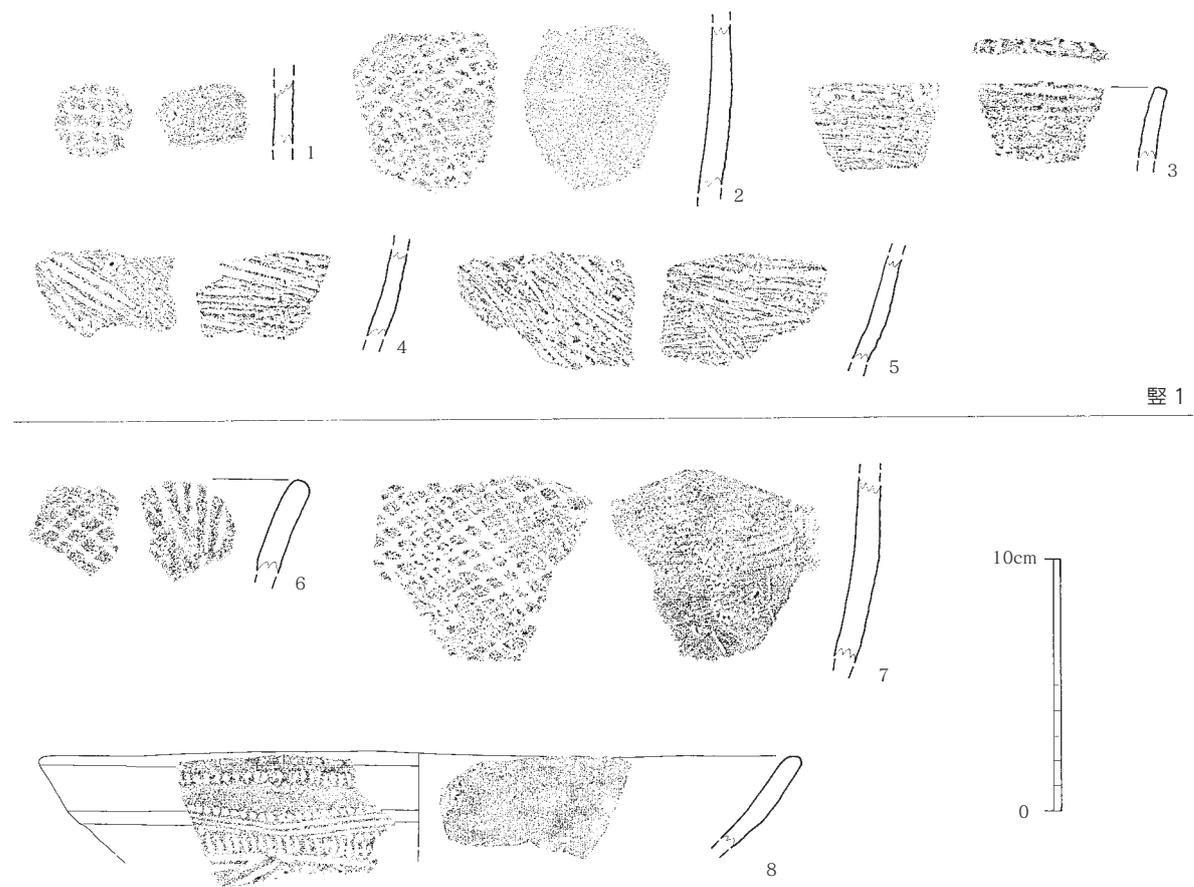
調査区北側中央やや東に位置する方形の竪穴建物である。長軸 3.35m、短軸 2.77m を測り、南北に長軸をとる比較的整った長方形のプランを呈する。遺構面からの深さは、40cm を測り、覆土からは、縄文土器・石器が出土している。竪穴建物 2 を廃絶したのちに造られたものと考えられる。覆土中から押型文土器が出土し、同じ縄文時代早期の住居と考えられるが、住居 2 の遺物の二次堆積の可能性もある。

出土土器 (図版 31、第 21 図)

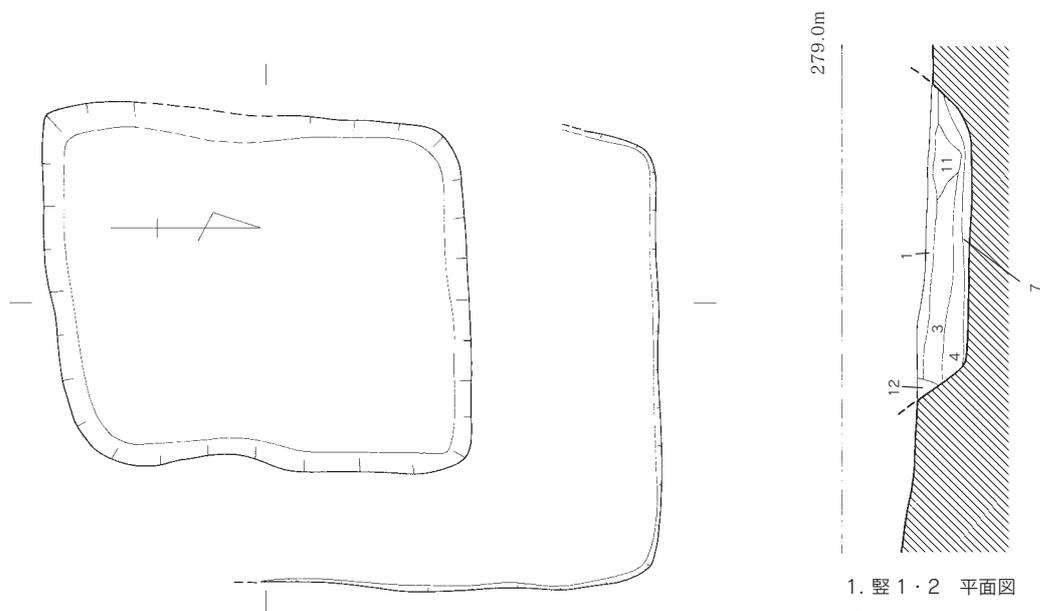
1・2 は押型文土器である。1 は大振りの楕円文を斜位に施文する。内面はナデ。2 も同じく大振りの楕円文を施文する。3 はわずかに外反する器形となる深鉢の口縁部片で、端部は面をなし浅い刻目を施文する。内外面横方向の条痕調整。4・5 は斜位の条痕調整を内外面に施文する。

竪穴建物 2 (第 22 図)

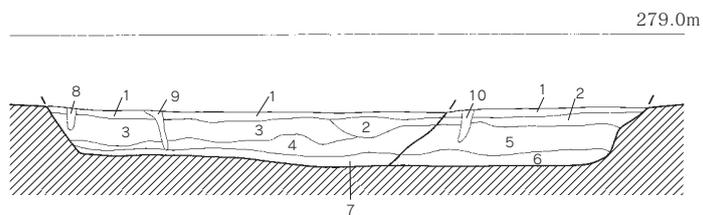
調査区北側中央やや東に位置し、南西の 3 分の 1 を竪穴建物 1 に切られる。全体的に非常に浅く、残りは良くない。特に南側隅については、遺構プランを確認できなかった。東西 3.66m、南北 2.92m の東西に長軸をとる長方形竪穴建物と考えられる。覆土である黒褐色土からは土器片、石器、剥片、礫が検出され、とくに多量の剥片が出土する。竪穴建物 1 と比較して量が多く、石器製作の仕上げ



第 21 図 1 区出土縄文土器実測図 (1/3)

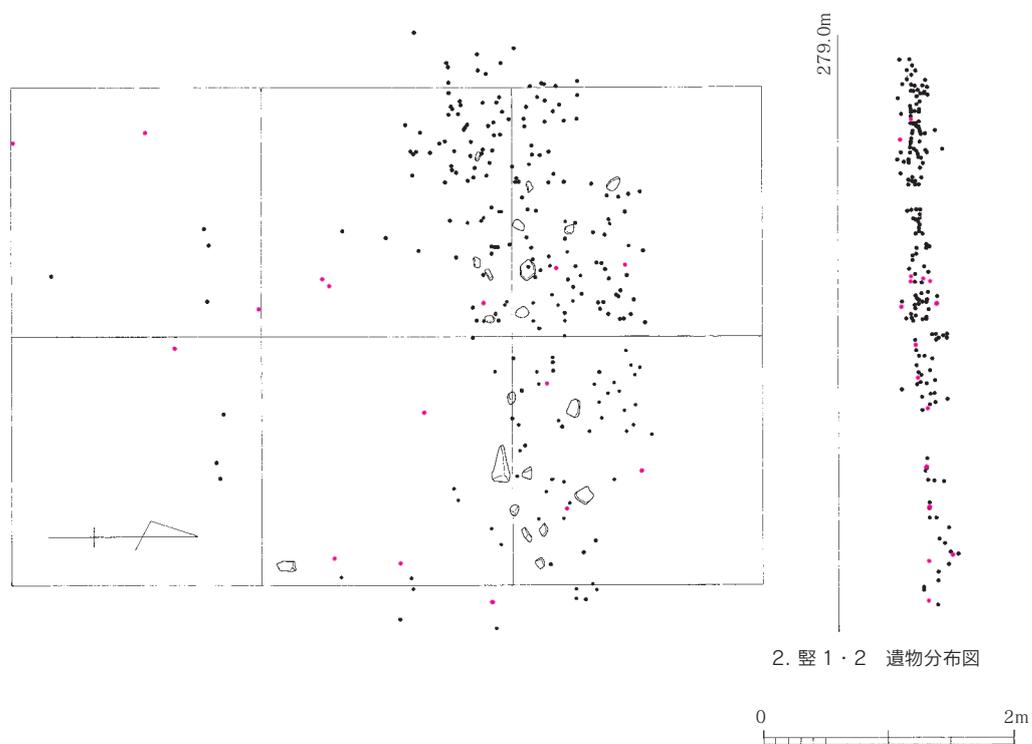


1. 竪 1・2 平面図



1区 竪穴建物 1・2

層位番号	色調	しまり	粘性	注記
1	暗黄褐色	○	○	小礫を多く含む
2	暗褐色	○	○	大礫を含む、炭・焼土を微量含む
3	黒褐色	○	○	大礫を含む、焼土・土器を含む
4	黒褐色	○	○	大礫を含む、炭を少量含む
5	黒褐色	○	○	大礫を含む、焼土粒・炭を少し含む
6	暗灰褐色	△	×	砂・小礫を少し含む
7	暗灰褐色	△	×	砂・小礫を少し含む
8	黄褐色	×	×	炭・焼土粒を微量含む
9	黄褐色	×	×	炭・焼土粒を微量含む
10	黄褐色	×	×	炭・焼土粒を微量含む
11	暗黄褐色	○	○	炭・焼土粒を少量含む
12	黒褐色	△	×	



2. 竪 1・2 遺物分布図

第 22 図 1区竪穴建物 1・2 実測図、遺物分布図 (1/60)

における作業場として使用されていたと考えられる。剥片等の分布は北西側に集中し、この場所において石器調整が行われたことが想定される。土器は図化できるものは出土しなかった。

その他出土縄文土器（図版 31、第 21 図）

6・7 は押型文土器である。6 は若干外反する口縁部片。外面に大振りな斜格子文を施文し、内面には原体条痕が見られる。7 は外面に横位の楕円文、内面は横方向の条痕調整を行う。8 は大きく開く器形となる深鉢の口縁部である。外面には刺突文や沈線からなる文様を施文する。口径 30.0cm。

中近世の遺構と遺物

掘立柱建物 1（第 23 図）

調査区北側東端に位置する建物であり、検出されたのは 2 間×4 間の建物であるが、総柱であることや、その規模および掘立柱建物 2 との関係から想定すると、本来は 3 間×4 間の建物であったのではないかと想定される。建物の主軸は南北軸を取る。掘立柱の中央に鍛冶遺構 1 が位置するため鍛冶遺構との関連も考えられるが、溝 2 よりも新しいこと、鍛冶遺構の性格を考えるとむしろ溝 2 と鍛冶遺構 1 がほぼ同時期で、掘立柱建物 1 より先行する可能性が高い。桁長 7.2m、梁長 4.2m を測り、柱間の間隔は 180～205cm である。柱穴は直径 35～70cm、深さ 60cm～105cm である。

掘立柱建物 2（第 24 図）

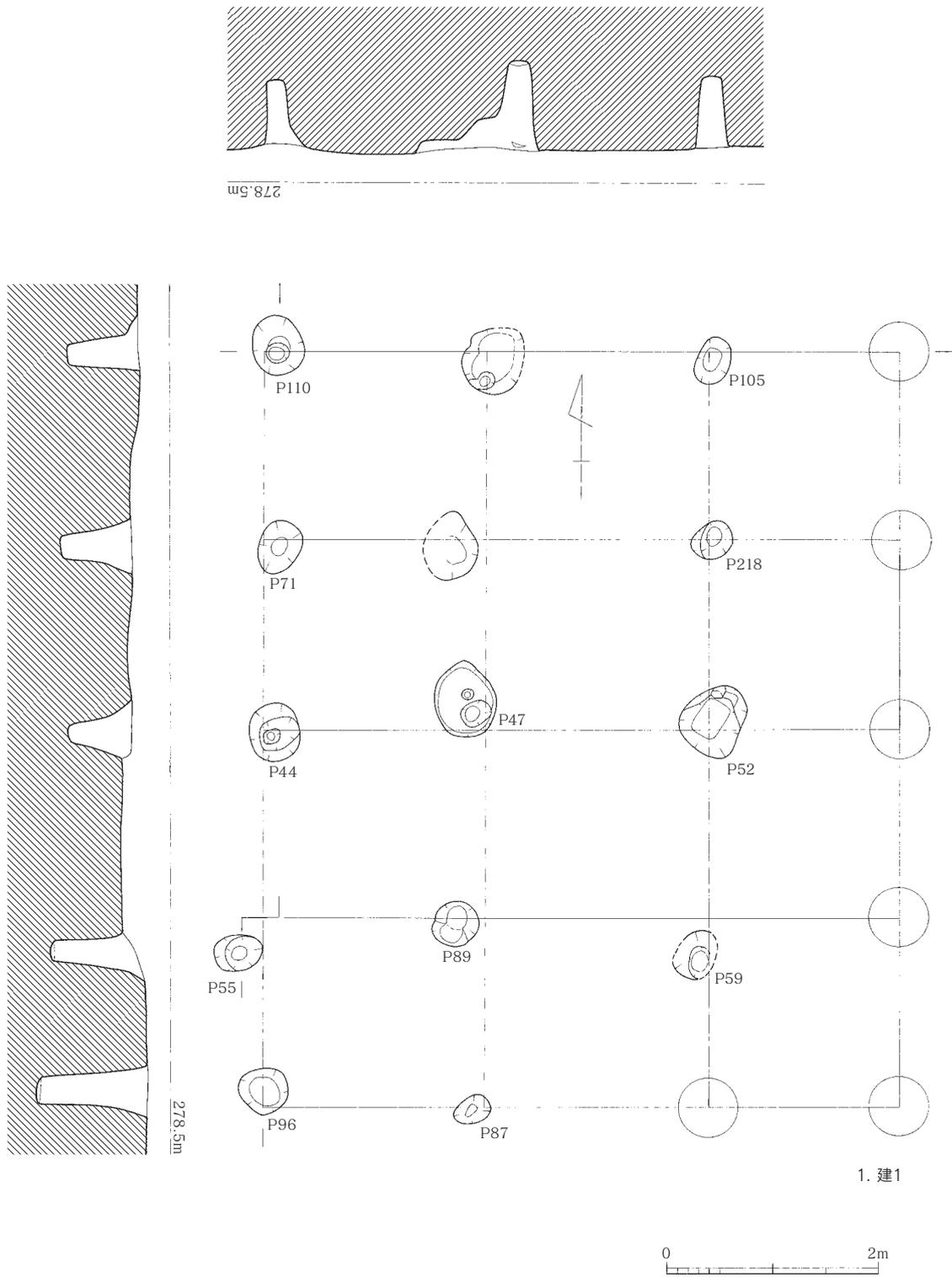
調査区中央東に位置する建物である。主軸は東西を取り、南北の軸は掘立柱建物 1 とほぼ平行になり、同時期の建物である可能性が高い。検出されたのは、桁行 3 間、梁行 3 間であったが、東西の柱間の方が長く、本来の柱間は桁行 4 間、梁行 3 間であったと想定される。桁長 3.05m、梁長 2.75m を測り、柱間の間隔は 80～120cm である。柱穴は直径 15cm～30cm、深さ 12cm～45cm である。

掘立柱建物 3（第 24 図）

調査区中央東やや北に位置する。主軸を南西に取り、2 号掘立柱建物と一部重なる。この掘立柱建物だけ他の 2 件と主軸が異なる。桁長 3.9m、梁長 2.3m を測り、柱間は、桁行 3 間、梁行 2 間である。柱間の間隔はほぼ 115cm である。柱穴は直径 25cm～35cm、深さ 10cm～35cm である。

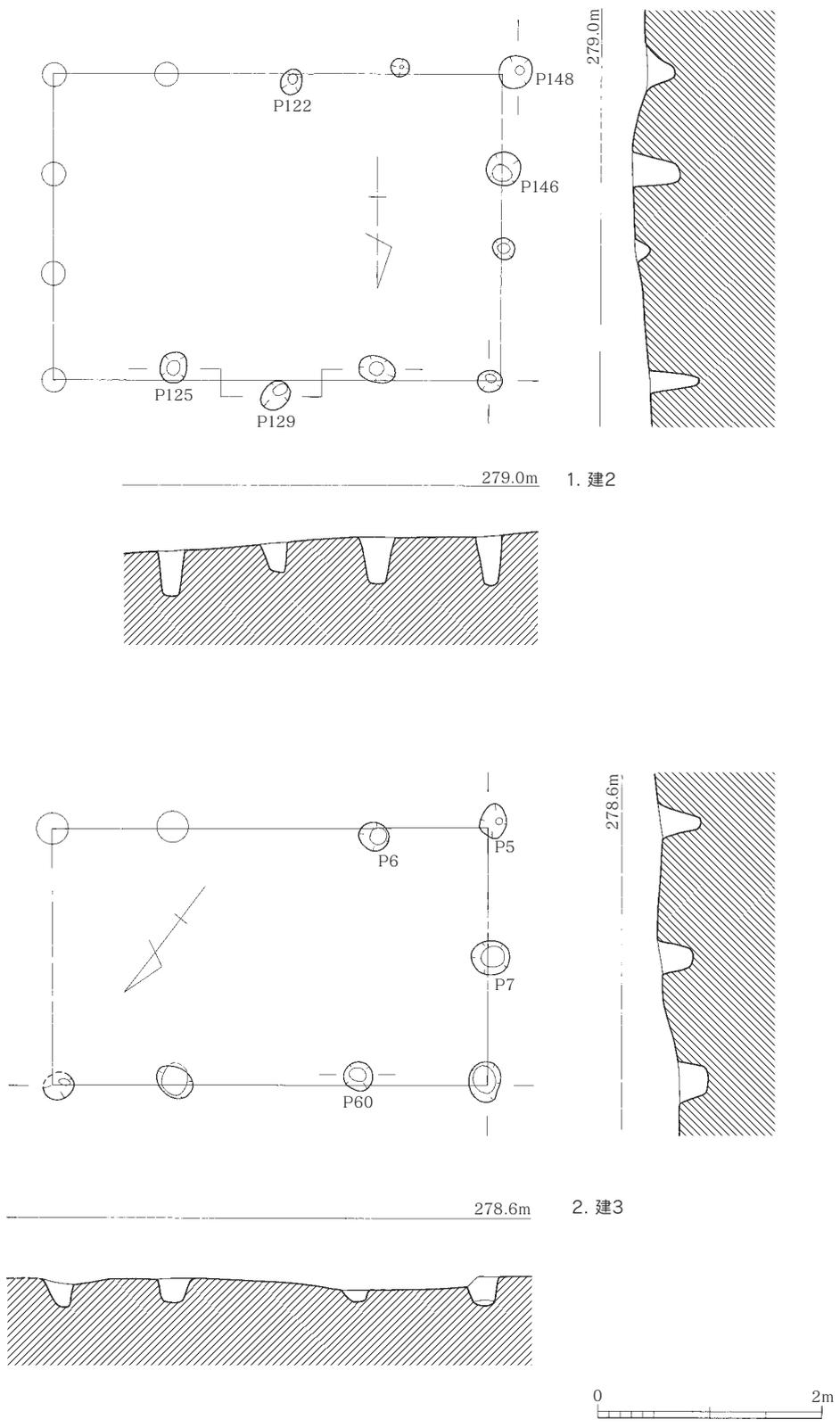
石組遺構 1（第 26 図）

調査区中央南西に位置する。二組の礎石である。やや東よりの南北方向に軸を取る。南北 2.3m、東西 0.55m を測る。礎石は北が径 50cm、南が径 40cm 程の石であり、加工は見られず、上面はさほど平坦ではない。礎石の下に根石等は見られなかった。周辺に対応する柱穴は見られず、建物というよりは門扉のような施設の礎石ではないかと考える。



1. 建1

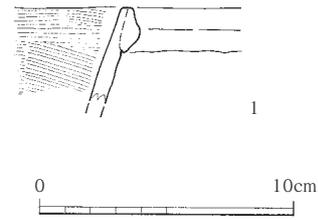
第 23 图 1 区掘立柱建物 1 実測図 (1/60)



第 24 图 1 区掘立柱建物 2・3 実测图 (1/60)

鍛冶遺構 1 (第 26 図)

調査区北東に位置する直径 55cm、深さ 14cm ほどの小型のピットである。ピット中央には円形に赤褐色の焼け土が入り、中央には炭と非常に細かな粒状滓を含む黒色土が詰まっていることから鍛冶関連遺構と考えられる。ピットの 30cm ほど西側には、長楕円状に広がるガチガチに焼けた焼土の塊があり、鍛冶にともなう遺構と考えられる。



第 25 図 1 区鍛冶遺構出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (第 25 図)

1 は土師質焼成の鍋である。口縁部は外面に小さく肥厚させる。内面横ハケ目、外面横ナデ。

鍛冶遺構 2 (第 26 図)

調査区中央南東よりに位置する、長軸 79cm、短軸 57cm、深さ 15cm の長楕円形のピットである。覆土の暗褐色土に多量の炭を多く含む。ピット床面や壁面は被熱による赤化はない。

鍛冶遺構 3 (第 26 図)

調査区中央東に位置する。直径 30cm、深さ 23cm ほどの円形の小型のピットである。隣接するピットにより切られている。覆土に径 15cm の円形に焼土が入り、焼土層の下に薄い炭の単一の層が入る。それより下層は褐色の粘質土であるが、炭を多く含んでいる。

土坑 1 (第 27 図)

調査区南西に位置する。長軸 110cm、短軸 100cm、深さ 14cm。不整楕円状を呈する。南側はピットにより切られる。中央に礫を 3 つ並べて置く。

出土遺物 (第 28 図)

1 は陶器播鉢である。口縁端部を小さな玉縁状に丸く肥厚させる。口縁部のみ鉄釉を施す。

土坑 2 (第 27 図)

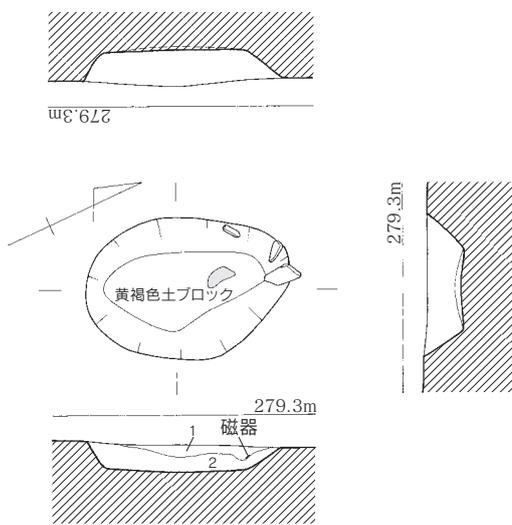
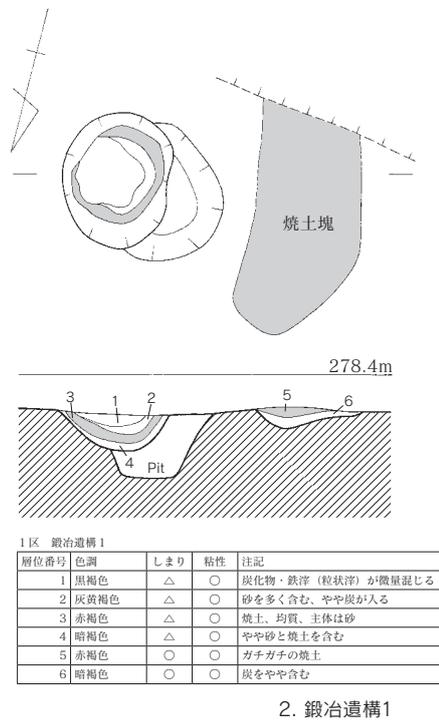
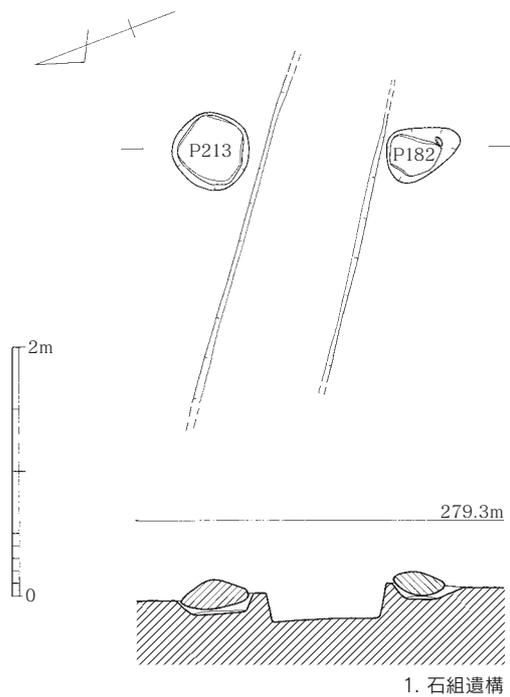
調査区南西に位置する。長軸 2.23m、短軸 1.95m の方形土坑の中に長軸 1.65m、短軸 1m 不整楕円形の土坑が作られている。深さ 45cm、テラス部分は深さ 18cm を測る。

出土遺物 (第 28 図)

2～5 は染付磁器である。2 は口縁部が外反する小杯。外面に「寿」の字を描く。3 は丸い器形の碗である。4 は 3 よりも高台部の径が大きく厚みもある。5 は体部が丸味をもつ皿である。

土坑 3 (図版 11、第 27 図)

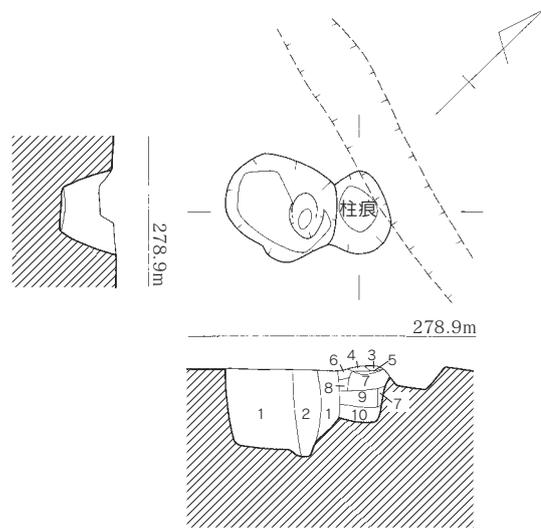
調査区北東に位置する。瓢形のピットで、長軸 53.2cm、短軸 40cm、深さ 50cm を測る。土師皿が深さ 30cm の所で 2 個体、深さ 40cm の所で 1 個体、計 3 個体確認された。いずれも口径 11.5cm、底形 6.5cm ほどの糸切皿である。最も深い所から検出された皿の下からは炭が多く検出され、また少し空洞状になっていたことから、本来柱の横に立てかけられていた土器が柱が腐ったのちにずり落ちたものと考えられる。



1区 鍛冶遺構2

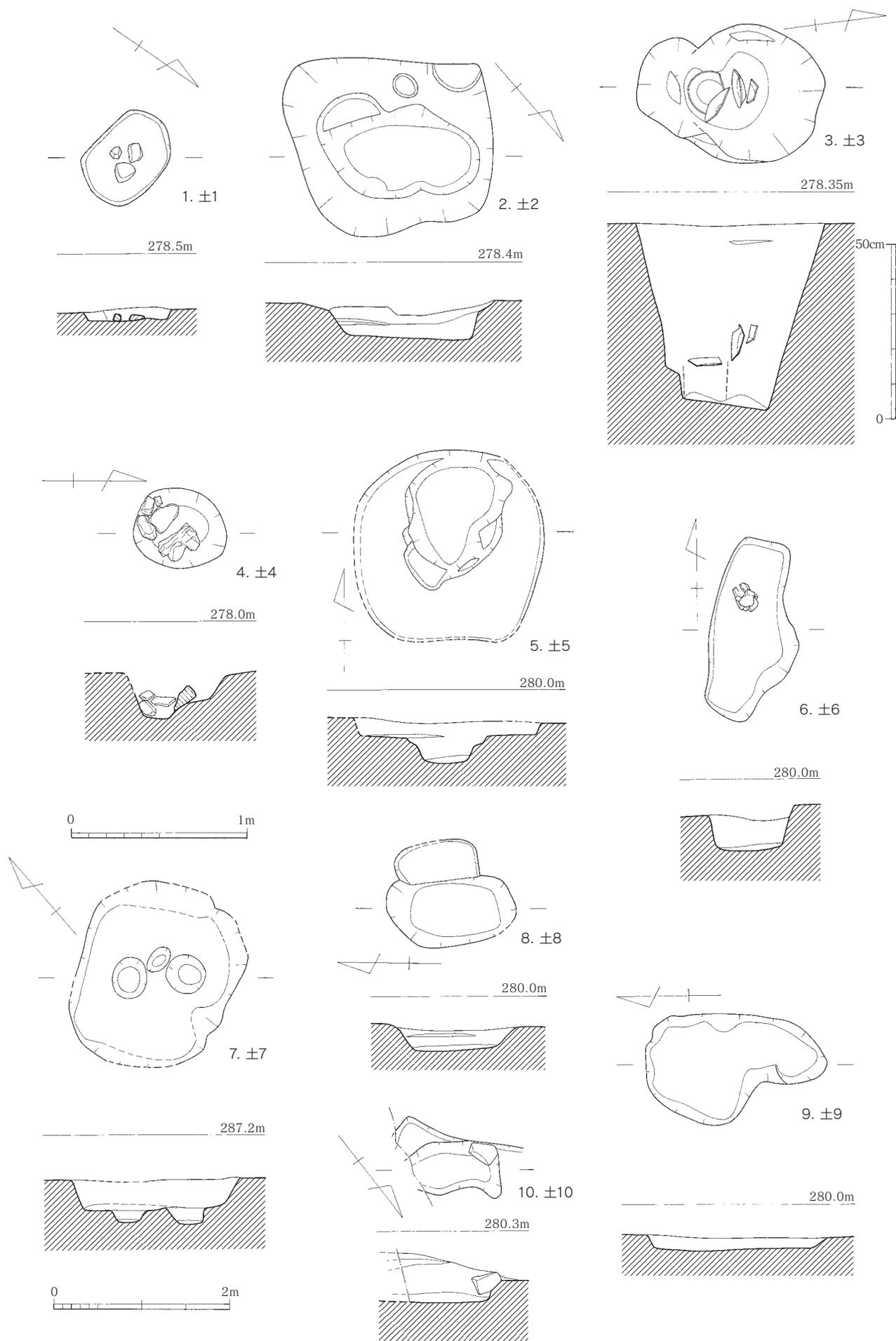
層位番号	色調	しまり	粘性	注記
1	暗褐色	○	○	炭を多く含む
2	褐色	○	○	黄褐色土塊・炭を含む

3. 鍛冶遺構2



4. 鍛冶遺構3

第26図 1区石組遺構・鍛冶遺構実測図 (1:1/60、2・3:1/30)



第 27 图 1 区土坑实测图 (3 : 1/15、他 : 1/60)

土坑 4 (図版 11、第 27 図)

調査区中央やや南東に位置する。円形のピットであり、長軸 54cm、短軸 46cm を呈する。

土坑内には、粘土の塊が落ち込んでいる。黄褐色で植物根はあるが、被熱の痕などはなく、鋳型などの用途に用いたとは考えにくい。住居の壁土が落ち込んだものと想定される。

土坑 5 (第 27 図)

調査区中央に位置する。径 2.15m の円形土坑の中央に長軸 1.5m 程の歪んだ三角形のピットが作られている。深さは、テラス部分は 20cm、最深部が 53cm である。

土坑 6 (第 27 図)

調査区中央やや南東に位置する。長さ 2.07m、幅 0.7 ~ 1.04m、深さ 50cm の長方形である。

土坑 7 (第 27 図)

調査区中央やや南東に位置する。長軸 2.14m、短軸 1.8m の隅丸方形を呈する。土坑内にはピットが多数作られている。深さは 29cm、ピット部分は 50cm である。

土坑 8 (第 27 図)

調査区中央東に位置する。東側に長さ 0.95m 程の長方形の土坑がくつつく方形土坑である。長軸 1.5m、短軸 1.23m、深さは、テラス部分は 15cm、床面は 31cm。

土坑 9 (第 27 図)

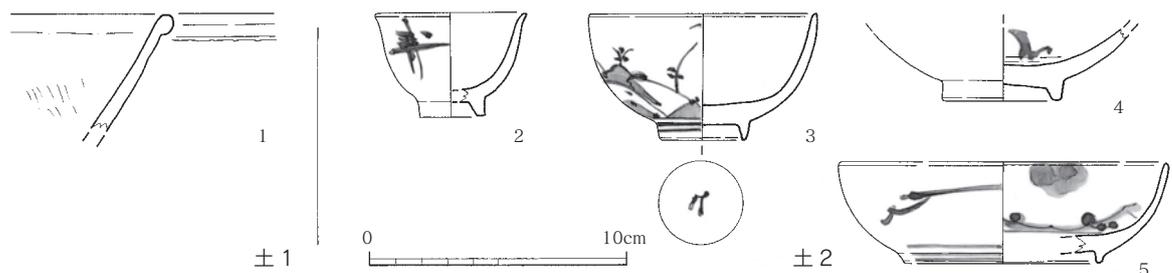
調査区中央東に位置する。不整形で北側にやや張り出す形の土坑である。長軸 1.0m、短軸 0.55m、深さ 57cm。西側に礫をおく。

土坑 10 (第 27 図)

調査区南に位置する。南側に突出する不整形の土坑である。長軸 2.05m、短軸 1.25m、深さ 15cm。

溝 1 (第 20・29 図)

調査区北に位置する。長さ、14.3m、幅 0.81 ~ 2m、深さ 38cm を測る。東から西へ向かい、ゆるい弧状を描いて流れる。



第 28 図 1 区土坑出土遺物実測図 (1/3)

溝2 (第20・29図)

調査区中央に位置する、南北にのびる溝である。長さ7.8m、幅0.7～1.5m、深さ25cmを測る。鍛冶遺構1および3に近いことから、これらとの関連を考えたが、覆土には炭や鉄滓等は含まれていなかった。

出土遺物 (第30図)

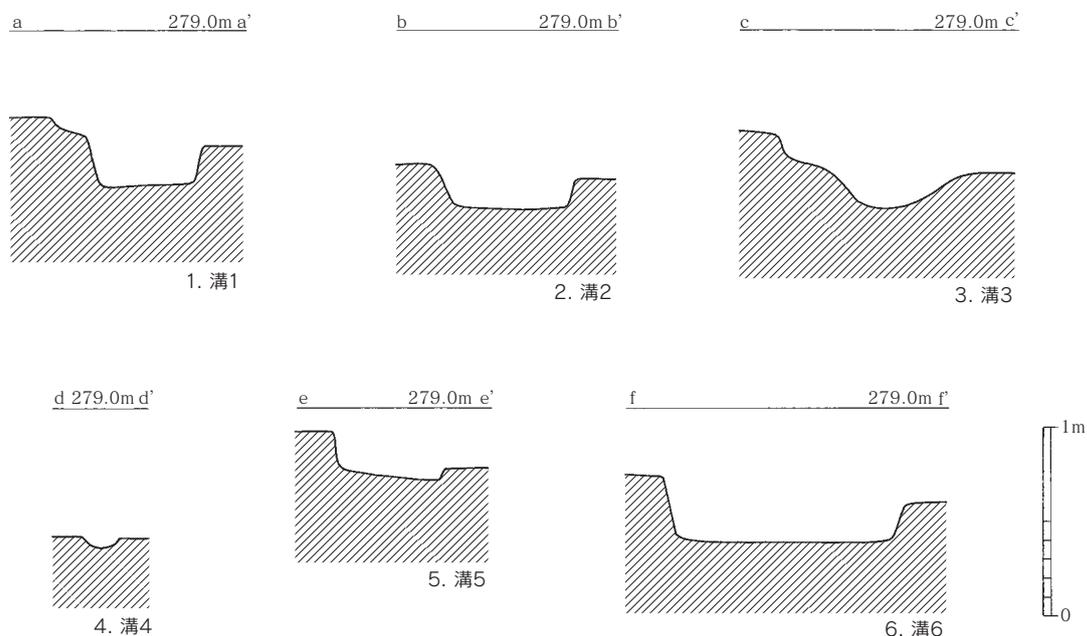
1～3は土師質鍋または鉢である。1は素口縁、2・3は端部を外側に肥厚させる。いずれも外には炭化物が付着する。2は傾きから、浅い鉢状になるものと思われる。4は小型の甕で、須恵質に焼成される。口径11.0cm。

5・6は陶器である。5は片口鉢。体部は丸味を帯び、口縁端部は外側に折り返して丸く肥厚する。褐色の釉を施釉する。6は口縁内端部を短くつまみ出した形状となる。内面の播目は密に施される。

7～10は磁器である。7は細身で口縁端部が外反する小坏。文様は施文されていない。8は下半が丸味を帯びた器形となる小坏。口縁端部はやはり外反する。呉須の発色が悪く灰色を呈す。9は高台部が細く高めで、体部が直線的に伸びる小坏。遺存する範囲では施文は見られない。全体に粗い貫入が見られる。10は丸味を帯びた器形の皿。内面には草花文を描く。

溝3 (第20・29図)

調査区中央西に位置する、東西にのびる溝である。ほぼ長方形の形状を呈する。長さ5.6m、幅2～2.4m、深さ40cmを測る。



第29図 1区溝断面実測図 (1/40)

出土遺物 (図版 28、第 30 図)

11 は瓦質焼成の火鉢である。口縁部が直立しており、円筒形になると思われる。外面には低い突帯が巡る。

12～14 は陶器である。12・13 は皿である。12 は口縁部が外反し、端部を波状に仕上げる。釉は鉄釉。13 は藁灰釉を施釉する。14 は口縁端部をほぼ水平に外側に屈曲させる鉢。外面は藁灰釉、内面には緑色釉による施文が見られる。

15 は口縁部がわずかに外反する小杯。外面口縁部下と高台部に呉須による圏線が施文される。

溝 4 (第 20・29 図)

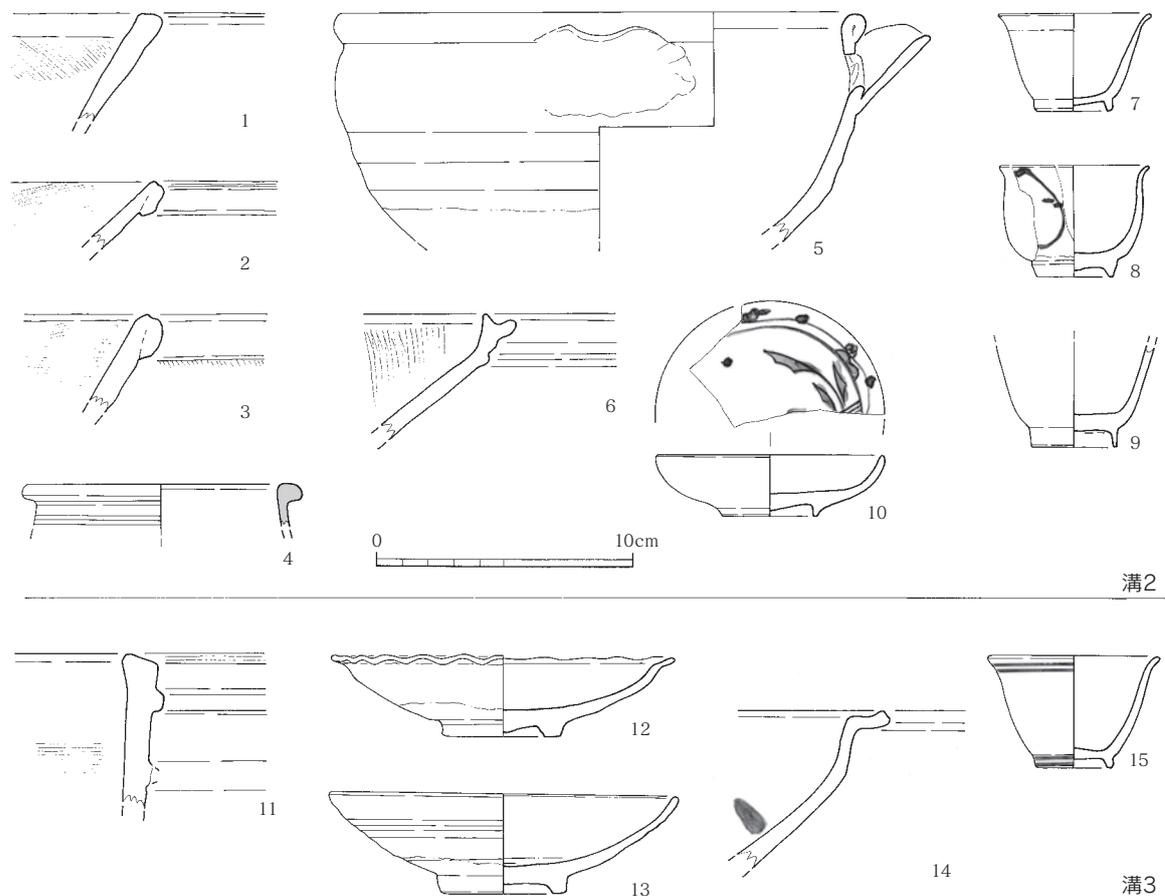
調査区中央に位置し溝 3 に切られる南北にのびる溝である。長さ 2m、幅 0.3m、深さ 5cm である。

溝 5 (第 20・29 図)

調査区南に位置する北西にのびる溝であり、細長い方形を呈する。長さ 5m、幅 1.1m、深さ 22cm である。

溝 6 (第 20・29 図)

調査区西に位置し、南北にのびる溝である。長さ 13m、幅 1.8～2.8m、深さ 36cm を測る。



第 30 図 1 区溝出土遺物実測図 (1/3)

ピットその他出土遺物（図版 31、第 31・32 図）

1～3 は土師器小皿である。1 は深みのある器形で底径が 3.2cm と小さい。口径 5.8cm、器高 2.0cm。2 は口径 6.2cm、器高 1.1cm。3 は口径 8.2cm、器高 1.7cm。

4～12 は土師器皿である。4 は口縁部が直立気味に立ち上がり深みのある器形となる。口径 8.0cm、器高 3.1cm、底径 5.0cm。5 は口径 8.6cm と小型の皿。6 は口径 9.8cm、器高 2.8cm。7～11 は底部端がシャープな稜を有し、類似する形状の皿である。口径 10.6cm、器高 2.7cm。8 は口径 10.8cm。9 は器壁が薄い。口径 12.0cm。10 は口径 11.3cm。11 は口径 11.4cm。12 はやや大型の皿か、もしくは鉢の底部であろう。底部の二ヶ所に穿孔が見られる。底径 9.0cm。

13～15 は土師質播鉢である。口縁端部はいずれも素口縁で、13 は内面ナデ後に播目が施される。14 は内外面ハケ目、15 は内面横ハケ目、外面ナデ。

16～22 は土師質鍋または鉢である。16 は端部が若干肥厚し、上端面に一条の沈線を巡らせる。内面ハケ目、外面ナデ。17～19 は口縁端部を外側に肥厚させる。18 は内面横ハケ目、17 と 19 は内面横ナデ。20 は上端部を水平に面取りする。内面横ハケ目、外面横ナデ。21・22 は口縁端部を外側に肥厚させる。調整は内外面ともナデ。

23・24 は瓦質焼成で、23 は鍋の口縁部か。外側に大きく開いた形状をなす。24 は器壁が厚く、底端部に台形状の低い脚部をもつ火鉢である。

25～36 は陶器である。25 は焼締の蓋である。天井部外面には放射状の沈線が施される。

26～29 は碗である。26・27 は口縁部が直立する器形となる。26 は素口縁。無色釉が施釉される。27 は口縁部を外側に丸く小さく肥厚させる。褐釉を施釉する。28 は体部外面にのみ黒色釉が見られる。内面は露胎。29 は天目碗。

30 は口縁部を強く外折する器形となる皿である。白色の釉を施釉する。

31 は口縁部が内湾する丸い器形の鉢である。口縁端部は丸く仕上げられる。外面には褐釉が施釉されるが焼成が悪くガラス化していない。内面は露胎。口径 13.0cm。

32 は細身で重心がやや高い位置にある瓶である。釉は無色釉を塗布する。

33 は甕である。頸部はあまり締まらず口縁部は短く直立し端部を内側に小さく肥厚させる。内面には格子当て具痕が残り、外面には数条の沈線が見られる。口径 16.6cm。高麗産の無釉陶器か。

34 は大型の鉢である。口縁部は外側に小さくつまみ出され、上面は水平面をなす。高台は低平な二重高台となる。焼成が悪いためか表面の褐釉はほぼ剥落する。口径 33.6cm、器高 10cm。

35 も大型の鉢である。外面は露胎、内面は白色釉施釉後に緑色釉、鉄釉を流し掛ける。内面には 3ヶ所の目跡があり、配置から本来は 8ヶ所にあったものと思われる。

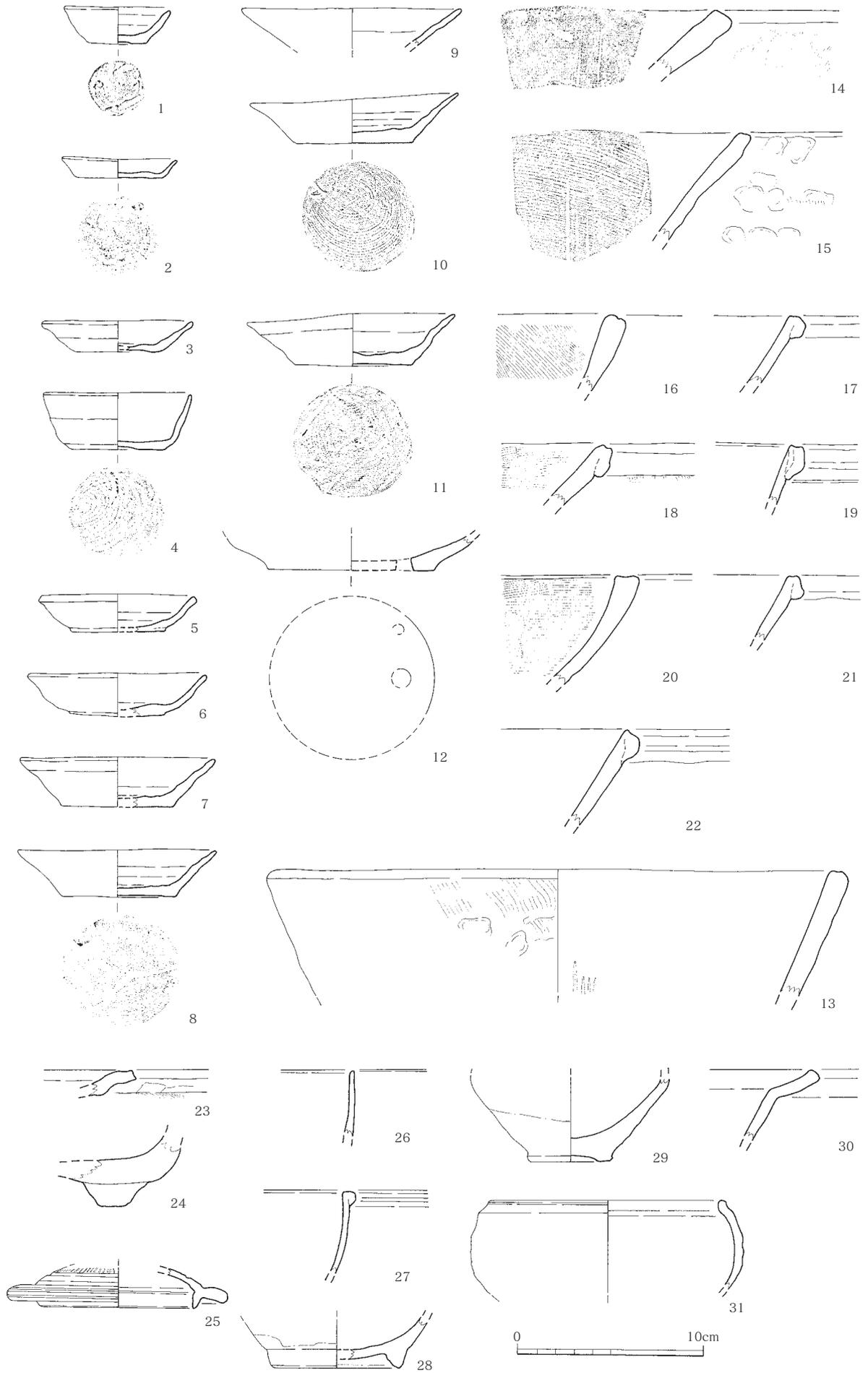
36 は香炉の類か。裾部には円形の透かし孔が見られる。釉は藁灰釉を施釉する。

37～46 は磁器である。37 は青磁碗の底部片。高台部畳付のみ露胎となる。

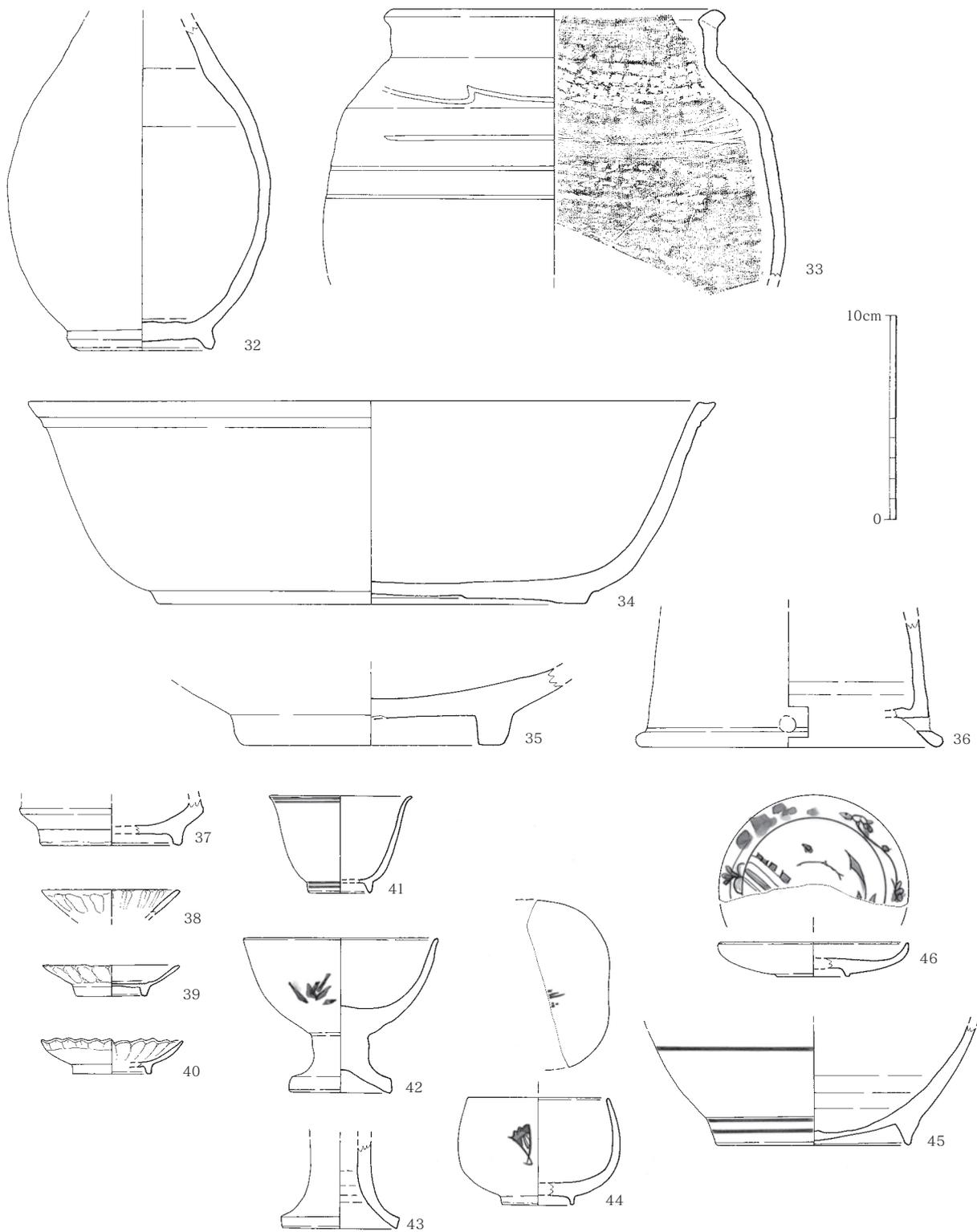
38～40 は紅皿である。どれも菊花状に整形され、40 は口縁部が花卉状に波打っている。38・39 は口径 6.8cm、40 は口径 7.0cm。

41 は小坏。細身の器形で口縁端部のみわずかに外反する。外面の口縁部下と高台部に圈線を巡らせる。

42 は仏飯器である。碗部は口縁部がやや開いて丸味が少ない器形となる。43 は脚部片である。42 と異なり脚柱部は筒状になる。44 は重心が下位にあり、口縁部が内傾する碗である。平面は円



第31図 1区ピットその他出土遺物実測図① (1/3)



第 32 図 1 区ピットその他出土遺物実測図② (1/3)

形ではなく方形に近い形状になるようである。45は大型の碗であろう。外面の体部と高台部に呉須による圏線が描かれる。内面は露胎。46は小型の皿である。浅い器形で端部のみ上方に立ち上がる。

(3) 2区の遺構と遺物 (図版8、第33図)

2区は五ヶ山網取遺跡の北西隅に位置する。調査区東側は道路に面し、東側は東西3～4mの範囲は高低差がきつく、土壤に鉄分を多く含む。調査区全体が西から東へかけて緩やかに低くなっており、調査区北東隅は278.00mと本調査区の中なかで最も標高が低い位置にある。

基本層序 (図版12、第34図)

2区北壁の東西セクションでは、調査区全体が西側から東側に向かって低くなっているのに合わせ、東に向かって低くなる。調査以前は畑として使われていた。第8層のにぶい褐色土と第14層が、遺構面となる褐色土であり、良好なロームの地山である。第5層と13層は、鉄分を多く含み、鍵層となっている。



第33図 2区遺構配置図 (1/200)

縄文時代の遺構と遺物

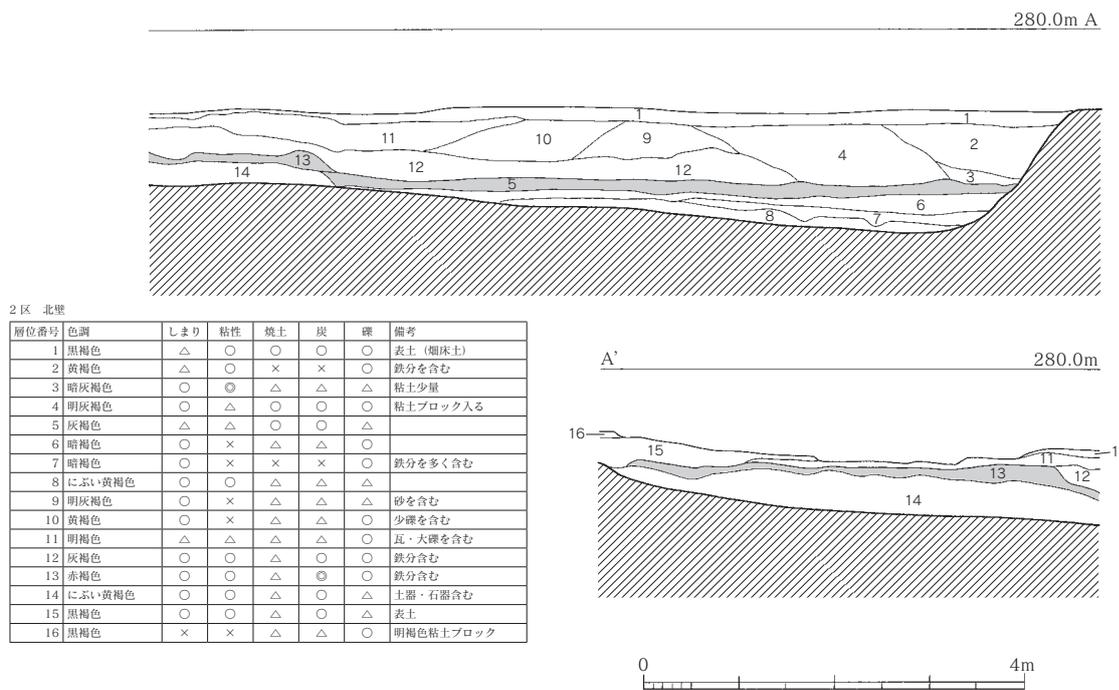
竪穴建物 1 (図版 12・13、第 35 図)

調査区中央に位置する。大型の竪穴建物であり、プランはやや南北に長い円形プランとなる。最大幅は、南北 6.34m、東西 5.8m と、非常に大きいため、調査時にも遺構検出時に精査を重ね最終的には土色の差で、ラインを引いたが、遺構のプランの把握については、少し不安が残る。柱穴については、竪穴内よりピットが多数検出されているが、基本的には壁に対応して、多角形に建てられていたものと想定されるが、ピットの大きさも深さもまばらであり、柱穴の並びとしてまでは確認できなかった。また、竪穴中央にあるピットからは、炭などは検出されず、炉として認識できなかった。また、東側の壁沿いの溝状の遺構からは、炭が検出され、こちらが炉の可能性が高い。竪穴建物 1 の東側では、円形の広がり確認され、竪穴建物 1 に切られる円形竪穴建物と想定したが、覆土も浅く、遺構として確認まではできなかった。

遺物出土状況のように、住居周辺からは多量の縄文土器片・石器片が出土している。石器は黒曜石とサヌカイトがみられる。剥片が多く出土しており、竪穴建物周辺において、石器製作をしていたことが想定される。

出土土器 (図版 31、第 37 図)

1・2 はわずかに外反する口縁部片。どちらも内外面条痕調整で口縁端部には刻目を施文する。3 は内面ナデ、外面縦方向の沈線が見られる。口縁端部にはやはり刻目を施文する。4・5 は条痕調整の胴部片である。6・7 は深鉢の底部である。6 は裾部がやや開き、底面はほとんど水平である。調整は内面条痕、外面ナデ。底径 7.6cm。7 は底面が若干上げ底となる。外面には条痕調整が認められる。底径 9.8cm。



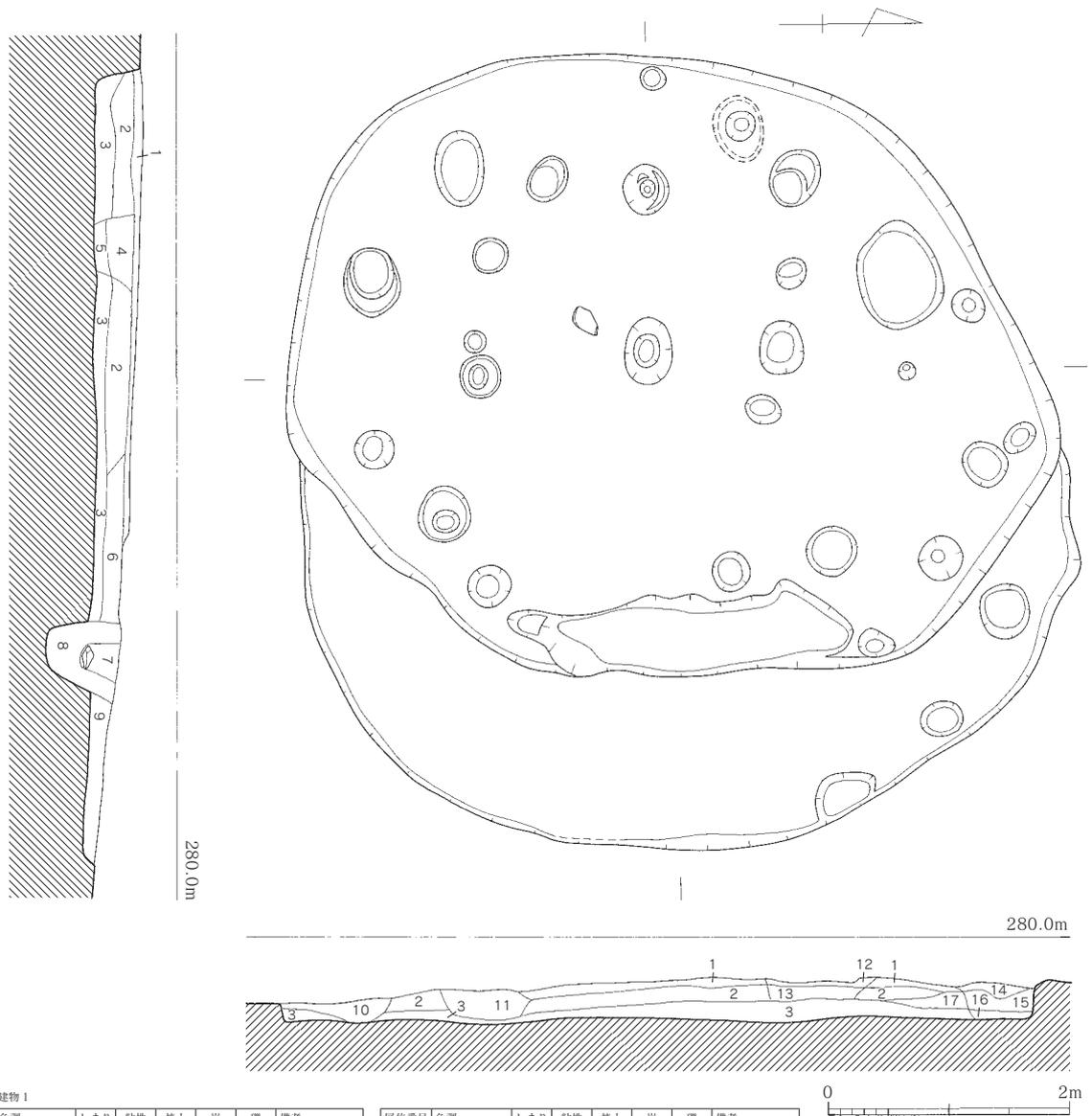
第 34 図 2 区北壁東西断面図 (1/80)

集石遺構 (図版 13、第 38 図)

調査区南西に位置する。南北 1.38m、東西 1.6 m の範囲に大きめの礫が集中する。いくつかのものは被熱により赤色化している。地山には被熱はなく、また遺構も確認されなかった。石組炉が放置され崩れた状態で検出されものと考えられる。

土坑 (図版 13、第 38 図)

調査区北東に位置し、南北 2.28m、東西 1.75m で不整楕円形を呈する。1.23m、1.75m の円形のピットの中に比較的大きな礫を詰める。



2 区 竪穴建物 1

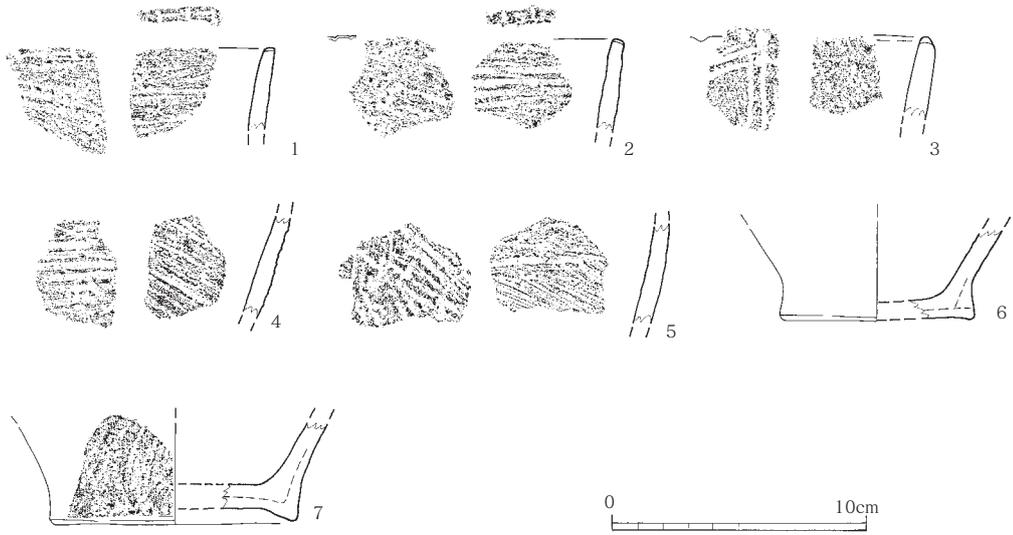
層位番号	色調	しまり	粘性	焼土	炭	礫	備考
1	黄褐色	△	△	○	△	○	ガチガチの砂
2	にぶい黄褐色	○	△	○	○	○	
3	暗黄褐色	○	○	△	○	△	細砂を含む
4	にぶい黄褐色	○	○	○	○	○	鉄分を含む
5	暗黄褐色	○	○	○	○	△	鉄分を含む
6	にぶい黄褐色	○	△	△	○	○	2と似る
7	黒褐色	×	×	△	◎	×	炭化物の層
8	明黄褐色	○	○	×	○	△	

層位番号	色調	しまり	粘性	焼土	炭	礫	備考
9	明黄褐色	○	△	○	○	○	2と似る
10	黄灰褐色	×	△	△	△	◎	
11	にぶい黄褐色	○	×	○	△	◎	
12	暗黄褐色	○	○	×	△	×	
13	暗黄褐色	○	○	△	△	△	
14	黄灰褐色	×	×	×	△	○	
15	灰褐色	○	×	×	×	◎	
16	にぶい黄褐色	○	△	△	○	○	

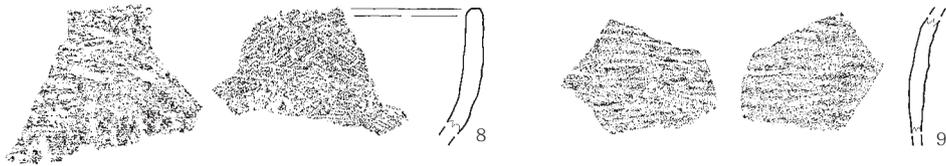
第 35 図 2 区竪穴建物 1 実測図 (1/60)



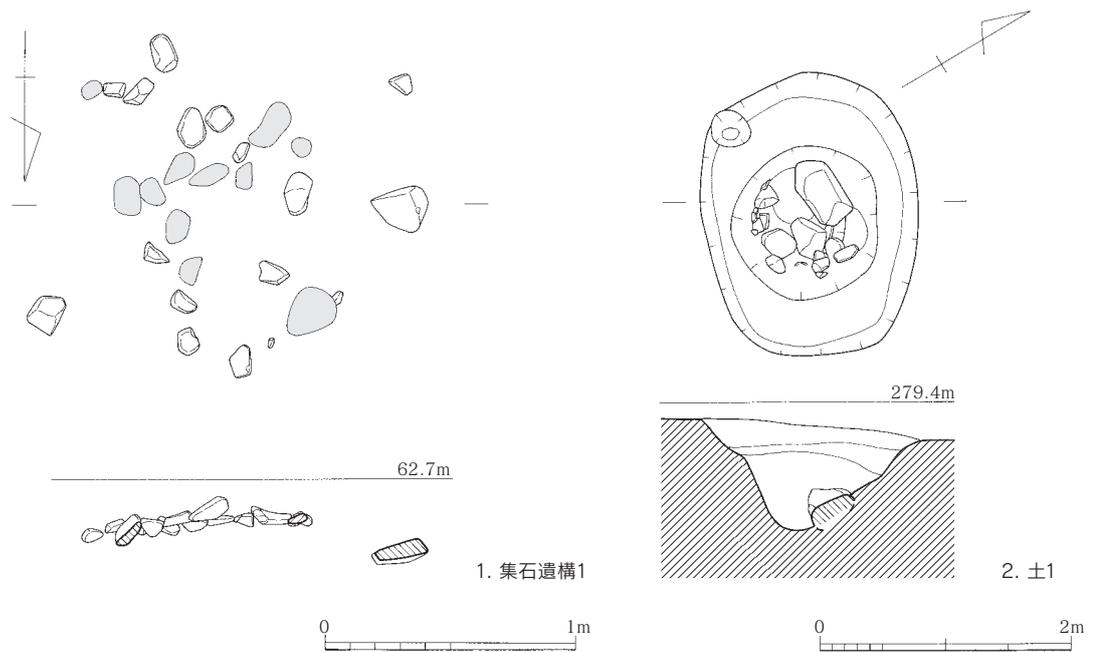
第36図 2区竪穴建物1グリッド図 (1/40)



豎1



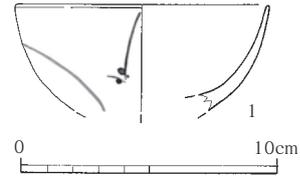
第 37 図 2 区出土縄文土器実測図 (1/3)



第 38 図 2 区集石遺構・土坑実測図 (1 : 1/30、2 : 1/60)

その他出土縄文土器 (第 37 図)

8 は直立する口縁部で、傾きからすると浅鉢のような形状となる
うか。内外面条痕調整。9 は深鉢の胴部片で外反する部分である。
内外面横条痕調整。



第 39 図 2 区出土遺物実測図 (1/3)

中近世の遺構と遺物

ピット出土遺物 (第 39 図)

1 は染付碗である。口縁部がやや外側に開きながら立ち上がる器形となる。呉須の発色は灰色に
近い。口径 10.0cm。

(4) 3 区の遺構と遺物 (図版 9、第 41 図)

五ヶ山網取遺跡の北西に位置する。3 区は丘陵の端部にあたり、一部山の斜面を削って整地して
いる。北東に向かってわずかに傾斜する。遺物は中世の土器も出土しているが主体は 17 世紀を中
心とする近世である。遺構は礎石建物が少数と、多数の掘立柱建物が確認された。またこれらの建
物に伴う、区画溝や井戸・土坑が確認されている。3 区北側では、東の境界で暗渠が確認された。
旧地形も東側に向かって低くなっているが、この段が集落の境にもなっていたと想定される。

また 2 区では縄文の包含層が確認されたが、この地区では確認されなかったことから、縄文時代
は東側の傾斜の緩い部分を中心に土地利用した、もしくは、近世以降の土地利用により判別が難し
くなっていると考えられる。

また近世の土坑 9 から古墳時代の可能性も考えられるガラス小玉が 2 点確認された。4 区の溝 1
の覆土からも古墳時代の須恵器片が確認されていることから、既に削平された丘陵部分等に古墳時
代の遺構があった可能性も考えられる。

縄文時代の遺構と遺物

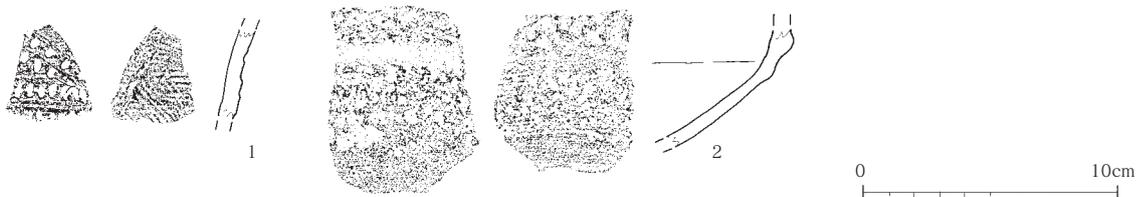
その他出土縄文土器 (図版 31、第 40 図)

1 は深鉢の口縁部下片で、外面に連続する刺突による文様を施文する土器である。近世ピットか
ら出土。内面は条痕調整。2 は浅鉢の屈曲部片である。内外面ナデ調整。土坑 4 覆土から出土。

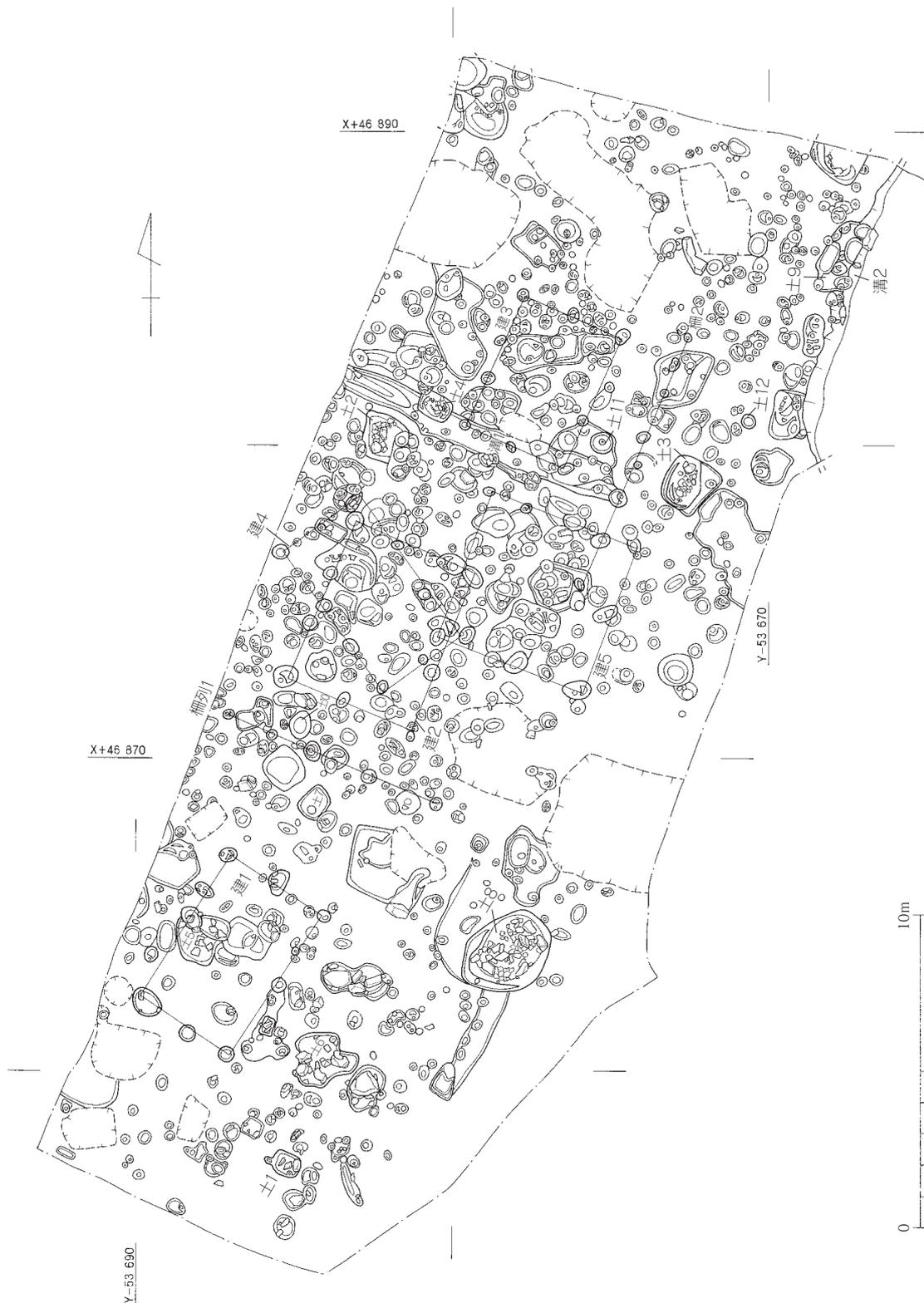
中近世の遺構と遺物

掘立柱建物 1 (第 42 図)

調査区南西に位置する。建物の主軸はやや北東にふれる南北軸を取る。桁長 5.4m、梁長 3.5m



第 40 図 3 区出土縄文土器実測図 (1/3)



第41図 3区遺構配置図 (1/200)

を測り、柱間の間隔は80～130cm、柱穴は直径40cmのものが多いが、25～80cmとばらつきもある、深さは20cm～45cmである。一部石が残るものもある。

掘立柱建物 2 (第 42 図)

調査区中央西に位置する。建物の主軸はやや北東にふれた南北軸を取る。桁長5.6m、梁長4.3mを測り、柱間の間隔は110～215cm、柱穴は直径23～70cm、深さは45cm～98cmである。

掘立柱建物 3 (第 43 図)

調査区中央北寄りに位置する。建物の主軸はやや北東にふれる南北軸を取り、掘立柱建物2とはほぼ軸を同じくする。桁長4.6m、梁長3.4mを測り、柱間の間隔は100～136cm、柱穴は30～40cmとほぼ大きさが均一である、深さ22cm～50cmである。

掘立柱建物 4 (第 44 図)

調査区中央西に位置する。建物の主軸は北西の軸を取り、同一の調査区では同じ軸の建物は見られない。桁長5.4m、梁長3.0mを測り、柱間の間隔は110～170cm、柱穴は直径25～50cmとばらつきもある、深さは17cm～67cmである。

掘立柱建物 5 (第 44 図)

調査区中央に位置する。建物の主軸は北東に触れる南北軸を取る。掘立柱建物2とほぼ軸を同じくするが、ピットの切り合い関係から見て、掘立柱建物2よりも新しく建てられたと考えられる。桁長5.0m、梁長5.0mでほぼ正方形を呈する建物である。柱間の間隔は98～216cmと幅があるがこれは他辺がすべて2間であるのに、北辺のみ3間であることによる。柱穴は北辺の西側のピットが直径35cmと小さく、他は40～70cmである。深さは40cm～72cmである。

柵列 1 (第 43 図)

調査区中央に位置する。掘立柱建物2の直ぐ南に位置し、並行する東西軸を取る。直径30～52cmの5つのピットが1.35m幅で並ぶ。掘立柱建物との関係からほぼ同時期の所産と考えられる。

柵列 2 (第 43 図)

調査区北側中央に位置し、掘立柱建物3のすぐ東に位置する。直径20～60cmのピットが83cm幅で7つ並ぶ。また掘立柱建物3と並行する南北の軸をとることから、ほぼ同時期の所産と考えられる。

土坑 1 (第 45 図)

調査区北に位置する。長軸86cm、短軸75cm、深さ35cmの隅丸長方形を呈する。覆土上層の東西方向に礫が並ぶ。

土坑 2 (図版 14、第 45 図)

調査区北西に位置する、長軸 150cm、短軸 140cm 程、深さ 36cm のいびつな方形を呈する。東側はピットに切られており、40cm 程の平坦な礫が入る。

出土遺物 (第 46 図)

1 は浅い形状となる土師質焼成の鉢である。器壁が薄いのが小型品であろうか。内外面ハケ目調整。2・3 は陶器皿である。どちらも丸味を帯びた深みのある器形で、高めの高台が付く。

土坑 3 (図版 14、第 45 図)

調査区調査区北東に位置する、長軸 170cm、短軸 124cm、深さ 45cm でややいびつな長方形を呈する。大小の礫が入り、30cm 程の大きさのものもある。

出土遺物 (第 46 図)

4・5 は土師質焼成の鍋または鉢である。7 は口縁端部を外側に三角状に肥厚させる。内面横ハケ目、外面横ナデ。8 は素口縁だがわずかに肥厚している。内外面ハケ目調整。

6 は土師質の釜である。器壁は薄く鋳部が短い。小型品であろうか。

7 は瓦質だが土師質に近い焼成の火鉢である。外面には突帯を巡らせ、その間に花文の印刻が見られる。

土坑 4 (第 45 図)

調査区北西に位置する、長軸 110cm、短軸 80cm、深さ 20cm の長方形を呈する。覆土に小礫が多く含まれる。

土坑 5 (第 45 図)

調査区南西に位置し、複数の土坑が重複しており、短軸 200cm、短軸 180cm、深さ 10～20cm の不整形な土坑である。いずれの土坑にも人頭大の礫が入る。

土坑 6 (図版 14、第 45 図)

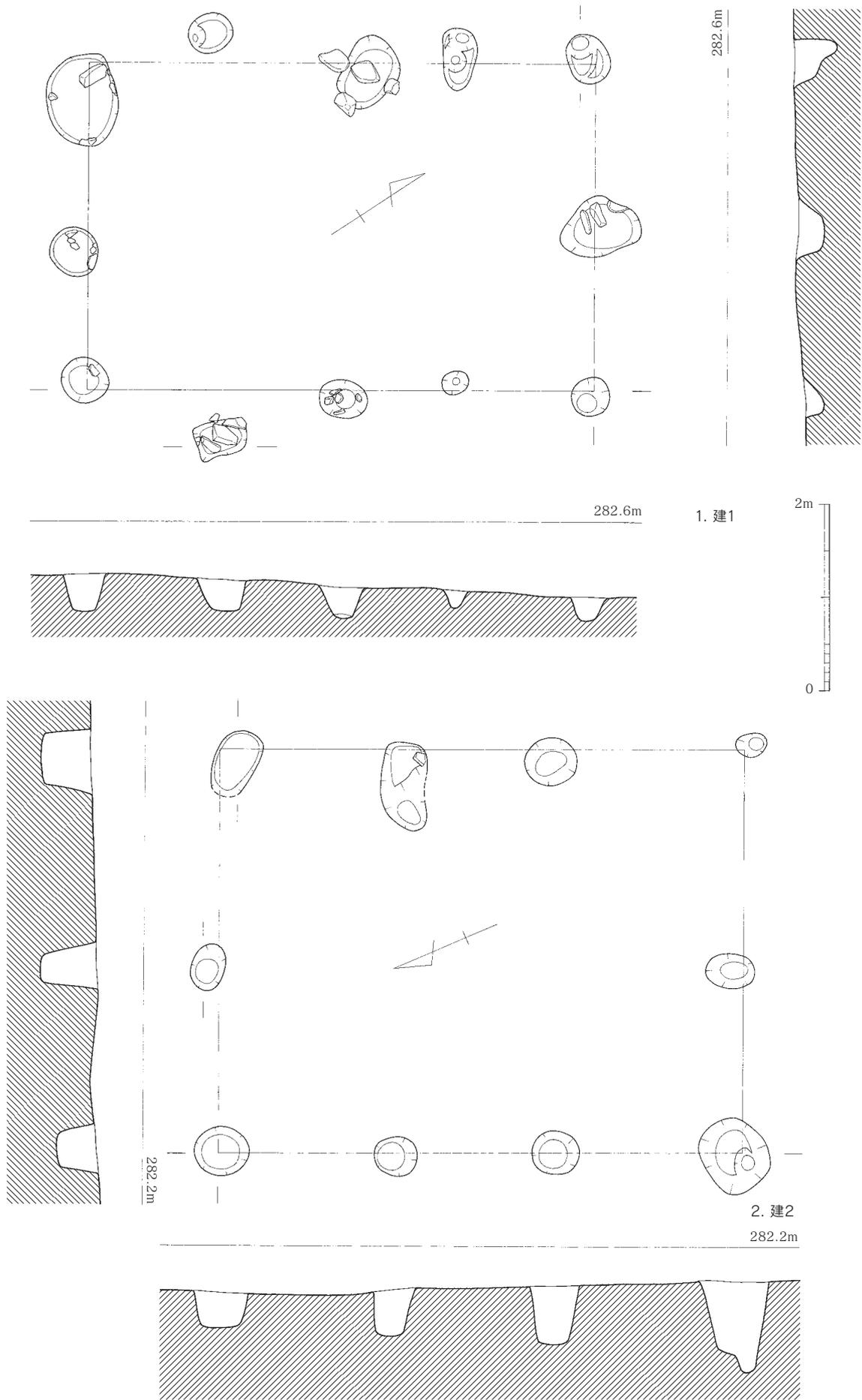
調査区南に位置し、径は 170～210cm、深さ 20cm の不整形な土坑である。60cm を超える大礫を据える。

土坑 7 (図版 15、第 45 図)

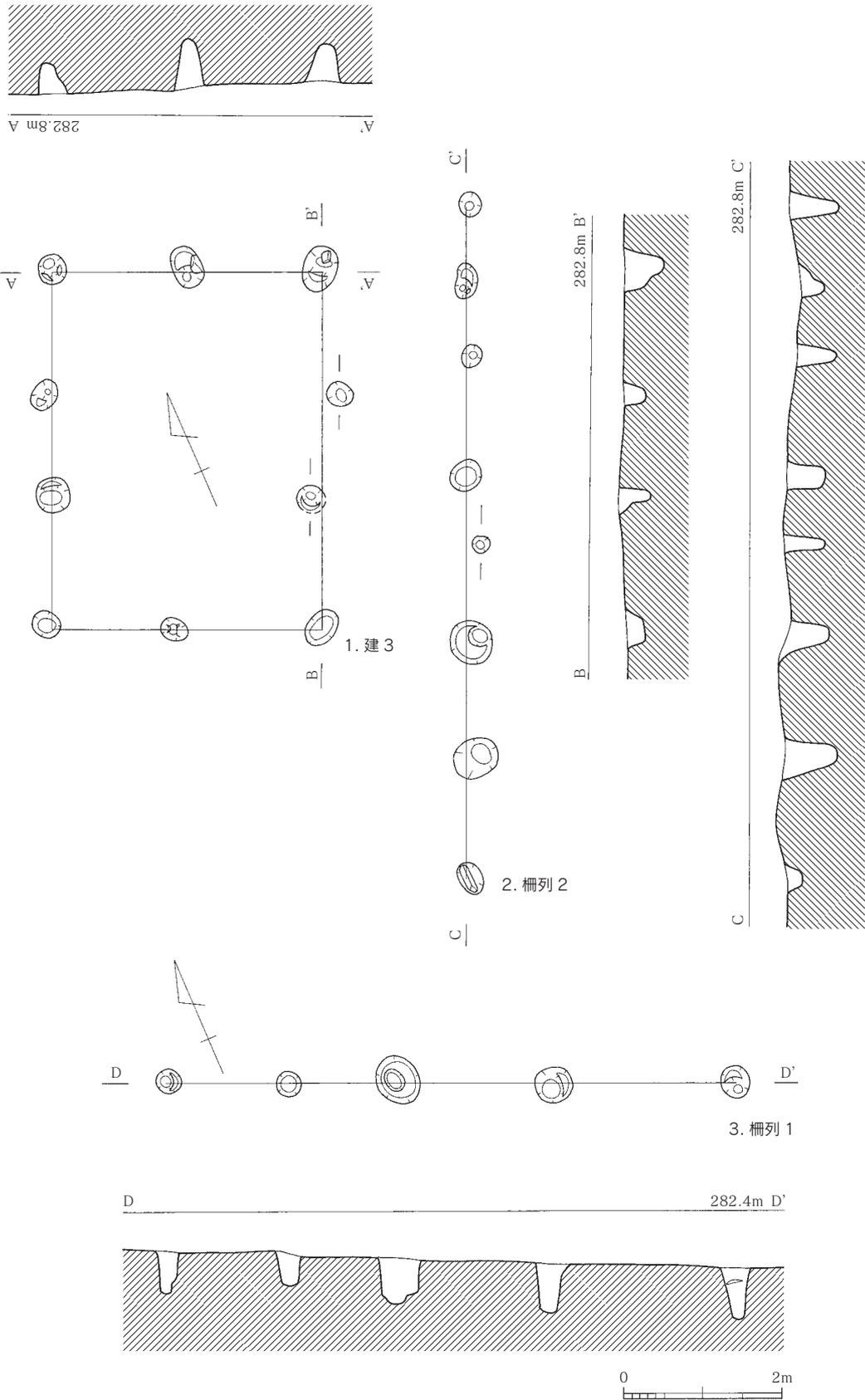
調査区南西よりに位置する不整形土坑で、径 95～112cm、深さ 5cm ほどの浅い土坑である。近世の土器が水平におかれた状況で検出された。

出土遺物 (第 46 図)

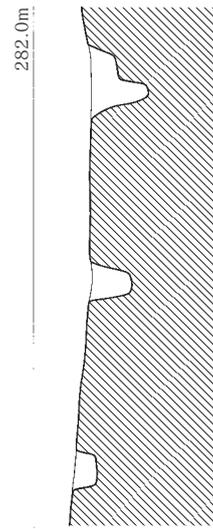
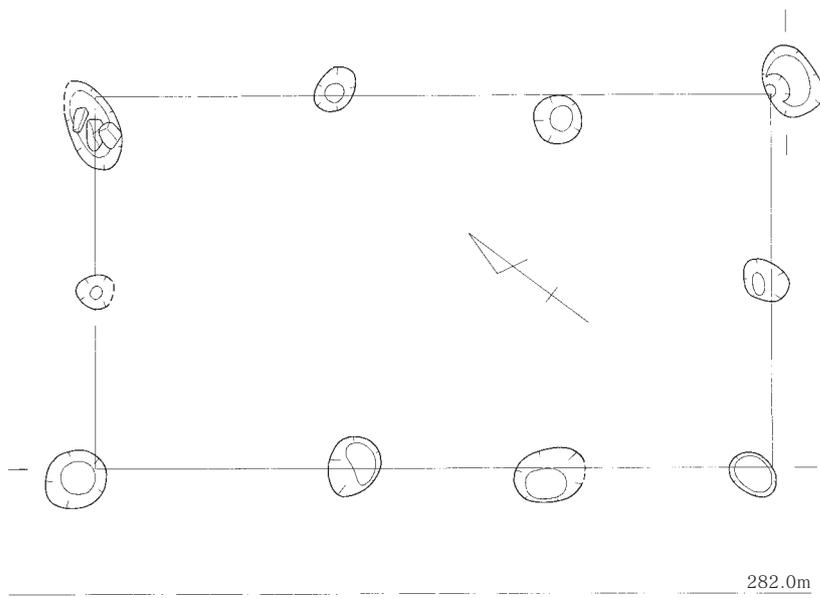
8 は土師質焼成の鉢である。上半は欠失しているので全体の器形は不明だが、下半は筒状を呈す。底部は上げ底となる。型押しによって整形されており、外面には凹線上の文様が縦方向に施文されている。



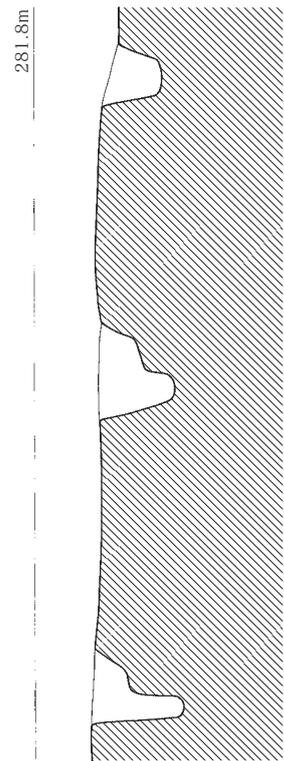
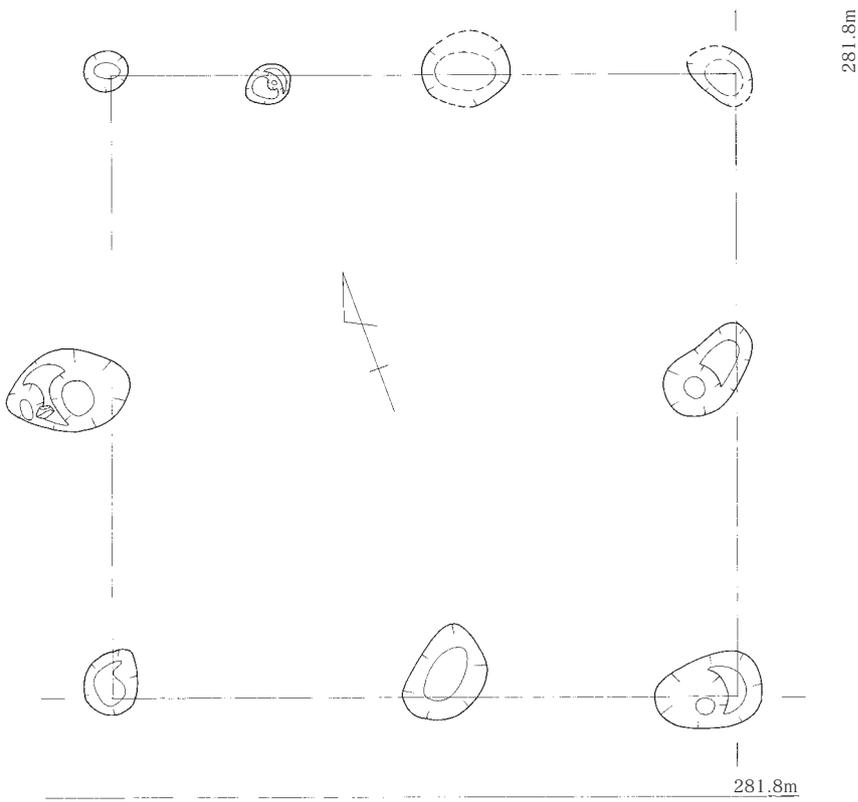
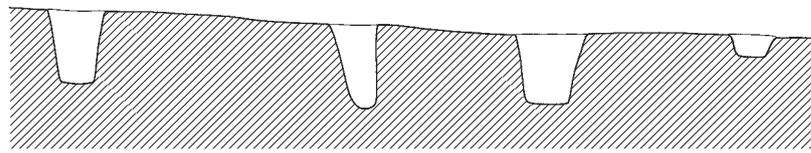
第 42 图 3 区掘立柱建物 1·2 实测图 (1/60)



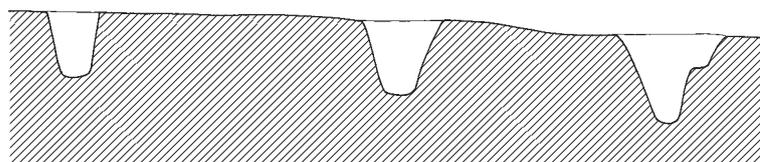
第 43 图 3 区掘立柱建物 3 · 柵列实测图 (1/80)



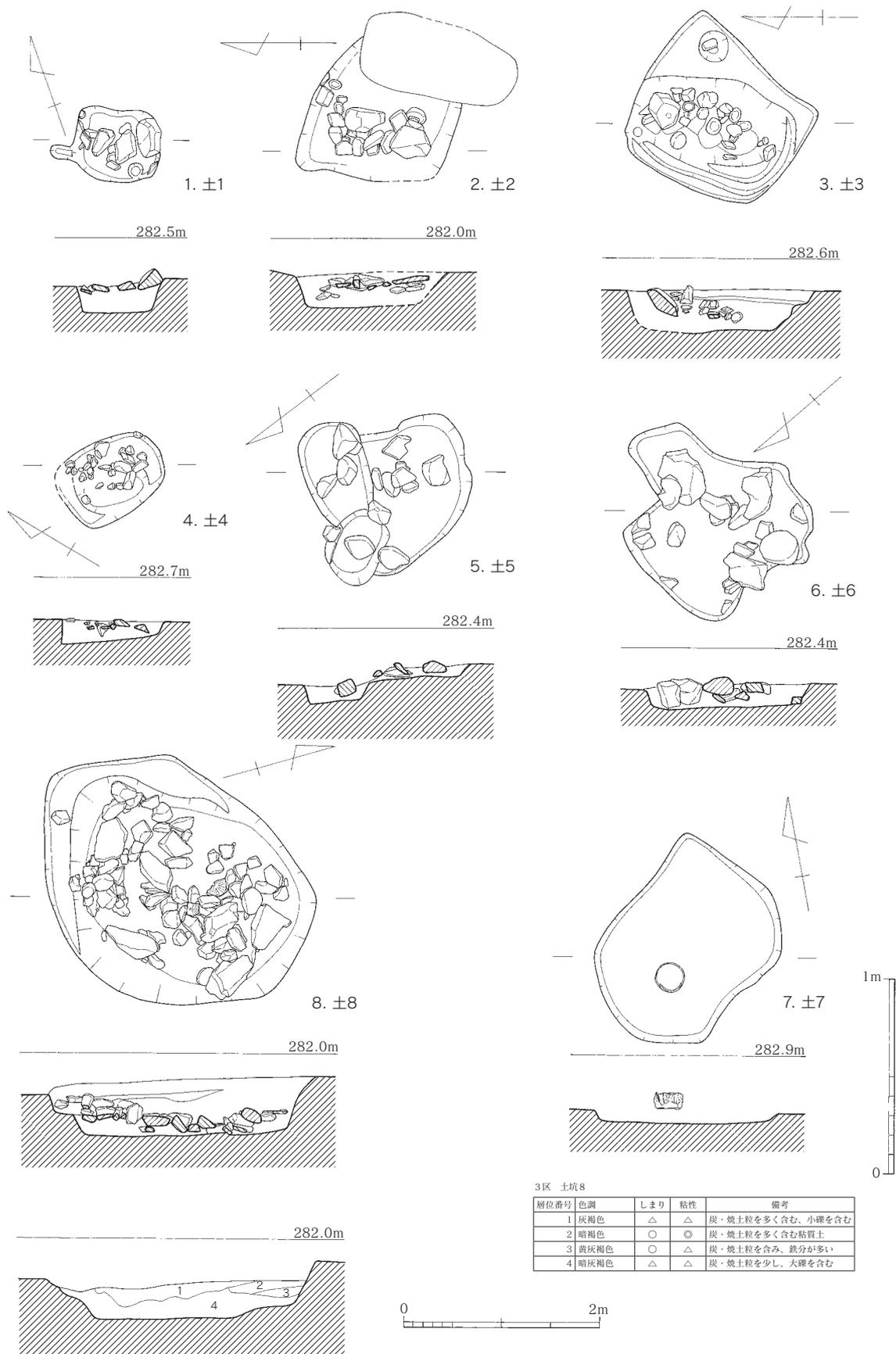
1. 建4



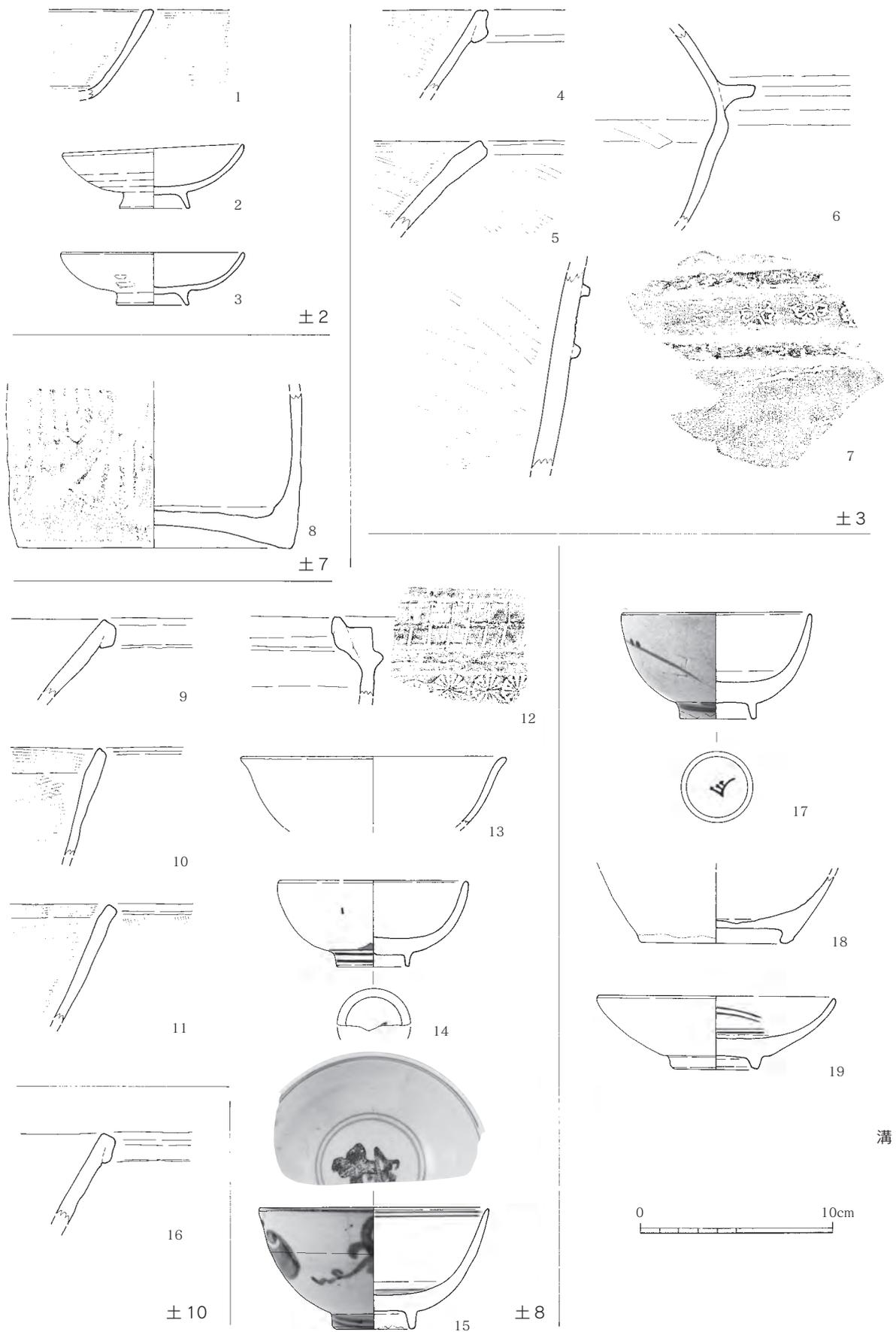
2. 建5



第44图 3区掘立柱建物4·5实测图 (1/60)



第45図 3区土坑1～8実測図(7:1/30、他:1/60)



第46图 3区土坑·溝出土遺物実測図(1/3)

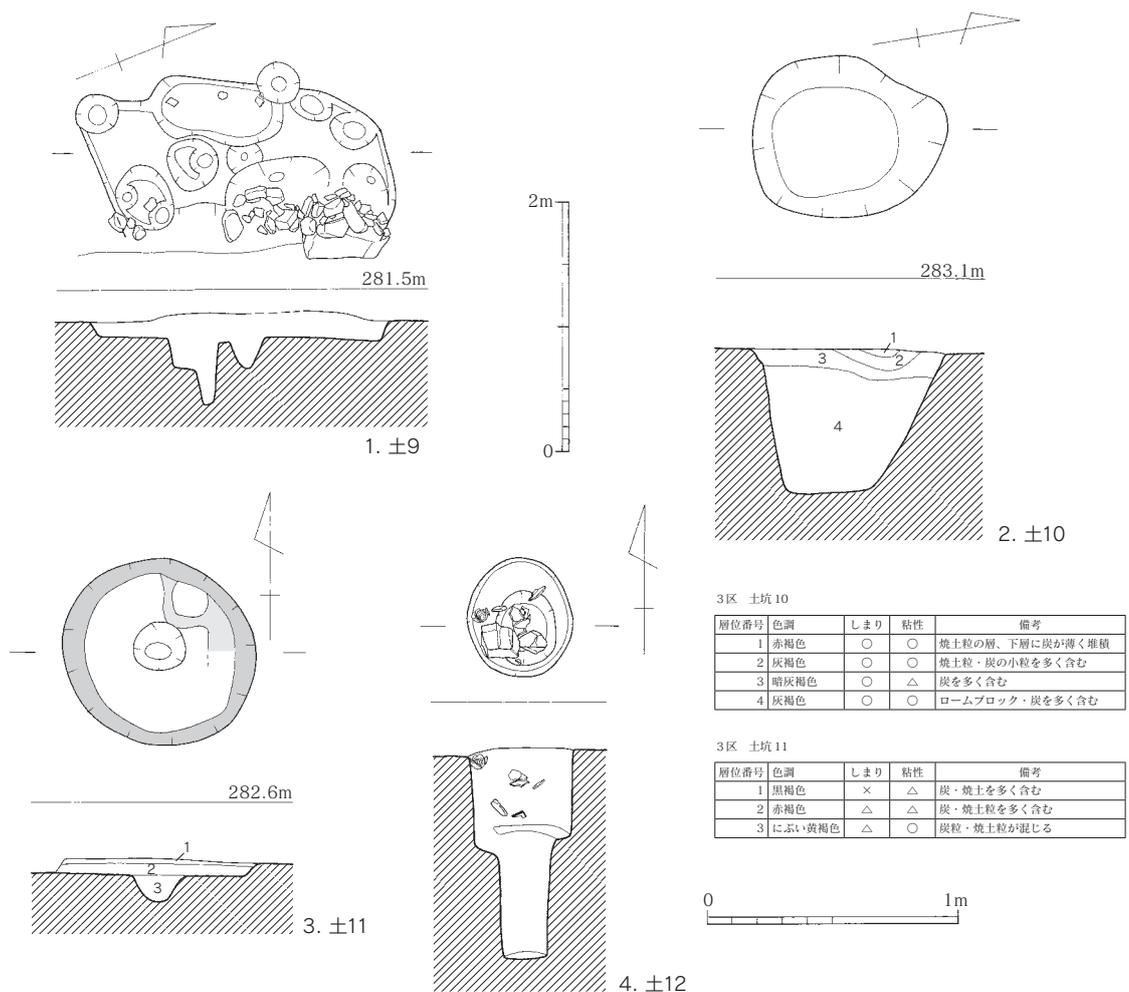
土坑 8 (図版 15、第 45 図)

調査区南東寄りに位置し、長軸が 310cm、短軸が 230cm、深さは 65cm を測る不整形の土坑である。土坑の底面近くには、人頭大の礫の集積が見られる。礫の中からは石臼の破片も混じる。

出土遺物 (第 46 図)

9～11 は土師質鍋である。9 は端部が玉縁状に小さく肥厚する。調整は内外面ナデ。10・11 は素口縁である。10 は内面横ハケ目、外面ナデ。11 は内面横ハケ目、外面縦ハケ目。12 は瓦質焼成で、香炉であろうか。口縁部が内側に屈曲し、端部のみ上方に立ち上がる形状となる。外面には突帯が一条巡らされる。外面口縁部下には板状工具押圧による刻目、その下部には菊花文の印刻を連続して施文する。

13 は青磁碗である。口縁部がわずかに外反する器形となる。表面には細かな貫入が見られる。14・15 は染付磁器の碗である。14 は浅い器形で高台部には圈線が巡らされる。体部や外底面の文



第 47 図 3 区土坑 9～12 実測図 (1 : 1/60、他 : 1/30)

様は欠失のため不明。15 は内面見込みに「寿」を描き、口縁部内面と高台部外面に圏線を巡らせる。

土坑 9 (第 47 図)

調査区北東端に位置し、溝 2 に切られる。長軸は 215cm、短軸は残存長 120cm、深さ 20cm である。複数のピットが重複する楕円形を呈する土坑である。中には小ぶりの礫が少量混じる。

ガラス小玉 2 点 (図版 34、第 147 図) が出土している。

土坑 10 (第 47 図)

調査区中央西よりに位置し、長軸 80cm、短軸 85cm、深さ 58cm の不整形円形を呈する。埋土は上層を中心に炭や焼土が多く含まれる。

出土遺物 (第 46 図)

16 は土師質の鍋である。口縁部は玉縁状に肥厚する。内外面ナデ調整。外面に炭化物が附着。

土坑 11 (第 47 図)

調査区北側中央に位置する、長軸 75 ～ 80cm、深さ 7cm の円形焼土坑。土坑内周囲には炭が巡り、木杵が炭化した可能性が考えられる。

土坑 12 (第 47 図)

調査区北東に位置する。径 42 ～ 48cm の円形土坑、2 段掘りになっており浅い方は 35cm、深い方は 85cm を測る。埋土より、土器・陶磁器が出土している。

溝 1 (第 41 図)

調査区北より南へ 3 分の 1 の所を、西から東へ直線状にのびる溝である。長さ 9.7m、幅 0.75 ～ 1.2m、深さ 24.5cm、である。掘立柱建物 2・3・5 と同じ軸を取るが、掘立柱建物 3 を切る。

溝 2 (図版 15、第 41 図)

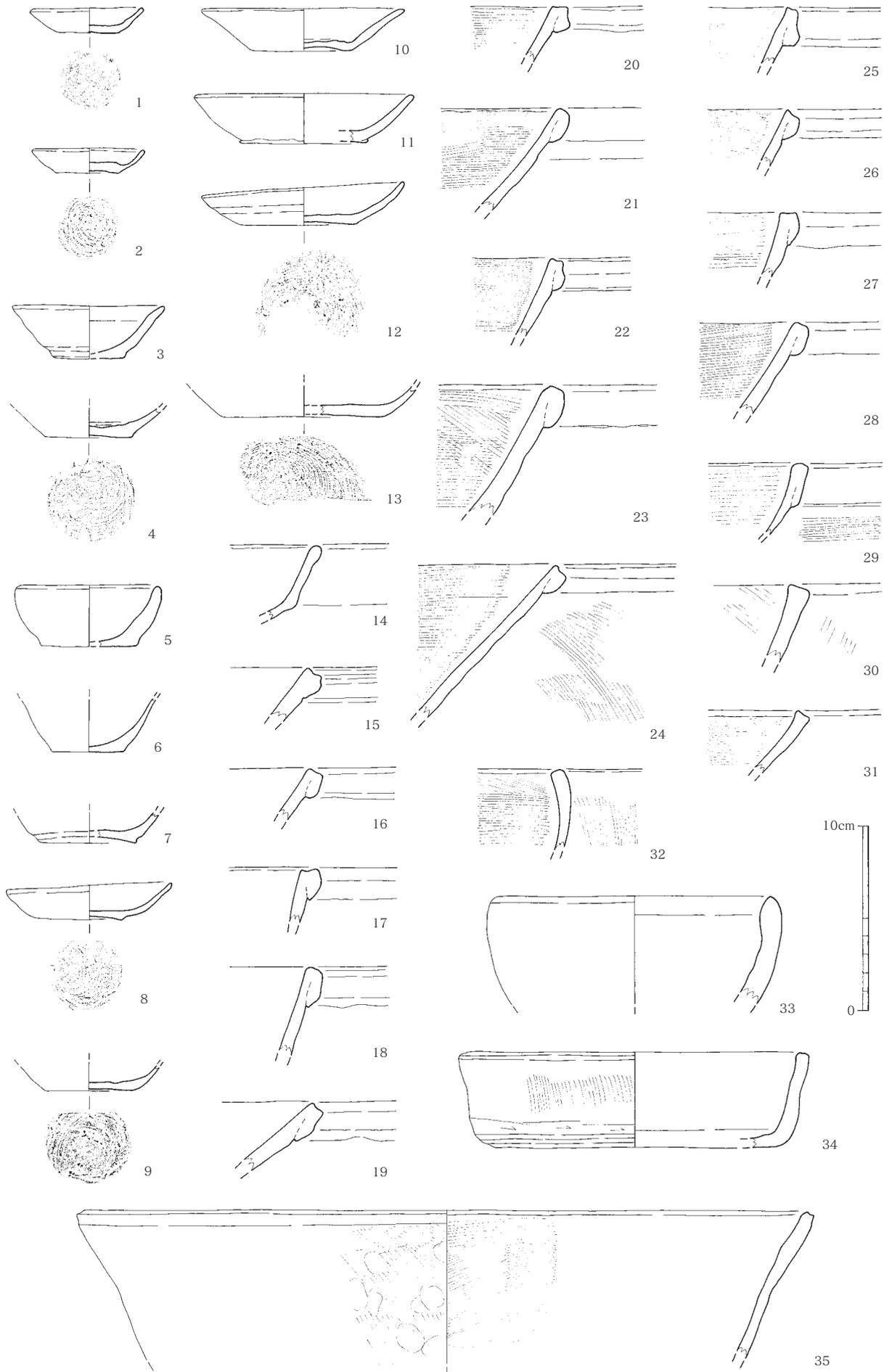
調査区北東端に位置し、7 区との境にある長さ 9.7m の溝である。東側の溝掘方は削平により失われ、西側のみ確認できた。溝底にそって小礫が並べられており、暗渠と考えられる。深さ 52.2cm である。

出土遺物 (図版 28、第 46 図)

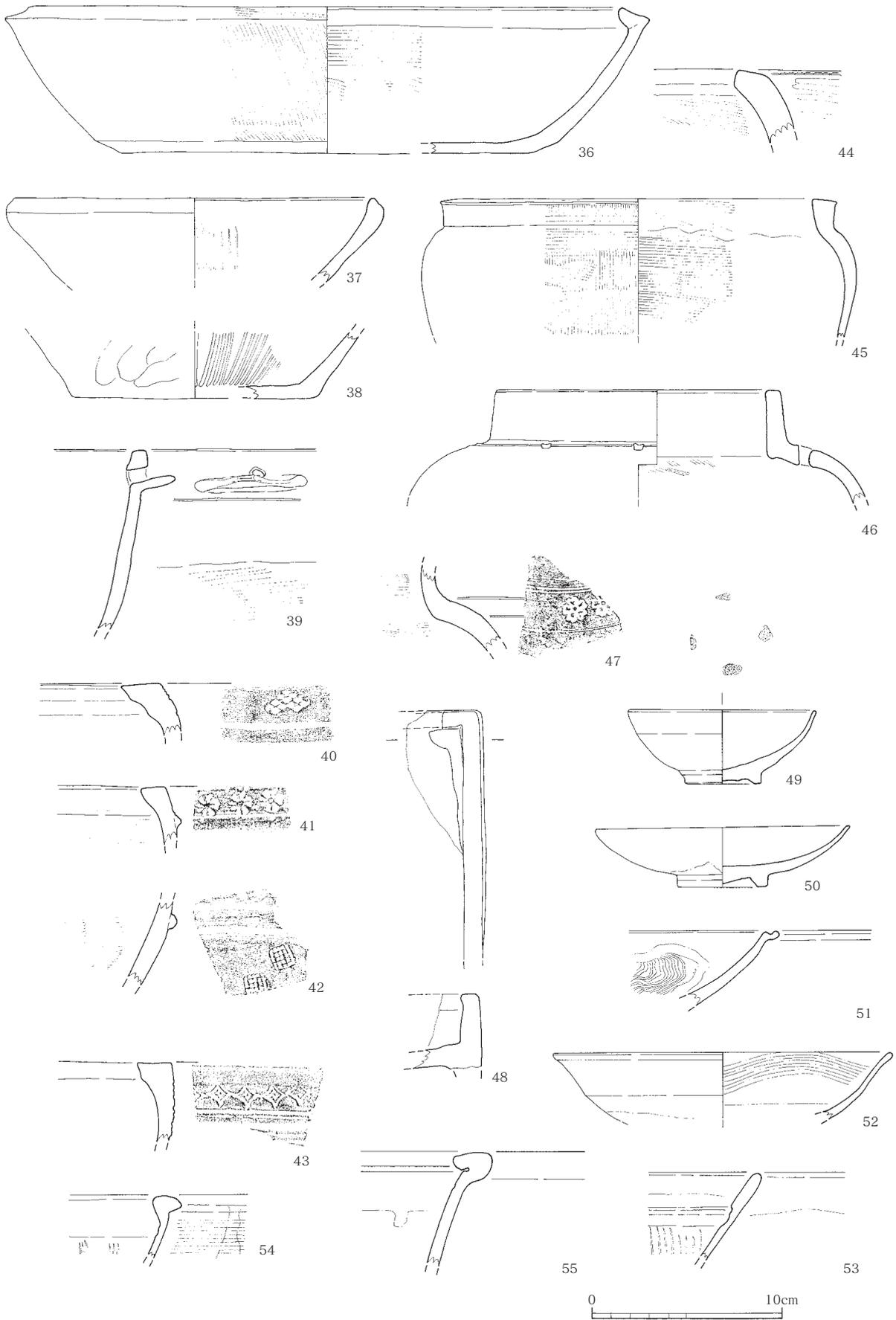
17 ～ 19 は磁器である。17 は染付碗。外面高台内に銘が入る。18 は高台部と体部の境目がなく直線的に続く器形となる。内面は露胎、外面はハケで白色釉を施す。19 はわずかに丸味を帯びた器形の皿。内面見込みの釉は輪状に掻き取られる。

3 区ピット出土遺物 (図版 28、第 48 ～ 50 図)

1 ～ 9 は土師器小皿である。1 は口径 6.2cm、底径 3.3cm。2 は口径 6.1cm、底径 3.4cm。3 は深みがあり口縁部がわずかに外反する器形。口径 8.2cm、底径 4.0cm。4 は底部と体部の境目が



第48図 3区ピット出土遺物実測図① (1/3)

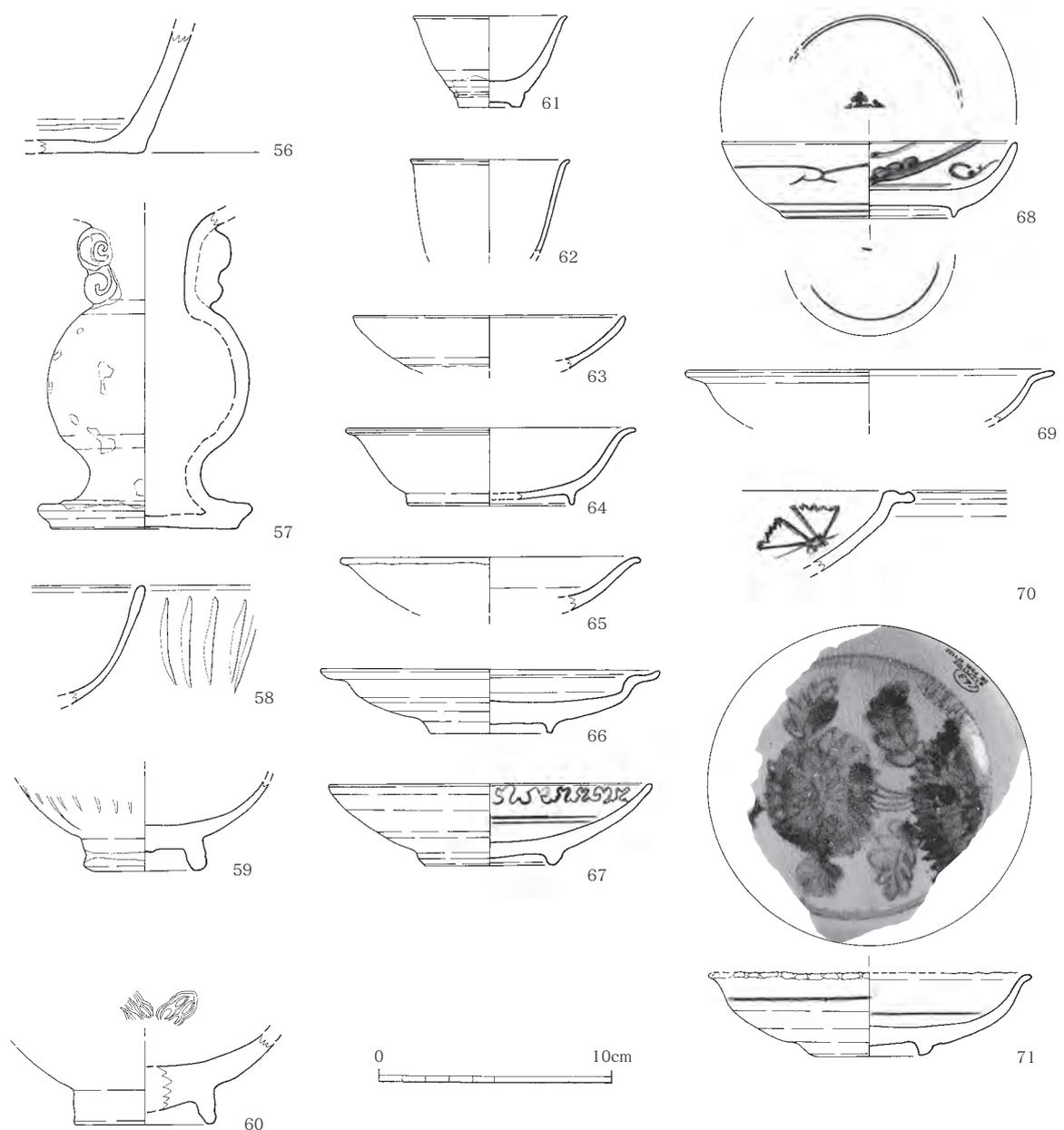


第49図 3区ピット出土遺物実測図② (1/3)

明瞭な稜をなす。底径 4.7cm。5 は深みのある器形で器壁が厚い。口径 8.0cm、底径 5.3cm。6 は 5 と比較すると器壁が薄い。底径 3.8cm。7 は若干上げ底になる。底径 5.2cm。8 は器壁が薄い。口径 8.9cm、底径 4.0cm。9 は底径 4.6cm。

10～13 は土師器皿である。10 は器壁が薄く底部が若干上げ底となり、体部は直線的に開く浅い器形となる。口径 11.0cm、底径 5.4cm。11 は口径 12.0cm、底径 7.0cm。12 は器壁が薄い。口径 11.0cm、底径 6.0cm。13 は底径 8.8cm。

14～36 は鍋または鉢である。14 は器壁が薄く、口縁部下で屈曲する器形となるので浅い形状の鉢であろう。口縁端部は丸くおさめる。内外面横ナデ調整。15～29 は口縁端部を外側に折り曲げて玉縁状に仕上げるものである。15～19 は内外面ともナデ調整、20～29 は内面ハケ目調整を行う。29 は他と異なり幅広く肥厚させた口縁部となる。30～35 は素口縁となる。32 は瓦質焼

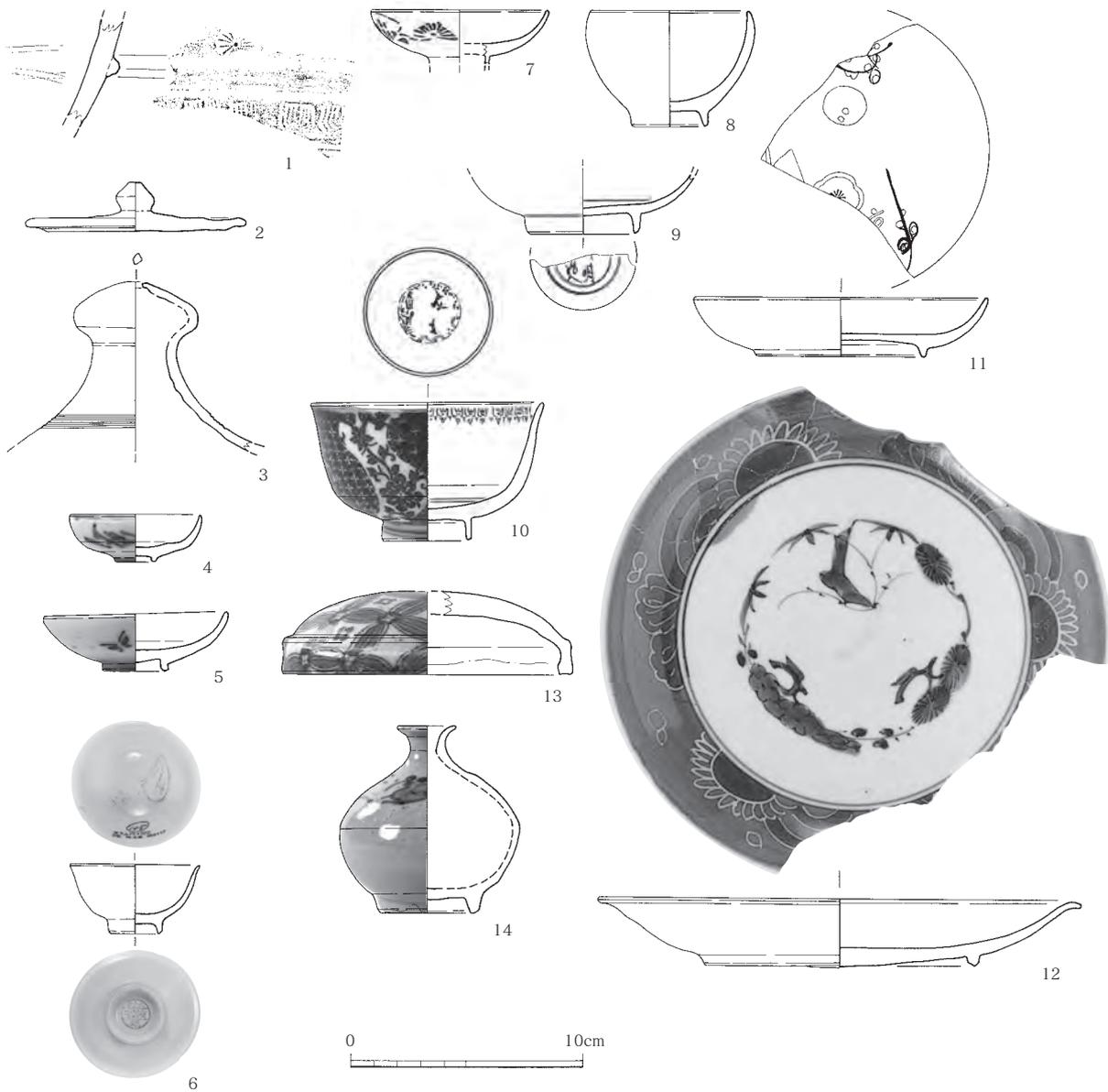


第50図 3区ピット出土遺物実測図③ (1/3)

成で、口縁部が内傾する鉢である。33は器壁が厚く口縁部が直立する鉢である。内外面ナデ調整。34は体部が浅く直立し、口縁端部には沈線を巡らせる鉢。体部外面下半は横方向のヘラケズリを行う。35は口径40.0cmを図る鍋。36は浅い形状の鉢で、口縁端部を強く内側に屈曲させる。内外面ナデ調整。口径34cm、器高7.8cm。

37・38は挿鉢である。37は瓦質焼成。口径10.0cmに復元される。38は土師質焼成。内面の櫛目は4本で一単位となる。

39は土師質耳鍋である。体部は直立し、口縁部下に小さな耳部が付けられる。耳部上には穿孔が見える。外面には炭化物付着。40～44は器壁も厚く、火鉢であろうと思われる。40～42は土師質焼成で、40・41はどちらも口縁部下に印刻を施し、40はその下に沈線、41は低い突帯を巡らせる。42は体部片で、低い突帯下に印刻がある。43は瓦質焼成である。やはり口縁部下に印刻を行い、その下に数条の沈線を巡らせる。44は土師質焼成で内面はハケ目、外面には工具による擦



第51図 3区その他出土遺物実測図 (1/3)

過を行う。

45～47は土師質焼成で釜であろう。45は口縁部が短く立ち上がる特異な形状で、或いは釜ではなく壺状の器形かもしれない。内外面ハケ目調整。46は肩部の二ヶ所に穿孔が見える。47は肩部に花文の印刻を施文し、その上下を沈線で区切っている。

48は箱形の皿である。焼成は瓦質だが土師質に近い。脚部があったようだが、欠損のため形状は不明である。

49～57は陶器である。49は碗に近い形状の皿。釉は白色釉。内面4ヶ所に目跡が残る。50は内面緑色釉、外面白色釉を施釉する。51は口縁端部を強く外側に屈曲させる。釉は灰釉地に緑色釉をハケで施文する。52は黒灰色釉の上に白色釉をハケで施文する。

53・54は播鉢である。53は焼締の播鉢。器壁は薄く、口縁部はわずかに肥厚する。54は口縁端部が丸く肥厚し、内側にわずかに傾斜する。釉は鉄釉。55は甕であろう。口縁端部を内側に折り曲げ、丸く肥厚させる。釉はナマコ釉。56は壺の底部片であろう。鉄釉を施釉する。57は仏花器である。藁灰釉を施釉する。

58～71は磁器である。58～60は青磁碗。58・59は外面に平行線を片彫りする。60は内面見込みに施文が見られる。釉は高台畳付にまで全面施釉される。

61～71は磁器である。61・62は白磁小坏。61は下半が締まった器形となる。62は下半が締まらず筒状に近い形状となる。63～66は白磁皿。64・65は端部が若干外反する。66は口縁部が一度上方に立ち上がり、さらに外側に水平までに開く。67～70は染付皿である。67は直線的に大きく開く器形となる。内面口縁部下にのみ施文される。68は小さな高台が付く。69は口縁端部が外側に開いた器形となる。70は口縁端部が強く水平近くにまで屈折する。71は口縁端部をわずかに花卉状にする。内面には花文、外面は圏線を描く。

その他の出土遺物（図版28、第51図）

1は瓦質火鉢か。外面には突帯と印刻が見られる。2・3は陶器蓋である。2は鉄釉を施釉する蓋。径9.6cm。3は体部に口のある瓶の類かと思われる。外面には鉄釉を施釉し、肩部には櫛描き沈線を施文する。4～12は磁器である。4は小皿もしくは蓋、5は小皿であろう。6は小坏。内面に金色・朱色で文様を印刷、外底面には「ハカタ有田屋製」銘款がある。7は小型の皿もしくは蓋であろうか。外面にプリントによる施文を行う。

8～10は碗である。8は小型の青磁碗で、口縁部が直立する。表面には粗い貫入が入る。9は内面見込みや外面高台部に圏線が巡り、底部には銘款が見える。10は内面口縁部下にプリントによる施文を行う。11は皿である。体部は丸味を帯びて浅く、内面には梅花を描く。12は中型の皿である。口縁部が外反し深みの少ない器形となる。施文は内面のみ。13は蓋である。天井部は丸味を帯び、口縁部との境は屈曲する。14は小型の瓶である。体部は丸く頸部はよく締まっており、口縁部は短く開く。

(5) 4区の遺構と遺物（図版9、第52図）

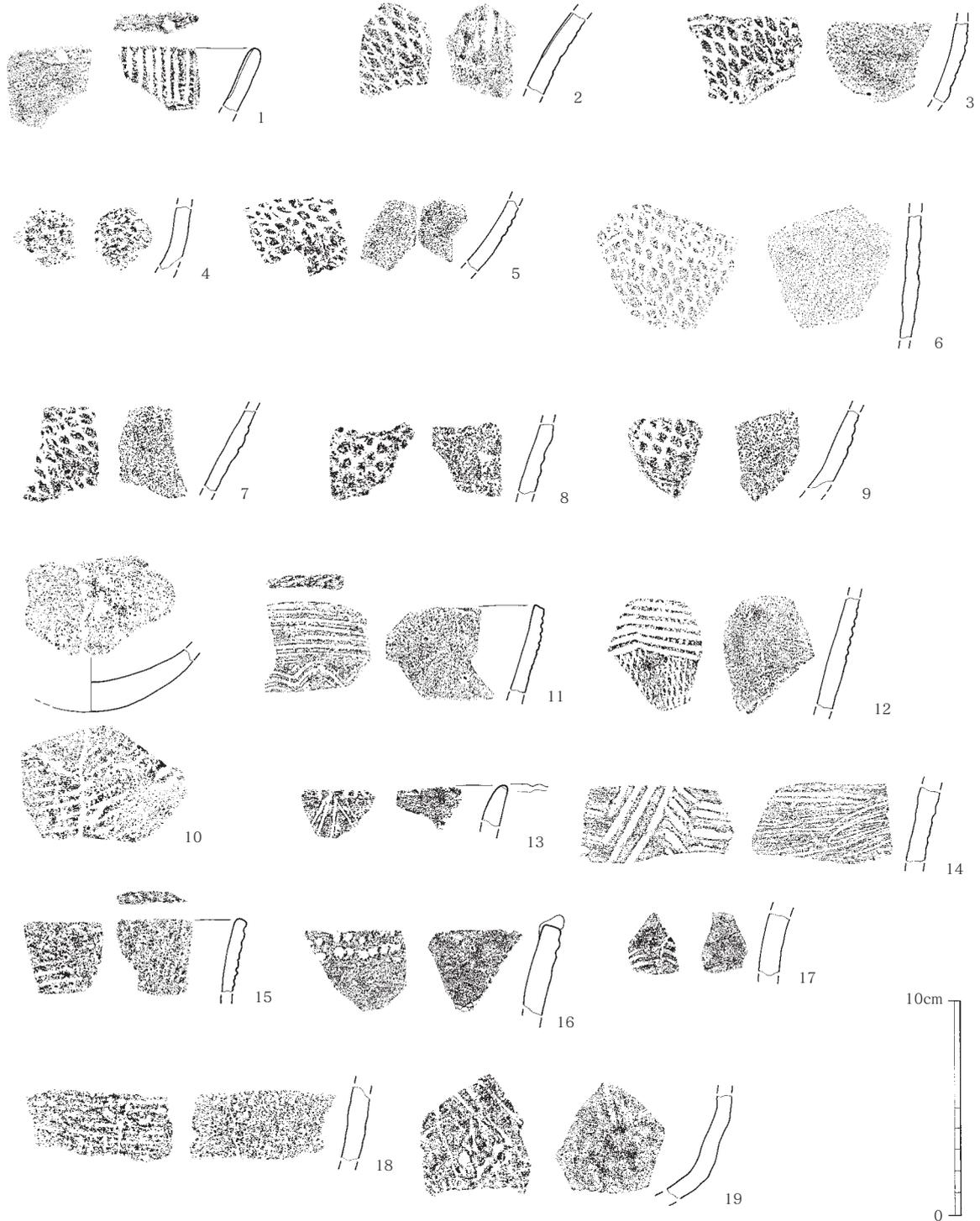
五ヶ山網取遺跡の中央に位置し、1区西南に位置する。4区全体が北東方向へ向かって緩やかに低くなっている。調査区中央やや北寄りに、北西から南東にかけて幅2mの溝が走っており、縄文



第52図 4区遺構配置図 (1/200)

時代等の遺物が出土している。

東半では3区同様近世の礎石建物・掘立柱建物・土坑・井戸等が確認されたが、西半は遺構のプランが明瞭でないピット・土坑群が主体で縄文時代の包含層と考えられる。西半についてはグリッドを入れて調査をおこなったが、分布が点的であるため、ここでは報告しない。押型文土器片・貝殻条痕の土器片・サヌカイト・黒曜石の石鏃や剥片類が多数検出された。



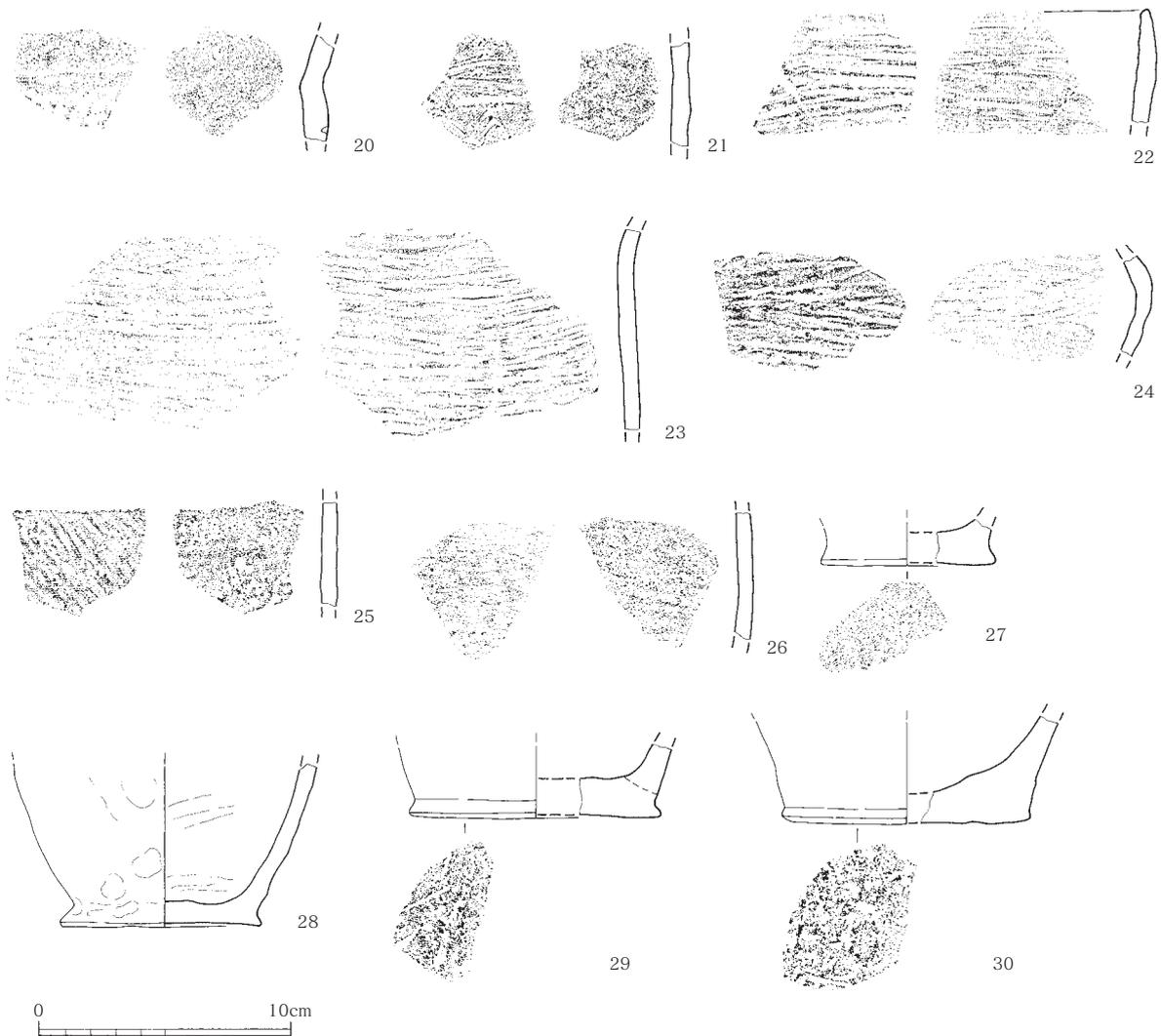
第53図 4区出土縄文土器実測図① (1/3)

縄文時代の遺構と遺物

4区出土縄文土器（図版31・32、第53図）

大半が包含層出土である。1～10は押型文土器である。1は外面ナデ、内面に縦方向の原体条痕を施文する口縁部片である。2も口縁部近くの破片で、内面には原体条痕、外面には斜位の楕円文を施文する。3はやや丸味を帯びており、下半部の破片か。内面ナデ、外面斜位の楕円文を施文する。4は内面ナデ、外面楕円文を施文するが、かなり潰れている。5は内面ナデ、外面横位の楕円文を施文。6は内面ナデ、外面縦位の楕円文施文。7は内面ナデ、外面斜位の楕円文施文。8は内面ナデ、外面丸味のある縦位楕円文施文。9も同様に内面ナデ、外面縦位楕円文施文。10は丸底に近い尖底の底部片で、内面ナデ、外面は条痕調整のように見える。

11・12は塞ノ神式に属するもの。11は外面口縁部下に横方向の条痕、その下位に波状の条痕を施文する。口縁端部には斜位の刻目を施文する。12は上位に平行沈線、下位に条痕を施文する。内面はナデ。



第54図 4区出土縄文土器実測図②（1：1/3、2：1/30）

13・14 は曾畑式に属すると思われる。13 は若干外反する口縁部片で、端部に刻目、外面には沈線文を施文する。14 は太い平行沈線を施文するもの。内面は条痕調整。

15 は口縁端部に刻目を施文する深鉢の口縁部である。16 は波状口縁で口縁部下に列点を施文する。17 は内面ナデ、外面条痕で波状に近い文様を施文するが、小片であり詳細不明。18・19 は内面ナデ、外面条痕調整の土器である。20 は深鉢の屈曲部片で、外面には列点文が見られる。内面はナデ。21 は内面ナデ、外面には条痕による波状文が見られる。22 は内外面条痕調整の深鉢で、直立する口縁部となる。23 は口縁部が若干外反する器形となるようである。内外面条痕調整。24 は内湾する器形となる。内外面条痕調整。25・26 は内面条痕調整を行う破片。

27～30 は底部片である。27～29 は端部が若干開いた器形となる。全て内外面ナデ調整を行う。27 は底径 7.0cm。28 は底径 8.1cm。29 は底径 10.2cm。30 は端部がほとんど開かない器形となる。底径 10.0cm。

中近世の遺構と遺物

掘立柱建物 1 (第 55 図)

調査区中央に位置し、主軸は南東を取る。桁長 8.2m、梁長 5.22m でほぼ長方形を呈する。柱間は南北が 3 間、東西 4 間であるが、南辺のみ 7 間である。柱間の間隔は南北が 200～240cm と広く、東西は北側が 90～172cm、南側が 28～60cm である。柱穴は 30～80cm であるが、大体は 50cm 前後である。深さは 10cm～62cm である。

鍛冶遺構 1 (第 56 図)

調査区中央東寄りに位置する。長軸 59cm、短軸 50cm、深さ 26cm の長楕円形の土坑である。北側をピットに切られる。覆土に炭や鉄滓を含むことから、鍛冶遺構と考えられる。

土坑 1 (第 56 図)

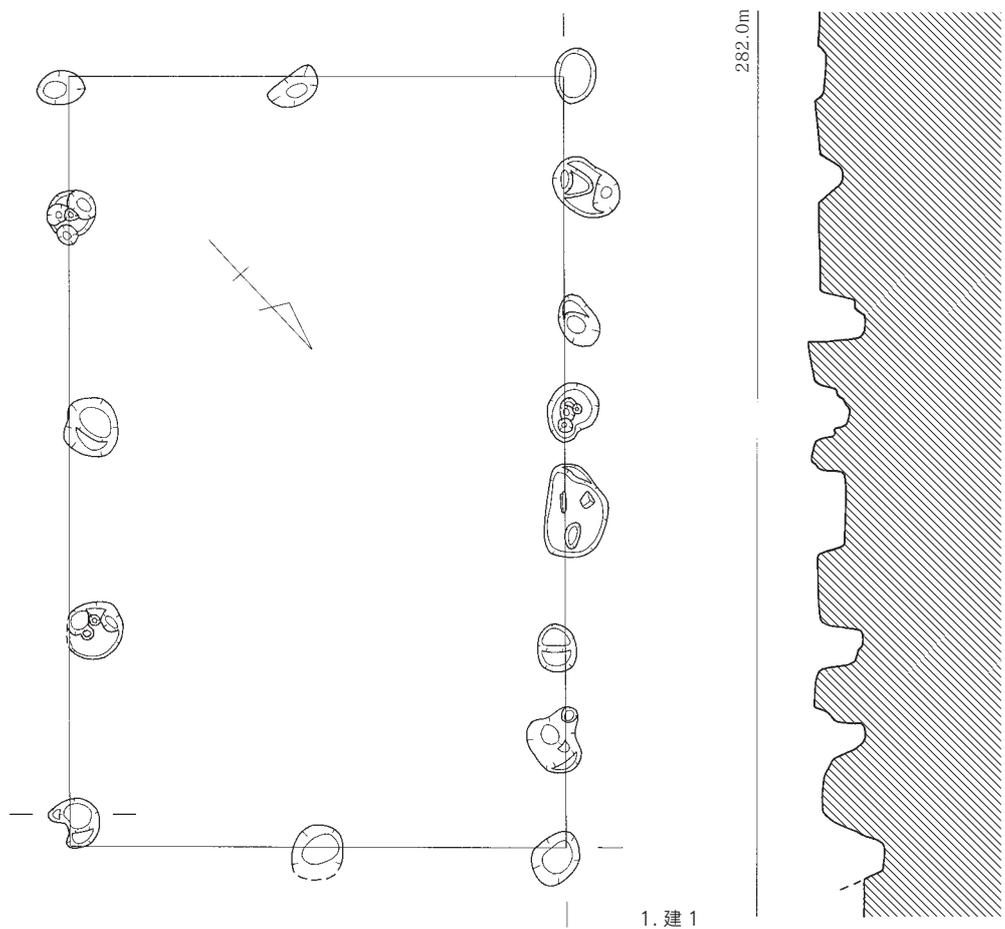
調査区中央に位置する。東西 1.8m、南北 2.4m、深さ 46cm の楕円形土坑である。土坑中部には、西壁よりに東西 1.4m、南北 0.84m、深さ 44cm の円形ピットが配されている。

出土遺物 (第 57 図)

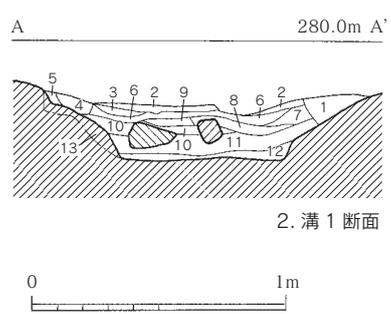
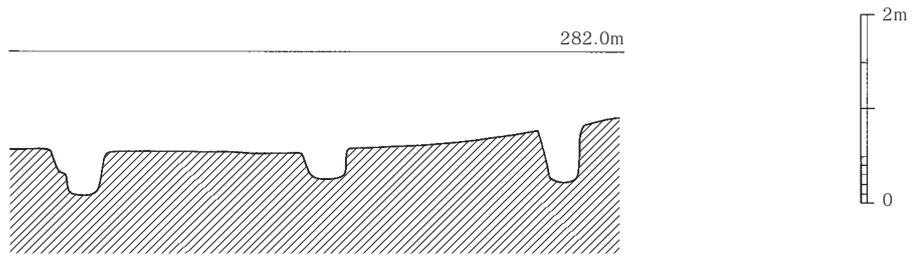
1 は瓦質鉢である。口縁部は素口縁で上端がわずかに窪んでいる。内外面ハケ目調整。口径 13.4cm。2 は土師質焼成の釜である。口縁部の立ち上がりは短い。口径 14.6cm。3 は瓦質火鉢である。口縁部は若干肥厚し上端部は面をなす。外面口縁部下には印刻、その下には幅広の沈線が数条巡らされる。4・5 は陶器である。4 は陶器皿。口縁部との境が稜をなし、口縁部はわずかに外反する。飴釉施釉。口径 13.2cm。5 は挿鉢の底部である。高台畳付のみ露胎。

土坑 2 (第 56 図)

調査区中央に位置する。東西 2.7m、南北 1.4m、深さ 30cm の不整楕円形の土坑である。中央を掘り込み、土坑北側に長さ 1m、幅 36cm の長細い石を置く。覆土には、炭化物粒が多く含まれることから、鍛冶遺構の可能性も考えられる。



1. 建 1

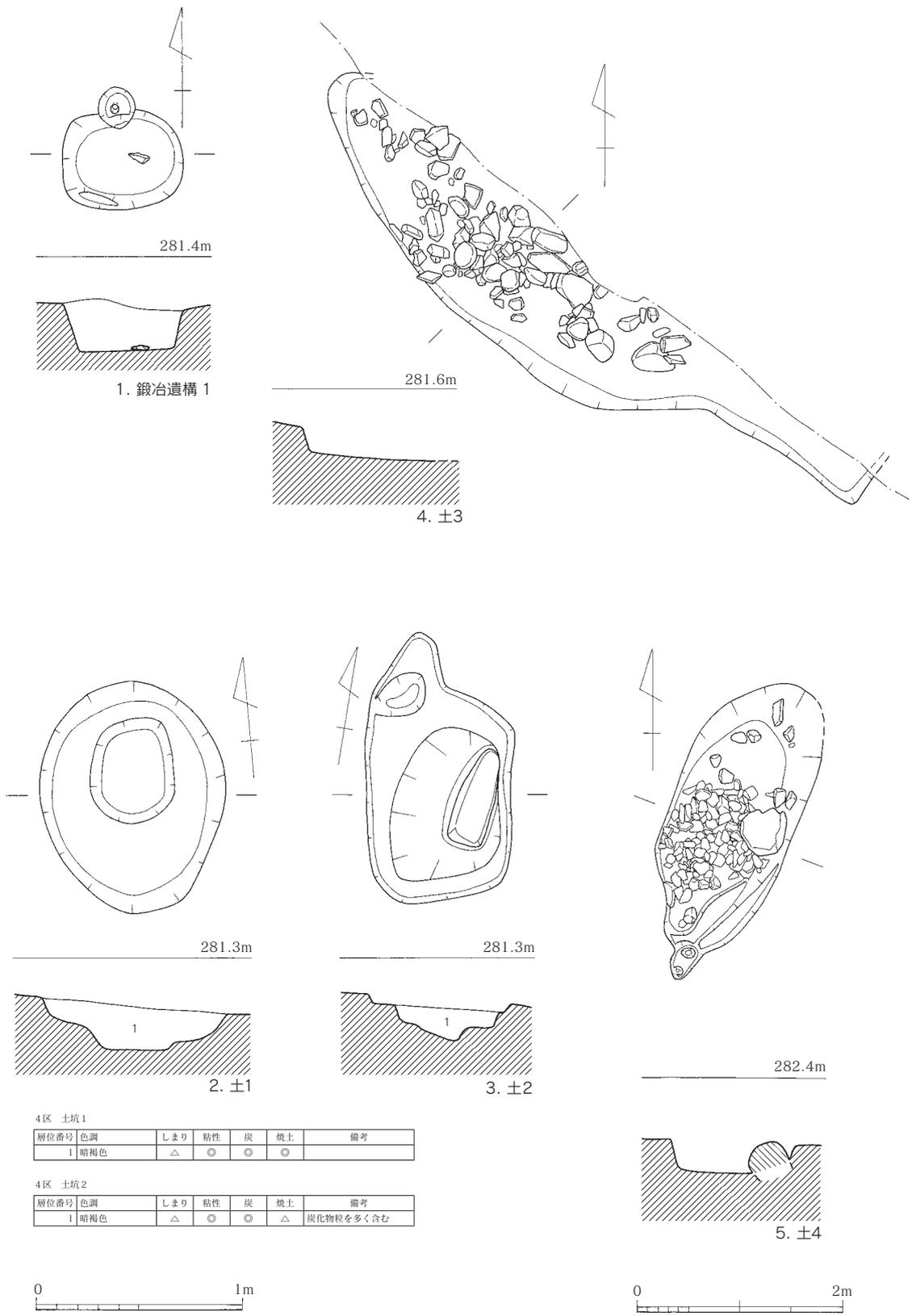


2. 溝 1 断面

4区 溝1

層位番号	色調	しまり	粘性	炭	焼土	備考
1	黒色	×	×	◎	×	均一な砂層
2	黄褐色	○	×	△	△	鉄分を含む
3	黒褐色	○	○	△	△	
4	黒褐色	○	○	◎	◎	礫・黄褐色土を含む
5	黄褐色	○	○	△	×	
6	黒褐色	△	○	◎	×	黄褐色砂を含む
7	黒褐色	○	○	△	△	鉄分・砂を含む
8	黒褐色	○	○	△	△	鉄分を含む
9	灰褐色	×	×	△	△	砂を多く含む
10	黒褐色	○	○	△	△	砂を少し含む
11	灰褐色	×	△	◎	◎	砂・粘土ブロックを含む
12	灰褐色	×	×	△	△	
13	黄褐色	○	○	△	△	砂を含む地山

第 55 図 4 区掘立柱建物実測図 (1 : 1/80、2 : 1/30)



第56図 4区鍛冶遺構・土坑実測図 (2・3: 1/30、他: 1/60)

出土遺物 (図版 28、第 57 図)

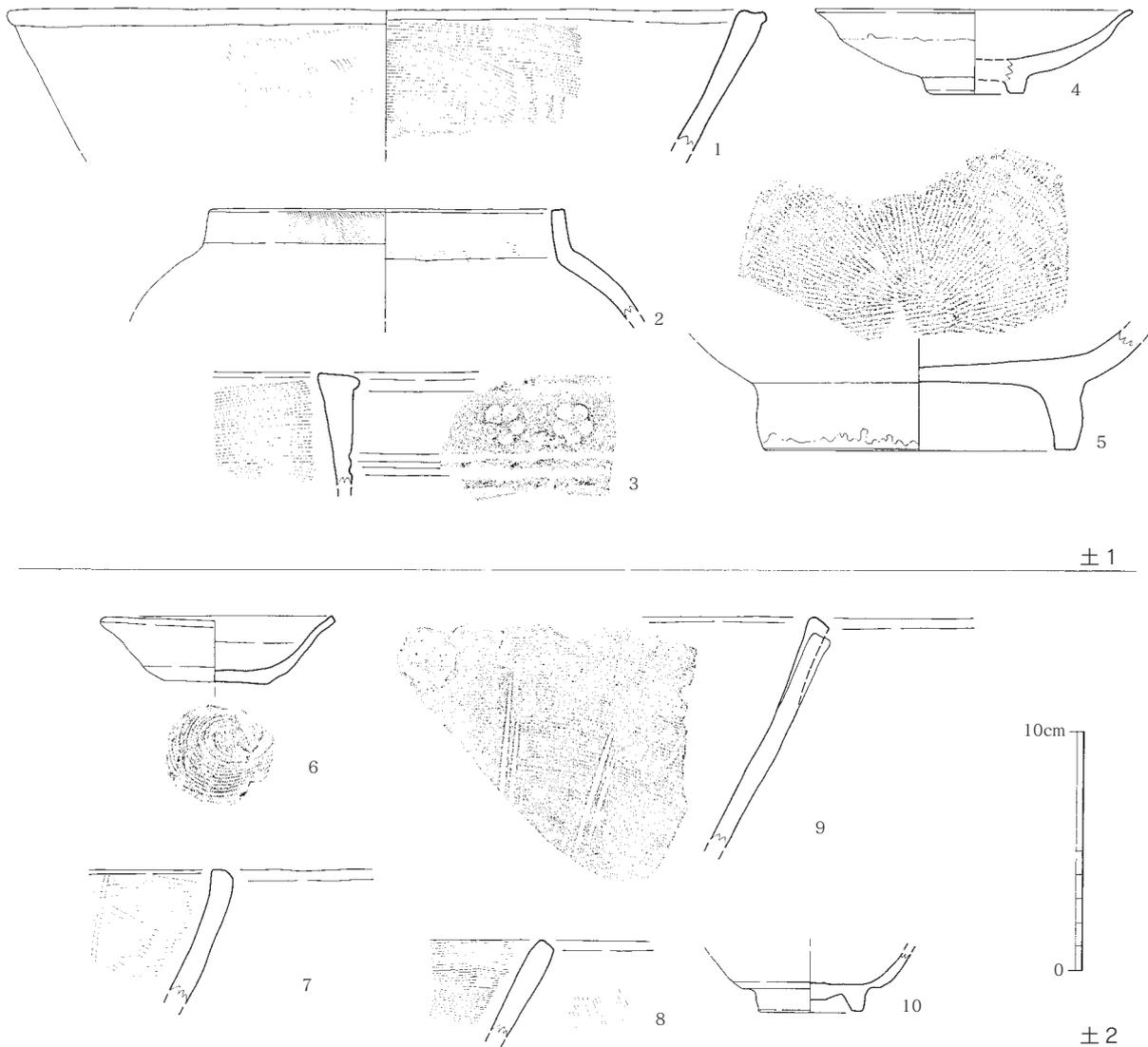
6 は土師器皿である。体部は緩やかに外反する。口径 9.7cm。7・8 は鉢である。7 は土師質焼成の鉢。口縁部は素口縁で内面横ハケ目、外面ナデ調整。8 は瓦質焼成でやはり素口縁である。内外面ハケ目調整。9 は土師質挿鉢である。口縁部は素口縁。内面には 2、3 条の挿目が見える。10 は陶器碗の底部である。体部は直線的に開くようである。鉄釉施釉。

土坑 3 (図版 16、第 56 図)

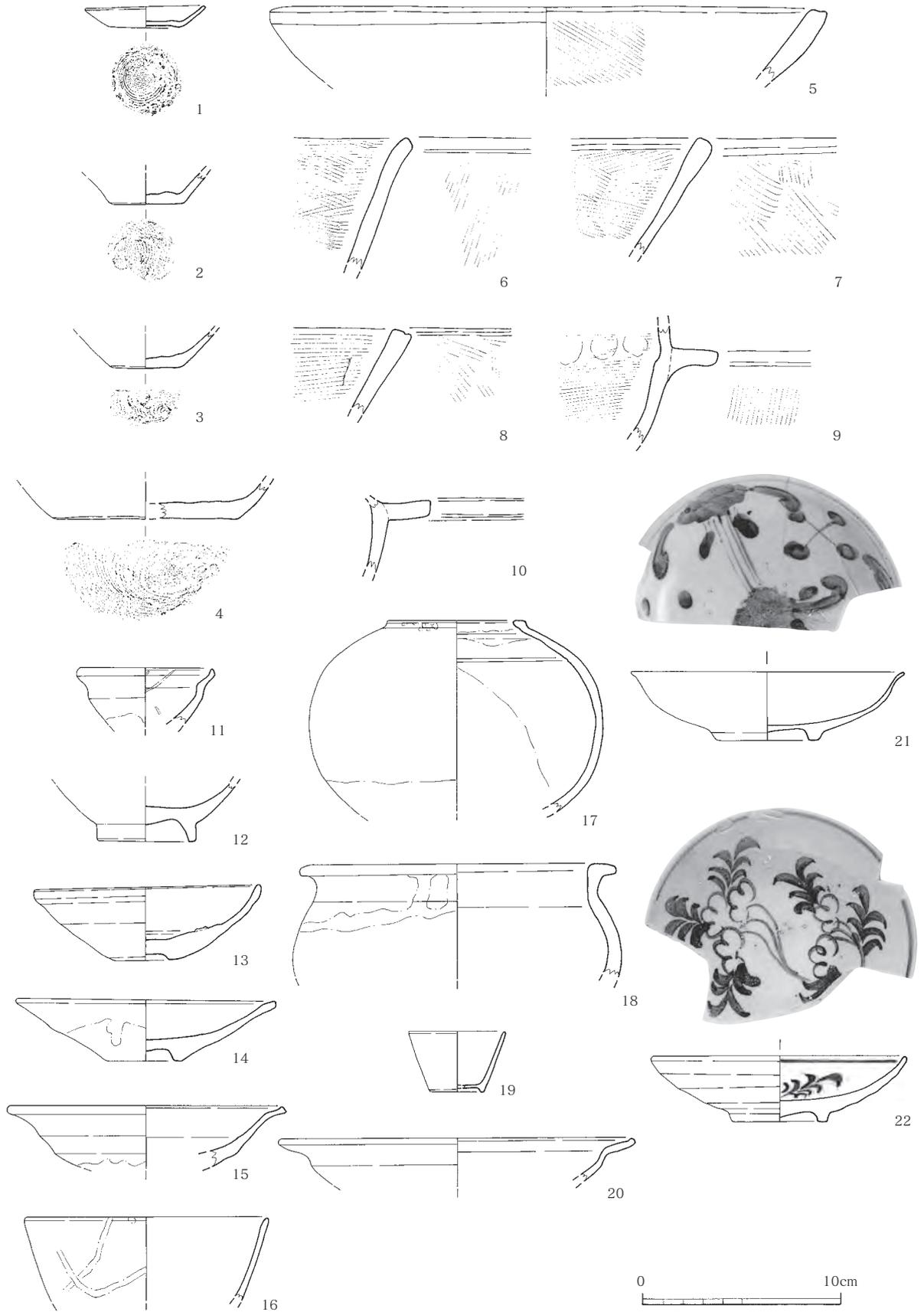
調査区中央北に位置する。南北 6.6m、東西 1.3m、南西に向かって細長くのびる土坑である。深さ 34cm であり北側に向かって深くなっている。土坑全体に、5cm ~ 20cm 程の大きめの礫が多く置かれる。調査区 7 区から続く溝の一部と考えられる。

土坑 4 (図版 16、第 56 図)

調査区西端に位置する東西 3.2m、南北 1.2m の東西に長軸を取る楕円形を呈する。深さ 33cm



第 57 図 4 区土坑出土遺物実測図 (1/3)



第58図 4区ピット出土遺物実測図 (1/3)

と深く、中央北壁に人頭大の石が置かれるのをはじめとして、5cm～10cmの小礫がぎっしりと詰められている。

溝 1 (第 51 図)

調査区西から東へ南西に向かつてのびる溝であり、長さ 24.8m、幅 2.8～4.8m、深さは西側では浅いが、東側の最も深い場所で 64cm を測る。調査区中央～西にかけては削平されており調査区東端は、比較的残りが良い。

ピット出土遺物 (図版 28・29、第 58 図)

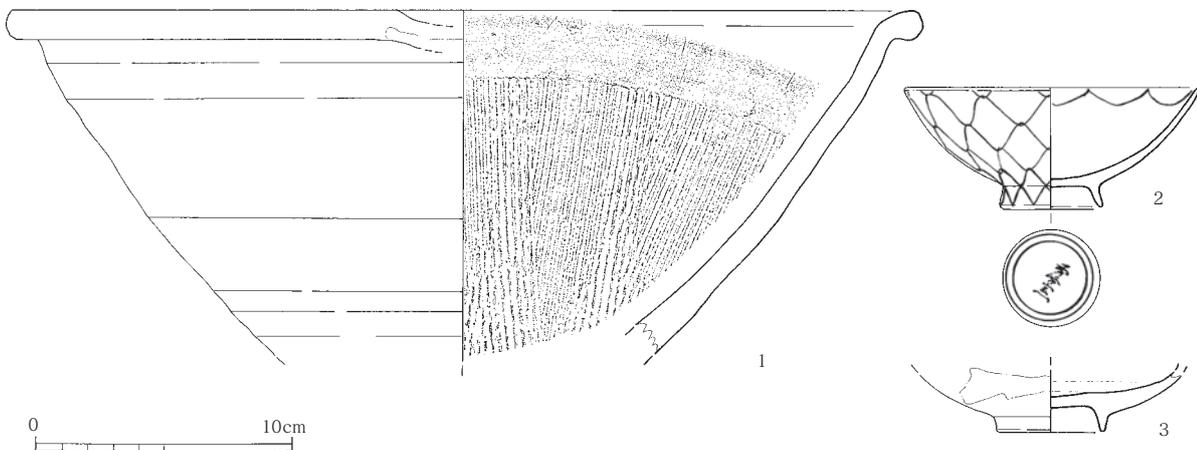
1～3 は土師器小皿である。1 は口径 6.2cm。2・3 は体部が外反気味に開く器形となる。2 は底径 3.6cm、3 は底径 3.4cm。4 は土師器皿である。底径 9.0cm。

5～8 は鍋または鉢である。どれも素口縁で、5・6 が土師質、7・8 は瓦質焼成。5 は端部上面が水平面をなす。口径 28.2cm。6 は外面に炭化物が付着する。7・8 は内外面ハケ目調整でやはり外面炭化物付着。9・10 は羽釜である。9 は土師質で端部の丸い鏝が付く。調整は内外面ハケ目。10 は鏝の端部が面をなす。内外面ナデ調整。

11～18 は陶器である。11 は小坏。口縁部下が外側に屈曲した形状となる。口径 7.0cm。鉄釉施釉。12 は青緑色の釉を施釉する。高台部径 5.2cm。13～15 は皿である。13 は高台部と体部の境目がなく丸味を帯びた器形となる。内面 4ヶ所に目跡が残る。灰釉施釉。口径 11.5cm。14 は同じく高台部と体部の境目がなく、体部は若干外反する。内面 4ヶ所に目跡が残る。灰釉施釉。口径 13.2cm。15 は口縁部が外反し、端部を上方に鋭くつまみ上げる。藁灰釉施釉。口径 14.2cm。16 は体部があまり開かない器形となる。外面に鉄釉を流し掛けする。口径 12.2cm。

17 は無頸壺である。口縁端部は水平面をなし、胴部は球形。鉄釉施釉。18 は小型の甕である。口縁部は外反して上端部が水平面をなす。鉄釉施釉。口径 16.0cm。

19～22 は磁器である。19 は体部が直線的に開く白磁小坏。口径 5.0cm。20～22 は皿である。20 は口縁部が強く外反する浅い器形となる。口径 18.0cm。21 もやはり口縁部が外反する。口径 13.8cm。22 は口径 12.5cm。



第 59 図 4 区その他出土遺物実測図 (1/3)

その他出土遺物（第 59 図）

1 は陶器挿鉢である。口縁部は短く外折する。施釉なし。2・3 は磁器である。2 は浅い器形の碗。内外に網目状の文様を描く。底部には「秀峰窯」銘款がある。口径 11.6cm。3 は高台径 4.4cm。

(6) 5 区の遺構と遺物（図版 10、第 60 図）

五ヶ山網取遺跡内で最も南に位置する。東を道路に面し、北を 1 区に接する南北に長い調査区である。西半分は段になっており、調査区北側では北西部の 1 区との境は 3.4m 程標高差がある。北半分では全体に東側より 1m 程高くなり、調査区南側については、ほぼ西と東との高低差は無くなっている。中近世の遺構は西側の段上に多く、段上に屋敷地が築かれたと考えられる。5 区の検出面は黄褐色粘土であるが、五ヶ山網取遺跡の中でも特に、地山に巨礫や大小の礫が多く含まれる。中には採石の痕跡が見られるものもある。この巨礫や石材を組み合わせて東西に水路を走らせたり、階段状に加工したり、中には楔を打って石材を割り出そうとした痕跡も見られ、石材を積極的に利用した痕跡が多く窺える。また、本調査では井戸の良好な例が検出された。この調査区において縄文時代の遺構は確認されず、表採資料のみみられる。

基本層序（図版 16、第 61 図）

5 区は本調査で最も南端に位置する。特に調査区東側各所に 3m を超える巨岩が配されていることから凹凸のある土地を盛土したのちに、屋敷地として利用されていたことが考えられる。特に隣接する 4 区南東では検出面と 1.38m の標高差があり、4 区側では遺構が確認されていない。このことから南側は高低差を解消する為に埋め立てて整地されていたと考えられる。

5 区全体をみるとして西側に高く、東側に低くなっていることから、主に屋敷地として利用する東側を盛土したことが分かる。

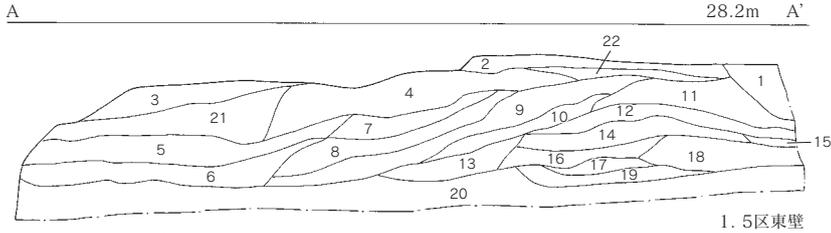
また、調査区東壁南北セクションは、東側の遺構検出面より上位の土層を記録したものである。検出面の屋敷地が放棄されて以降は、更に埋め立てて、最終的には西側の高さに合わせる形で全体を盛り土したのと考えられる。

調査区中央南東の長さ 15m、幅 5m の長方形の部分は、検出面より一段低くなっている。北側は検出面とあまり差はないものの、南側は高低差が 1m と、南に向かうにつれて低くなっている。ここは地山が砂層であり、また、段上落ち込みとの境に 5.3m 程の石列が設けられていることから、屋敷地の境として、意図的に掘り込まれていたことが考えられる。

中近世の遺構と遺物

掘立柱建物 1（第 62 図）

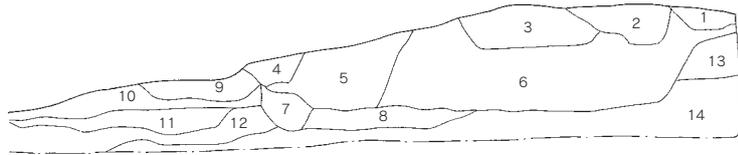
調査区北東側で、本遺跡のなかでも最も低い場所に位置する。主軸は少しだけ西に触れる南北軸を取る掘立柱建物である。南西部隅のピットの一部を欠くが、5 区で唯一確認された建物である。桁長 5.3m、梁長 3.65m を測り、柱間の間隔は 100～160cm であり、ほぼ 140cm の間隔が多い。柱穴は 28～45cm、深さ 30cm～60cm である。



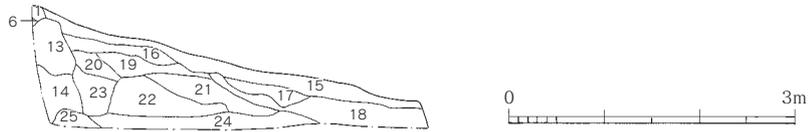
5区東壁セクション (西から)

層位番号	色調	礫	炭	焼土	しまり	粘性	備考
1	黒色土	◎	△	△	×	△	擾乱ピット
2	黒褐色土	○	△	△	×	×	
3	黒色土	○	◎	△	×	○	
4	黄褐色土	△	△	△	○	○	黒色土をブロック状に含む
5	黒色土	○	△	△	△	○	
6	黄褐色土	△	△	△	○	○	黒色土、黄色砂を多く含む
7	黒褐色土	△	○	△	○	○	粘質土(黄色)を多く含む
8	黄褐色土	△	△	△	○	○	
9	黒褐色土	○	△	△	◎	○	水晶を含む
10	にぶい黄褐色土	○	△	△	×	○	砂を多く含む
11	黒褐色土	△	△	×	◎	○	
12	黄褐色土	△	△	△	◎	○	
13	暗褐色土	△	○	△	○	△	
14	黒褐色土	△	◎	△	○	○	
15	黒色土	△	△	×	×	×	
16	黒褐色土	△	△	×	○	○	
17	黄褐色土	△	△	×	×	×	砂利層
18	黒褐色土	◎	△	×	×	×	礫を多く含む層
19	黒色土	○	○	◎	○	○	帯状に焼土層が入る
20	黒色土	○	◎	△	○	○	
21	黒色土	◎	◎	△	×	×	
22	黄褐色砂	△	△	△	○	×	

B 28.2m B'



C 28.2m C'



2. 5区北壁

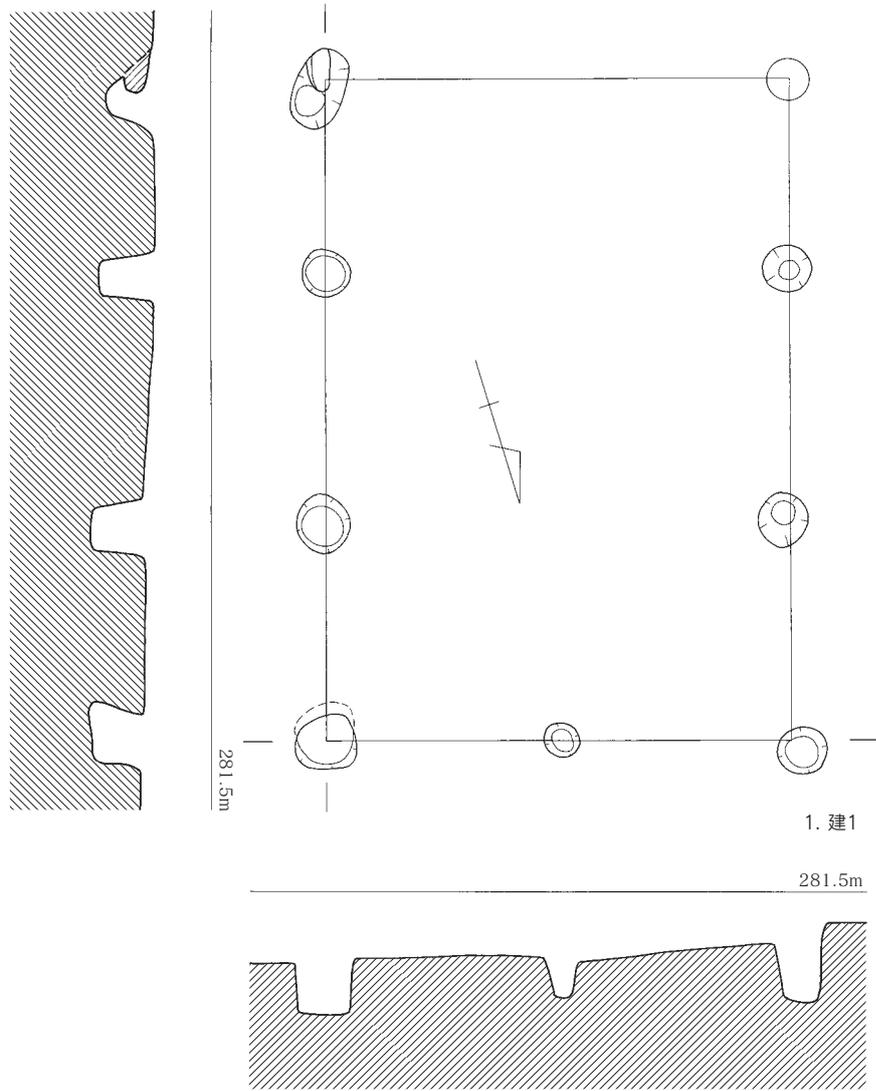
5区北壁セクション

層位番号	色調	礫	炭	焼土	しまり	粘性	備考
1	にぶい黄褐色土	△	△	×	×	○	
2	黒褐色土	△	○	×	×	○	
3	黒褐色土	○	◎	×	○	○	
4	黒褐色土	△	△	×	○	○	
5	にぶい黄褐色土	△	○	×	○	○	
6	にぶい黄褐色土	×	○	△	○	○	
7	明黄褐色土	△	△	×	△	△	
8	黄褐色土	△	○	×	△	△	
9	黒褐色土	△	△	×	×	△	砂を多く含む
10	黄褐色土	△	△	×	×	△	
11	にぶい黄褐色土	△	△	×	×	△	
12	明褐色砂	△	△	×	○	△	
13	黄褐色土	△	△	△	○	○	
14	黒褐色土	○	○	△	○	○	小礫混じり
15	黒褐色土	○	△	×	○	○	
16	にぶい黄褐色土	△	◎	×	△	○	
17	黒褐色土	○	△	×	○	○	
18	暗褐色土	○	◎	△	○	○	砂混じり
19	にぶい黄褐色土	△	◎	×	○	○	
20	黄褐色土	△	△	×	○	○	
21	黒褐色土	△	△	△	○	△	
22	暗褐色土	△	△	×	○	○	
23	黒褐色土	△	△	×	○	○	
24	黒褐色土	△	○	×	△	○	14と似る
25	黒褐色土	△	△	×	△	○	14と似る

第 61 図 5 区東壁・北壁断面図 (1/80)



第60图 5区遺構配置図 (1/200)



第 62 图 5 区掘立柱建物实测图 (1/60)

井戸 1 (第 63 図)

調査区最南部東よりに位置する、径 1.4m、深さ 1.03m を測る、円形の素掘りの井戸である。覆土の中より 45cm 程の角礫が検出されている。井戸の南側に、長さ 4m、幅 3m の長方形の掘り込みが確認されており、他の井戸と同じく井戸へ至る通路の可能性も指摘できる。

井戸 2 (図版 18、第 63 図)

調査区中央東側に位置する。長軸 140cm、内法 100cm、短軸 160cm、内法 80cm のやや楕円形を呈する石組の井戸である。大小の河原石を組み合わせて作られている。崩落の危険があったため図化できたのは地表より 1.4m の所までにとどまる。調査終了後、井戸本体を重機で掘りぬいたところ、深さ 2.6m の高さで底が確認できた。

また井戸北側に 40cm 程の扁平な石が径 90cm 程の円形の掘り込みで据えられており、井戸で水を組む際の足場であったと考えられる。また井戸を中心に南東に軸を取る長さ 3.2m、幅 2m の通路が設けられている。北側は失われるが、南側は良好に残存する。南側は長さ 3.2m、幅 0.5m 程の溝を掘り、20～60cm 程の礫石を据えている。また、南東の最も井戸に近い部分では、幅 1m の三角形の大きな石を配置する。

出土遺物 (第 64 図)

4 は小型の陶器甕である。口縁端部が強く外折し上端部は外傾する。釉は薄い黄緑色を呈す。5 はガラス製のインク瓶である。上層から出土。

井戸 3 (図版 18、第 63 図)

調査区中央西壁そばに位置する。長軸 160cm、短軸 150cm の東西に長い長楕円形の素掘りの井戸である。深さは 160cm を測るが北側は更に 25cm 深く、175cm の深さである。

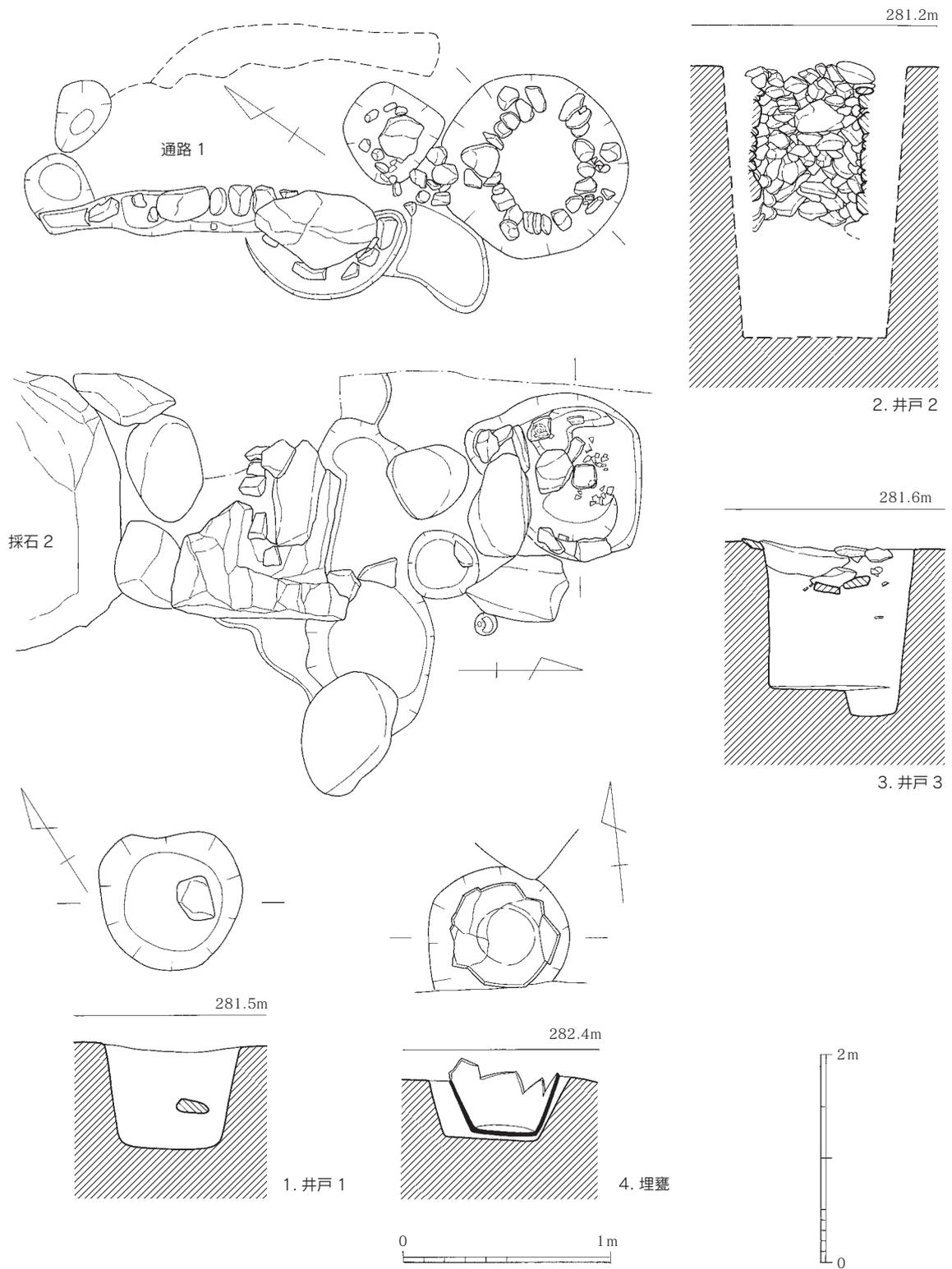
覆土 50cm 程の所に、比較的大きな礫や茶碗類が確認され、井戸を埋め戻した際に配置されたものではないかと考えられる。また井戸より南に 1.6m の所に巨礫から削り出した石段が、採石遺構 2 の巨礫に架かっている。溝を挟み埋甕と井戸 3 と対峙することから、井戸 3 周辺に並ぶ長さ 1m 程の大礫と合わせて井戸 2 のような井戸のための通路と考えられる。

出土遺物 (図版 29、第 64 図)

6・7 は土師器小皿である。6 は口径 6.5cm、底径 3.2cm。7 は底部と体部の境が明瞭な稜をなす。底径 4.8cm。8 は土師器皿である。体部は直線的に開いている。口径 11.5cm、器高 2.8cm。9～12 は土師質鍋または鉢である。9～11 は口縁端部が玉縁状に肥厚する。9 は内外面ナデ調整で外面に炭化物が付着する。10・11 は浅い器形となる鉢。どちらも内外面ハケ目調整。11 は口径 47.2cm を測り外面には炭化物が付着する。12 は体部が直立するもので、口縁部は丸くおさめている。調整は内外面とも横ナデ。口径 23.0cm。

13・14 は陶器である。13 は短く外折する口縁部形態となる。口径 30.6cm。内面には灰釉による櫛描文様が施される。14 は碗であろう。内面見込みと外面高台部に各 3ヶ所の目跡が残る。釉は灰釉施釉。

15～17 は磁器である。15・16 は碗である。15 は口縁端部に鉄釉を塗布する。16 は口径 10.2cm、高台径 3.8cm。17 は体部上半が屈折する皿。口径 13.3cm、高台径 4.6cm。



第 63 図 5 区井戸・埋葬実測図 (1 ~ 3 : 1/60、4 : 1/30)

埋甕 (図版 17、第 63 図)

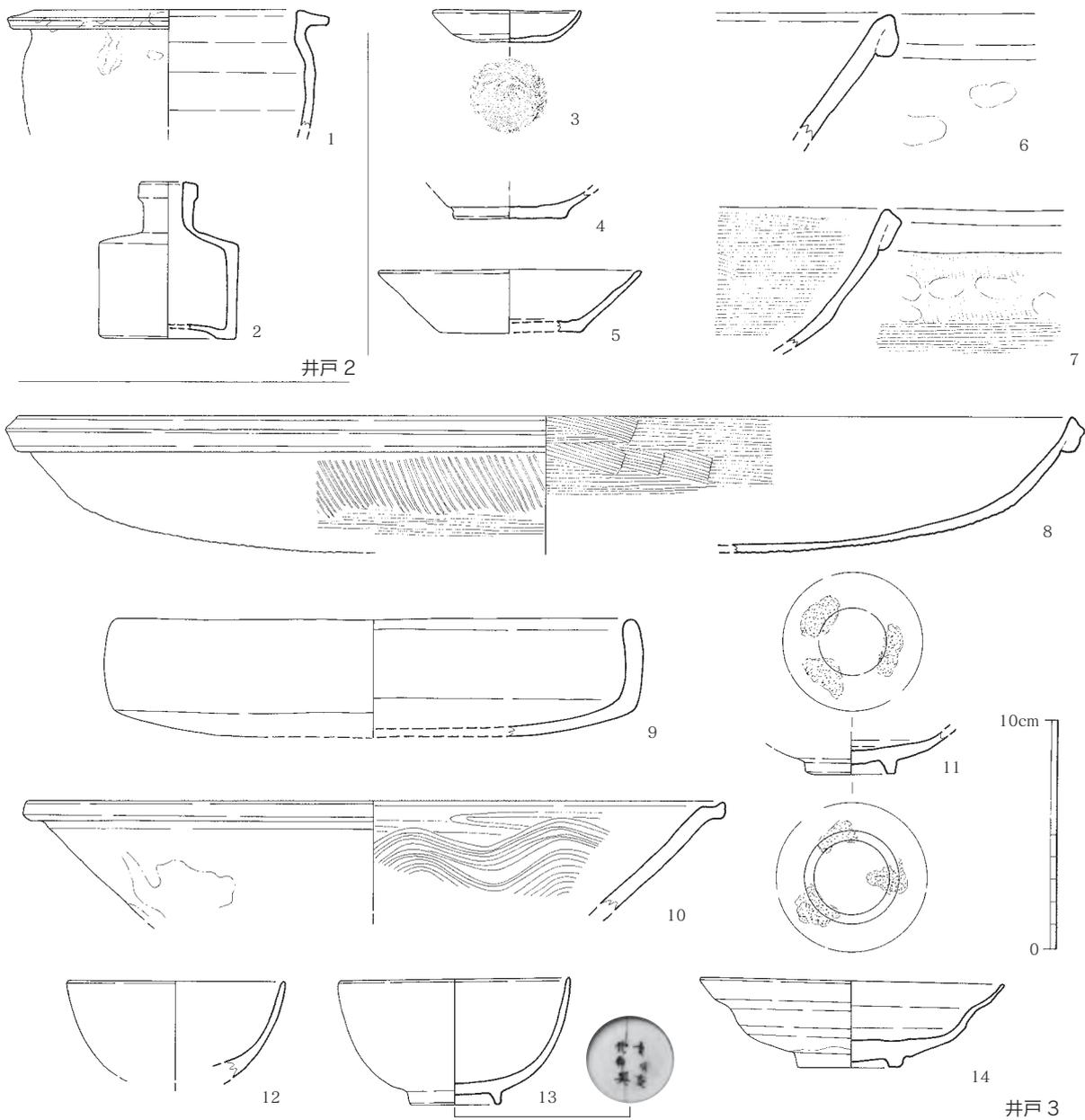
調査区中央西壁側に位置する。やや甕よりも大きめの円形の穴を掘りくぼめたのちに甕底部を据えている。甕本体の上部は欠損し、底部のみ残す。

出土遺物 (第 65 図)

1 は陶器甕である。長胴で底径が広く、頸部はあまりしまらない。口縁部は緩やかに外反し端部は内側に肥厚する。釉は鉄釉。口径 49.0cm、底径 29.5cm、器高 79.5cm。

土坑 1 (図版 17、第 66 図)

調査区北東に位置する。比較的整った長楕円形を示す土坑であり、長軸 2.0m、短軸 1.68m を測る。覆土は、粘性はあるがしまりのない均質な混じり気のない黄褐色土である。完形の陶器皿が 2 点出

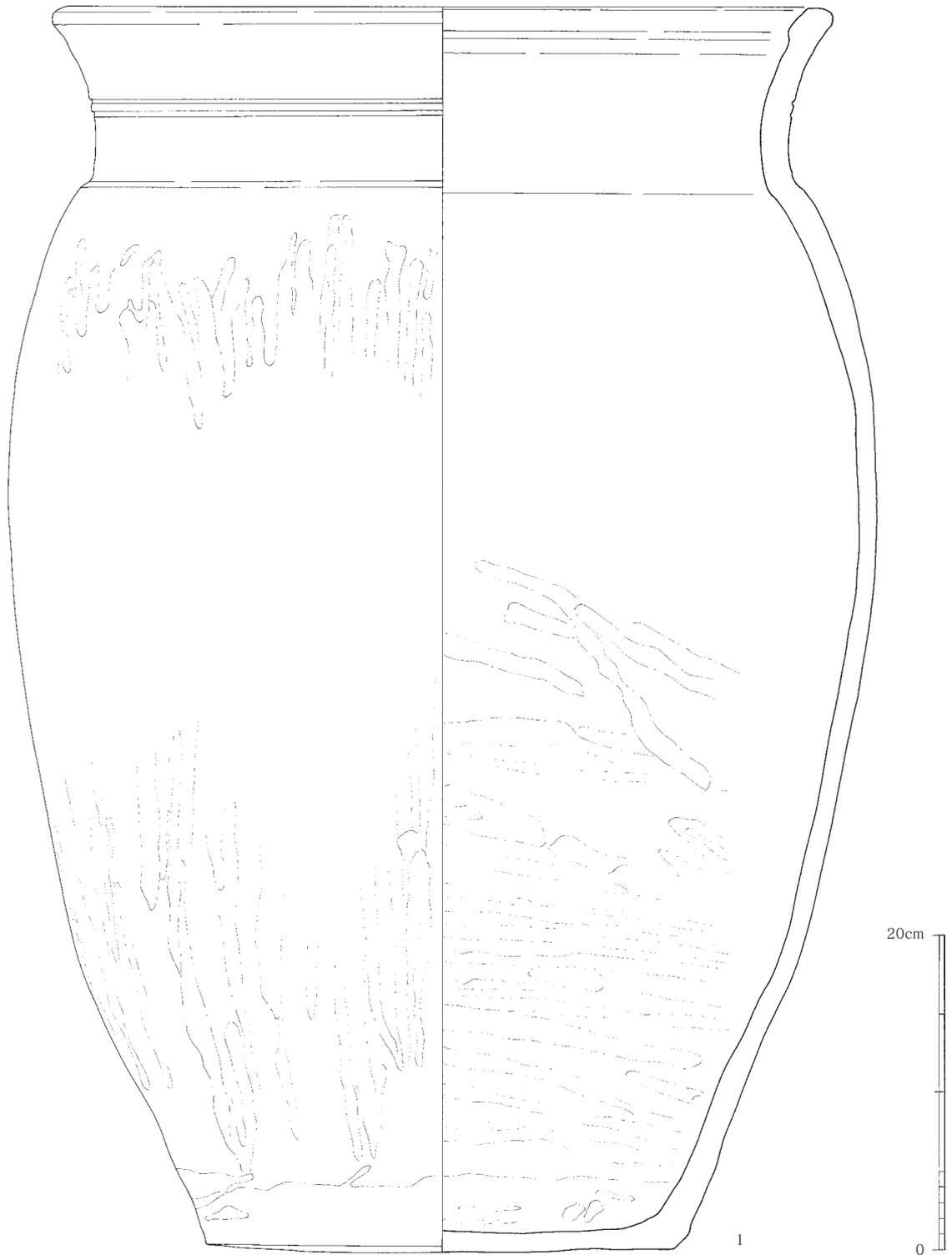


第 64 図 5 区井戸出土遺物実測図 (1/3)

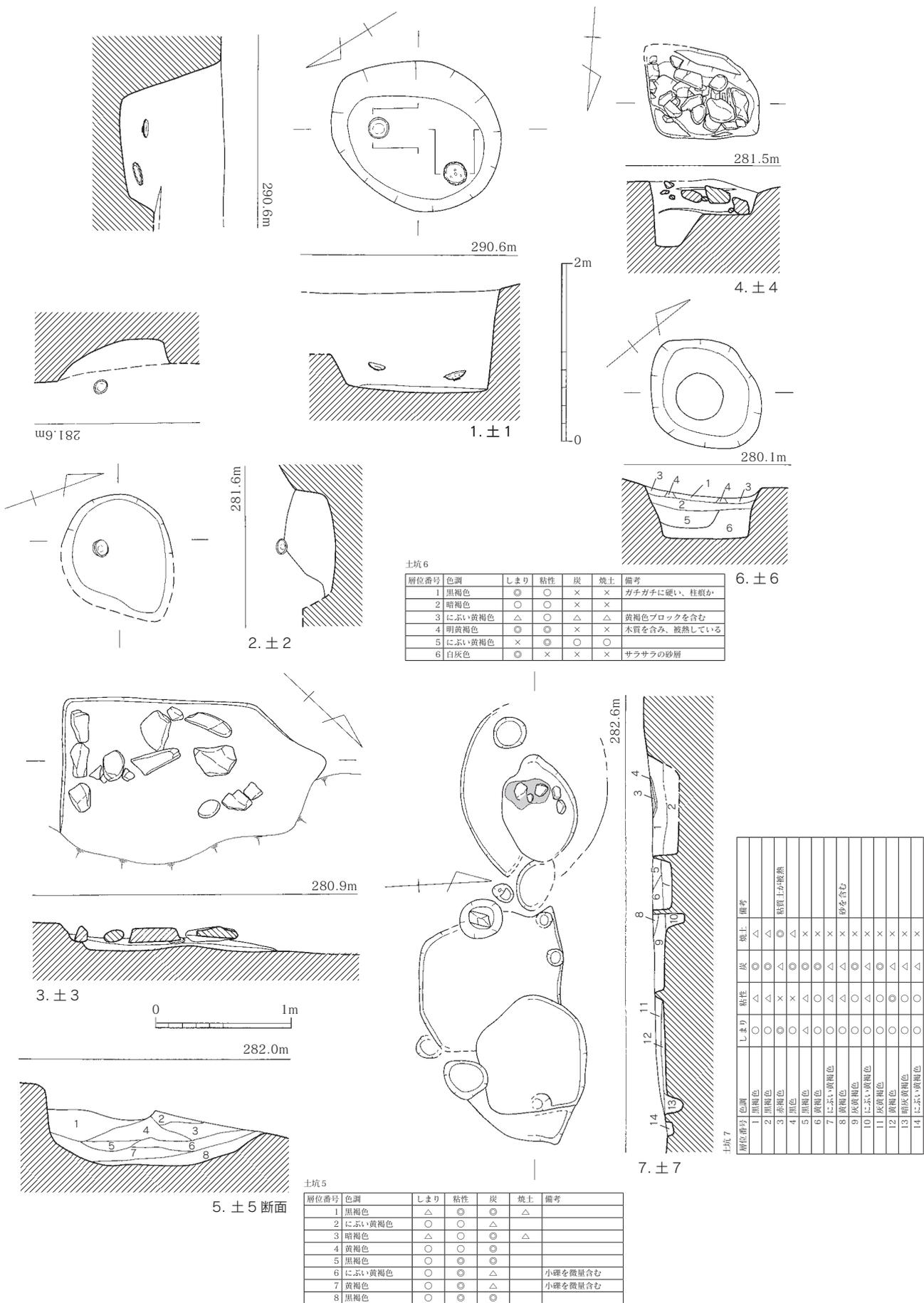
土しており、意図的に埋納されたものと考えられる。

出土遺物 (図版 29、第 67 図)

1・2 は完形で出土した陶器皿である。1 は丸味を帯びた器形となる。藁灰釉を施釉する。口径 10.9cm。2 は口縁部を波状に仕上げる。釉は灰釉。口径 13.9cm、器高 4.3cm。



第 65 図 5 区出土埋甕実測図 (1/4)



第66図 5区土坑実測図 (3・5・7 : 1/40、他 : 1/30)

土坑 2 (図版 17、第 66 図)

調査区北東に位置し、東半分は削平により失われるが、長軸は 1.34m と想定され、短軸 1.24m の円形を呈するピットである。

出土遺物 (第 67 図)

3 は口縁部を玉縁状に肥厚させる鍋である。土師質焼成。内外面ナデ調整。4 は小型の土師質鉢。口縁端部は体部に比べて若干身が厚く、上端部は平坦面をなす。内面横ハケ目、外面縦ハケ目調整を行う。口径 20.6cm。5 は陶器小坏である。釉は灰釉。底径 2.8cm。

土坑 3 (第 66 図)

調査区北東に位置する。長軸 1.95m、短軸復元長は 1.0m の方形土坑である。南側の大半を削平により失うが、方形の土坑を掘り下げて、20～30cm 程の比較的縦長の石を並べている。

土坑 4 (第 66 図)

調査区中央西端に位置する、長軸 61cm、短軸 48cm を呈する不整形の土坑である。東壁に径 35cm、深さ 36cm のピットを配し、大小の礫が覆土の中に含まれる。

土坑 5 (第 60・66 図)

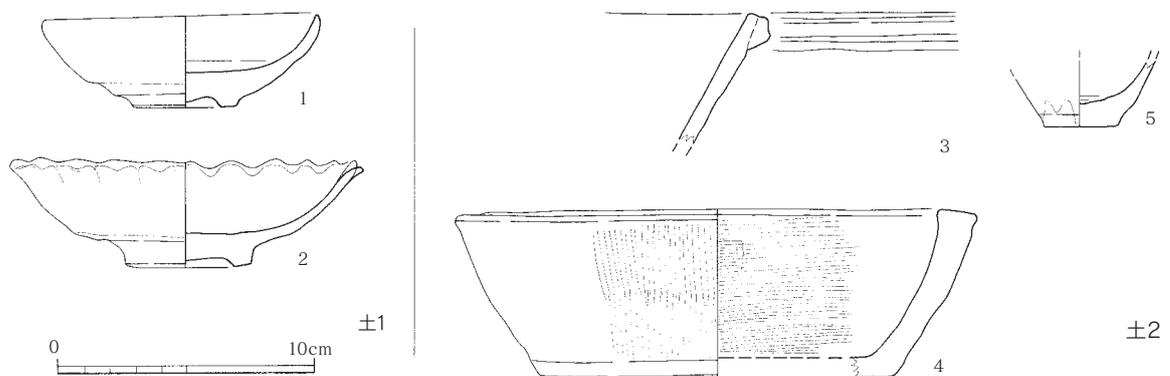
調査区北西隅に位置し、長軸 8m、短軸 5m の不整形の土坑である。西側に方形のテラスを作り、段状になっている。調査区のなかでも規模が突出していることから、廃棄土坑などの性格が想定できる。

土坑 6 (第 66 図)

径 60cm の円形土坑であり、覆土中央に径 26cm、幅 4cm 程の赤色土が円形に入る。柱痕と考えられることから、柱痕が被熱により残されたものと考えられる。

土坑 7 (第 66 図)

調査区東側に位置する。北側に赤褐色土の粘質土が検出され、何らかの焼成遺構と考えられるが、南側は全体に削平を受けており、実態は明らかではない。



第 67 図 5 区土坑出土遺物実測図 (1/3)

採石遺構 1 (第 60 図)

調査区南壁にかかる南北 2.5m、東西 4.5m の三角形の巨岩である。巨岩の一部を加工して削ったあとが数か所見られ、採石によりとがった割口が数箇所見られる。

採石遺構 2 (第 60 図)

調査区中央やや南寄りに位置し、西壁にかかる巨岩である。特に石の南側半分に採石による割れ口が多くみられる。

採石遺構 3 (第 60 図)

調査区中央西端に位置する東西 3.4m、南北 2.3m の表面がなだらかな巨岩である。石の東南端に 10cm × 10cm 程の方形の穴が転々と並ぶことから、巨石を加工する為に穿った矢穴と考えられる。

溝 1 (第 60 図)

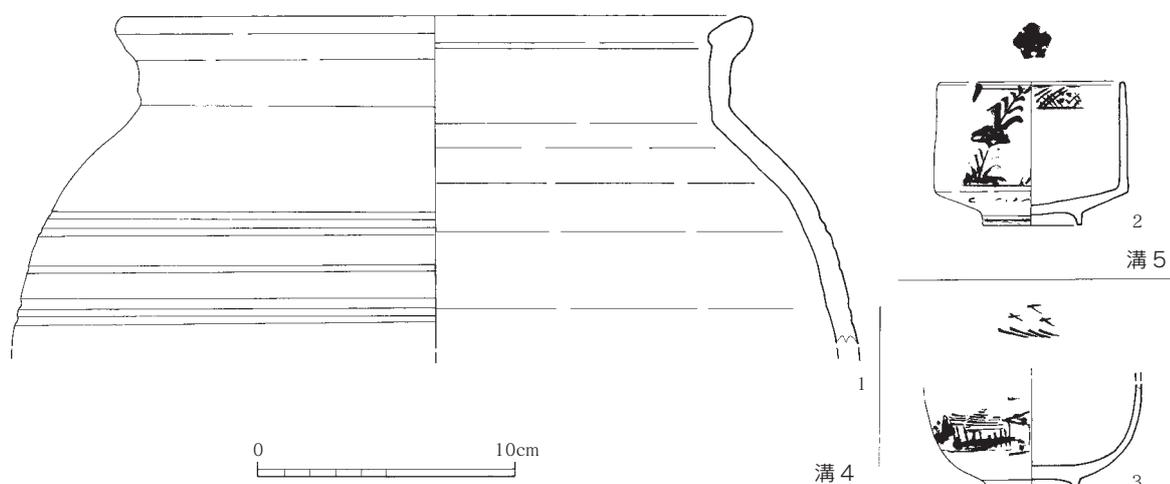
調査区南東端に位置し、調査区外に続く溝である。長さ 7.8m、残存幅 1.4m、深さ 55cm。中央北側に大礫を二つ並べる。床面は平坦でなく、いくつかのピットがつながった形に見える。

溝 2 (第 60 図)

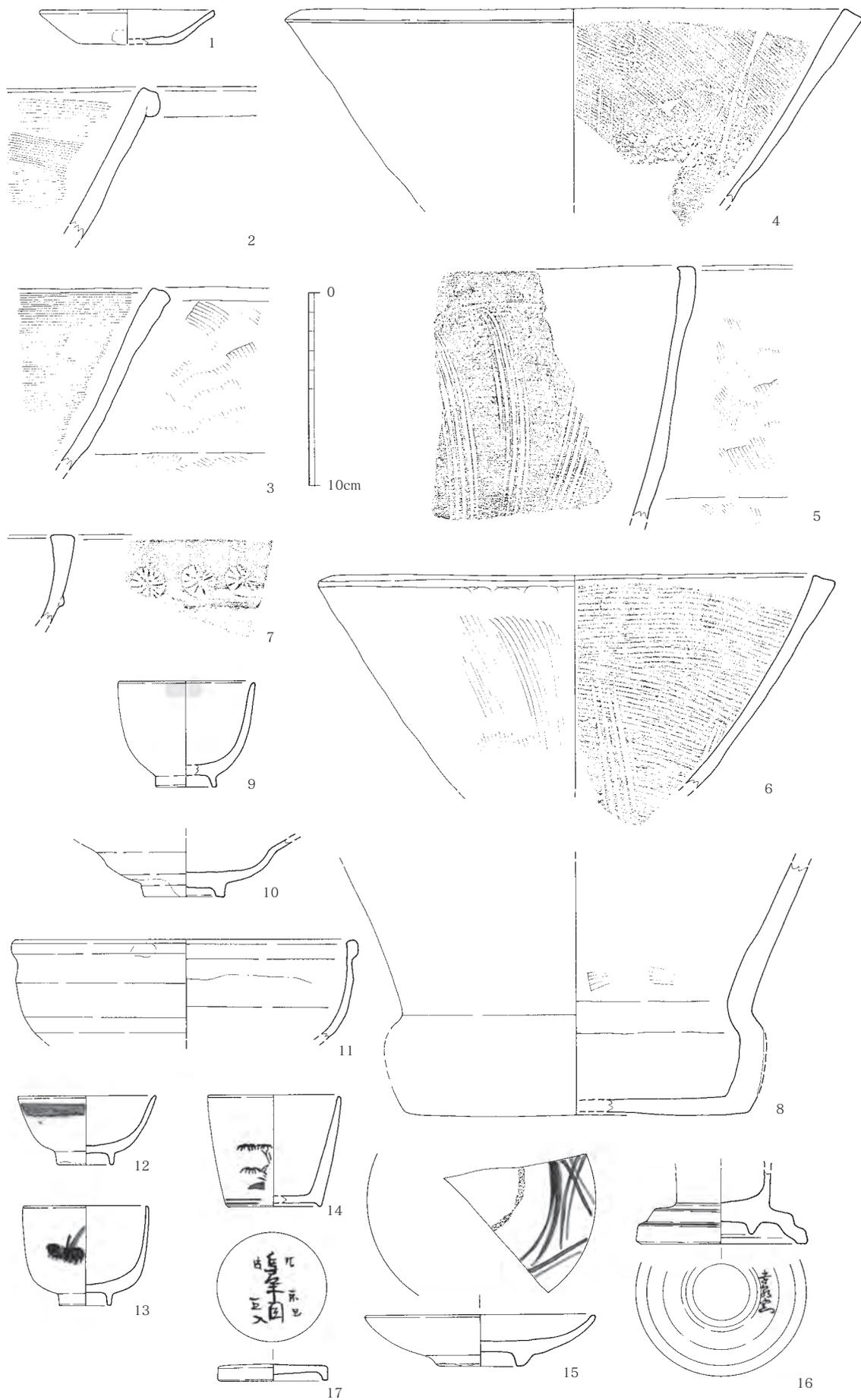
調査区中央東壁の一段下がった部分の最南端に位置する。長さ 2.9m、幅 2.1m、深さ 8cm ~ 40cm で、西に深く、東が浅い。幅 2.1m の東西にのびる溝であり、まばらではあるが礫を東西に並べる。

溝 3 (第 60 図)

調査区中央東壁の一段下がった部分の北端に位置する。長さ 4.8m、幅 0.6 ~ 1.2m、深さ 15cm と浅い溝で、東西にのびる。



第 68 図 5 区溝出土遺物実測図 (1/3)



第69図 5区その他出土遺物実測図 (1/3)

溝4 (第60図)

調査区北東隅に位置し、北側を土坑2に切られる。南北にのびる長さ5.5m、幅0.7m、深さ33cmの溝である。

出土遺物 (第68図)

1は陶器甕である。口縁部は内側に折り曲げて丸く肥厚する。口径25.1cm。2は磁器碗である。底部と体部の境は明瞭に屈曲し、筒状を呈す。口径7.3cm、器高5.7cm。

溝5 (第60図)

調査区北東隅に位置し北側を土坑3に切られる。溝4と並行して南北にのびる長さ4.5m、幅0.6m、20cmの溝である。

出土遺物 (第68図)

3は染付磁器碗である。体部が丸味を帯びた器形となる。高台部径3.6cm。

その他出土遺物 (第69図)

1は土師器小皿である。口径9.1cm、器高1.9cm。2・3は鍋である。2は土師質焼成で口縁端部を玉縁状に肥厚する。内外面ハケ目調整。3は瓦質焼成で口縁部は素口縁。内外面ハケ目調整。4～6は播鉢である。4・5は土師質焼成で、どちらも口縁部は素口縁。4は口径30.0cm。5は傾きに不安が残る。内面の櫛目は5本。6は瓦質焼成。外面に炭化物が付着する。口径27.0cm。7は瓦質火鉢であろう。外面口縁部下には菊花文の印刻があり、その下に小さな突帯が巡る。8は体部が扁平な壺状となる鉢である。土師質焼成で内面にはナデに先行するハケ目が見られる。外面は赤茶色の化粧土を塗布する。底径17.6cm。

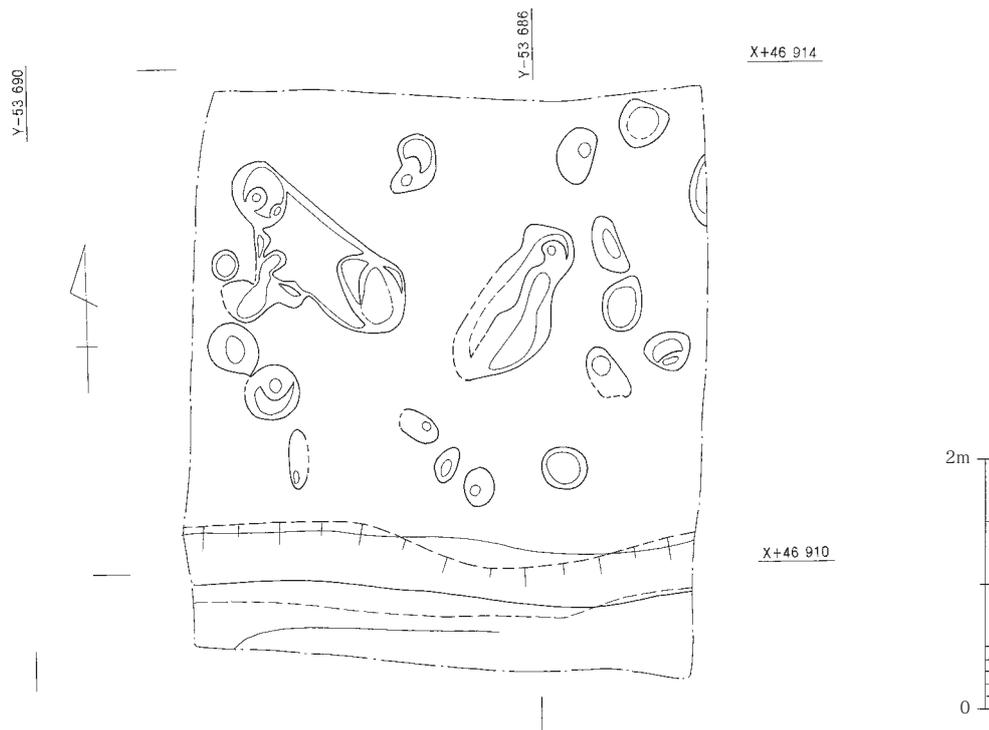
9～11は陶器である。9は小碗である。口縁部の一部に青緑色の釉が見られる。10は口縁部が外反する皿。釉は灰釉。11は鉢である。体部は丸く口縁端部は玉縁状に肥厚する。釉色は黄緑色。口径18.0cm。

12～16は磁器である。12～14は小坏。外面の口縁部下に幅広の圈線を巡らせる。口径7.1cm。13は体部が直立気味に立ち上がる。口径6.5cm。14はいわゆるそば猪口と呼ばれる小型筒状の鉢である。15は皿である。内面の文様の発色は灰色に近い。16は屈曲する脚部を有した筒状品である。仏花器か。17は小型の蓋である。

(7) 6区の遺構と遺物 (図版19、第70図)

6区は河川に向かい舌状に張り出す丘陵の突端部にあたる。地名は「尼寺」であり、また、丘陵の突端部であり南北とも一望する非常に眺望の良い場所であるため、縄文、もしくは中近世の祠等の存在が予想された。

丘陵上であるため、人力によりトレンチ調査を行なった。陶磁器破片が表露された平坦面を選んでトレンチを入れた。丘陵頂上部では陶器破片が表採されたため、長方形のトレンチを入れたものの、削平がひどく遺構は確認されなかった。そこで、頂部より一段下の、南側の調査区全体を見下ろす平坦面に2m四方のトレンチを入れた。ここではピット、および溝状の落ちが確認された。しかし、明確な遺構は認められず、また数片の陶磁器片が見つかったものの、時期特定はできなかった。し



第 70 図 6 区遺構配置図 (1/60)

かしながら 7 区で確認された溝 1 の区画溝は、この丘陵を囲うように造られており、この丘陵上に寺跡などの遺構があった可能性は残る。

(8) 7 区の遺構と遺物 (図版 10、第 71 図)

五ヶ山網取遺跡北側、6 区の南西、1 区と 3 区の間位置する。調査区全体は北東へ向かいゆるく傾斜する。調査区を北東へ向かって走る現代の溝、および北西から南東へ走る現代の溝によって攪乱されている。検出面では、西側半分は 15 世紀代と考えられる、コ字状の区画溝、溝 1 が走っている。溝 1 は東西方向に細く、南北ラインを中心に少なくとも 6 回にわたり、繰り返し掘り直しが行われたと考えられる。溝 1 からは、16 世紀代の龍泉窯の青磁をはじめとする陶磁器、土器、石臼、鉄滓など多量の遺物が出土している。17 世紀代には整地が行われ、南北に石垣が築かれ、その後畑地となっても境界として今日に至ったと考えられる。溝 1 より西側は、上層・下層共に多数のピットが密に存在し、繰り返し建物が建てられたことを示している。一方、調査区東側は中世以降の開発を受けることがなく、きれいな黄褐色土の遺構面で、貝殻条痕文の土器や黒曜石・サヌカイトの石器をとまなう方形土坑やピットが多数確認された。周囲の状況と照らし合わせると、縄文時代晩期頃と考えられる。

また、調査区南西および南東の一部では、下層まで調査を行なった。調査区南東下層からは押型文期と考えられる包含層が確認された。調査区南西についても、上層二面の調査終了後、グリッド調査を行ったが、縄文時代の遺物は採取されるものの明確な遺構は把握にはいたらなかった。中世以降の開発により壊されているものとする。



第71図 7区遺構配置図 (1/200)

縄文時代の遺構と遺物

調査区東南部下層（第 72 図）

7 区縄文時代上層および中近世面の調査後に掘り下げた、縄文時代の遺物を包含する灰褐色土の遺構面である。遺構面では、ピットが確認されたが、明確な遺構となるものはなかった。ピットより少数の土器や石器が出土している。更にトレンチを入れ下層の状況を確認したが、遺構・遺物は確認されなかった。このため、この遺構面が本調査区で確認できる最下層と考えられる。

調査区東南部上層

7 区は溝 1 を境に東が縄文の遺構のみ、西が縄文および近世以降の遺構面と明確に分かれる。西側は、近世以降の遺構により、明確に縄文時代と分かる遺構は確認されていないが、調査区東側は中世以降の開発を受けることがなかったため、非常に保存状態が良い。混入物の少ない均質な黄褐色土の遺構面で、貝殻条痕文の土器や黒曜石・サヌカイトの石器をともなう方形土坑やピットが多数確認された。周囲の状況と照らし合わせると、縄文時代晩期頃と考えられる。また、下層からは押型文の時期と考えられる包含層が確認された。調査区西側についても、上層二面の調査終了後、グリッド調査を行ったが、縄文時代の遺物は採取されるものの、やはり明確な遺構を把握するにはいたらなかった。もし、あったとしても中世以降の開発により削平されているものとする。

竪穴建物 1（図版 20、第 73 図）

調査区北東中央に単独で所在する竪穴建物である。プランは整ったほぼ正方形に近い隅丸方形を呈する住居で非常に遺存度がよい。長軸 2.3m、短軸 2.53m で、遺構面からの深さは 31cm である。主軸は北東をとり、柱穴は確認されなかった。建物南側より深鉢が出土した。

出土土器（第 74 図）

1 は内外面条痕調整の深鉢である。胴部上半は直立し、口縁部のみわずかに外反する。外面口縁部下は若干肥厚する。胎土に石英、長石、雲母を若干含み、暗黄褐色を呈す。口径 15.4cm。

方形土坑（第 72・75・77 図）

調査区南東部では、方形の土坑を 14 基確認した。全体に削平を受けているため、あまり残りはよくない。また、大きさも大小まちまちである。切り合い関係も多いが、規模は大小さまざまで、住居とするには躊躇する。しかし、整った方形を呈するものが多く、ここでは方形土坑として、報告する。

方形土坑 1（第 76 図）

調査区南東部の一番西寄りに位置する。南北を攪乱に切られる。主軸は北東をとる。隅丸方形の土坑である。長軸 2.7m、短軸 2.5m、深さ 44cm を呈する。

方形土坑 2（第 76 図）

調査区南東部北寄りに位置し、方形土坑 1 に切られる。主軸方向は北をとり、南北に長い長方形

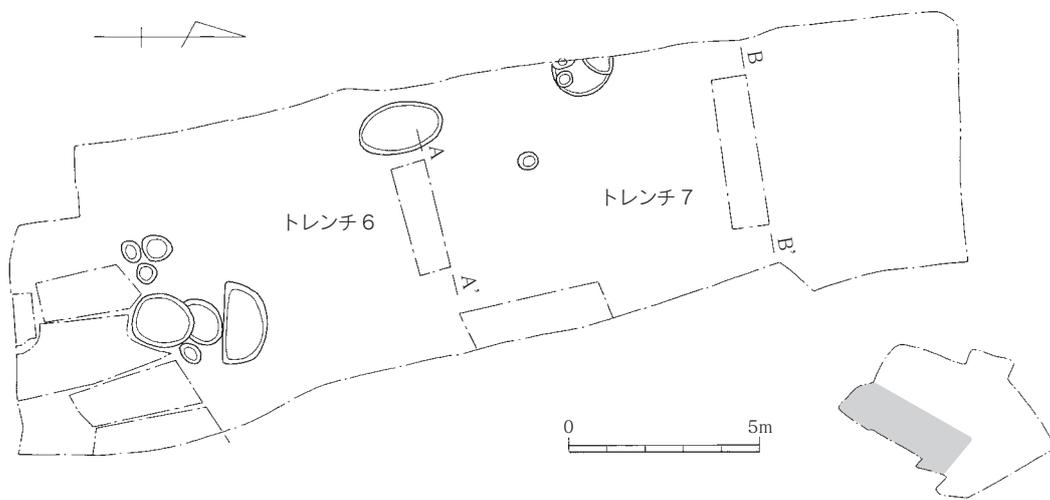
を呈する。遺構、南東に長方形のピットが占める。長軸 3.1m、短軸 2.5m、深さ 10cm と浅い。

方形土坑 3 (第 76 図)

調査区南東部最も北に位置する。主軸を北西に取り、南北に長い長方形を呈するが、北半分は攪乱に切られる。長軸 2.5m、短軸 1.3m、深さ 29cm。

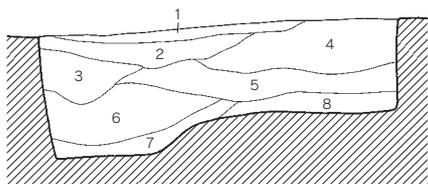
方形土坑 4 (第 76 図)

調査区南東部北に位置し、方形土坑 4 に切られる。南半分に不整楕円の土坑が入る。主軸方向は



1. 7 区東南下層

A 280.5m A'

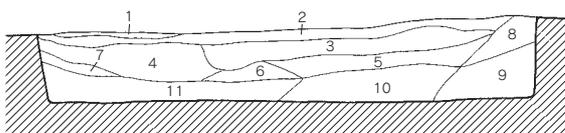


2. トレンチ 6

7 区 トレンチ 6

層位番号	色調	炭	焼土	砂礫	鉄	粘性	しまり
1	灰褐色土	△	×	△	×	○	○
2	明褐色土	△	△	○	△	○	○
3	にぶい黄褐色土	△	×	△	△	○	○
4	明灰褐色土	○	△	△	×	○	○
5	暗黄褐色土	○	△	△	×	○	○
6	暗灰褐色土	○	△	△	×	○	○
7	灰黄褐色土	△	△	△	×	○	○
8	明黄褐色土	△	△	△	×	○	○

B 280.5m B'



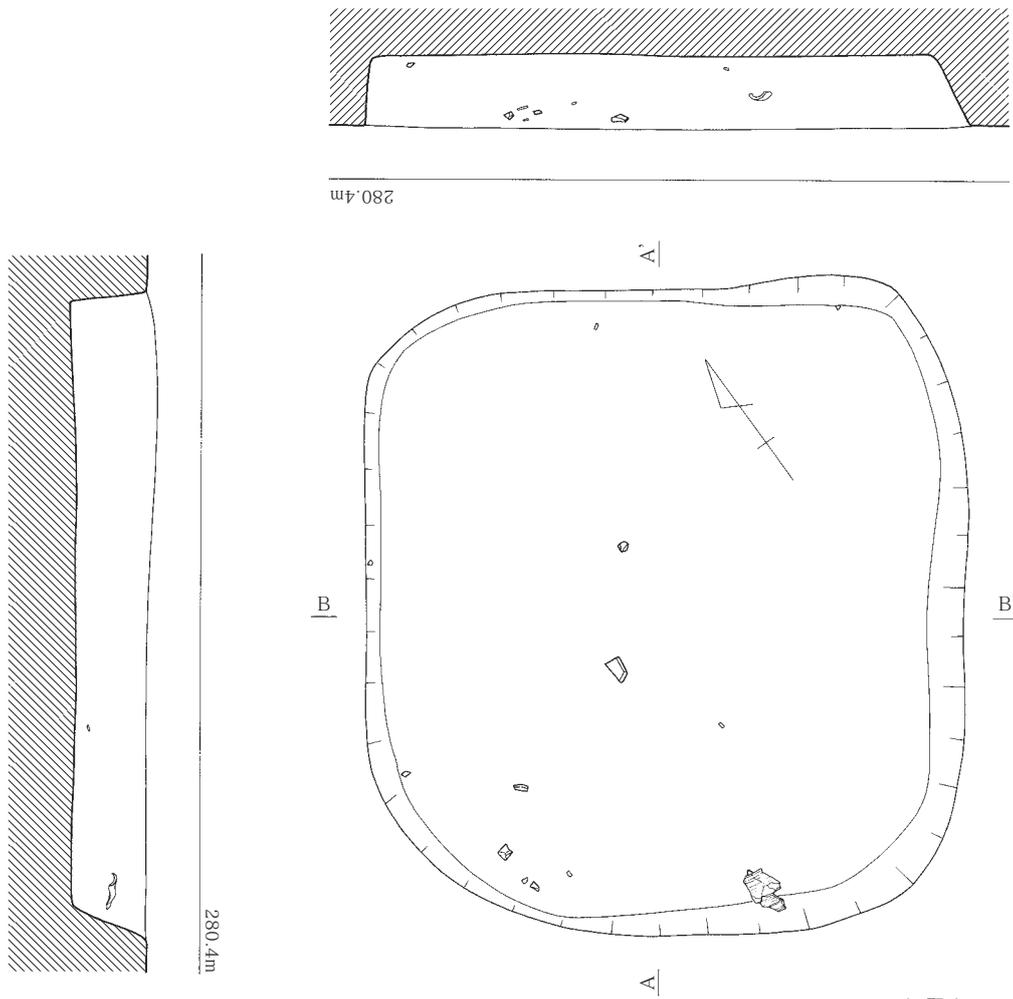
3. トレンチ 7

7 区 トレンチ 7

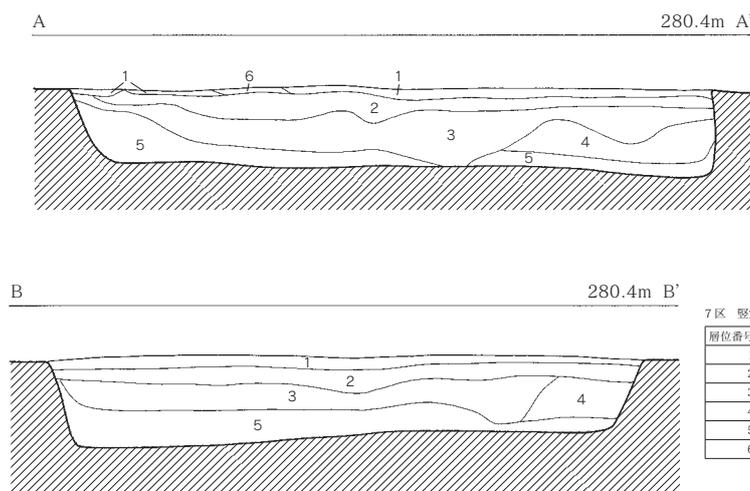
層位番号	色調	炭	焼土	砂礫	鉄	粘性	しまり
1	黒褐色	○	×	○	×	○	○
2	灰褐色	○	△	△	×	○	○
3	灰黄色	△	○	○	×	×	×
4	暗灰黄色	○	△	△	×	△	△
5	灰褐色	△	△	△	×	△	△
6	灰褐色	○	△	×	×	○	○
7	にぶい黄褐色	○	△	△	×	×	×
8	灰褐色	○	×	△	×	△	△
9	暗褐色	○	△	△	×	○	○
10	暗灰黄色	△	△	△	×	△	△
11	灰褐色	△	△	△	×	△	×

0 1m

第 72 図 7 区東南部下層 (縄文) 平面図・トレンチ土層図 (1 : 1/200、2・3 : 1/30)

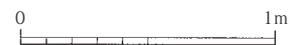


1. 竪 1



7区 竪穴建物 1

層位番号	色調	炭	焼土	砂礫	粘性	しまり	備考
1	灰褐色土	○	○	○	△	◎	
2	赤褐色土	○			○	○	鉄分を含む
3	にぶい黄褐色土	◎			○	○	
4	にぶい黄褐色土	△			○	○	
5	黄褐色土	△	△	△	○	○	
6	灰褐色土	○	○		×	○	



第73図 7区竪穴建物1実測図 (1/30)



第74图 7区出土縄文土器実測図 (1/3)

西をとり、東西に長い長方形を呈する。長軸 2.6m、短軸 2.5m、深さ 26cm。

方形土坑 5 (第 76 図)

調査区南東部に位置する。主軸方向は北東をとる、深さ 18cm の土坑である。

方形土坑 6 (図版 20、第 76 図)

調査区南東部北側に位置し、南側は方形土坑 7 を切り、北側は方形土坑 5 を切る 2 つの土坑を切る。主軸方向は北西をとり、少し歪んだ方形を呈する。長軸 2.5m、短軸 2.4m、深さ 28cm。床面に 2 つのピットが作られる。

方形土坑 7 (図版 20、第 76 図)

調査区南東部北側に位置し、方形土坑 6 に切られる。主軸方向は北西をとり、東西に長い長方形を呈する。長軸 2.1m、短軸残存長 1.6m、深さ 25cm。床面にはピットが作られる。

方形土坑 8 (第 76 図)

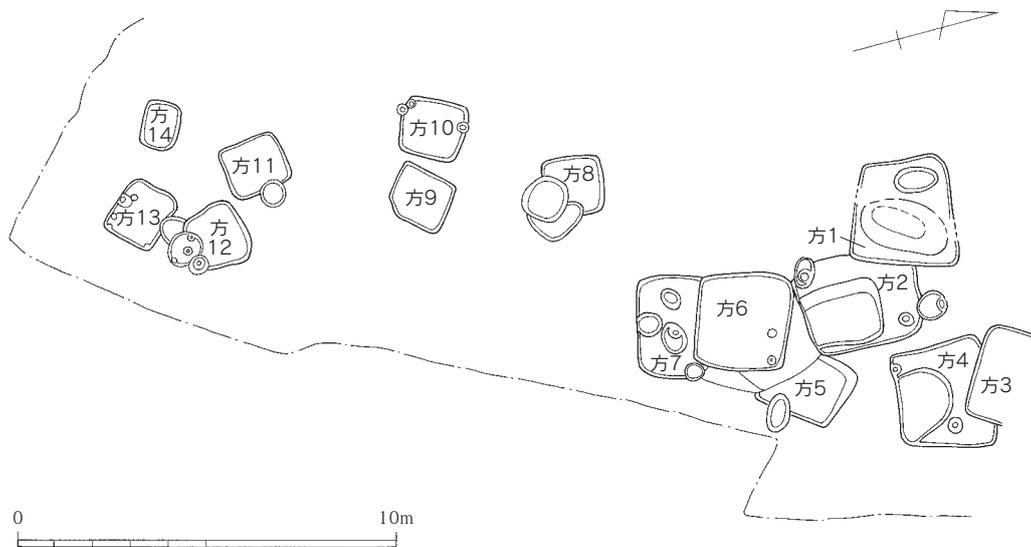
調査区南東部中央西よりに位置し、正方形を呈する。長軸 1.6m、短軸 1.5m、深さ 39cm。

方形土坑 9 (第 76 図)

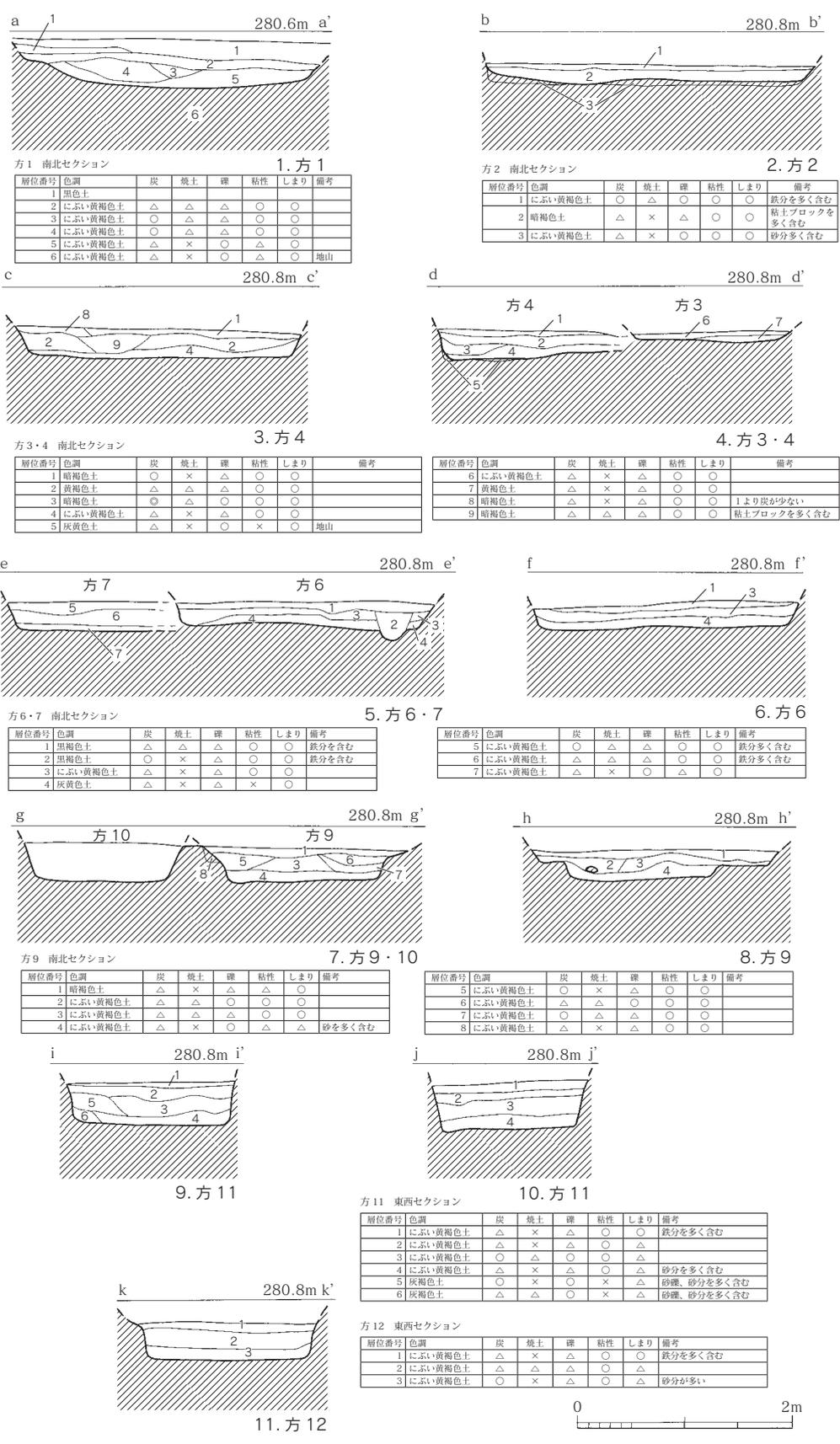
調査区南東部中央に位置する、ややいびつな正方形を呈する。長軸 2.3m、短軸 2.2m、深さ 28cm。

方形土坑 10 (図版 21、第 76 図)

調査区南東部中央西よりに位置し、正方形を呈する。長軸 1.7m、短軸 1.5m、深さ 35cm。



第 75 図 7 区方形土坑遺構配置図 (1/200)



第76図 7区方形土坑土層実測図 (1/60)

方形土坑 11 (図版 21、第 76 図)

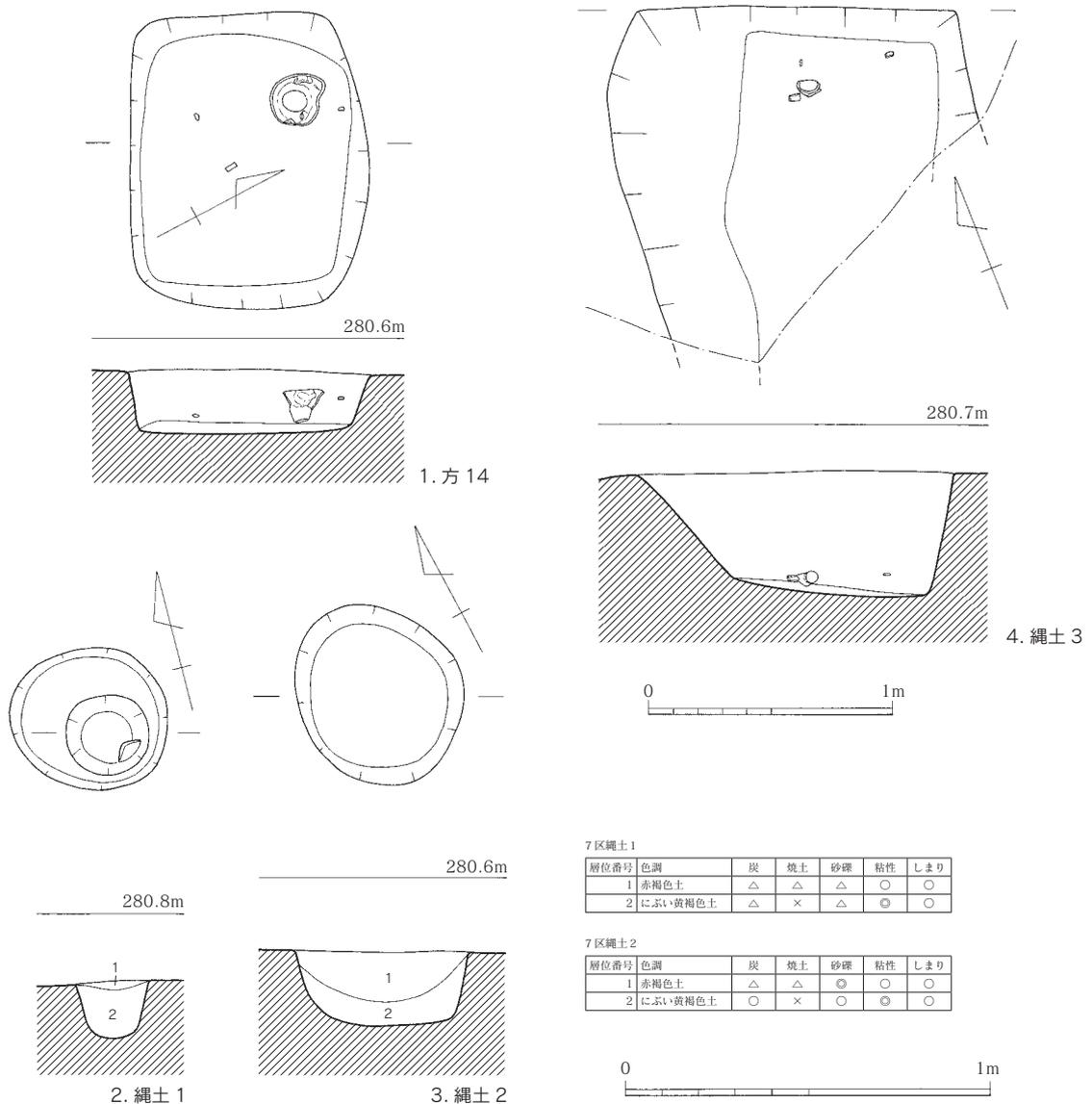
調査区南東部南に位置し、正方形を呈する。主軸方向は北をとる。長軸 1.6m、短軸 1.4m、深さ 45cm。

方形土坑 12 (第 76 図)

調査区南東部南に位置し、正方形を呈する。長軸 1.6m、短軸 1.4m、深さ 34cm。

方形土坑 13 (第 76 図)

調査区南東部南に位置し、正方形を呈する。長軸 1.5m、短軸 1.3m、深さ 35cm。



第 77 図 7 区縄文方形土坑・土坑実測図 (1・4 : 1/30、他 : 1/20)

方形土坑 14 (図版 21、第 76 図)

調査区南東部南に位置し、長方形を呈する。土坑北西隅に鉄分が鉢状に残る。長軸 98cm、短軸 122cm、深さ 26cm。

土坑 1 (第 71・77 図)

調査区南東部南に位置し、方形土坑 14 を切る。径 40cm の円形を呈する。深さ 20cm。覆土に焼土および炭を多く含む。

土坑 2 (第 71・77 図)

調査区南東部北に位置し、方形土坑 3 を切る遺構である。径 46cm の円形を呈し、深さ 16cm。覆土には炭と焼土を多く含む。

土坑 3 (第 71・77 図)

調査区南東部南に位置する。歪んだ長方形の土坑であり南側は調査区外である。長軸 146cm、短軸 152cm、深さ 50cm。中央より深鉢底部が出土する。

その他出土縄文土器 (図版 32、第 74 図)

大半は包含層出土である。2～9 は曾畑式であろう。2 はわずかに外反する口縁部片で、内外面口縁部下に列点文、その下に太い平行沈線を巡らせる。3 は 2 と同一個体と思われる。外面に二列の列点文があり、その上下に平行沈線が巡る。4 は横位の平行沈線を施文する小片。5 は内面に細めの条痕、外面に列点文と斜位の平行沈線を施文する。6 は内面に横位の条痕調整、外面に二列の列点文と縦位の平行沈線を施文する。7 もやはり内面横位の条痕、外面に列点文と平行沈線を施文する。8・9 は内面ナデ、外面太い条痕による文様を施文する。

10～13 は春日式であろう。10 は隆帯を行う口縁部片。内外面条痕調整。11 は外面に列点文が施文される。12 は突帯上に列点文を施文する。内面はナデ。13 も同様である。

14 は直立する口縁部片で、外面に貝殻端部押圧による斜位の沈線を交差させて施文する。15 は波状口縁となる深鉢で内面ナデ、外面には縦位の沈線文が見られる。口縁端部は刻目を施文する。16 は内面横位、外面縦位の条痕調整を行う。17 は波状口縁となるようで、端部は丸く肥厚する。内面ナデ、外面太い平行沈線を施文する。18 は直立する口縁部片で、内面ナデ、外面には太い沈線がわずかに見られる。19 は丸味を帯びた小片で、内面横条痕、外面の屈曲部には縦位の平行沈線を施文する。

中近世の遺構と遺物

調査区南西部下層 (第 78 図)

上層区画を掘り下げたのち、10～30cm 程の整地面を人力で掘り下げ黄褐色土の面を検出した。中心となる遺構は溝 1－vii であるが、特に溝 1－i とトレンチの間では、多数のピットが確認され、この時期は区画の中でも、北側を中心に使っていたことが分かる。時期は、中世以降と考えられる。

調査区西半 (第 71 図)

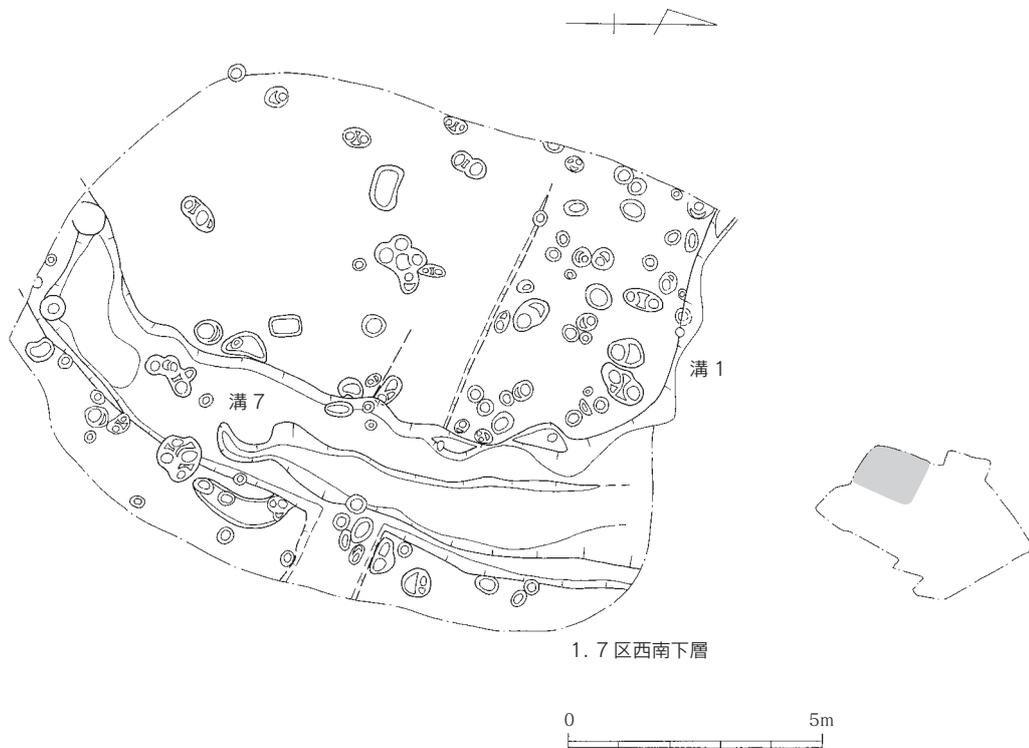
中世以降、掘立柱建物が繰り返し築かれている調査区西半の調査である。調査区西半は全体が溝 1 によって区画されており、その内周の部分に当たる。

掘立柱建物 1 (第 79 図)

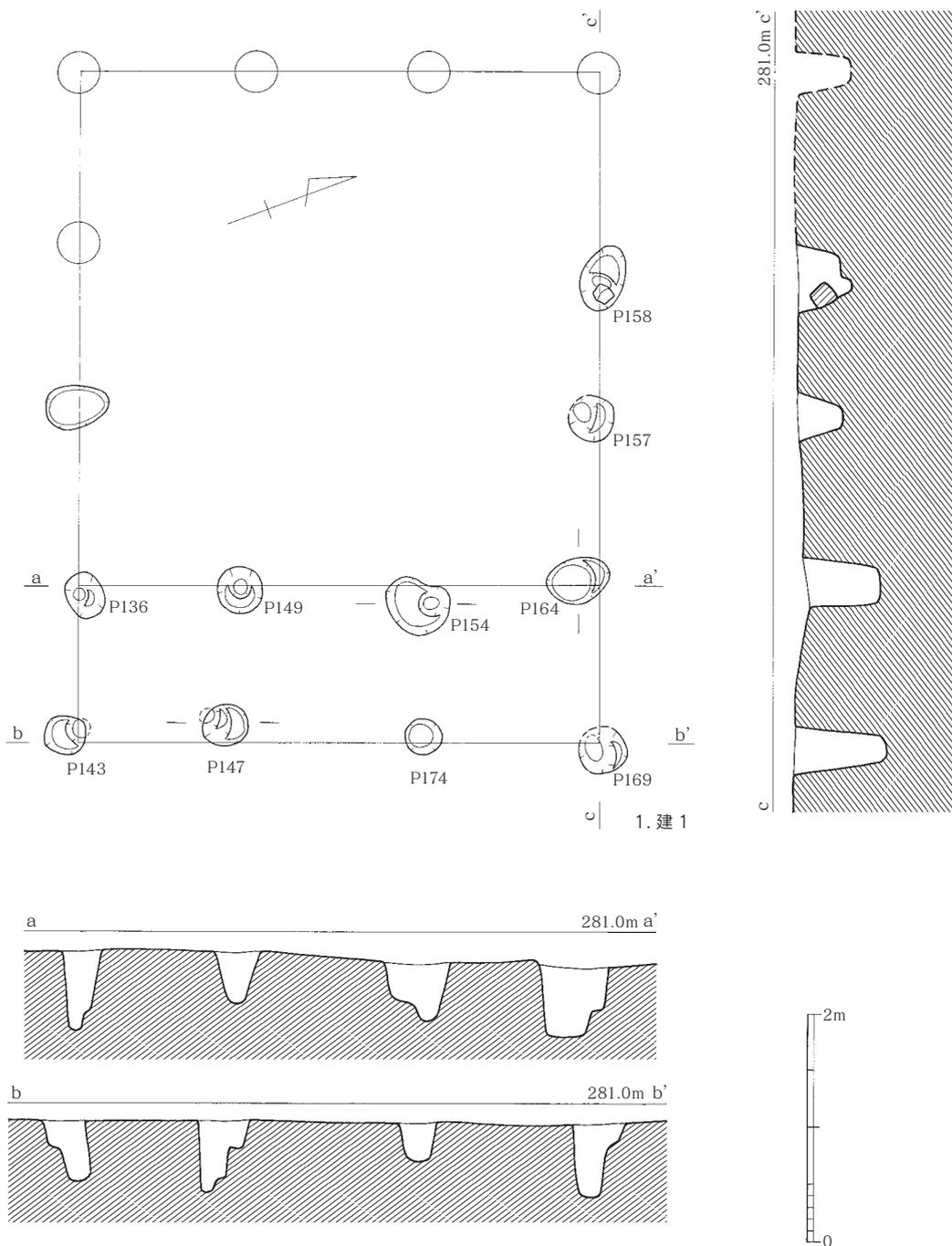
7 区は切り合い関係がひどく、当該区で唯一確認された掘立柱建物である。調査区北西中央の突出した部分に位置し、主軸を南東に取る。西側の柱列とピットを一部欠くが、3 間×3 間の建物に庇が付くものと想定される。桁長 4.5m、梁長の復元長は 4.5m、庇まで入れた梁長の復元長は 5.8m を測る。柱間の間隔は 83～120cm であり、平均的な間隔は 100cm である。柱穴は 30～40cm、深さ 31cm～68cm である。

石垣 1 (第 71 図)

溝 1 南の上層では、トレンチを挟んで南北に幅 20～50cm の間隔で石が並べられている。南は長さ 2.5m、北は長さ 3.2m であり、石垣の基礎であると考えられる。このことから、17 世紀代には溝が廃絶され、整地が行われる。しかし溝であった部分は、その後畑地となっても石垣として境界としての機能を保ったと考えられる。



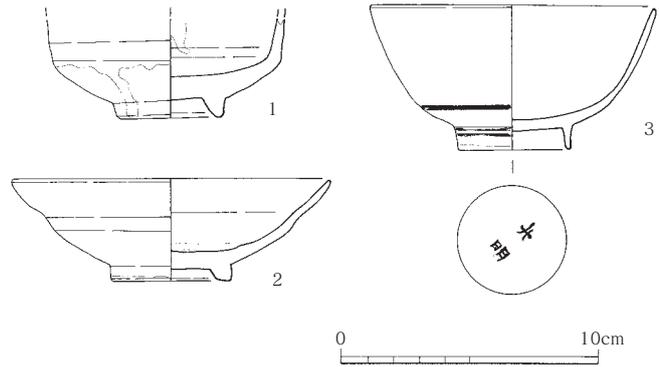
第 78 図 7 区西南部下層 (中世) 実測図 (1/150)



第 79 图 7 区掘立柱建物实测图 (1/60)

出土遺物（第80図）

1は陶器碗である。底部と体部の境は不明瞭な稜をもって屈曲する。体部は直立気味に立ち上がっている。体部下半から高台部にかけて露胎となる。高台部径4.2cm。2は鉄釉施釉の陶器皿である。体部は直線的に開いており、中位で若干段を有す。口径12.6cm、器高4.0cm、高台部径4.8cm。3は染付磁器碗である。外面体部下位と高台部に圈線を巡らせ、高台部内面には「大明」銘がある。口径11.1cm、器高5.8cm、高台部径4.5cm。



第80図 7区石垣出土遺物実測図（1/3）

埋甕（図版22、第81図）

調査区北西に位置する大甕を掘り据えた遺構である。大甕の底部のみ残り、一部破片が内部に落ち込んでいる。甕内部の覆土はサラサラの砂であり、明らかに他の遺構の覆土と異なる事から、便所甕として用いられたものではないかと想定できる。

出土遺物（第82図）

1は埋甕として使用されていた土師質甕の底部片である。体部は直線的に伸びており、底部はわずかに上げ底となる。内面ハケ目、外面ナデ調整。底径28.2cm。2・3は覆土中から出土。2は染付磁器小碗である。底部と体部の境目は屈曲し、体部はあまり開かずに伸びる。高台部径2.8cm。3は陶器皿である。体部は丸味を帯びて大きく開く。釉は透明釉を施釉する。口径12.2cm。

土坑1（第83図）

調査区北西に位置する。楕円形の土坑であり、北半分は調査区外。検出面は被熱により赤色を呈する。長軸残存長48cm、短軸残存長40cm、深さ15cm。

土坑2（第83図）

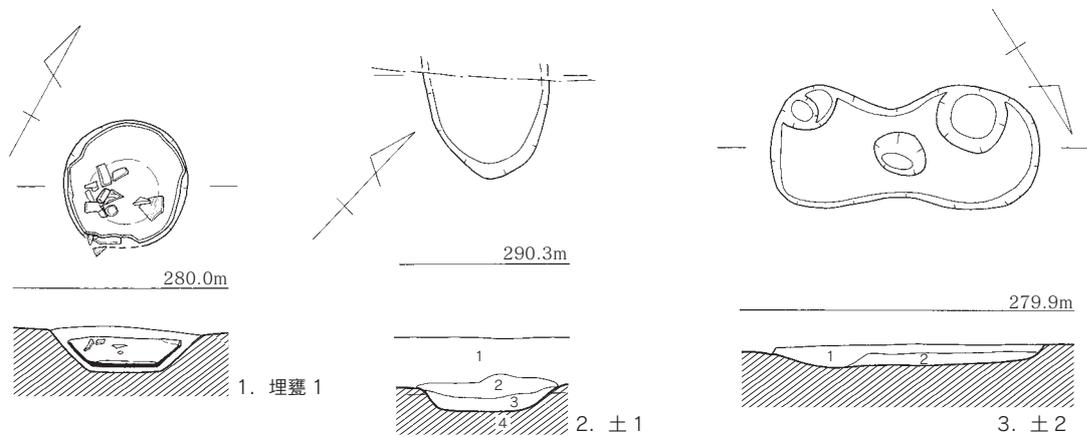
調査区北西に位置し、中央にくびれのある楕円形を呈する。長軸107cm、短軸35cm、深さ8cm。

土坑3（図版22、第83図）

調査区北西に位置する、不整楕円形の土坑で底部は北側に広く掘り込まれている。長軸109cm、短軸87cm、深さ95～82cm。覆土上部より土瓶の底部が出土する。底部付近には比較的大きめの礫が少数配置され、掘込部分には焼土塊の広がりが見られる。

出土遺物（第84図）

1は土師質鍋である。口縁部は玉縁状に肥厚する。内外面ともハケ目調整。

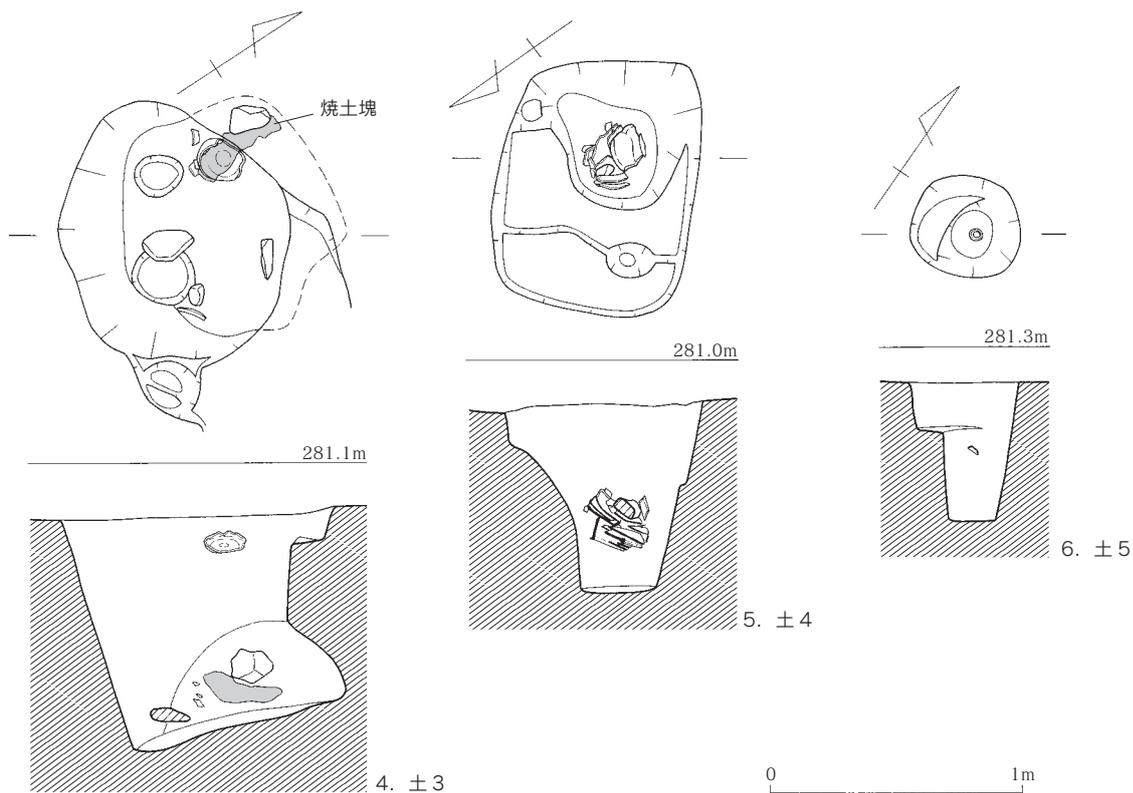


7区土坑1

層位番号	色調	炭	焼土	砂礫	粘性	しまり
1	暗褐色土 (表土)	○	△	×	×	×
2	赤褐色土	△	◎	×	×	○
3	明褐色土	△	○	×	△	○
4	にぶい黄褐色土 (地山)	×	×	△	○	○

7区土坑2

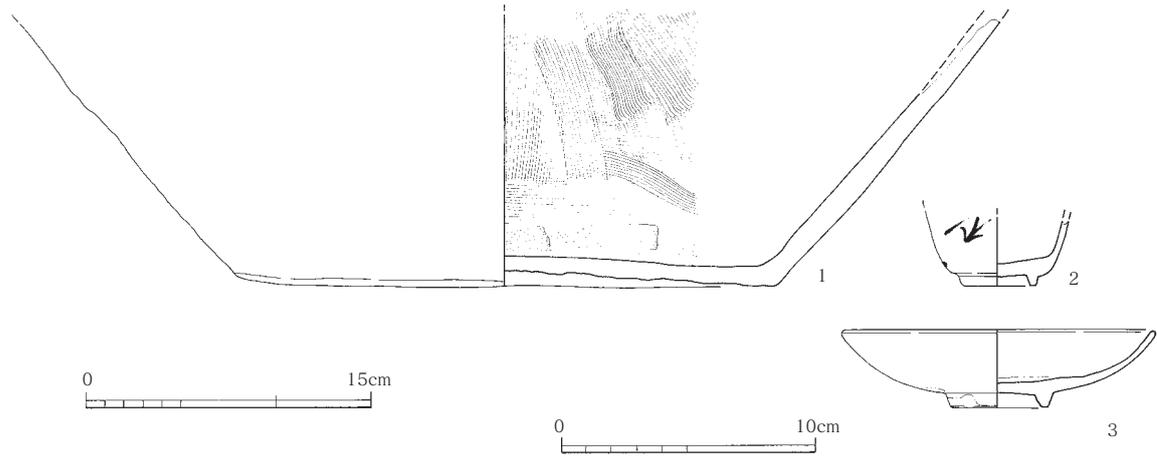
層位番号	色調	炭	焼土	砂礫	粘性	しまり
1	赤褐色土	△	△	×	○	○
2	にぶい黄褐色土	△	×	×	○	○



7区土坑3

層位番号	色調	炭	焼土	砂礫	粘性	しまり
1	暗褐色土	△	△	○	◎	×

第 81 図 7区埋甕・土坑実測図 (1/30)



第82図 7区埋甕出土遺物実測図 (1:1/4、2・3:1/3)

土坑4 (図版23、第83図)

調査区北西に位置する。やや角の取れた長方形の土坑で、長軸100cm、短軸78cm。深さ15cmの所で段があり、南側に長軸87cm、短軸76cmの半円状のプランの深い掘り込みがあり、深さ74cmを測る。柱穴の可能性もあるが、周辺で対となるものは確認されなかった。底より25cm上で、甕の破片が折重なる上に礫が置かれた状況が確認される。

出土遺物 (図版29、第84図)

2は土師質の甕である。胴部は直立気味に立ち上がっており、口縁部はわずかに内傾する。口縁端部は内外にわずかにつまみ出す。上面はやや内傾する面をなす。外面の口縁部下には不明瞭な沈線を一巡させる。調整は内面が斜ハケ目後ナデ、外面が縦方向のハケ目。口径46.2cm。

土坑5 (図版23、第83図)

調査区南西に位置する。円形を呈する土坑で長軸43cm、短軸39cm、深さ20cmの所に段があり、最も深い部分は深さ55cm。深さ25cmの所から、土師器小皿が出土する。

出土遺物 (第84図)

3は土師器小皿である。体部が内湾しながら開く器形となる。口径6.0cm、底径3.0cm、器高1.4cm。

土坑6 (第83図)

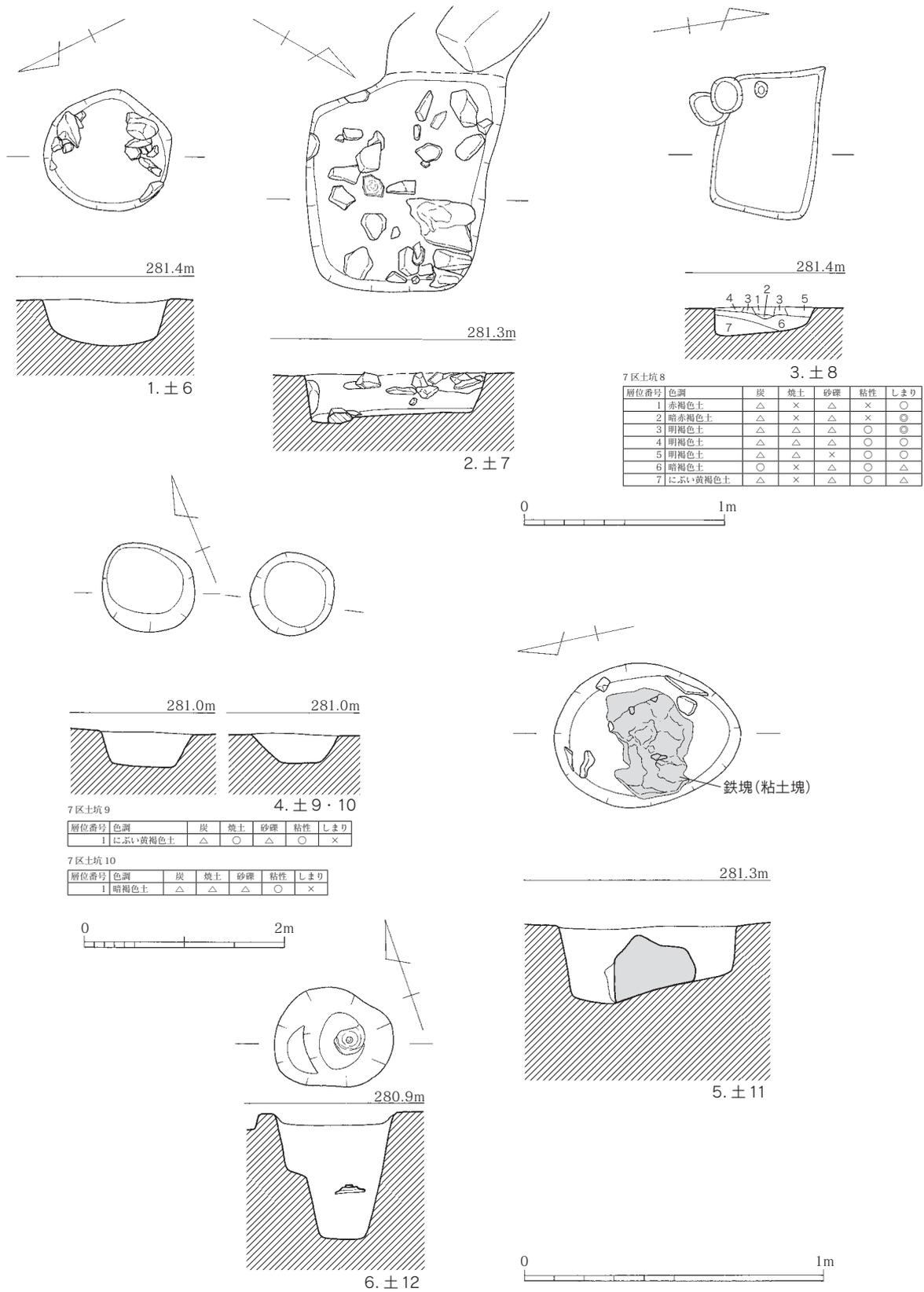
調査区南西に位置する。不整形円形を呈し、長軸76cm、短軸62cm、深さ42cm、土坑東側の北と南に大礫を並べる。

出土遺物 (第84図)

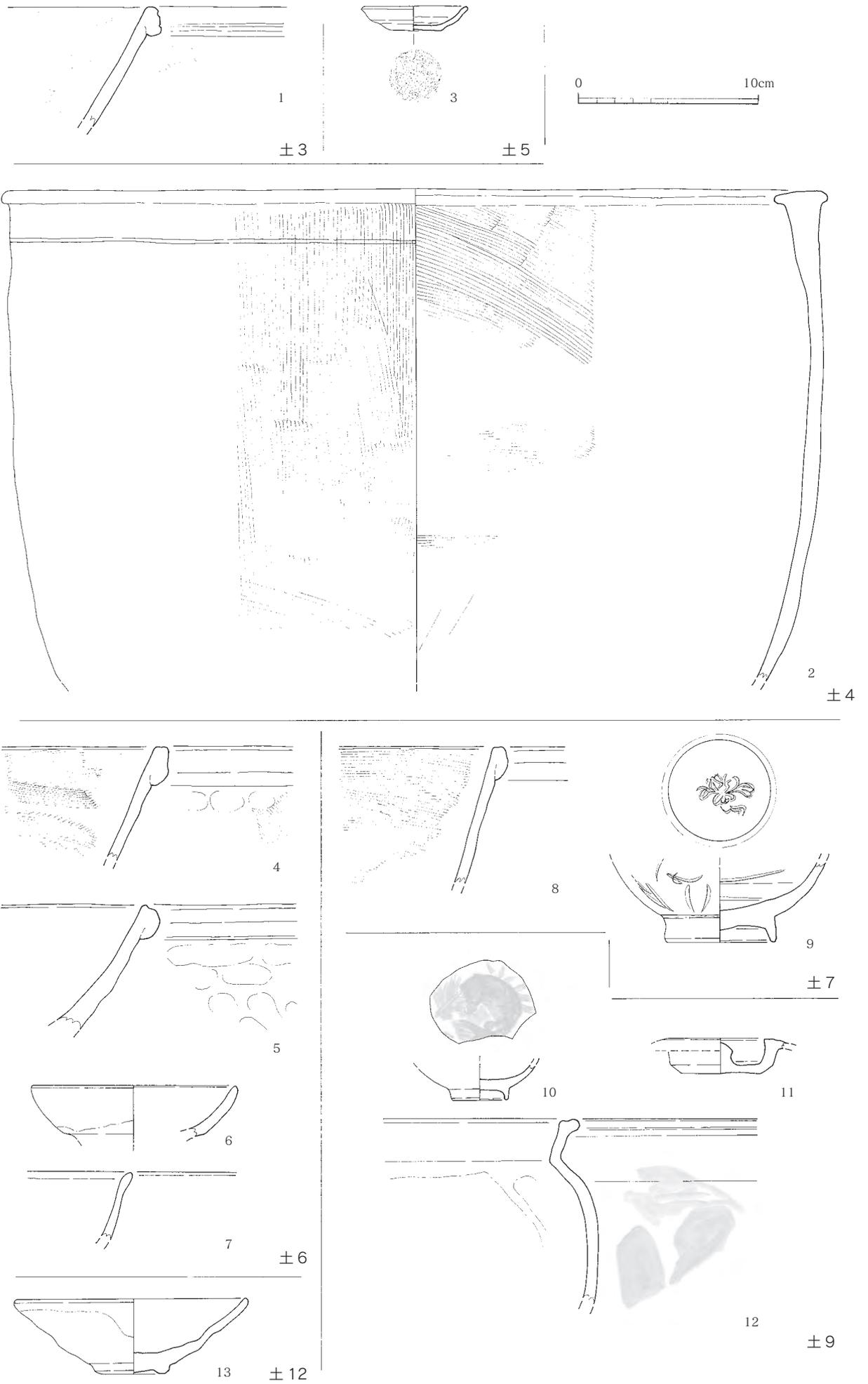
4・5は土師質焼成の鍋である。どちらも口縁部を玉縁状に肥厚させる。4は内外面ハケ目調整、5は内外面ナデ調整。6は灰釉施釉の陶器皿で、丸味を帯びた器形となる。口径11.6cm。7は青磁碗の口縁部で、口縁端部付近のみ若干外反する器形となる。

土坑7 (第83図)

調査区南西に位置する方形土坑であり、長軸111cm、短軸90cm、深さ26cm。まばらに大礫を



第 83 図 7 区土坑実測図 (1・4 : 1/60、2・3 : 1/30、5・6 : 1/20)



第84图 7区土坑出土遗物实测图 (1/3)

配す。一部の石には鉄分が付着する。土坑中央より青磁碗が出土する。

出土遺物（第 84 図）

8 は土師質焼成の鍋である。口縁部は玉縁状に肥厚する。内面横ハケ目、外面ナデ調整。9 は青磁碗である。外面と内面見込みに草花文を施文する。内外面に砂目跡がある。

土坑 8（第 83 図）

調査区南西に位置する。ややいびつな長方形土坑である。長軸 77cm、短軸 52cm、深さ 14cm。

土坑 9（第 83 図）

調査区北西突出部に位置する。直径 92cm、深さ 34cm の土坑である。

出土遺物（第 84 図）

10 は色絵磁器で小皿であろう。内面には鯛の図柄を描く。器表に細かい貫入が入る。高台径 3.2cm。11 は鉄釉施釉の陶器蓋である。受部に対して天井部が内側に落ち込んだ器形であり、擬宝珠状の撮部はその中に付けられる。12 は白色釉の上に黄色、緑色、茶色の釉で文様を描く中型の陶器壺である。肩がやや張った器形で、口縁部は若干外傾し、端部を肥厚させる。

土坑 10（第 83 図）

調査区北西突出部に位置する。円形の土坑で直径 86cm、深さ 15cm の土坑である。

土坑 11（第 83 図）

調査区西半南に位置し楕円形を呈する。長軸 63cm、短軸 50cm、深さ 16cm。中央に鉄分の付着した粘土の塊を配す。

土坑 12（図版 23、第 83 図）

調査区西半南に位置し、不整楕円形を呈する。長軸 40cm、短軸 33cm、深さ 38cm。深さ 20cm のところに段を設ける。床面より 15cm の所で陶器皿が検出された。

出土遺物（図版 29、第 84 図）

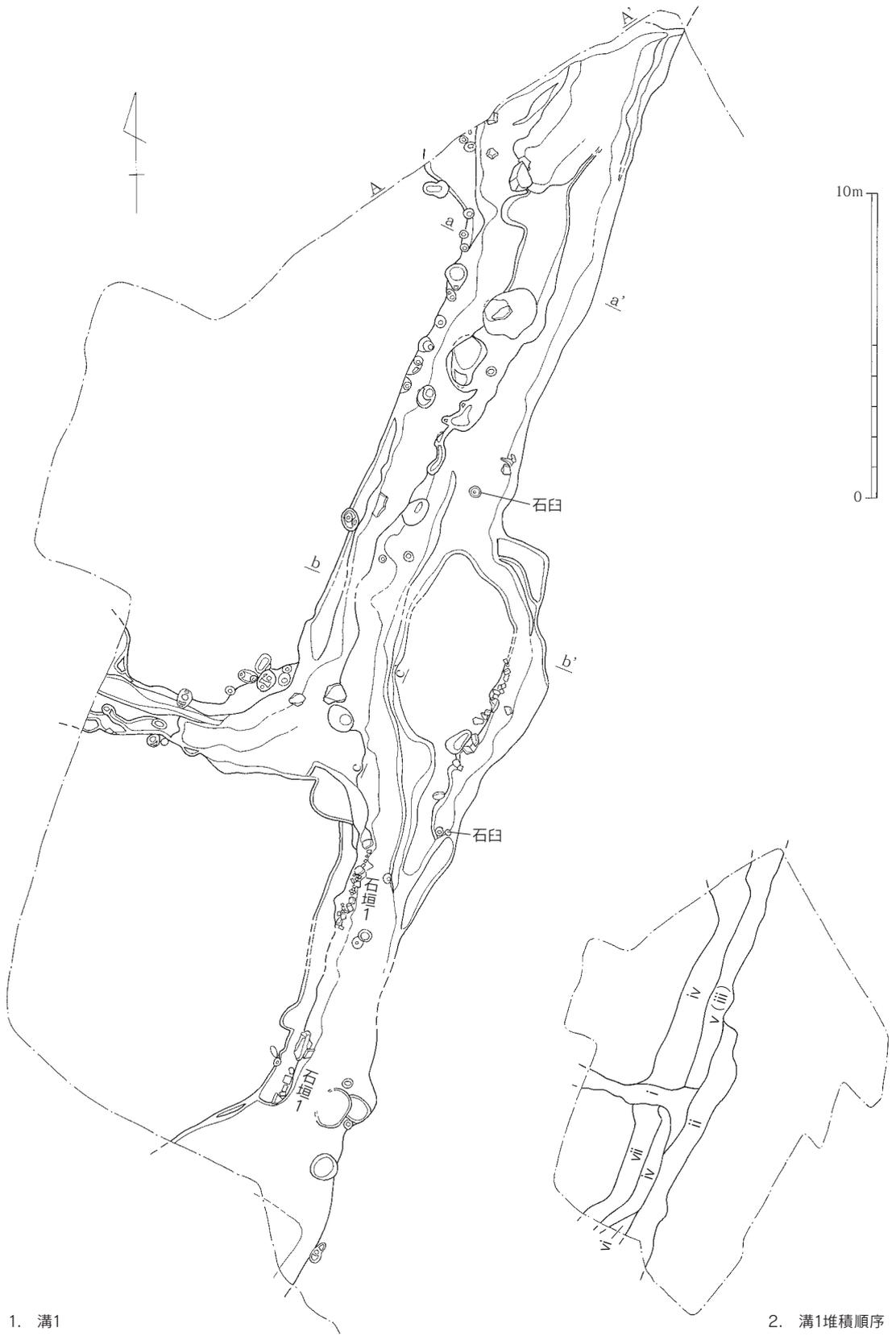
13 は灰釉施釉の陶器皿である。体部は直線的に開いており丸味のない器形となる。口径 13.2cm、器高 4.3cm、高台部径 4.2cm。

溝 1（図版 19・22、第 85・86 図）

溝は、東西方向に細く、南北ラインを中心に繰り返し掘り直しが行われている。覆土の堆積から i～vi の段階で 6 回の掘り直しが行われたことが分かる。主に下層で確認された vii は iv と対応して削平されたと考えられる。

特に南北方向は、溝幅が 8～3m、東西方向の幅は 1.5～4m、深さ 0.3～1.5m を測る。特に溝 1-i の東西の溝からは多量の鉄滓が出土しており、付近で製鉄、特に精錬鍛冶をしていた可能性が指摘できる。

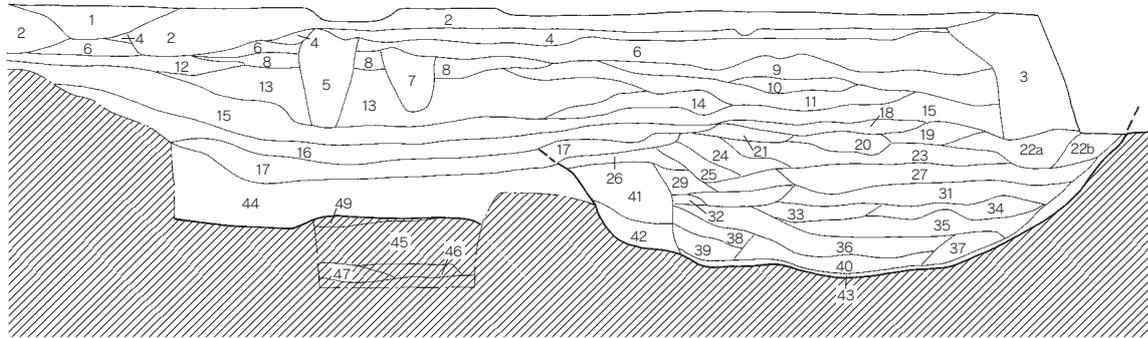
溝の南北中央には東側に一部石列のある中洲があり、平坦に整えられた痕跡から、何らかの作業



第85图 7区溝1実測図 (1/200)

A

281.5m A'



1.7 区東壁

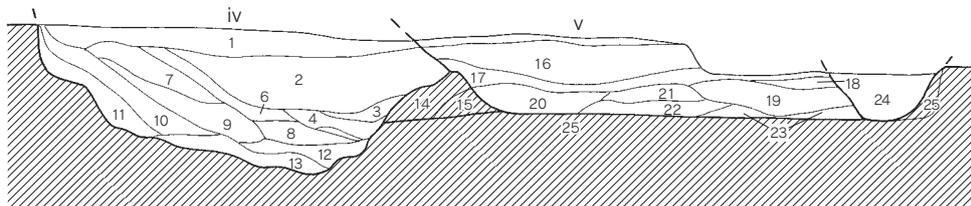
7区東壁

層位番号	色調	炭	粘土	砂礫	鉄分	粘性	しまり	注記
1	暗赤褐色土	○	x	△	○	○	○	表土
2	黒灰土	○	x	△	x	○	○	表土
3	黒褐色土	○	x	△	x	x	○	遺物を含む
4	赤褐色土	○	△	△	○	○	○	
5	黒褐色土	○	△	△	x	○	○	ピット
6	黒褐色土	○	△	△	x	○	○	
7	黒褐色土	○	△	△	x	○	○	ピット
8	暗褐色土	△	x	△	x	○	○	
9	暗褐色土	△	x	△	x	○	○	
10	暗褐色土	△	x	△	x	○	○	
11	暗褐色土	△	△	△	x	○	○	やや明るい
12	暗褐色土	△	△	△	x	○	○	
13	暗褐色土	△	x	△	x	○	○	
14	暗褐色土	△	x	△	x	○	○	やや赤みの強い
15	暗褐色土	△	△	△	x	○	○	
16	にぶい黄褐色土	△	△	△	x	○	△	砂分多く含む
17	にぶい黄褐色土	△	○	x	○	○	○	砂分多少含む、やや明るい
18	暗灰黄褐色土	○	○	○	x	△	△	黄褐色砂多し含む
19	暗灰黄褐色土	○	○	△	x	△	△	黄褐色砂多し含む
20	黄褐色土	△	x	△	x	x	x	
21	灰黄色土	△	x	○	x	x	x	
22a	黒褐色土	○	○	○	x	x	x	
22b	灰黄色土	○	○	○	x	x	x	
23	灰黄色土	○	△	○	x	x	x	
24	灰黄色土	△	△	△	x	x	x	

層位番号	色調	炭	粘土	砂礫	鉄分	粘性	しまり	注記
25	赤褐色土	△	△	△	△	x	x	
26	灰褐色土	△	△	△	x	x	x	
27	灰土	△	△	x	x	x	○	
28	黄褐色土	△	△	△	x	x	x	
29	灰褐色土	△	x	△	△	x	x	
30	灰褐色土	△	△	△	△	○	x	
31	灰褐色土	△	△	△	x	x	x	
32	赤褐色土	△	△	△	x	x	x	
33	赤褐色土	△	△	△	○	x	x	
34	灰褐色土	△	△	△	△	x	x	
35	灰黄色土	△	△	△	△	○	○	
36	黄灰褐色土	△	△	△	△	○	○	
37	灰褐色土	△	△	△	x	x	○	
38	赤褐色土	△	△	△	△	x	x	
39	灰褐色土	△	△	△	○	x	△	
40	赤褐色土	△	△	△	x	x	△	
41	暗灰褐色土	△	△	△	x	x	○	
42	灰褐色土	△	x	x	x	x	○	
43	灰褐色土	△	x	○	x	x	○	
44	暗褐色土	△	x	△	x	x	○	
45	黄褐色土	△	○	○	○	○	○	鉄分は解状に入る、黒曜石石露
46	灰褐色土	△	△	△	x	△	○	
47	灰褐色土	△	△	△	○	△	○	
48	灰黄褐色土	△	△	△	○	△	○	
49	暗褐色土	x	x	△	x	○	○	遺物は含まれない

a

281.0m a'



2. 溝 1-iv・v

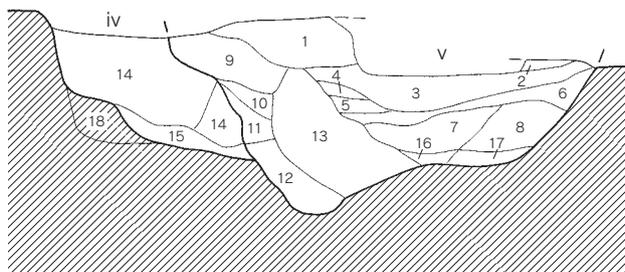
溝 1-iv・v

層位番号	色調	砂	粘土	炭	機土	礫	粘性	しまり	鉄	その他
1	暗褐色土	△	○	△	△	△	○	○	x	
2	暗褐色土	△	○	△	△	△	○	○	x	土器含む
3	暗褐色土	△	○	△	△	x	△	△	x	
4	青灰褐色粘土	△	○	○	△	x	○	△	x	
5	暗褐色土	○	△	△	x	x	x	x	x	
6	暗褐色土	○	○	△	x	x	x	x	x	
7	暗褐色土	△	○	△	△	△	x	x	x	
8	灰褐色土	○	○	△	△	△	x	x	x	
9	暗灰黄色土	△	○	△	△	△	○	○	x	
10	灰褐色土	○	○	○	△	△	○	○	△	粘土ブロック含む
11	にぶい黄褐色土	△	○	○	△	△	○	○	○	
12	灰褐色土	△	△	△	△	△	○	△	x	鉄滓含む
13	灰褐色土	○	△	△	x	○	△	△	△	

層位番号	色調	砂	粘土	炭	機土	礫	粘性	しまり	鉄	その他
14	黄褐色土	△	○	△	x	△	○	○	x	
15	暗褐色土	△	○	△	x	△	○	○	x	
16	暗褐色土	△	○	△	△	△	○	○	x	
17	暗褐色土	○	○	△	△	△	△	○	x	
18	にぶい黄褐色土	○	△	△	x	x	△	○	x	
19	灰褐色土	△	△	△	x	△	○	x	x	
20	にぶい黄褐色土	○	△	△	△	△	○	○	x	
21	にぶい黄褐色土	△	○	○	△	△	○	○	x	
22	にぶい黄褐色土	△	○	○	△	△	○	○	x	
23	にぶい黄褐色土	△	○	△	x	x	○	○	x	
24	赤褐色土	○	○	△	x	△	x	x	○	解状に入る
25	黄褐色土	x	○	△	x	△	○	○	x	地山

b

281.0mb'



3. 溝 1-iv・v

溝 1-iv・v

層位番号	色調	粘土	砂	粘性	しまり	炭	機土	礫	鉄分	その他
1	黒褐色土	x	○	△	○	○	○	○	x	
2	黒褐色土	x	△	△	○	△	x	x	x	
3	暗褐色土	x	○	x	△	△	△	x	x	
4	灰褐色土	△	△	○	○	△	x	x	x	
5	暗褐色土	x	○	x	x	△	△	x	x	
6	灰褐色土	○	x	○	○	△	x	○	○	
7	黄灰褐色土	x	○	x	○	△	x	x	○	
8	暗褐色土	x	○	x	x	○	x	x	○	
9	暗褐色土	○	○	○	○	△	△	△	x	
10	暗褐色土	○	○	○	○	△	△	△	x	
11	暗褐色土	○	○	○	○	△	△	△	x	
12	灰褐色土	x	○	x	x	△	△	△	x	
13	灰褐色土	○	○	○	○	△	x	○	○	
14	暗褐色土	○	△	○	○	△	x	△	x	
15	灰褐色土	○	○	△	○	△	△	x	x	
16	灰褐色土	x	○	x	○	△	x	x	x	
17	にぶい黄褐色土	x	○	x	○	△	△	x	○	
18	黄褐色土	x	○	○	○	△	x	x	x	地山



第 86 図 7 区東壁および溝 1-iv・v 土層断面図 (1/60)

場として使われていた可能性も指摘できる。溝底からは完形の石臼等も出土している。また、溝覆土からは陶磁器をはじめとして、土器、石臼、鉄滓、など多量の遺物が出土している。

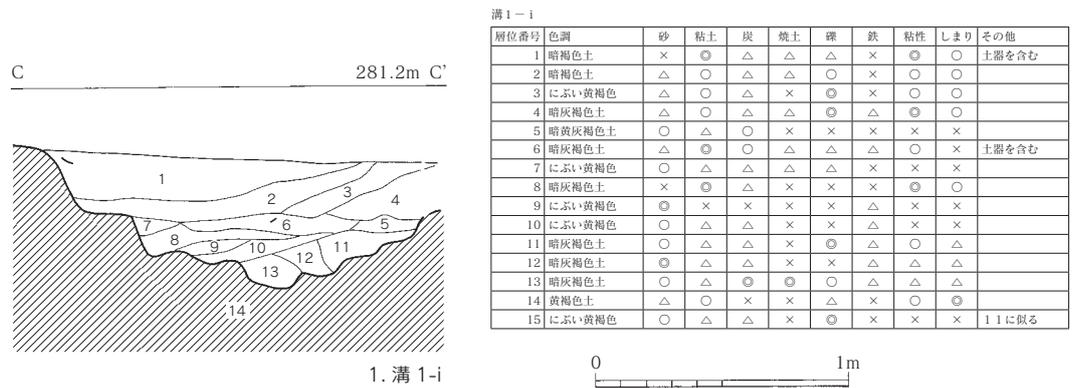
7区西南部下層（中世）では、西側にゆるく内湾しながら南北方向に走る溝1-viiが確認された。残存長13.5m、残存幅1.5～3.3m、深さ12～64cmである。元来、溝1-iを挟んで北側の、溝1-ivとつながる。上層では、溝1-iを挟んで南側の区画は北側より東に3m程広がるが、当初の区画は東西同じ幅に揃えられていたことが分かる。

出土遺物は、i～viiの各段階に分けて報告する。また整地層下層で検出された溝1-iの掘り残し、溝1-iv・v間ベルト内、大部分が下層で検出された溝1-viiも区別して報告する。

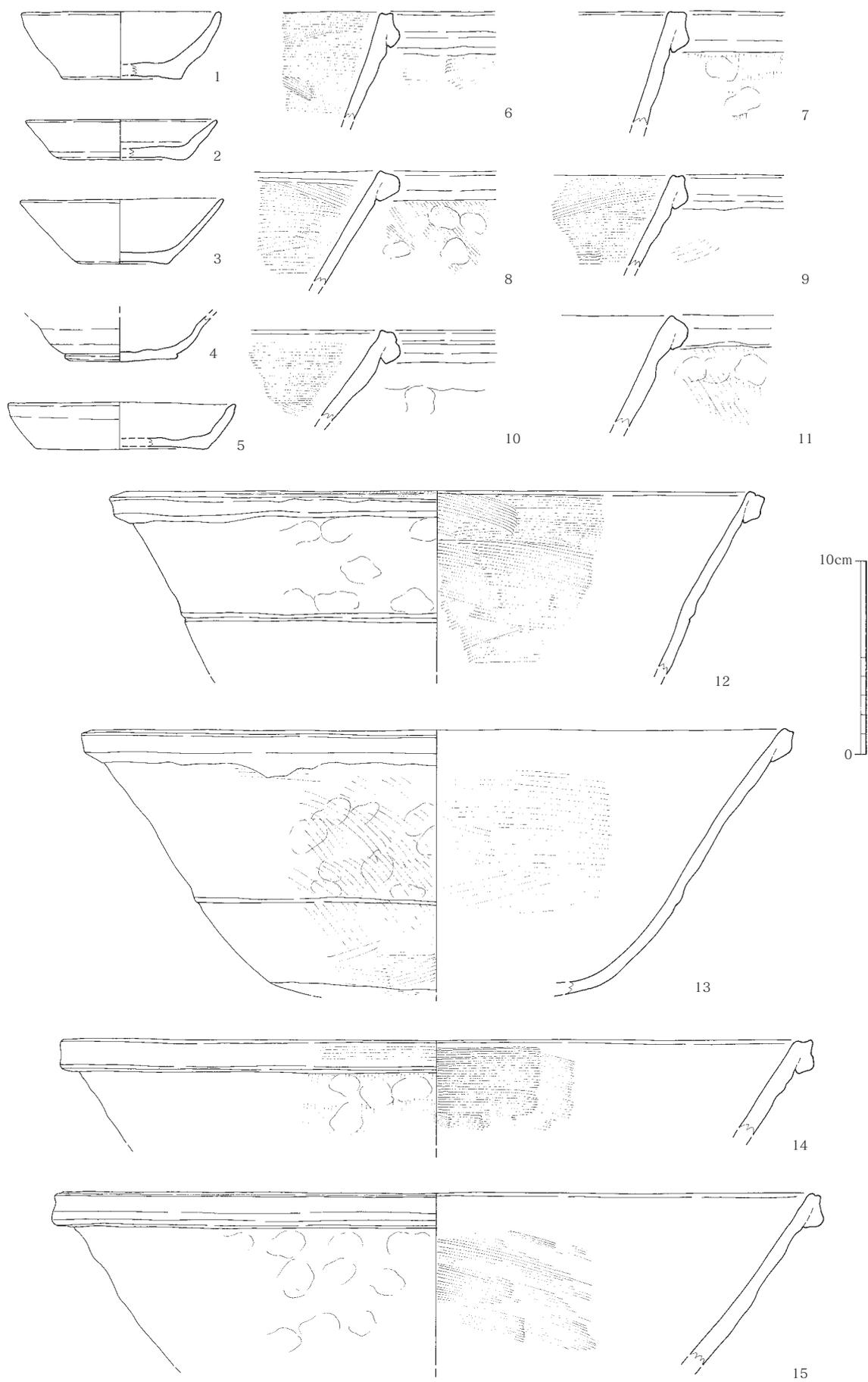
溝1-i出土遺物（図版29、第88～93図）

1～5は土師器皿である。1は底部と体部の境が明瞭である。体部はわずかに内湾する。口径10.2cm。2は体部が直線的に短く伸びる。口径10.0cm。3は器壁が薄く、体部は直線的に長く伸びる。口径10.6cm。4は口縁部が外反する器形となるようである。底径5.8cm。5は口径11.8cm。

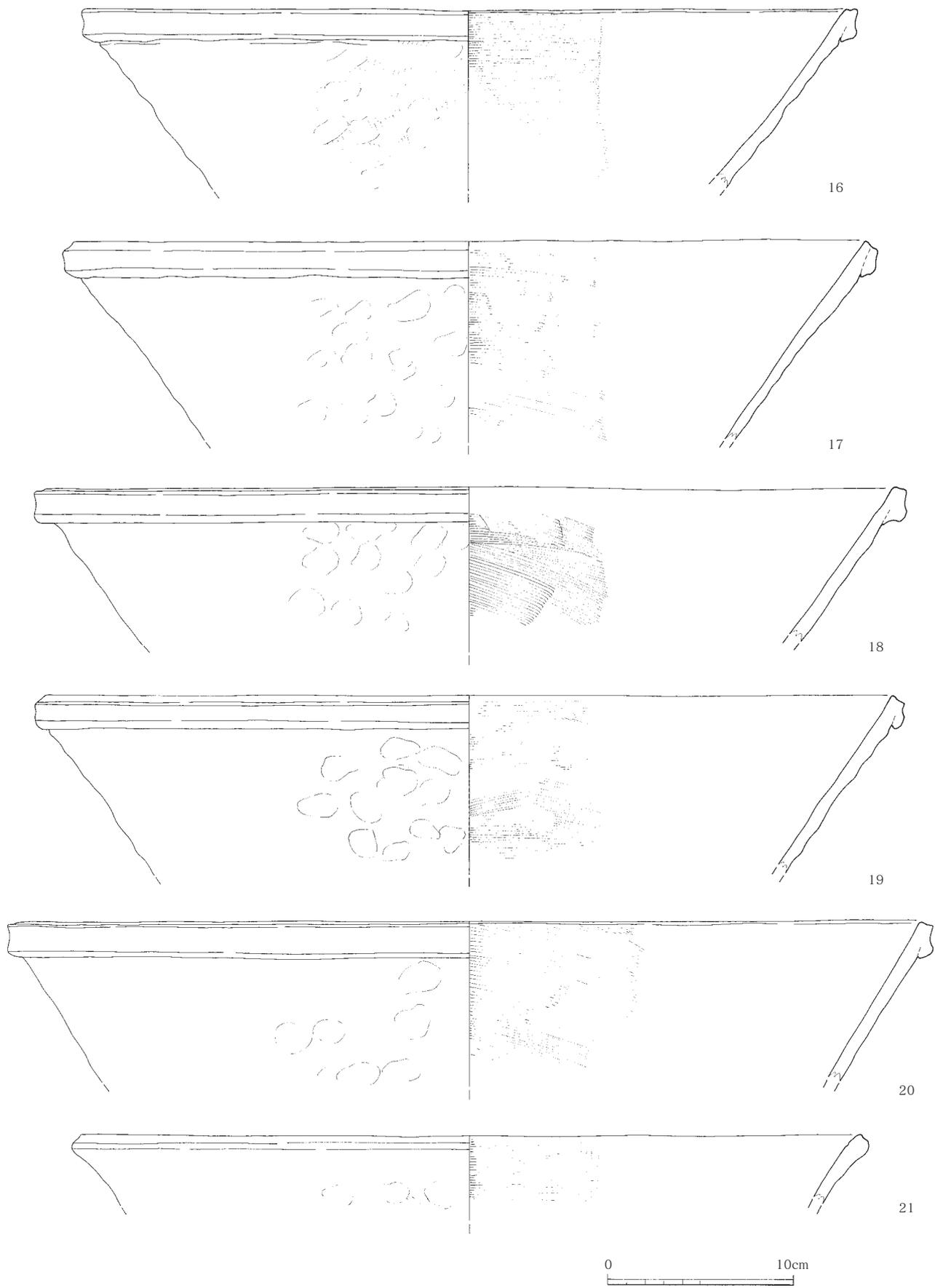
6～24は深い器形となるようであり、鍋であろう。6～20は深い器形で口縁端部を玉縁状に肥厚させるもの。全て土師質焼成である。内面は細かい横ハケ目調整を行うものが多いが、7や11はナデ調整を行う。外面はハケ目後にナデを行うものも多く、指圧痕が良く残っている。12や13は体部中位に不明瞭な突帯を巡らせる。口径は12が34.0cm、20が50.0cmを測る。21～25は同じく深い器形の鍋だが素口縁のものである。22や25は口縁端部を不明瞭に窪ませて沈線状に仕上げている。21～24は土師質、25のみ瓦質である。内面は横ハケ目、外面は21がナデ、25がハケ目後ナデ、他はハケ目調整である。遺存状態の良い23や24では体部と底部の境に不明瞭な段があり、23は中位付近、24はかなり下がった位置にある。22は口径31.0cm、24は口径



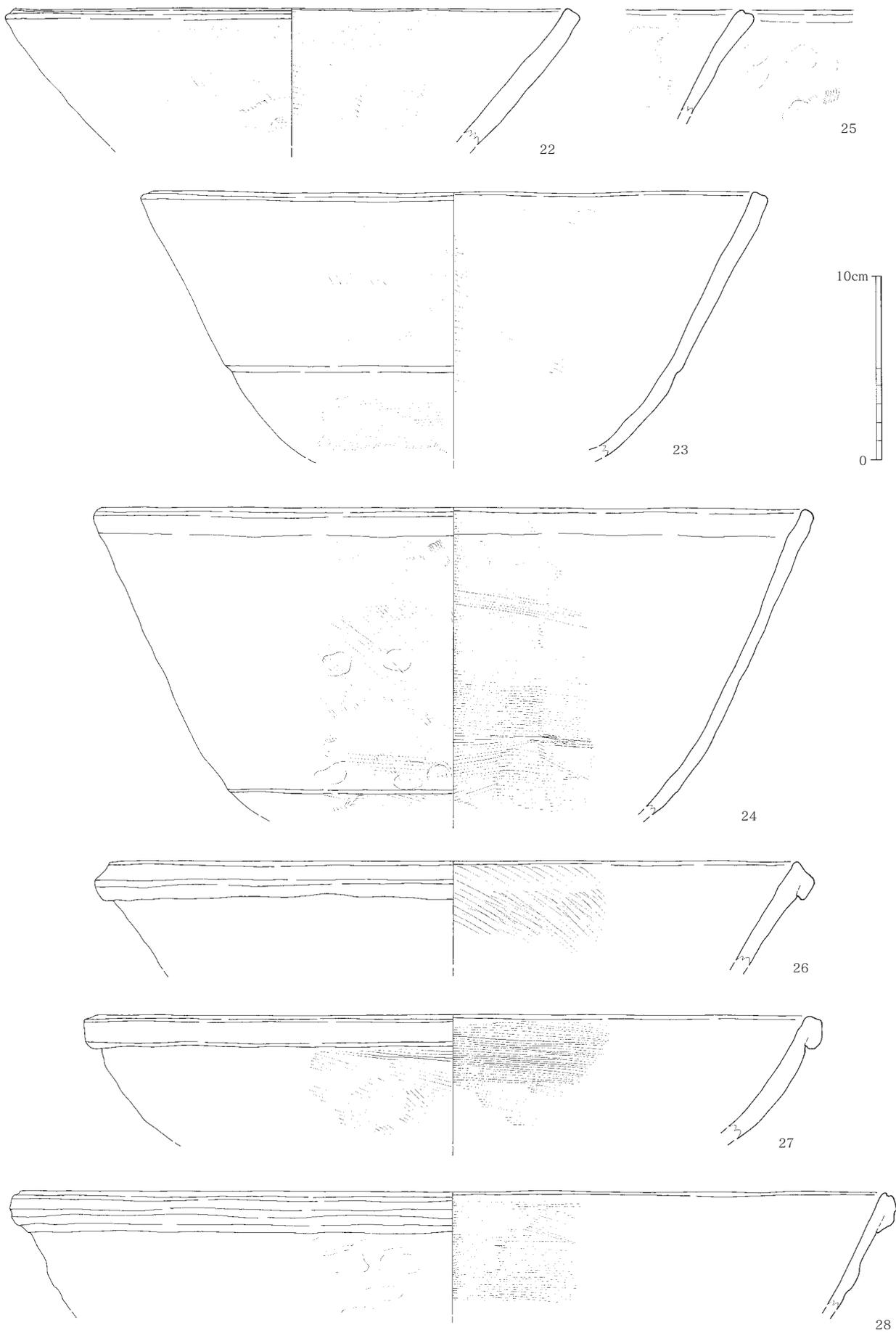
第87図 7区溝1-i土層断面図 (1/30)



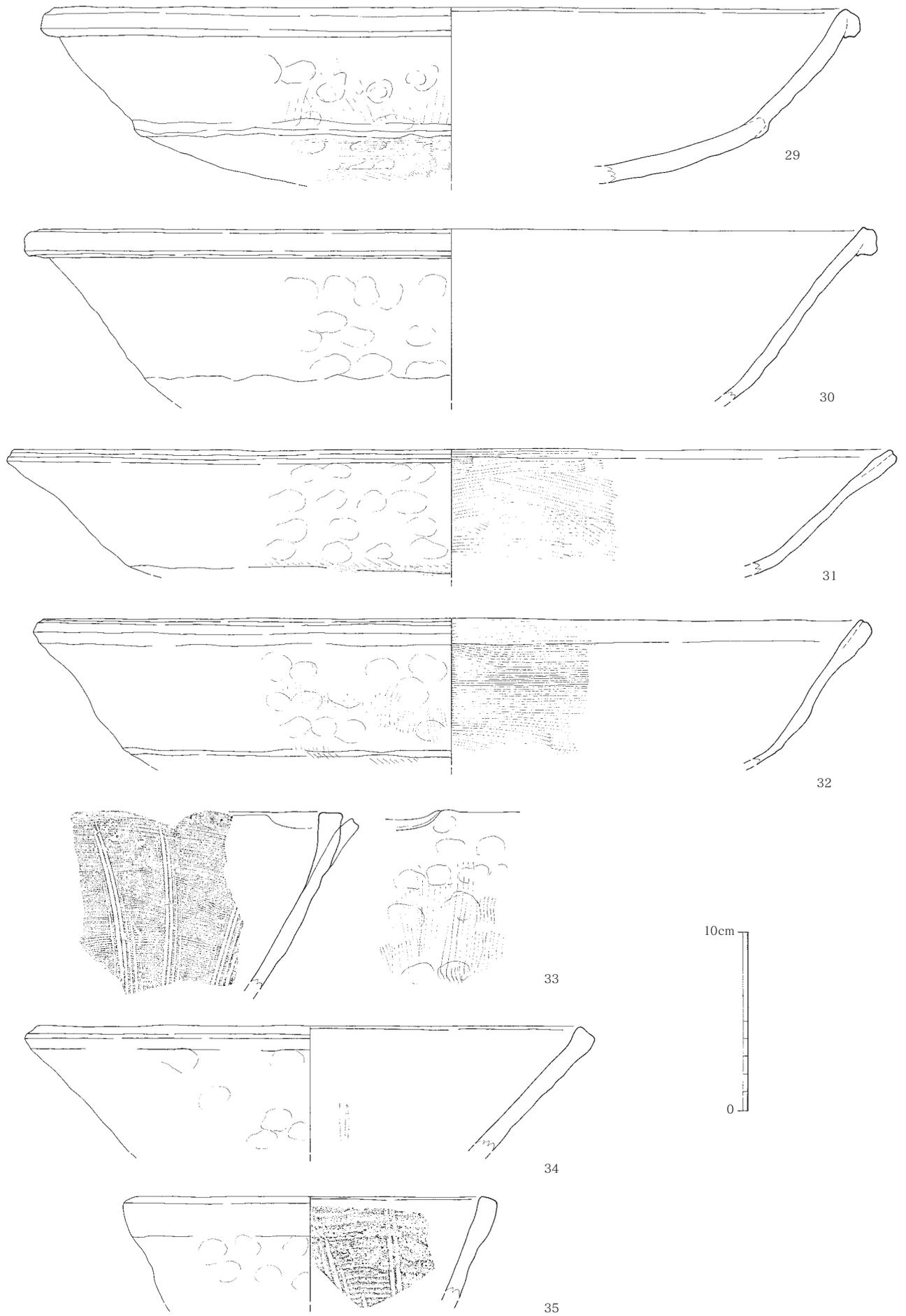
第88图 7区溝1-i 出土遺物実測図① (1/3)



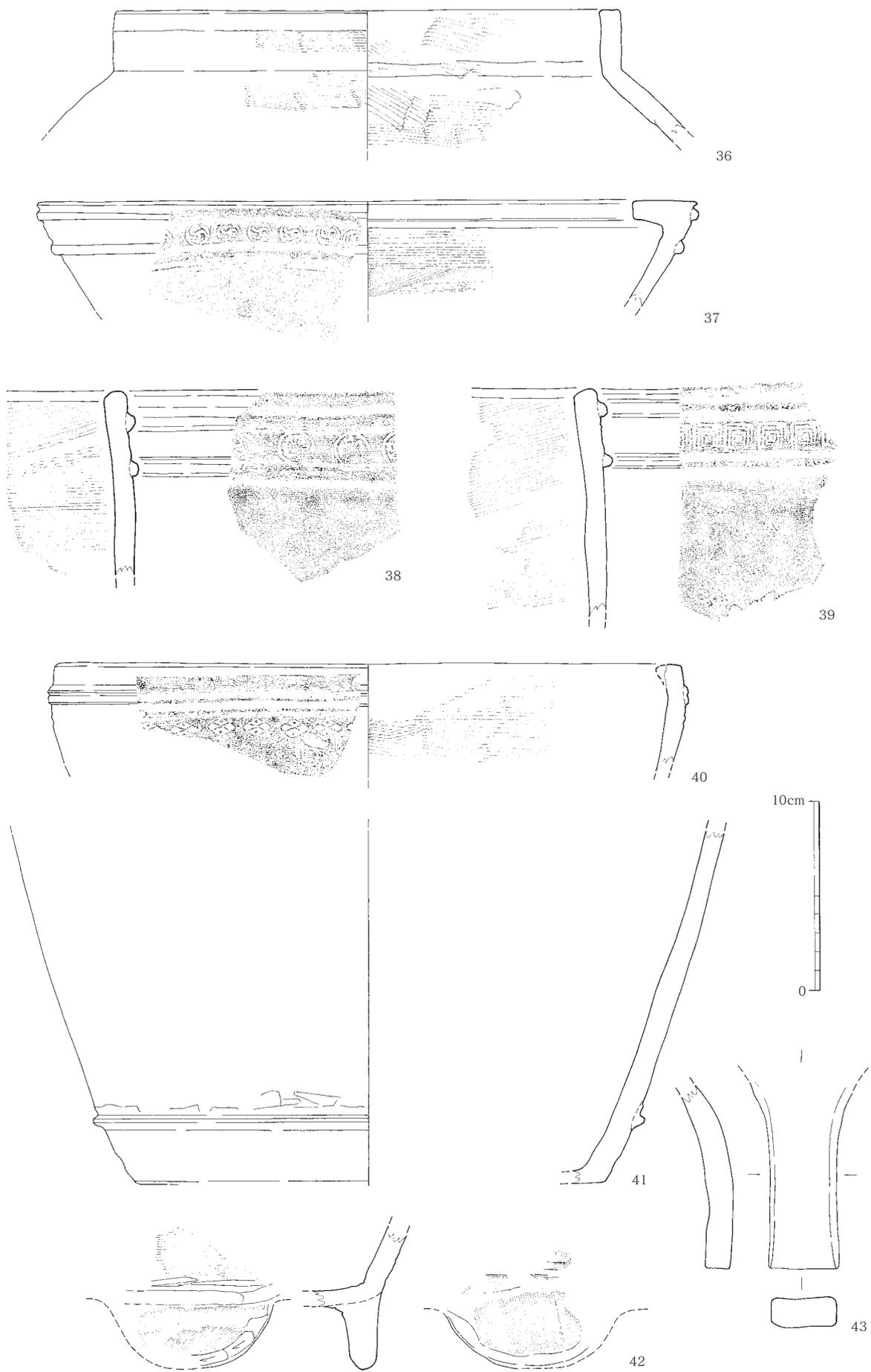
第 89 图 7 区溝 1 - i 出土遺物実測図② (1/3)



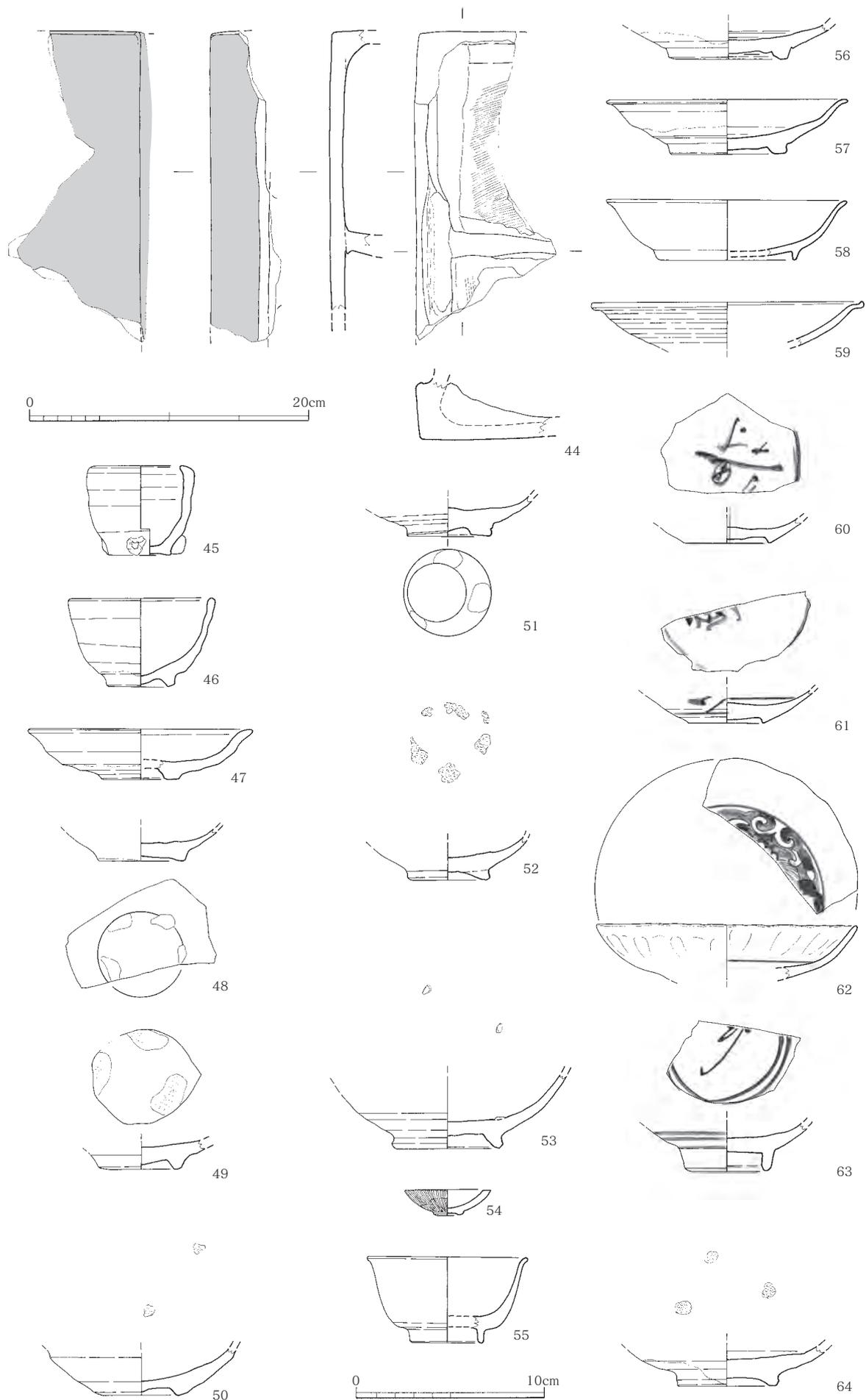
第90图 7区溝1-i 出土遺物実測図③ (1/3)



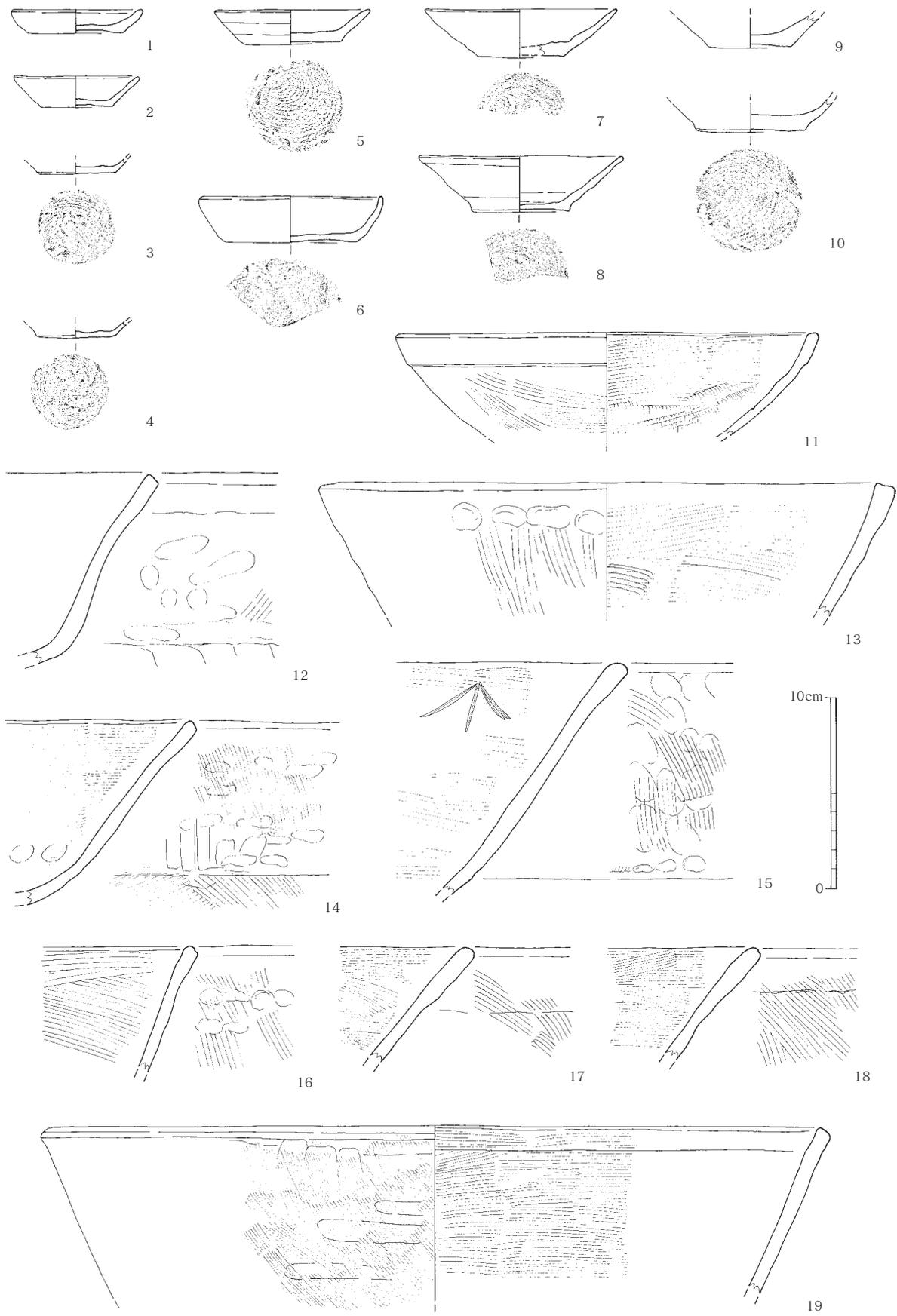
第91图 7区溝1-i出土遺物実測図④ (1/3)



第92图 7区溝1-i出土遺物実測図⑤ (1/3)



第93图 7区溝1-i出土遺物実測図⑥ (44:1/4、他:1/3)



第94图 7区溝1-ii出土遺物実測図① (1/3)

39.0cm。

26～32は浅い器形の鉢である。26～30は口縁部が玉縁となるもので、全て土師質焼成。27は口縁部下が丸味を帯びた器形となるが、他は直線的である。29・30は内面ナデ、他は内面横ハケ目調整である。外面は、27・29がハケ目、他はナデ調整を行う。29は底部付近まで比較的良く残っている例だが、屈曲部より上位と下位とで調整に使用するハケ目の種類が異なっている。29は屈曲部の段は比較的明瞭だが、30は段を形成していない。26は口径37.4cm、30は38.0cm。31・32は素口縁となるもので、体部よりも口縁部の方が若干肥厚している。焼成は31が土師質、32が瓦質。調整は両者とも内面横ハケ目、外面ハケ目後ナデを行っており、指圧痕がよく残っている。口径は31が50.0cm、32が口径47.0cm。

33～35は挿鉢である。どれも素口縁。33・34は土師質、35は瓦質焼成。33は片口付近の破片で、内面は細かい横ハケ目後に5本1単位の櫛目を施文する。34は口径32.0cm。35は口縁部があまり開かない器形に復元できたが若干不安が残る。口径21.0cm。

36は土師質焼成の釜である。頸部の縮まりは弱く、口縁部は短く直立する。端部は水平な面をなす。内外面ハケ目調整。口径26.8cm。37～42は火鉢である。37～39は土師質、40・41は瓦質焼成である。37は体部が開いた器形であり、口縁部が内面に長く伸びる。外面口縁部下に二条の突帯があり、その間に巴文の印刻を配置する。内面は横ハケ目調整、外面は丁寧なナデ調整。38・39は筒状の器形となる。両者とも外面口縁部下に二条の突帯を配し、その間に印刻を行う。内面は横ハケ目、外面は丁寧なナデ調整。40は口縁部下が若干丸味を帯びた器形となる。外面口縁部下に一条の突帯があり、その下に印刻を行う。内面横ハケ目、外面ナデ調整。41は下半部片である。底部から少し上に、一条の突帯を巡らせる。調整は内外面ともナデを行う。底径25.0cm。42は火鉢の脚部であろう。丸味を帯びた形状となる。調整は内外面ともハケ目。43は脚部。44は土師質焼成の箱形品。外面は赤色顔料を塗布して非常に丁寧な仕上げを行っているが、内面は粗いハケ目調整のみである。

45～53は陶器である。45は焼締の小型鉢で、焼成は瓦質に近い。体部はあまり開かず筒状を呈す。体部下端には3ヶ所に粘土目が付着したままである。46は小碗である。体部の開きは弱い。口径7.8cm。釉色は濃緑色を呈す。47は端部が短く外反する皿である。口径12.0cm。釉は灰釉。48～53は碗または皿の底部片である。48は残存する範囲で4ヶ所に目跡が残る。釉は灰釉。高台部径4.6cm。49は内面3ヶ所に目跡が残る。釉は灰釉。高台部径4.6cm。50は高台部と体部の境目が不明瞭な丸味を帯びた器形となる。内面には残存する範囲で2ヶ所に目跡が見られる。釉は灰釉。高台部径4.0cm。51は藁灰釉施釉。高台部径4.4cm。52は内面の目跡が顕著である。藁灰釉施釉。高台部径4.4cm。53は大きめの碗であろう。内面の残存する範囲で2ヶ所に小さな目跡が残る。釉は灰釉。高台部径5.6cm。

54～64は磁器である。54は白磁の紅皿。口径4.6cm。55は小坏である。口縁部がわずかに外反する。56は白磁碗の底部片で高台部径6.4cm。57～59は白磁皿である。57は口縁部がわずかに外反する。口径17.6cm。58は器壁が薄い。口径13.0cm。59もやはり口縁部が外反するが、端部を上方につまみ上げる。口径14.6cm。60～63は染付磁器で、60・61は高台部と体部の境目がなく丸味を帯びた器形の皿である。62は口縁部を輪花状にした皿。口径14.0cm。63は高台部が高い器形のもので、碗か。64は白磁碗で、内面に目跡が残る。高台部径5.4cm。

溝 1 - ii 出土遺物 (図版 29・30、第 94～100 図)

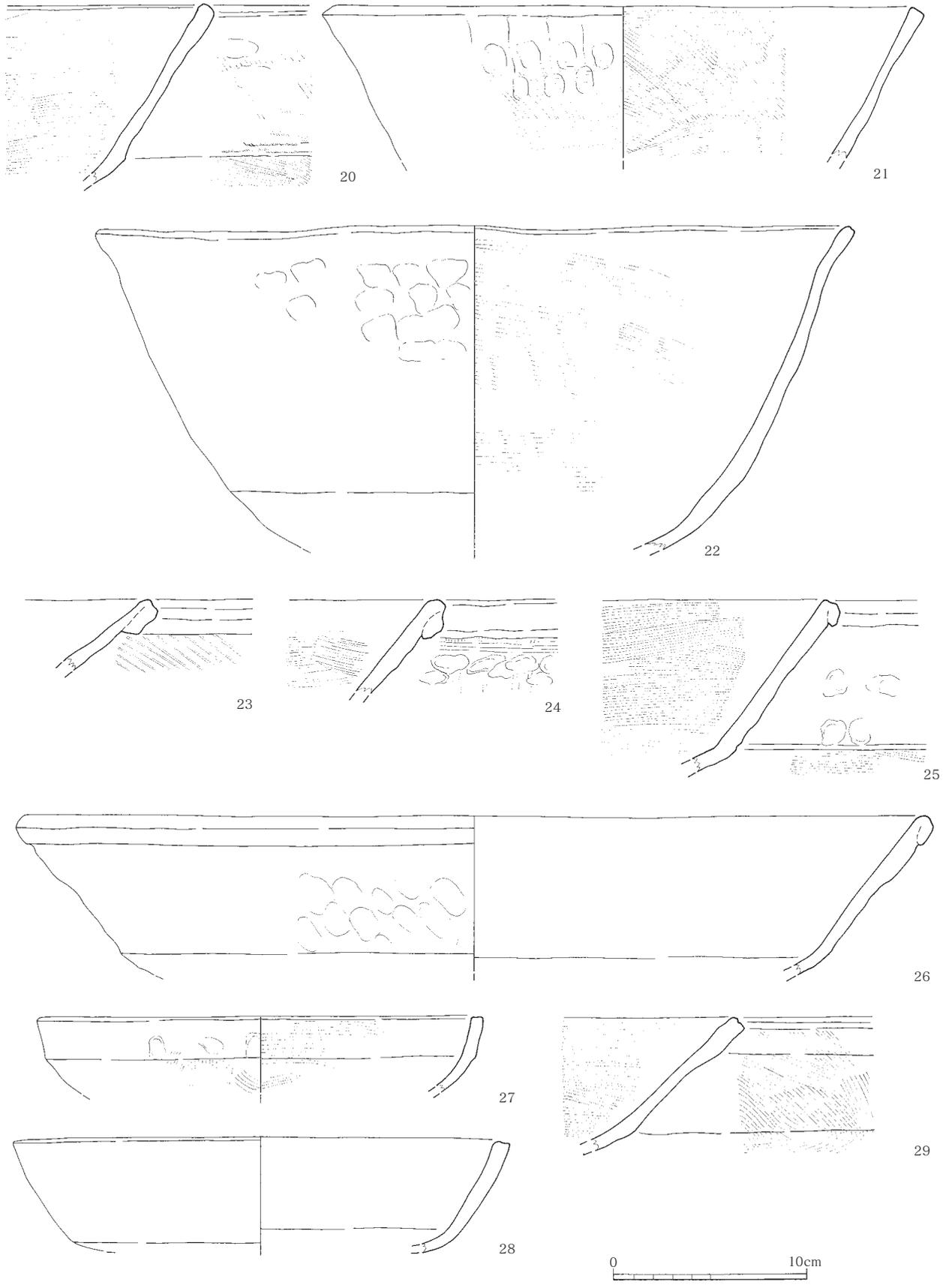
1～5 は土師器小皿である。1 は口径 6.9cm。2 は体部が直線的に開く。口径 6.6cm。3 は底径 4.1cm。4 は底径 4.2cm。5 は口径 8.1cm。6～10 は土師器皿である。6 は体部が内湾する。口径 9.4cm、器高 2.4cm。7・8 は体部が直線的に開く。7 は口径 10.0cm。8 は口径 10.6cm。9 は底径 4.4cm。10 は 5.8cm。

11～22 は鍋または深みのある鉢である。11 は小型品であり鉢とした方が適当か。口縁部は若干肥厚する。内外面横ハケ目調整。口径 22.0cm。12～22 は素口縁となる。12 は内外面ナデ調整。体部の屈曲部の稜は不明瞭である。13 は口径 30.0cm。14 はやや浅い器形となる。外面には炭化物が付着する。15 は内面の口縁部下にヘラ描き文様がある。屈曲部は浅い段状となる。16 は口縁部があまり開かない器形となる。17 は口縁部が若干肥厚する。18～22 は瓦質焼成である。18 は内面と外面でハケ目の工具が異なる。19 は口径 41.0cm。20 の屈曲部は不明瞭な段状になる。21 は口縁端部が明瞭な面をなす。口径 31.4cm。22 は体部が深く丸味を帯びた器形となる。内面はハケ目後ナデ、外面はナデで指圧痕が明瞭に残る。屈曲部の段はほとんど見えない。口径 39.8cm。

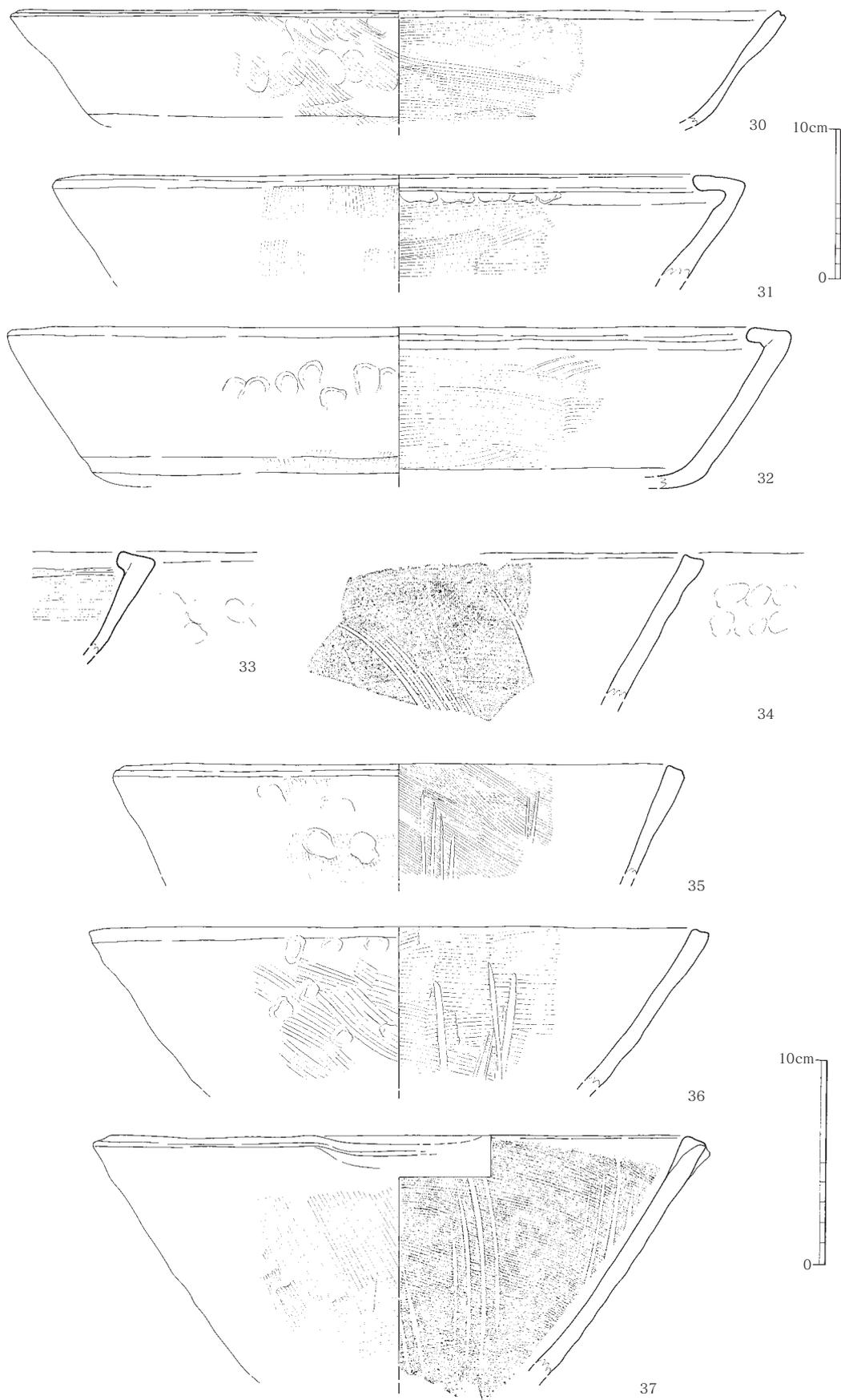
23～33 は土師質焼成の鉢である。23～26 は口縁部を玉縁状に肥厚させるもの。23 は口縁部下のハケ目が非常に粗い。25 は屈曲部に沈線を巡らせる。26 は内外面ナデ調整。屈曲部は不明瞭な稜線を有す。口径 48.0cm。27～31 は素口縁となる。27 は口縁部が若干肥厚する。口径 23.4cm。28・29 は内外面横ナデ。どちらも口径 26.0cm。30 は口縁端部に沈線を巡らせる。屈曲部は不明瞭な稜線を有す。31 は口径 50.1cm を測る大型品。内外面ハケ目調整。32・33 は口縁端部を内側に強く折り曲げた形状の土師質鉢。どちらも内外面ハケ目調整。32 は口径 34.0cm。33 は口径 38.4cm。34 は瓦質焼成で鉢であろうか。口縁端部を内側に短く伸ばす。内面横ハケ目、外面ナデ。

35～42 は挿鉢である。口縁部は全て素口縁となる。35～38 は土師質焼成である。35 は挿目が極端に斜方向を向いている。36 は口縁部があまり開かない器形となる。内面の挿目前のハケ目は非常に細かい。口径 28.0cm。37 は内面の挿目が非常に太く並行に施されていない。口径 30.4cm。38 は 4 本 1 単位の挿目を入れる。口径 30.0cm。39～42 は瓦質焼成。39 は体部がわずかに外反しながら開く。挿目は 6 本 1 単位。口径 33.6cm、底径 14.8cm、器高 13.8cm。40 は体部がわずかに内湾しながら開く。口縁部は若干肥厚している。挿目はヘラ状工具で 1 本ずつ施文している。口径 30.0cm。41 は口径 31.6cm。42 は体部があまり開かない器形となる。口縁端部は平坦面をなし、内端部をわずかにつまみ出す。

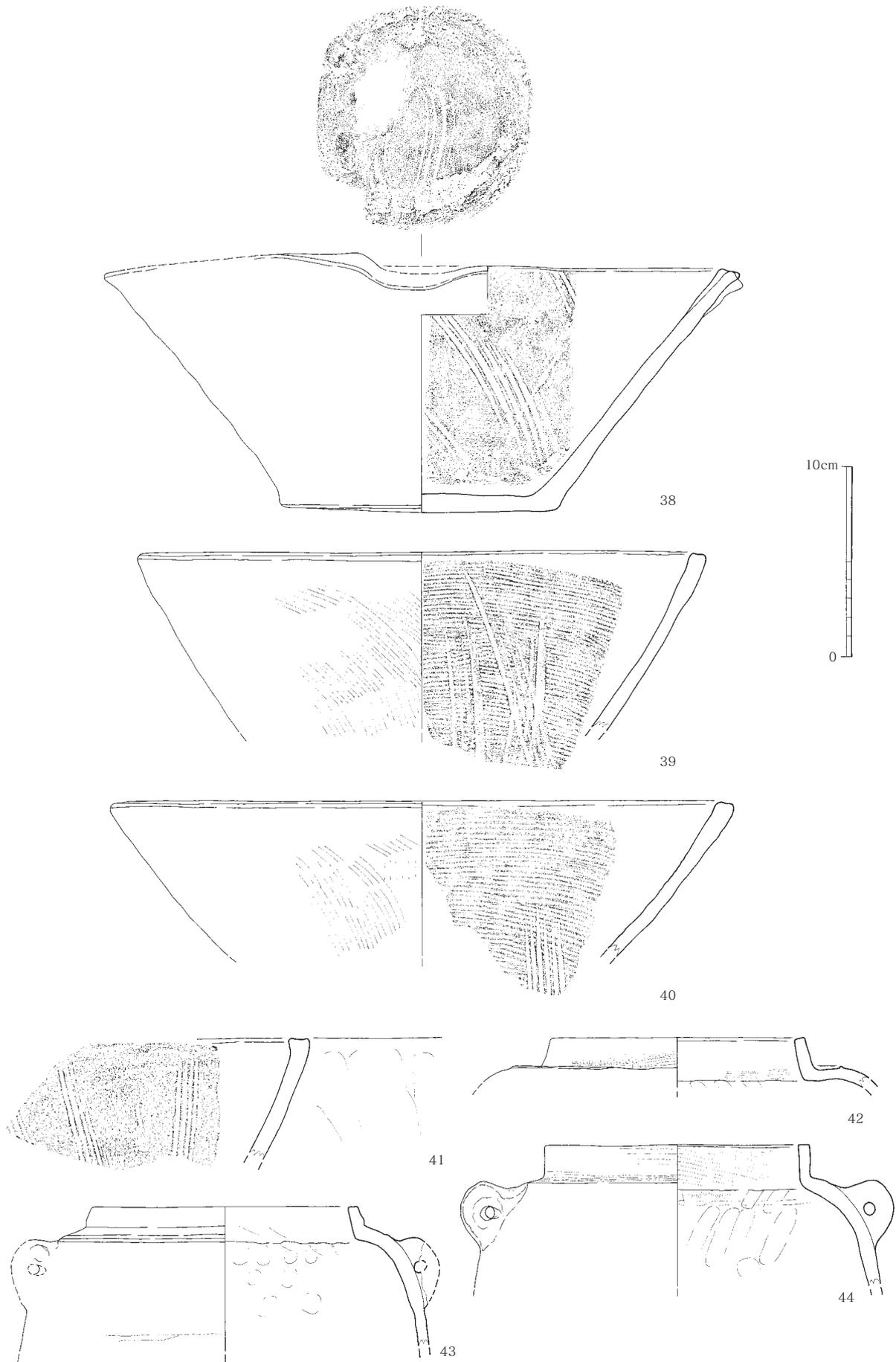
43～53 は釜である。43～47 は土師質焼成。43・44 は口縁部がわずかに内傾する。43 は口径 11.4cm。44 は頸部の締まりが弱く、口縁部は短い。口径 14.0cm。45 は口縁部が短く直立する。口径 14.0cm。46 は体部片である。鏝は短く水平に伸び、鏝部下に最大径がある。鏝部径 27.6cm。47 は口縁部下に花文の印刻を横方向に 3 個連続で施文する。頸部はあまり締まらず、口縁部は短く内傾する。調整は内外面ハケ目調整。48～53 は瓦質焼成である。48 は小型品。口縁部と頸部の境には沈線を巡らせ、その下に菊花文の印刻が見られる。口縁部は短く直立する。口径 11.0cm。49 は 48 よりも肩の張りが弱い。口縁部は短く直立し、肩部との境に沈線を巡らせる。口径 11.0cm。50 は肩が丸く張っており、口縁部は短く内傾する。口径 15.0cm。51 は外面肩部に櫛状工具押圧による施文がある。口径 14.0cm。52 は肩部と口縁部の境目が不明瞭である。口縁



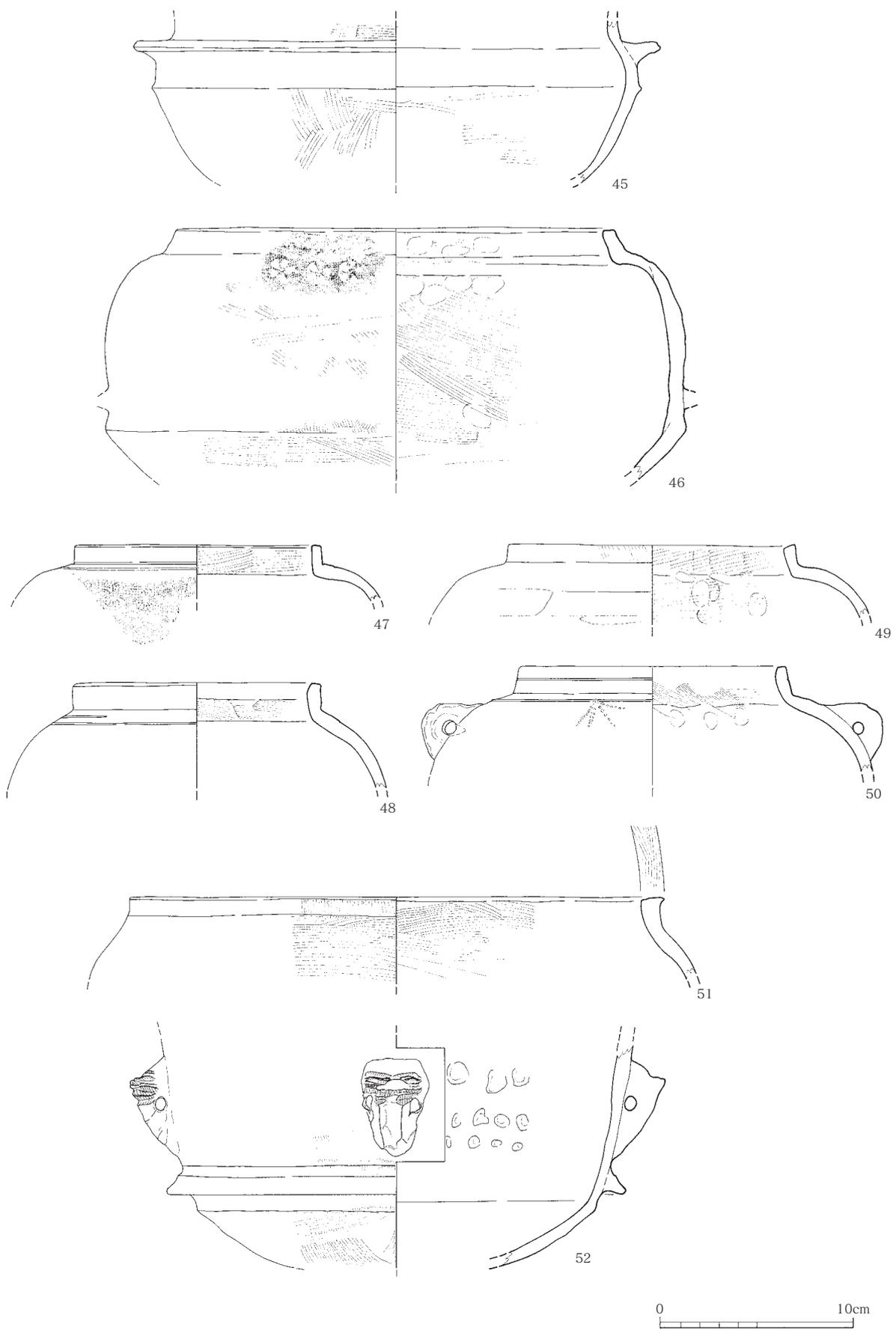
第95图 7区溝1-ii出土遺物実測図② (1/3)



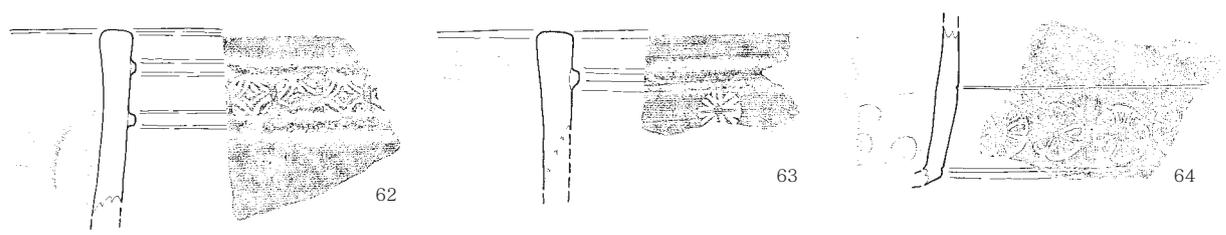
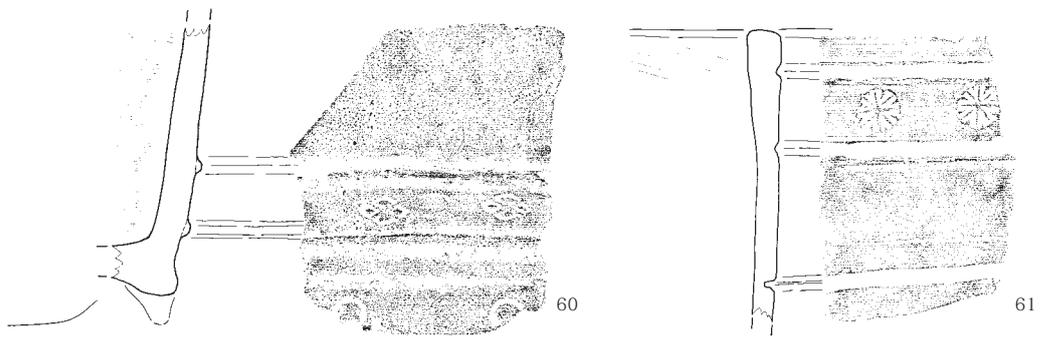
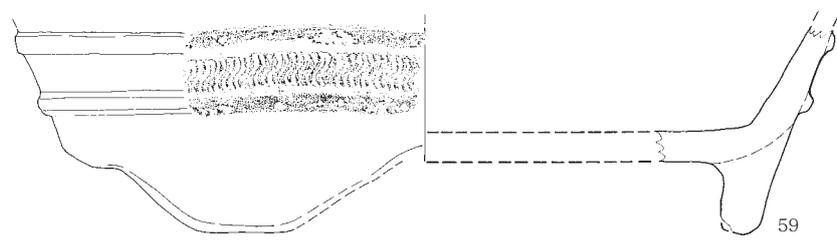
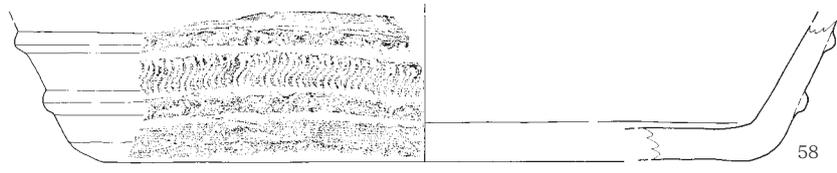
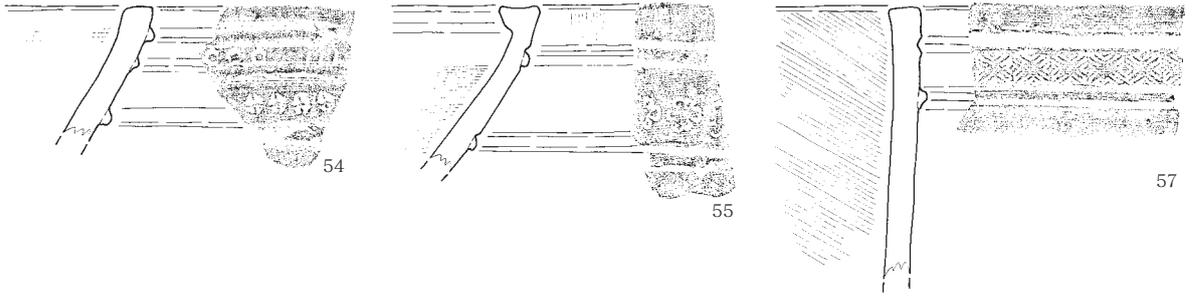
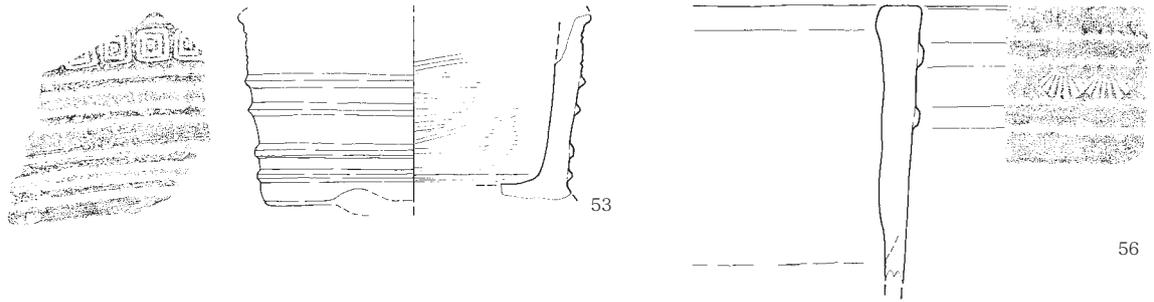
第96图 7区溝1-ii出土遺物実測図③ (31:1/4、他:1/3)



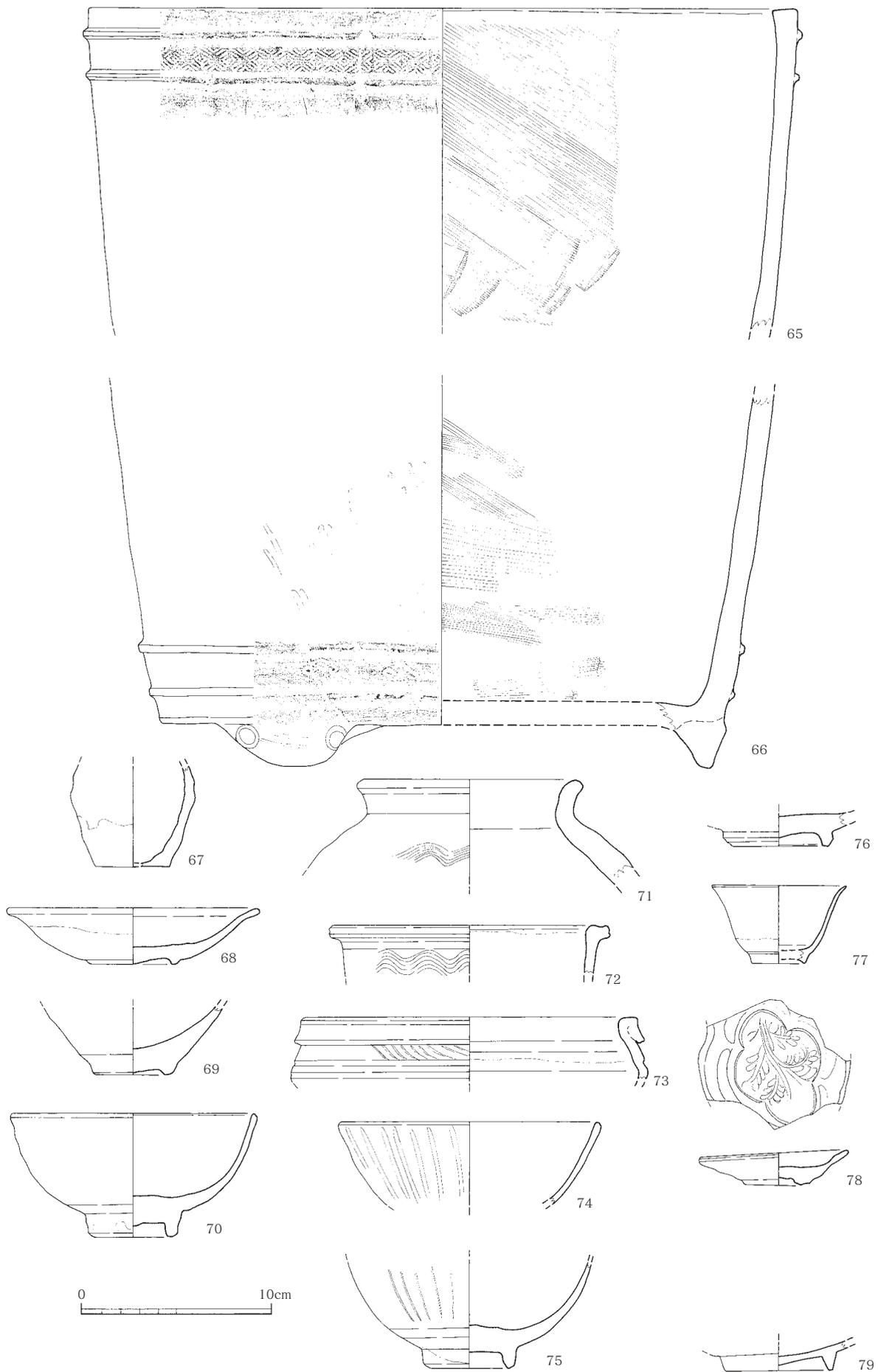
第97图 7区溝1-ii出土遺物実測図④ (1/3)



第98图 7区溝1-ii出土遺物実測図⑤ (1/3)



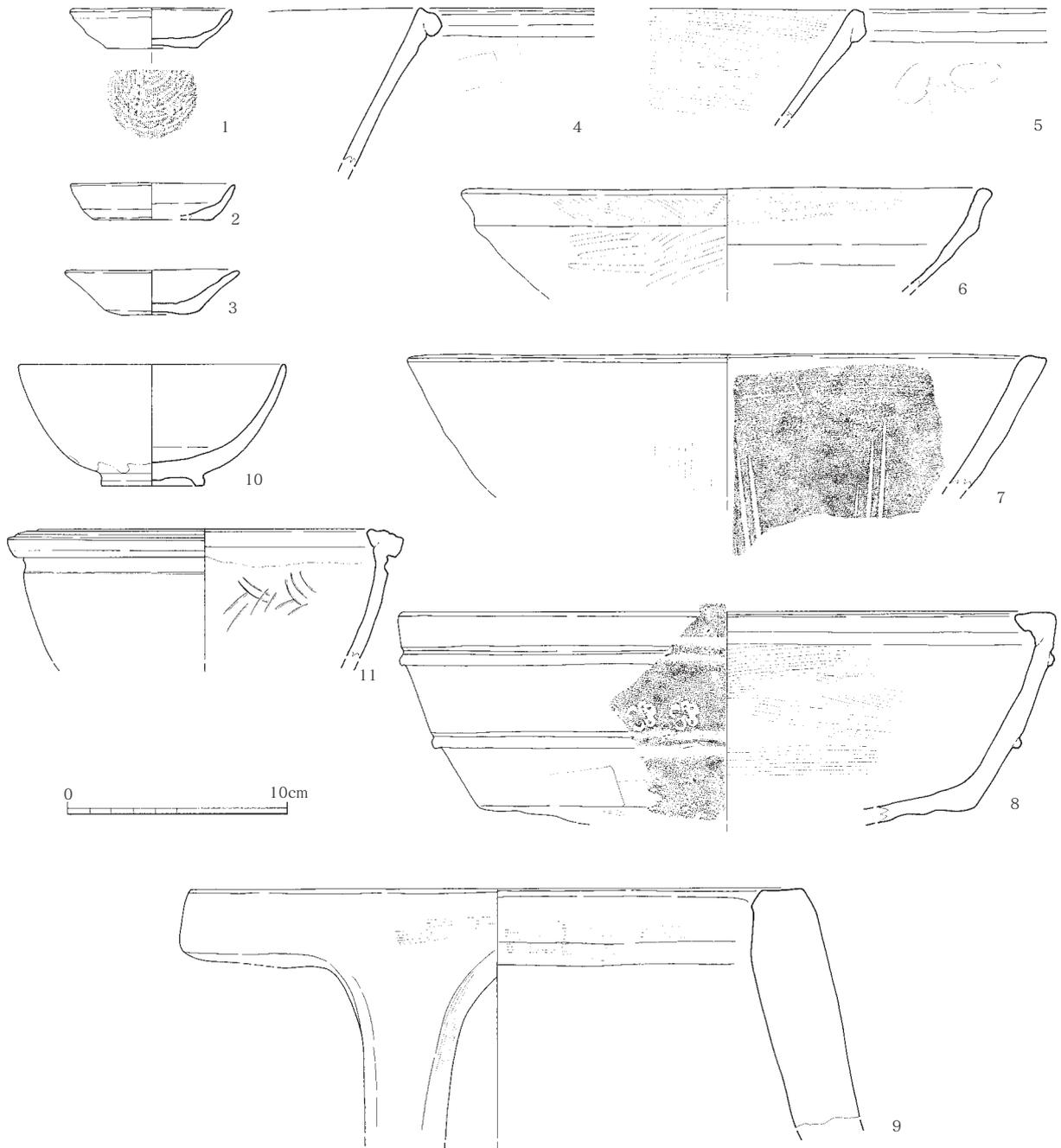
第 99 图 7 区溝 1 - ii 出土遺物実測図⑥ (1/3)



第 100 图 7 区沟 1 - ii 出土遗物实测图⑦ (1/3)

端部は水平面をなし、調整は全面ハケ目調整。口径 28.0cm。53 は 2ヶ所に把手があり、そのすぐ下に小さな罫が巡る。内面ナデだが先行する指圧痕が明瞭に残る。外面はハケ目後ナデ。罫部径 24.0cm。

54 は香炉であろうか。土師質焼成である。筒状の体部で沈線が複数巡っており、その間に印刻を施文する。底径 12.0cm。55～67 は火鉢である。55～61 は土師質焼成。55・56 は口縁部が開く形状のもの。55 は素口縁だが 56 は内面に短く伸びた口縁となる。57・58 はほぼ直立する口縁部となる。57 は内面ナデ、58 はハケ目調整。59・60 は同一個体の可能性がある。60 は丸味を帯びた脚が付く。59・60 は内面ナデ調整を行うが、61 は内面ハケ目調整。62～67 は瓦質焼成。



第 101 図 7 区溝 1 - ii 南西端部出土遺物実測図 (1/3)

62～64はどれも直立する口縁部となる。65は突帯ではなく沈線を巡らせており、内面には粗いハケ目を行う。66・67は接合しないが同一個体である。口縁部下に二条の突帯を巡らせ、その間に印刻を施文する。底部付近にも二条の突帯があり、その間に印刻を施文している。脚部は丸味を帯びた形状で、環状の印刻を施文する。内面はハケ目後ナデ、外面はヘラミガキ状に平滑に仕上げる。口径37.8cm、底径30.1cm。

68～74は陶器である。68は鉄釉を施釉する小型の壺。69は灰釉施釉の皿である。70・71は碗である。70は鉄釉、71は藁灰釉施釉。72は鉄釉施釉の壺で、頸部はよく締まり口縁部は短く外反する。口径12.0cm。73は小型の甕。口縁部は短く強く外反する。口径15.0cm。

75～80は磁器である。75～77は青磁碗である。75・76はどちらも外面に縦方向の並行沈線を片彫りする。75は口径14.0cm。76は丸味を帯びた器形となる。高台部径5.0cm。77は高台部径5.2cm。78は白磁小坏である。口縁部がわずかに外反する。口径7.2cm。79は型押し整形の白磁小皿である。80は染付碗の底部である。高台部径5.7cm。

溝1 - ii 南西端部出土遺物 (第101図)

1～3は土師器皿である。1は口径7.2cm。2は7.4cm、3は体部が外反しながら開く器形となる。口径8.0cm。4・5は鍋であろう。どちらも土師質。口縁部は玉縁状に肥厚させる。4は内外面ナデ調整、5は内面横ハケ目、外面ナデ。6は土師質焼成の鉢である。口縁部下が稜を有し、口縁部は短く外反する。外面と内面の口縁部のみがハケ目調整を行う。口径24.1cm。

7は土師質焼成の挿鉢である。口縁端部は明瞭な平坦面をなす。内面の挿目は幅が広い。口径29.0cm。8は鉢形の火鉢である。焼成は土師質焼成。口縁部は内側に短く屈曲する。外面には二条の突帯を巡らせ、その間に印刻を行う。口径30.0cm。9は土師質焼成のもので、五徳かと思われるが、被熱の痕跡はない。調整はハケ目後にナデを行う。

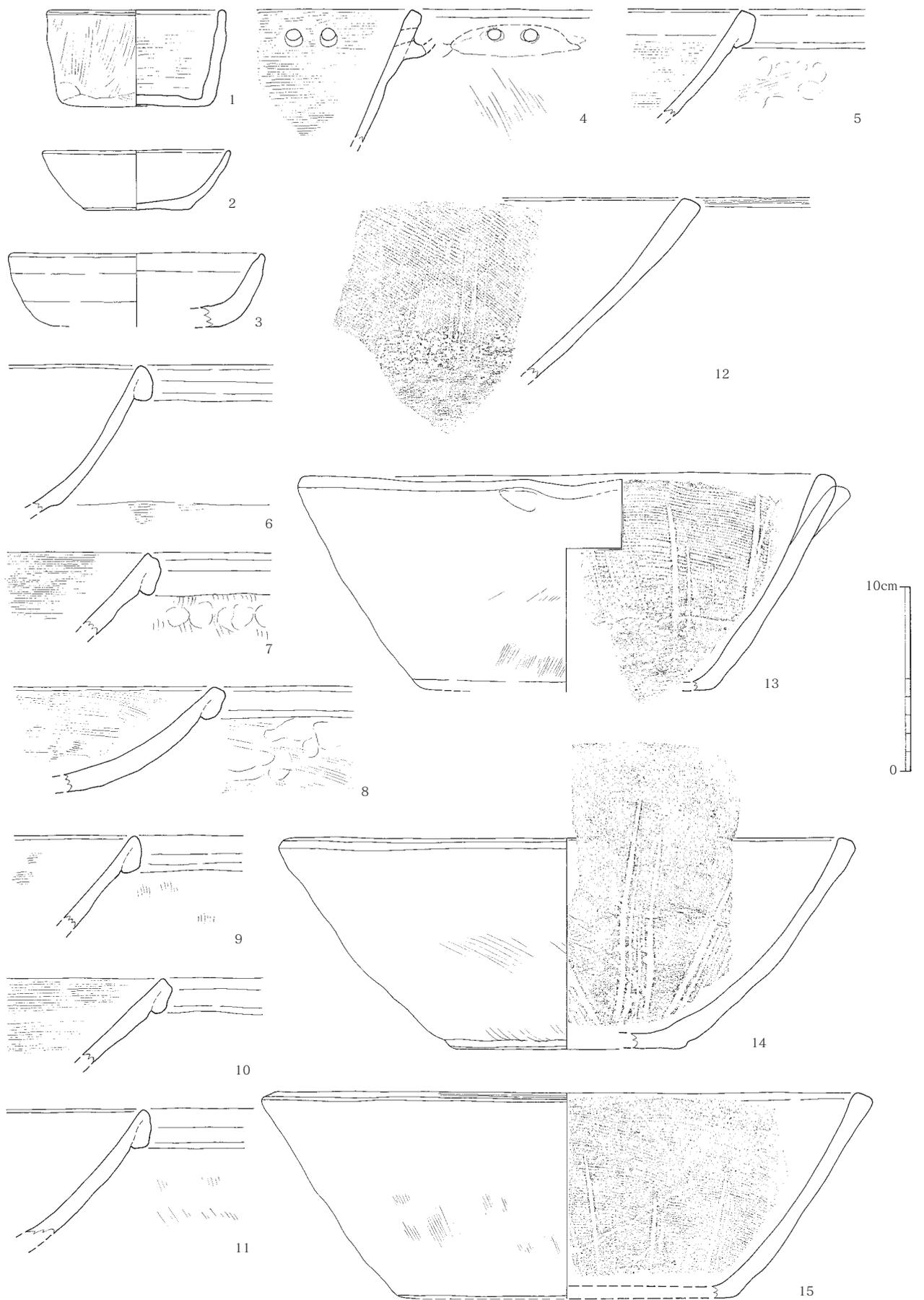
10・11は陶器である。10は陶器碗である。体部は半球形をなす、釉は藁灰釉を施釉し、外面高台部付近は露胎となる。口径12.0cm。11は小型の甕であろう。口縁部を外側に肥厚させ、内側にも三角状に鈍く尖っている。内面には同心円当て具痕が残る。釉は褐色釉を施釉する。口径18.0cm。

溝1 - iii 出土遺物 (図版30、第102～105図)

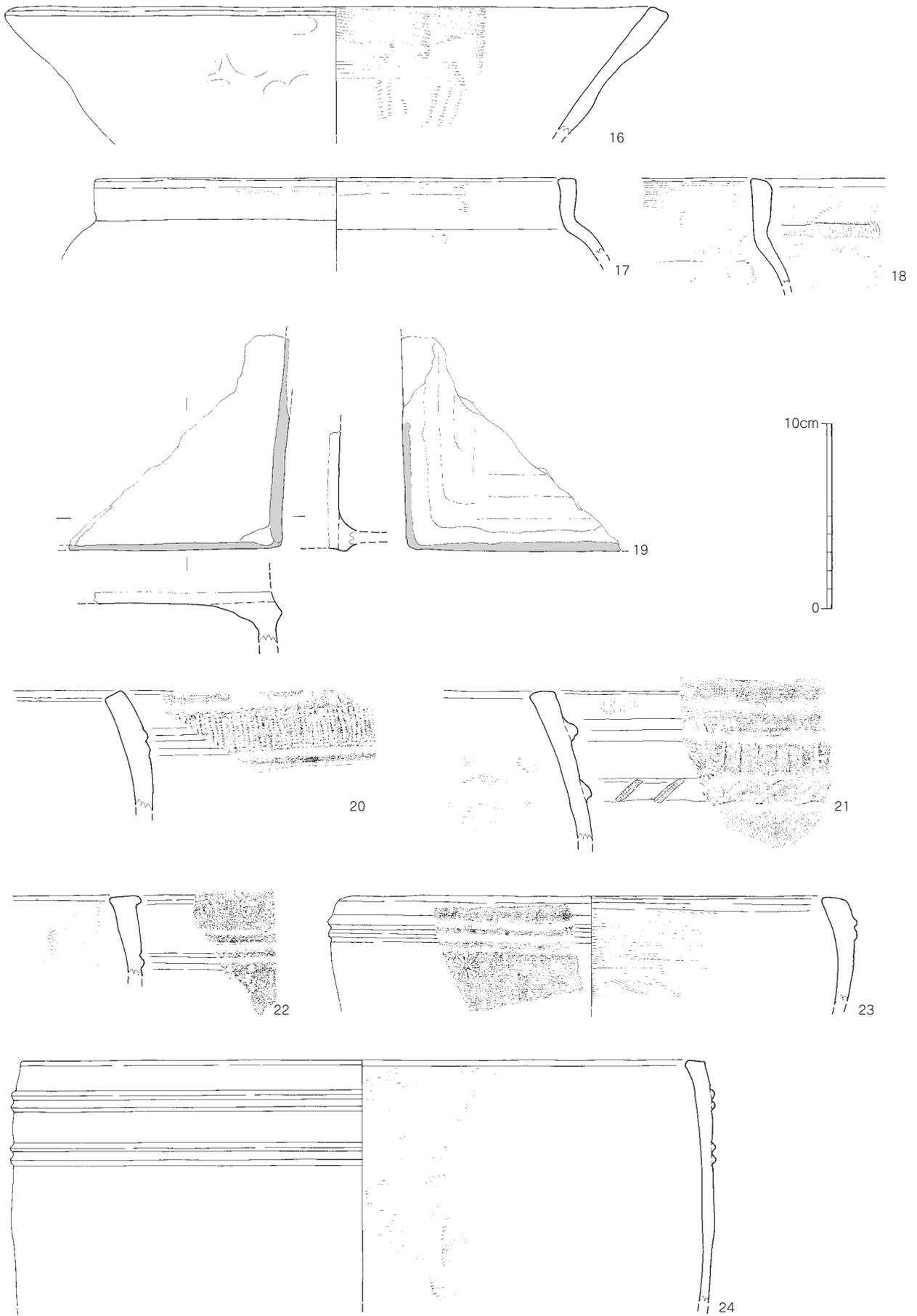
1は土師質焼成の土器で、体部が直立し短い筒状をなす。香炉であろうか。内外面ハケ目調整。口径9.4cm。2・3は土師器皿である。2は口径10.1cm。3は瓦質に近い土師質焼成である。器壁は非常に厚い。口径13.6cm。

4～6は鍋である。4は土師質焼成の耳鍋。耳部には二ヶ所に穿孔があり、口縁部下にも二ヶ所穿孔がある。5・6は口縁部を玉縁状に肥厚させるもの。5は内外面ハケ目調整、6は内面ナデ調整。7～11は浅い器形となる鉢であろう。どれも口縁部は玉縁状に肥厚する。11は内面ナデだが他はハケ目調整を行う。

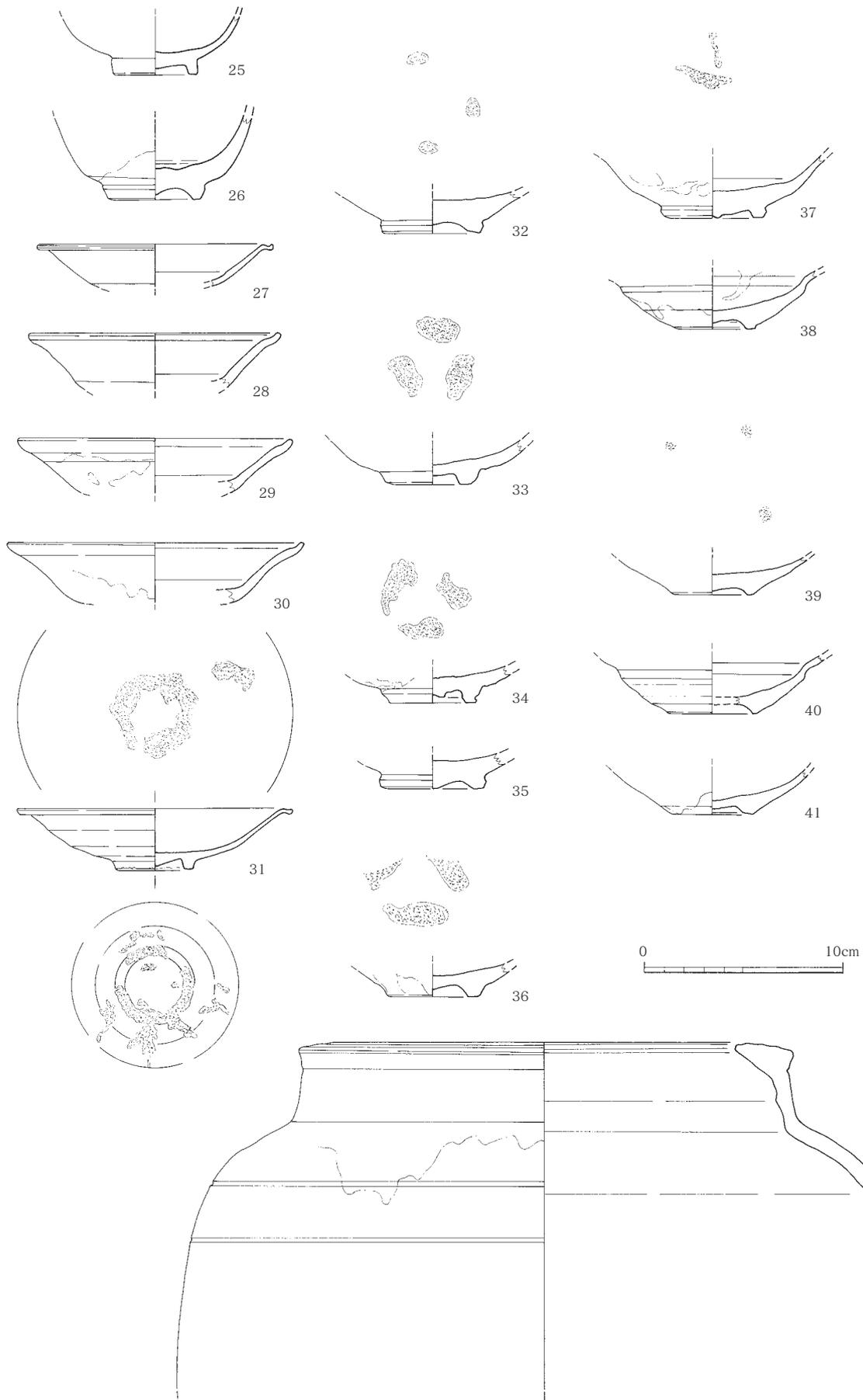
12～16は土師質挿鉢である。12・13は一本ずつ挿目を施文している。13は口径29.3cm、底径16.0cm。14は内面の調整はナデ。口径29.9cm、底径12.8cm。15は口径31.6cm、底径18.4cm。16は他と比較すると口縁部が開いた器形になる。口径36.0cm。17・18は土師質焼成



第 102 图 7 区沟 1 - iii 出土遗物实测图① (1/3)



第 103 图 7 区沟 1-iii 出土遗物实测图② (1/3)



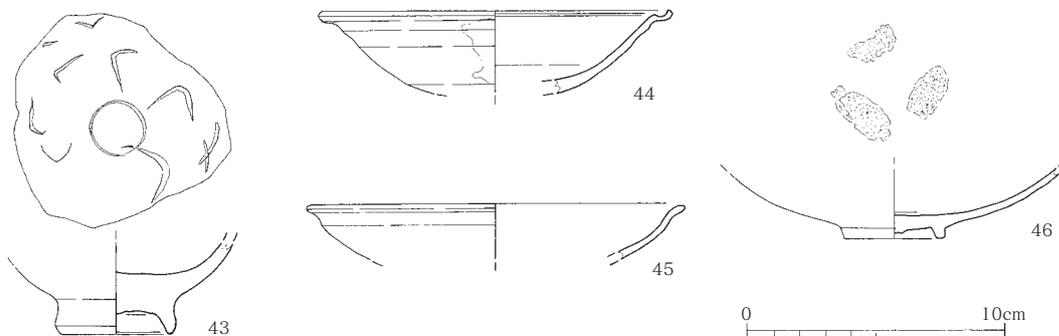
第 104 图 7 区沟 1 - iii 出土遗物实测图③ (1/3)

の釜である。17は頸部があまり締まらず口縁部が短く直立する。口径24.4cm。18は17よりも口縁部が長く伸びる。19は土師質焼成の箱状品である。外面側面には精良な赤色顔料が塗られている。内面は指ナデの痕跡が明瞭に残る。

20～24は火鉢である。20・21は土師質焼成。20は口縁部が丸く内傾しており、外面の口縁部下には櫛状工具の連続刺突による文様を施文する。21も口縁部が内傾する。外面の口縁部下には二条の突帯があり、その間には印刻、下の突帯の上にはハケ状工具刺突による刻目が施される。22～24は瓦質焼成。22は外面の口縁端部とその下に突帯があり、その間に印刻を行う。23は外面口縁部下に近接する二条の突帯を施し、その下に印刻を行う。口径25.8cm。24は遺存する範囲では筒状に近い器形となる。口径37.0cm。

25～42は陶器である。25・26は陶器碗である。25は丸味を帯びた器形で灰釉施釉。高台部径4.1cm。26は底部と体部の境が稜をなす。釉は鉄釉を施釉する。高台部径4.7cm。27～31は皿である。どれも体部が外反しながら大きく開いており、口縁端部のみ上方を向く。釉は灰釉である。27は口径12.0cmで、器壁が非常に薄くシャープである。28は12.3cm、29は14.0cm、30は15.0cm、31は器壁が薄くシャープな作りである。内面見込みや外面高台部付近に砂目跡が残る。口径13.9cm。32～41は碗または皿の底部片である。32は釉が青灰色を呈す。灰釉か。33は内面に三ヶ所目跡が残る。釉は灰釉。34も灰釉である。35は無色釉、36は白色釉を流し掛ける。37は無色釉。38～41は外面の高台部と体部の境目がない形状となるものである。全て灰釉施釉。42は甕である。頸部は内傾して短く立ち上がり、口縁部は三角形に内側に伸びる。肩部には二条の沈線が巡る。釉は褐釉であろう。口径25.0cm。

43～48は磁器である。43は青磁碗である。内面にはヘラ片彫りの文様が見られる。高台部径4.3cm。44は青白磁である。高台部径4.7cm。45～48は皿である。どれも器壁が薄くシャープな作りである。45は口縁部が強く外反し、端部のみ上方に向く。口径13.6cm。46は45と比較すると端部の上がりか弱い。口径13.9cm。47は外反が緩やかである。口径14.6cm。48は内面の三ヶ所に目跡が残る。高台部径3.8cm。



第105図 7区溝1-iii出土遺物実測図④(1/3)

溝 1 - iv 出土遺物 (第 106 ~ 112 図)

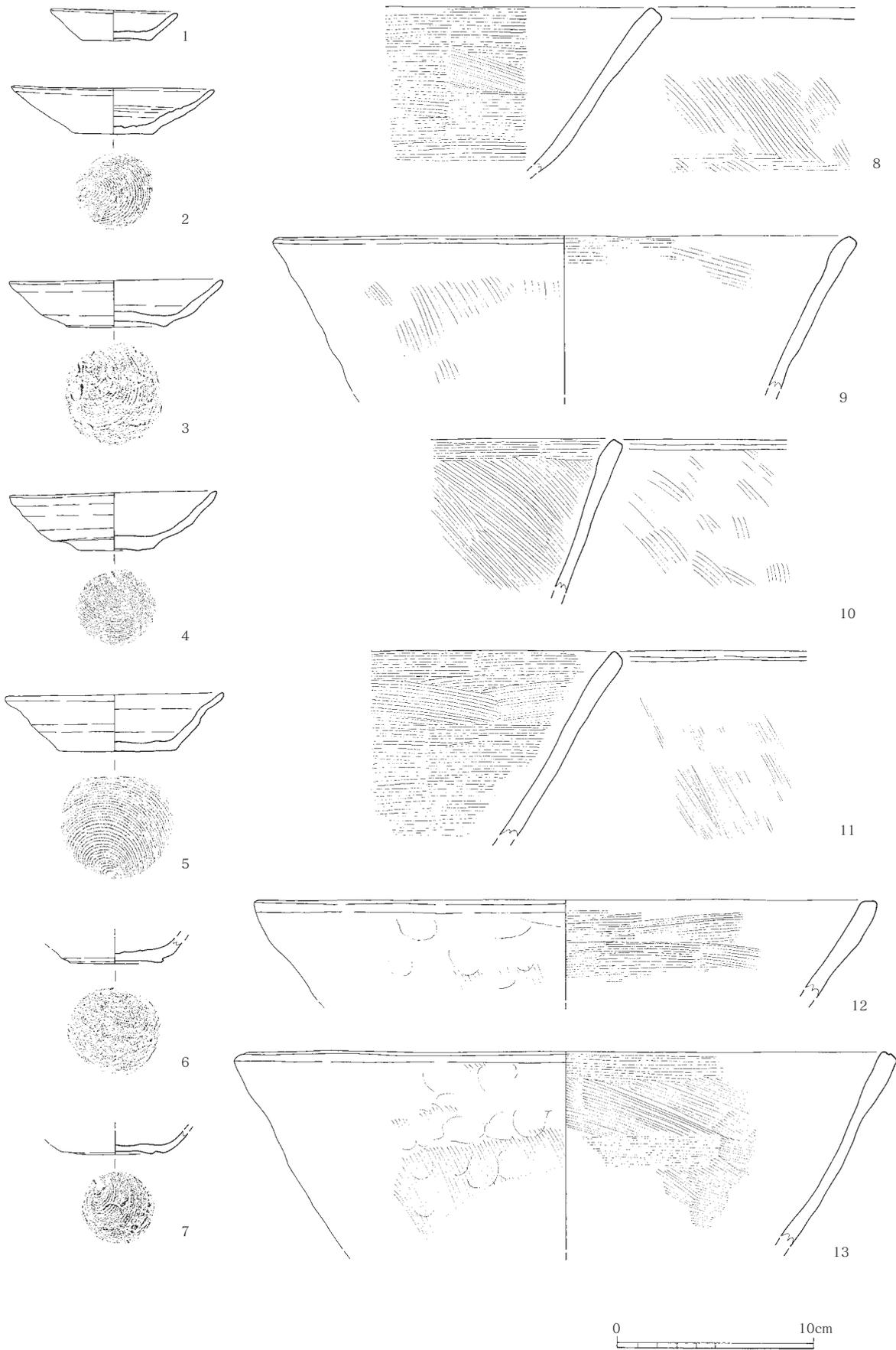
1 は土師器小皿である。口径 6.6cm。2 ~ 7 は土師器皿である。2 は体部が直線的に開く器形となる。口径 10.4cm、底径は 4.1cm。3 は若干上げ底となる。口径 11.0cm、底径 5.3cm。4 は口径 10.7cm、底径 3.8cm。5 は体部が外反しながら開く器形となる。口径 11.2cm、底径 6.0cm。6 は底径 4.6cm。7 は底径 3.8cm。

8 ~ 19 は鍋である。8 ~ 13 は素口縁となる。8・9 は土師質焼成。8 は口縁部が明瞭な面をなし、内外面ハケ目調整を行う。9 も内外面ハケ目調整。口径 29.2cm。10 ~ 13 は瓦質焼成。調整はどれも内外面ハケ目調整。12 は口径 30.6cm、13 は口径 32.8cm。14 ~ 19 は口縁部を玉縁状に肥厚させる。16 は内外面ハケ目調整だがそれ以外は内外面ナデ調整を行う。17 は口径 35.2cm、18 は口径 41.0cm、19 は口径 47.6cm。

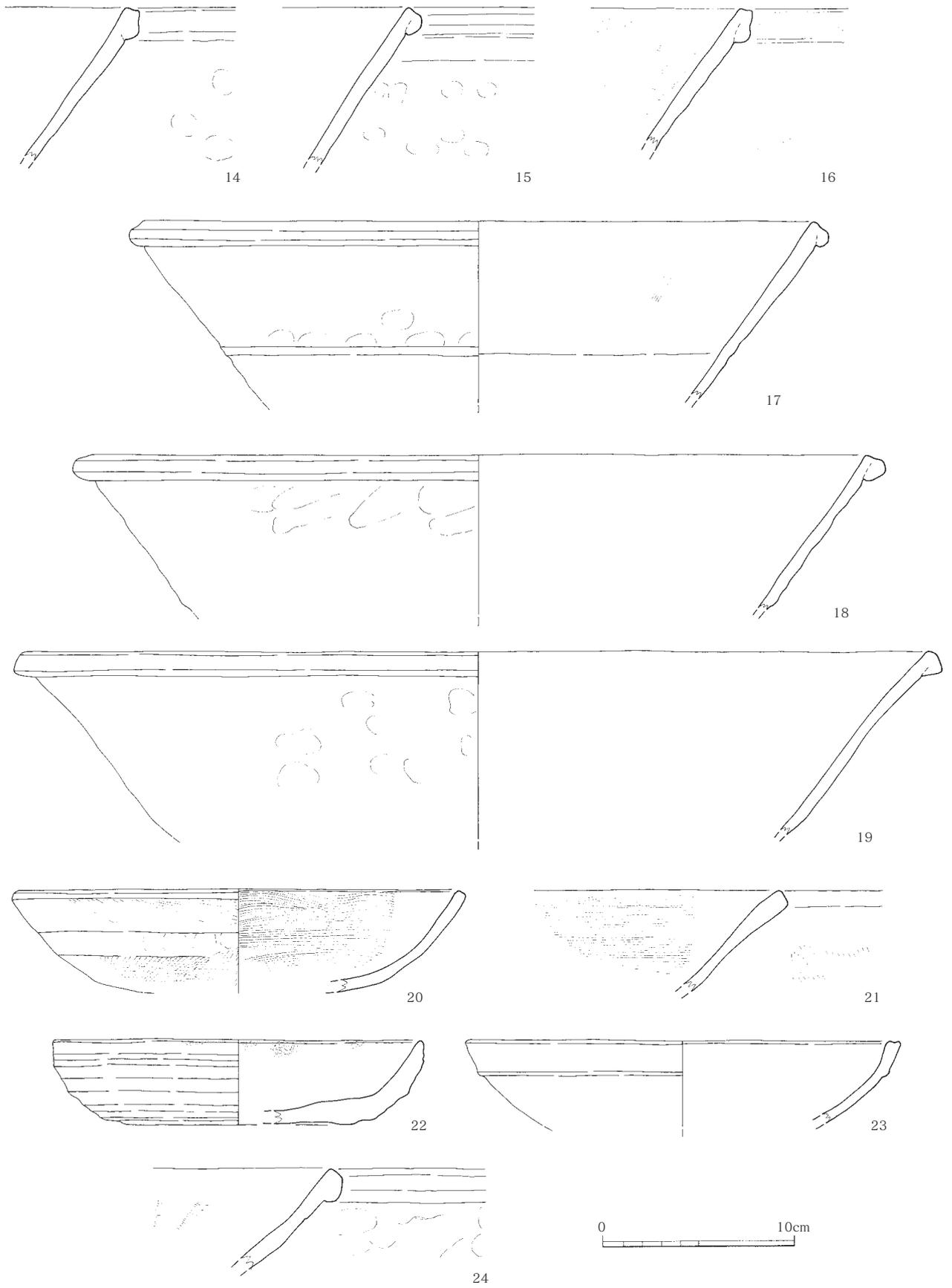
20 ~ 28 は鉢である。22 は瓦質焼成で、それ以外は土師質焼成。20 ~ 22 は素口縁となる。20 は内外面ハケ目調整で口径 23.8cm。22 は体部の器壁が厚く、口縁端部は薄くなる。また、口縁端部を中心に油煙が付着する。口径 19.6cm。23 ~ 26 は口縁部を玉縁状に肥厚させるものである。23 は口縁部の肥厚が断面縦長でそれほど厚くならない。口径 23.2cm。24 は傾きから鉢としたが、鍋の可能性もある。25 は口径 50.0cm、26 は口径 50.8cm を測る大型品である。27・28 は口縁部を内側に折り返した形状となる。27 は口径 24.4cm。28 の口縁部は 27 よりも長く内側に伸びる。口径 36.0cm。29 ~ 31 は土師質播鉢である。内外面ハケ目調整を行い、その後内面に播目を施文する。29 は口径 23.4cm、器高 8.5cm、底径 14.0cm。30 は体部に小さな穿孔がある。31 は体部があまり開かない形状となる。口径 30.0cm、器高 14.7cm、底径 19.0cm。

32 ~ 40 は釜である。32 ~ 37 は土師質焼成となる。32 は口縁部が短く内傾している。口径 12.0cm。33 は口縁部が直立し、口縁部下に二条の沈線が巡る。口径 16.4cm。34 は内外面ナデ調整。口径 16.8cm。35 は肩部に穿孔が 1 ヶ所認められる。口縁部は直立する。口径 16.0cm。36 はやや大型品である。口縁部は直立する。口径 27.0cm。37 は体部片。肩部は丸味が少なく、鏝部は短く水平に伸びる。38 ~ 40 は瓦質焼成である。38 は口縁部が短く直立し、肩部には連続して印刻を施文する。口径 15.8cm。39 は口縁部下に櫛目を一巡させており、肩部の印刻は連続して施文されない。口径 14.0cm。40 は体部片である。鏝部はわずかに上方に伸びている。調整は内外面ハケ目。

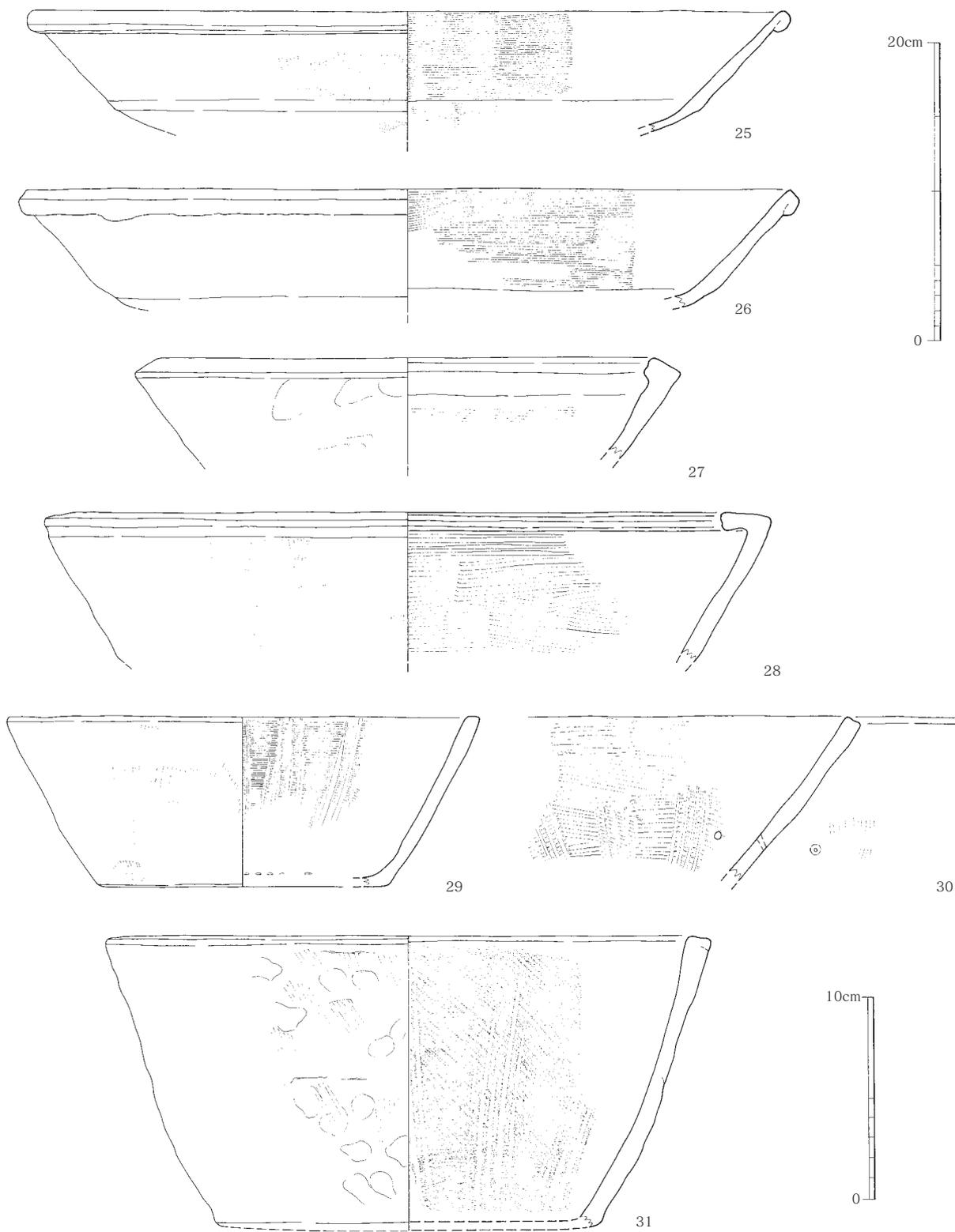
41 ~ 52 は火鉢である。41 ~ 45 は土師質焼成。41 は口縁部が開いた鉢に近い形状となる。口縁端部は内側に短く折れている。外面口縁部下には印刻を施文し、その下には二条の沈線が巡る。口径 34.0cm。42 は口縁端部が若干肥厚し、外端部に太い沈線を巡らせている。口縁部下の印刻は大振りな花文を施文する。43 はやや丸味を帯びた器形となる。外面の二条の突帯に挟まれた中に、菊花文の印刻と櫛状工具の連続刺突による文様を施文する。口径 26.6cm。44 は口縁部下の二条の突帯間には施文が行われぬ。口径 33.0cm。45 は底部付近の破片である。脚部は丸味が少ない器形となる。体部は下方に二条の突帯を巡らせ、その間に菊花文の印刻を施文する。底径 32.8cm。46 ~ 52 は瓦質焼成である。46 は口縁部付近が内傾し丸味を帯びた器形となる。口縁端部は不明瞭な刻目を施しているように見える。口径 32.6cm。47 は口縁部が直立し、外面には二条の突帯を巡らせ、その間に印刻を施す。口径 34.0cm。48 は内面ハケ目調整を行う。口径 39.8cm。49 は口径 40.8cm。50 は外面口縁部下に一条の突帯を巡らせ、その上から櫛状工具刺突による刻目を施す。内面は横方向、外面は縦方向にヘラミガキ状の擦過を行う。口径 40.0cm。51 は体部が開いた



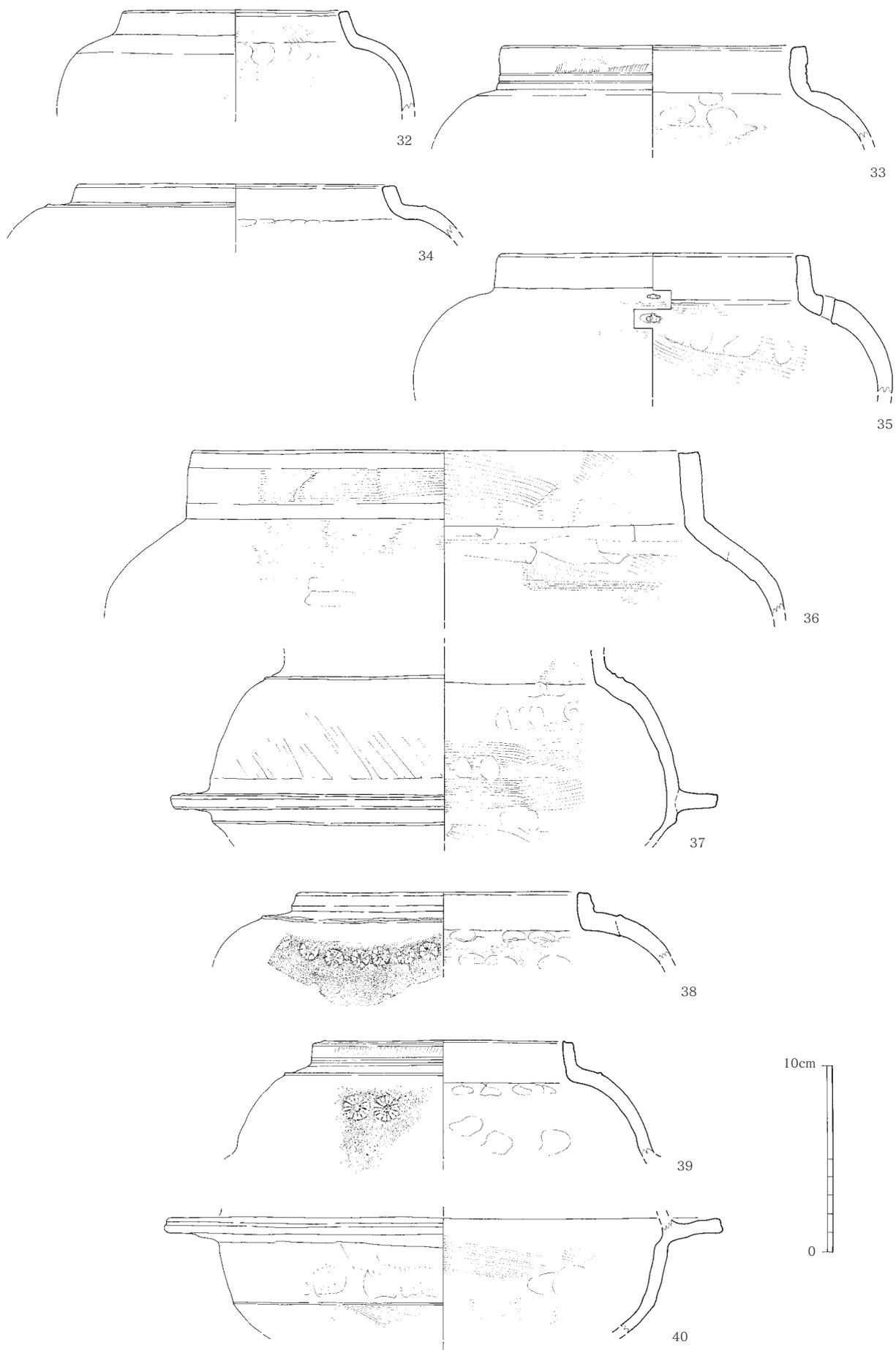
第106图 7区沟1-iv出土遗物实测图① (1/3)



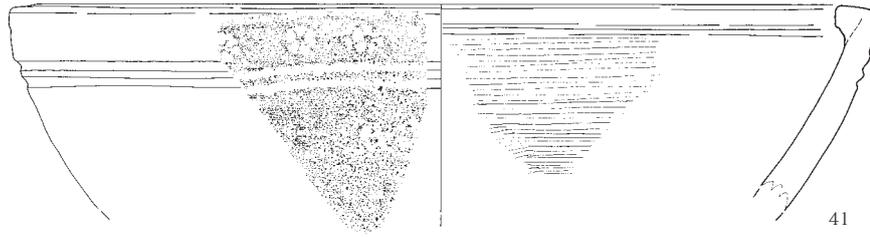
第107图 7区沟1-iv出土遗物实测图② (1/3)



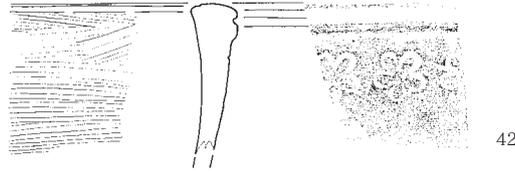
第 108 图 7 区溝 1 - iv 出土遺物実測図③ (25・26 : 1/4、他 : 1/3)



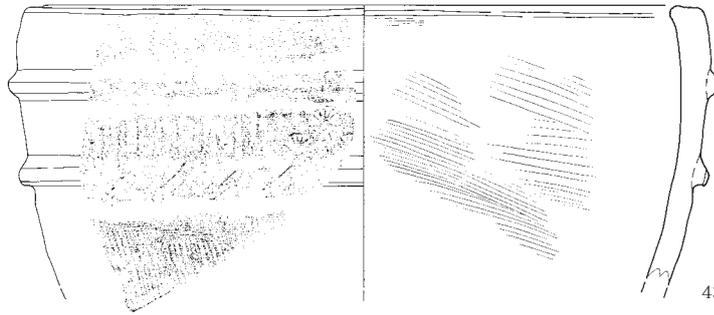
第109图 7区溝1-iv出土遺物実測図④ (1/3)



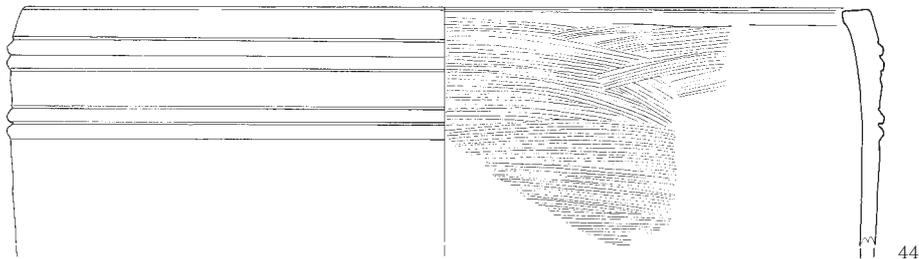
41



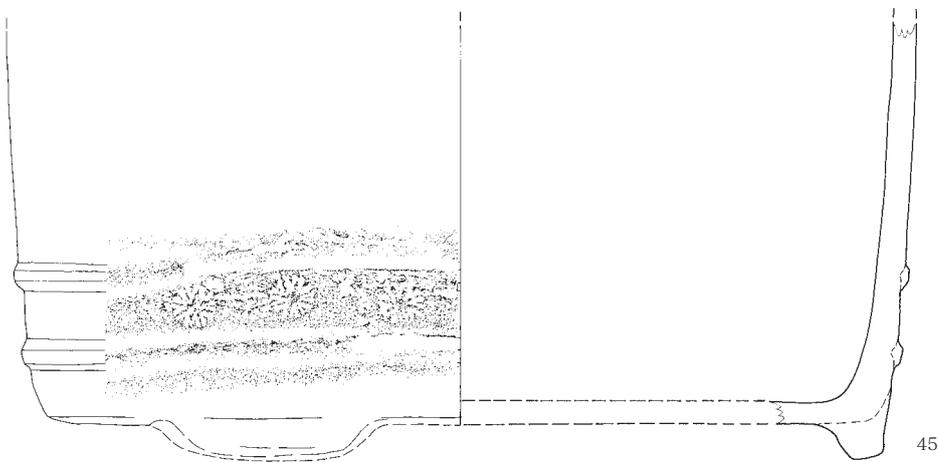
42



43



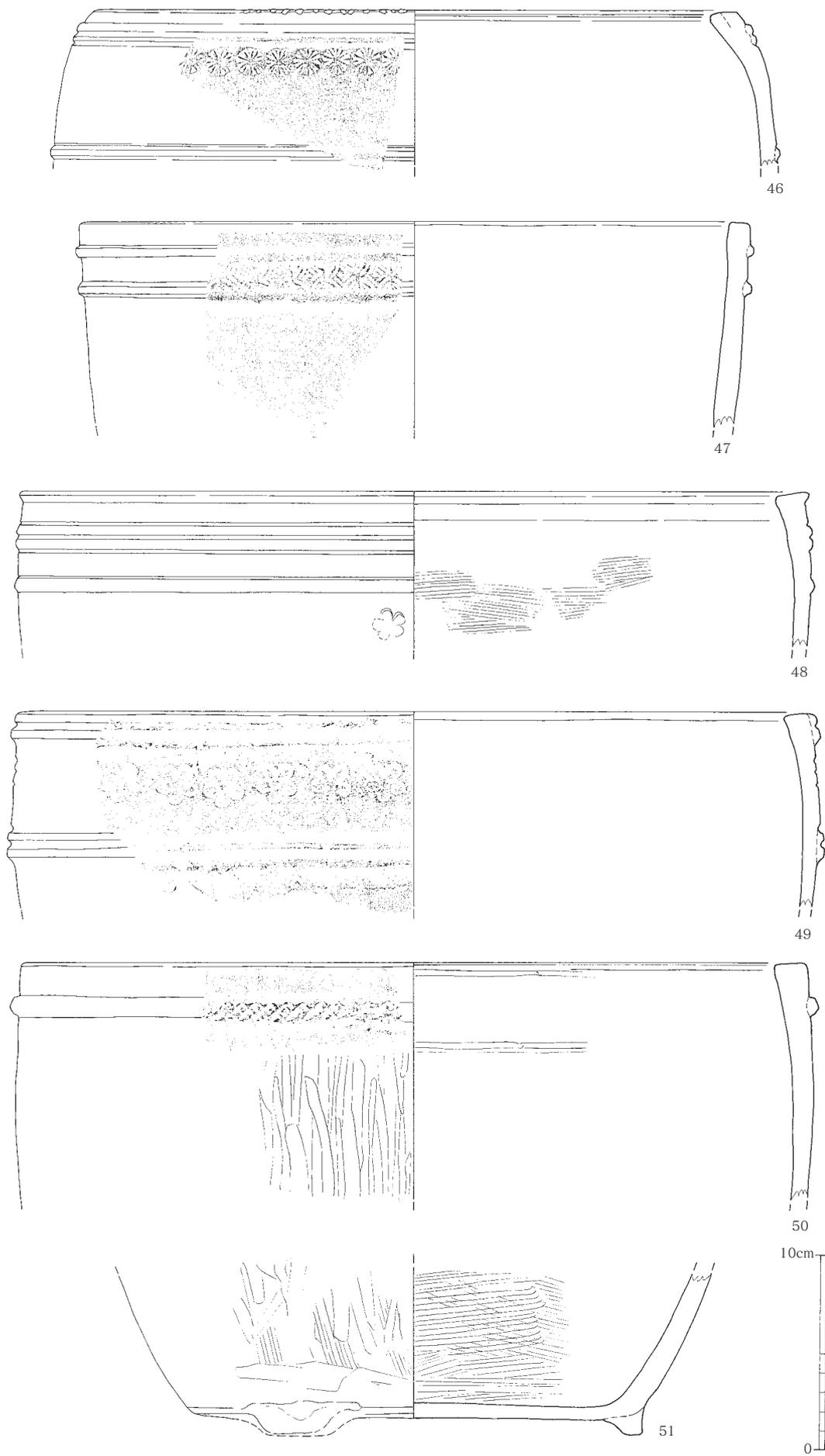
44



45



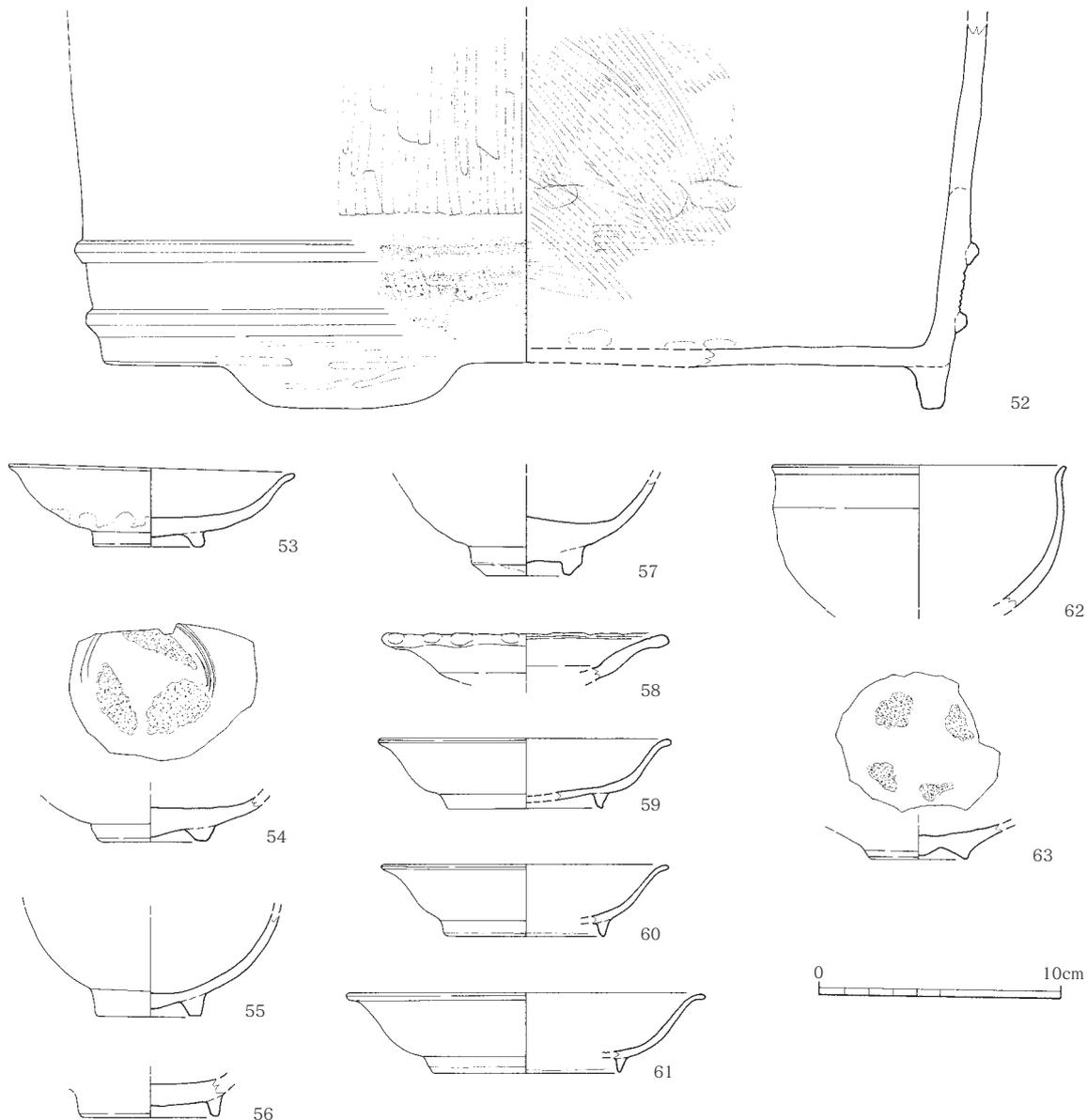
第110图 7区沟1-iv出土遗物实测图⑤ (1/3)



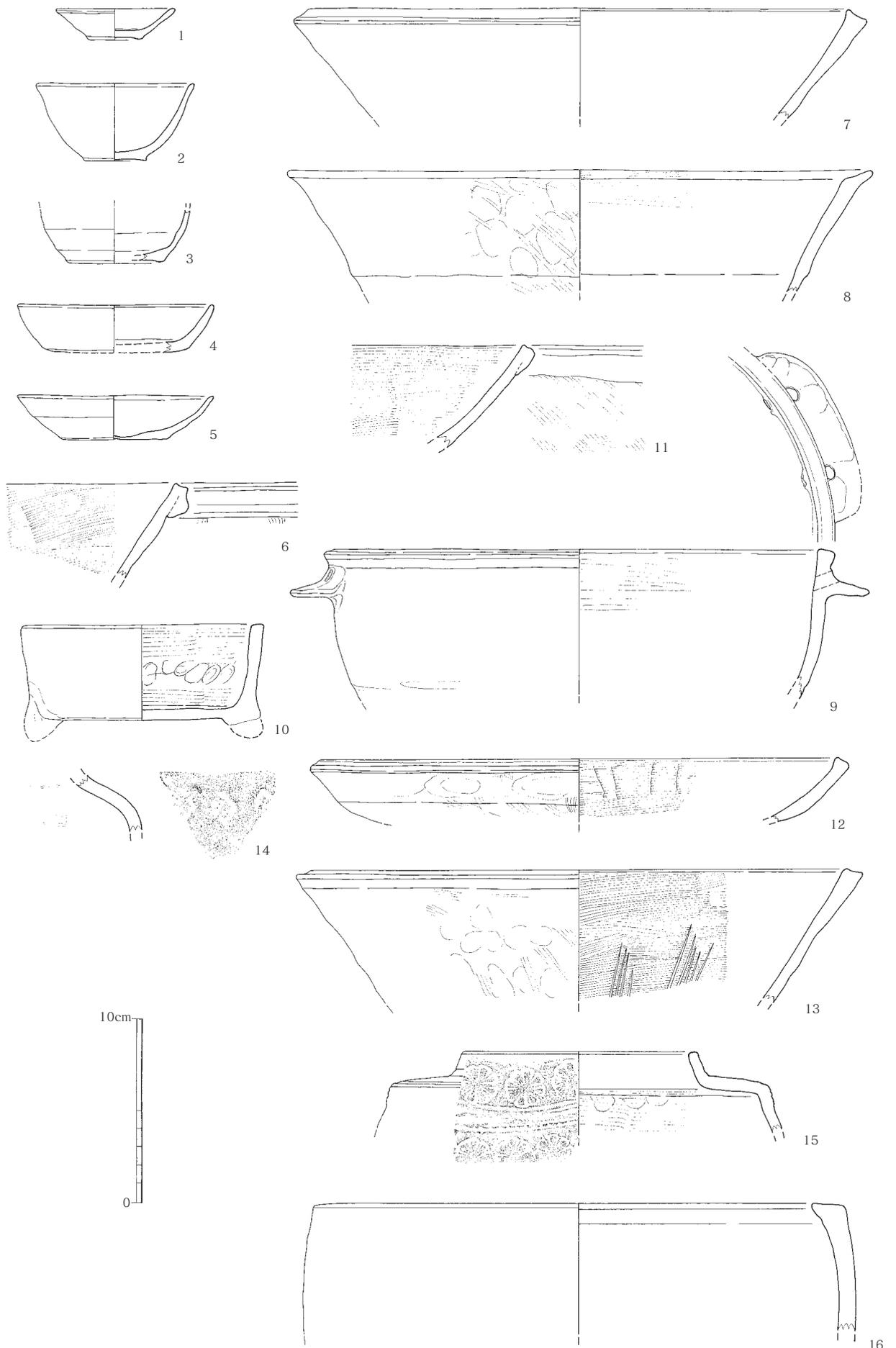
第 111 图 7 区沟 1 - iv 出土遗物实测图⑥ (1/3)

器形となる。内面ハケ目、外面ハケ目後ヘラミガキ状の擦過を行っており、体部下端は横ヘラケズリを行っている。焼成は瓦質だが土師質に近い。底径 22.5cm。52 は筒状の器形となる。内面ハケ目、外面ヘラミガキ調整。底径 35.4cm。

53・54 は陶器皿である。53 は体部が丸味を帯び口縁部が短く外反する。釉は茶灰色を呈す。口径 12.9cm。54 は李朝粉青沙器である。底径 4.7cm。55～63 は磁器である。55～58 は青磁である。55 は丸い器形となる碗。高台部径 4.1cm。56 は碗の底部で高台部径 5.6cm。57 も碗である。底部の器壁が非常に厚い。高台部径 4.6cm。58 は口縁端部を輪花状にする皿である。口径 12.0cm。59～61 は白磁皿である。どれも口縁端部を短く外反させる。59 は口径 12.4cm、60 は口径 12.0cm、61 は口径 14.8cm。62 は丸い器形の白磁碗である。口縁部は短く外反する。口径 12.2cm。63 は白磁皿の底部であろう。高台部径 4.2cm。



第 112 図 7 区溝 1 - iv 出土遺物実測図⑦ (1/3)



第 113 图 7 区溝 1 - iv · v 出土遺物実測図① (1/3)

溝 1 - iv・v 出土遺物 (図版 30、第 113・114 図)

1 は土師器小皿である。体部は直線的に開く。口径 6.3cm。2～5 は土師器皿である。2 は深みのある器形で碗に近い形状をなす。口径 8.4cm。3 も 2 と同様深みがある器形。底径 5.1cm。4 は口径 10.6cm、5 も口径 10.6cm。

6～9 は鍋または鉢である。6 は口縁端部を玉縁状に肥厚させるもので、内外面ハケ目調整。7 は端部が面をなす。口径 29.3cm。8 は口縁端部を強く横ナデして器壁を薄く仕上げる。体部外面には段を有す。口径 31.6cm。9 は耳鍋である。耳部直上に二ヶ所穿孔を行っている。口径 26.4cm。10 は小型で器高が低い筒状を呈しており、香炉か。焼成は土師質焼成。口径 12.9cm。

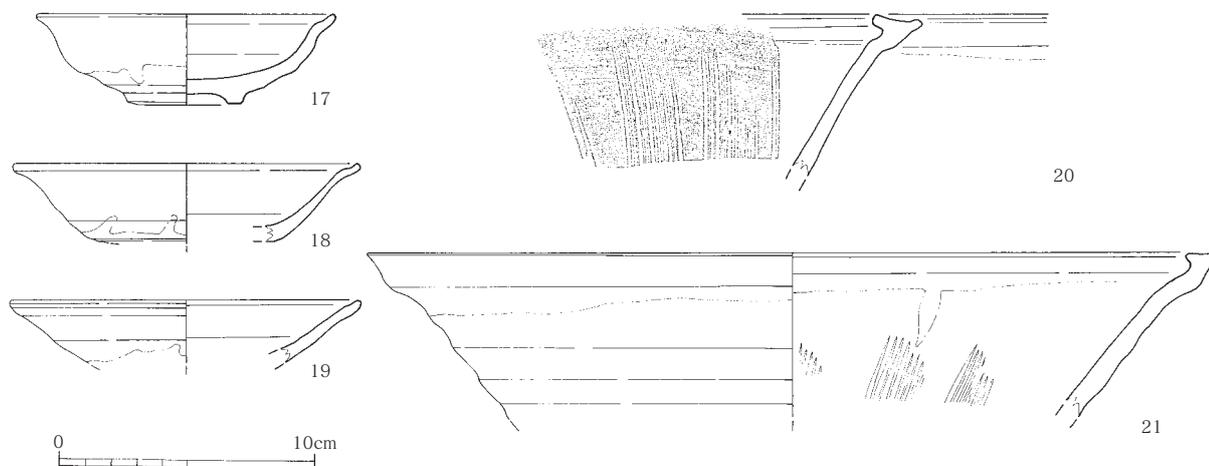
11・12 は鉢である。11 は瓦質焼成で口縁端部をわずかに肥厚させる。外面には炭化物が付着する。12 は土師質焼成で浅い器形となる。口縁部は素口縁。口径 28.2cm。13 は土師質播鉢である。口径 29.2cm。

14・15 は釜である。14 は土師質焼成の釜肩部片。15 は肩部が屈曲する器形のもので、口縁部は短く内傾する。肩部の稜を挟んで上下二段に印刻を行う。口径 13.4cm。16 は筒状を呈しており、口縁端部内側が三角形状に尖った器形となる。口径 28.8cm。

17～21 は陶器である。17～19 は灰釉施釉の皿である。17 は口径 11.8cm、18 は口径 13.4cm、19 は口縁部の反りが少ない器形で、口径 13.6cm。20・21 は播鉢である。どちらも口縁端部を内側に短く伸ばした形状となり、口縁部のみ鉄釉を施釉する。21 は口径 33.3cm。

溝 1 - v 出土遺物 (第 115 図)

1・2 は瓦質焼成の火鉢であり、接合しないが同一個体である。体部は筒状に近いが若干口縁部が開いた器形となり、端部はわずかに肥厚する。上端は水平面をなす。外面口縁部下には一条の突帯が巡り、その上下に印刻を行う。底部近くにも一条の突帯を巡らせる。調整は内外面ともハケ目調整。口径 43.8cm、底径 31.6cm。



第 114 図 7 区溝 1 - iv・v 出土遺物実測図② (1/3)

溝 1 - vi 出土遺物 (第 142 図)

1 ~ 3 は土師質焼成の鍋である。1 は口縁部を玉縁状に肥厚させるもの。内面横ハケ目、外面ナデ調整を行う。2・3 は素口縁となる。調整は内外面ハケ目。4・5 は土師質播鉢である。4 は口径 24.4cm。5 は底径 10.7cm。6・7 は土師質焼成の火鉢である。どちらも口縁部が直立に近い形状となる。6 は二条の三角突帯間は無文だが、7 は印刻を施文する。

溝 1 - vii 出土遺物 (第 142 図)

8 は土師質焼成の鉢である。口縁端部は内側に短く伸ばす。内外面ハケ目調整。口径 35.0cm。



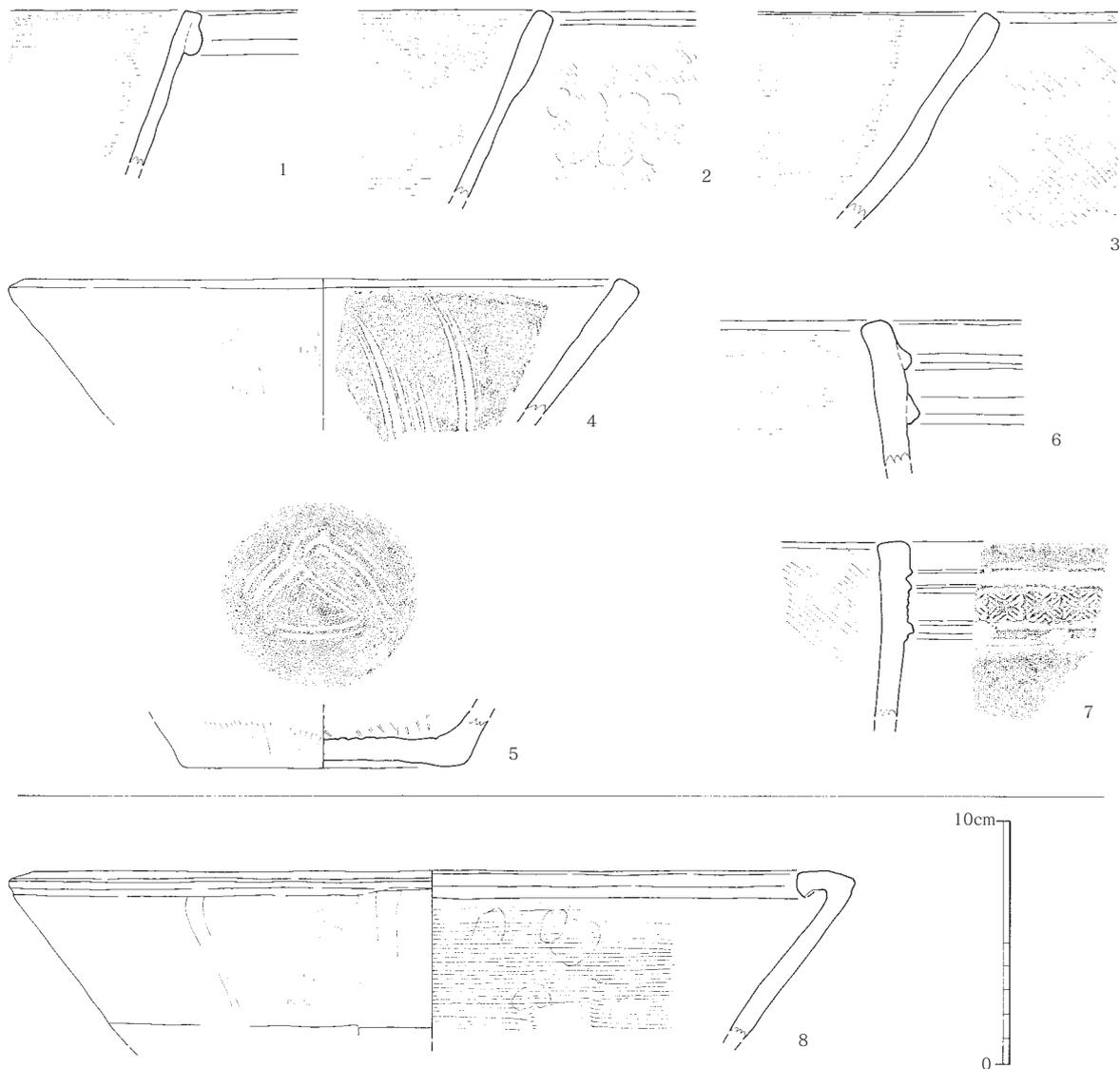
第 115 図 7 区溝 1 - v 出土遺物実測図 (1/3)

下層溝 1 - i 出土遺物 (第 117 図)

1・2 は土師質鍋である。1 は素口縁となる。体部中位に不明瞭な稜線を有す。調整は内面ナデ、外面ハケ目後ナデを行い、外面には炭化物が付着する。口径 30.0cm。中央最下層出土。2 は口縁部を玉縁状に肥厚させる。体部中位には接合の際の指圧痕が明瞭に残る。調整は内外面ハケ目調整。口径 35.4cm。中央部最下層出土。

下層溝 1 - iv・v 間ベルト (図版 30、第 117 図)

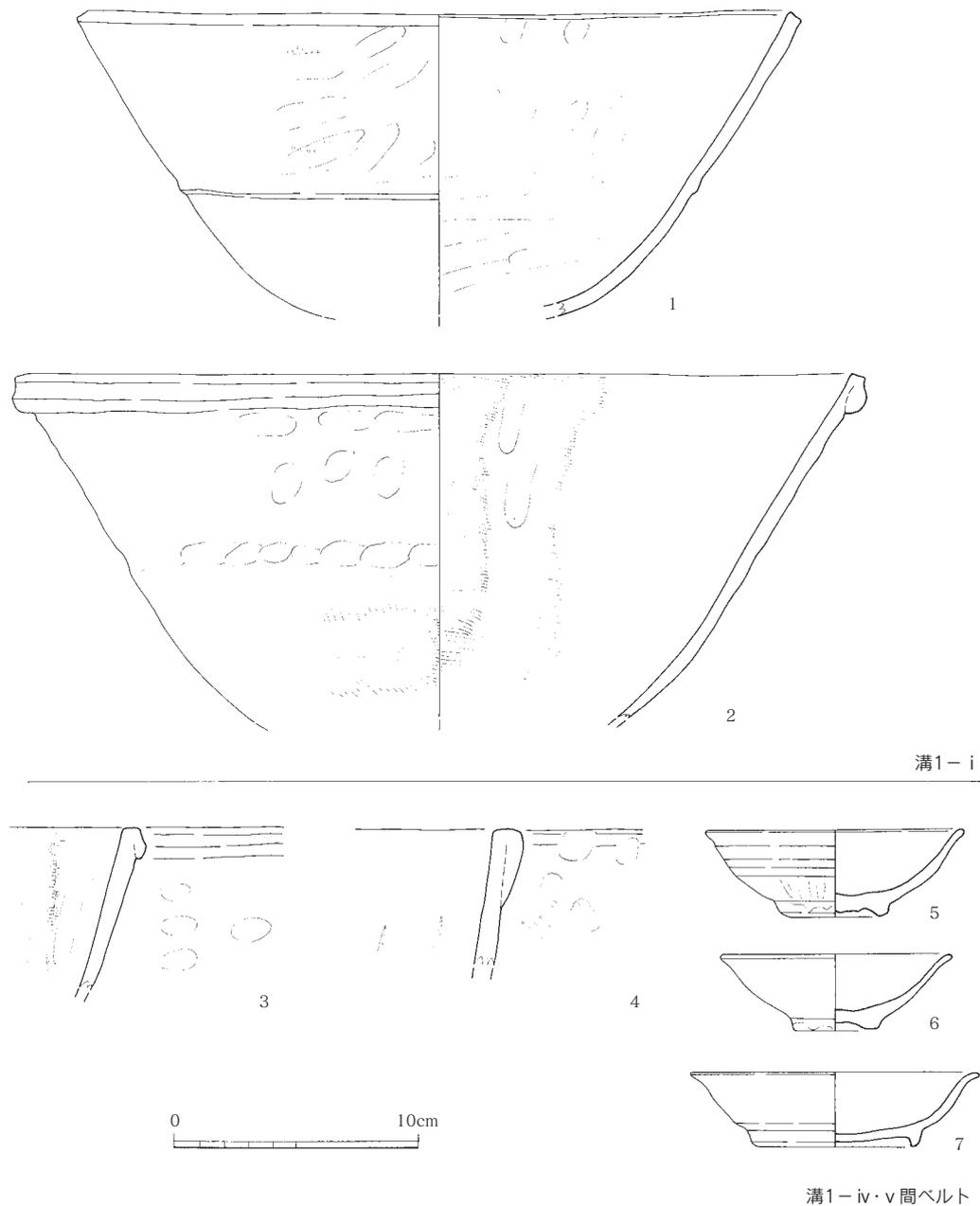
3 は土師質鍋である。口縁部は小さな玉縁状を呈す。内面ハケ目、外面ナデ調整。4 は土師質焼成の播鉢である。口縁部は長めに折り返して肥厚させる。調整は内外面ともナデ調整で、外面には先行するハケ目が見える。5 は灰釉施釉の陶器碗である。体部は丸味を帯び口縁部はわずかに外反する。口径 10.7cm。6・7 は白磁皿である。6 は口縁部の外反が弱い。口径 9.6cm。7 は底径が大きく、口縁部が若干外反する。口径 12.0cm。



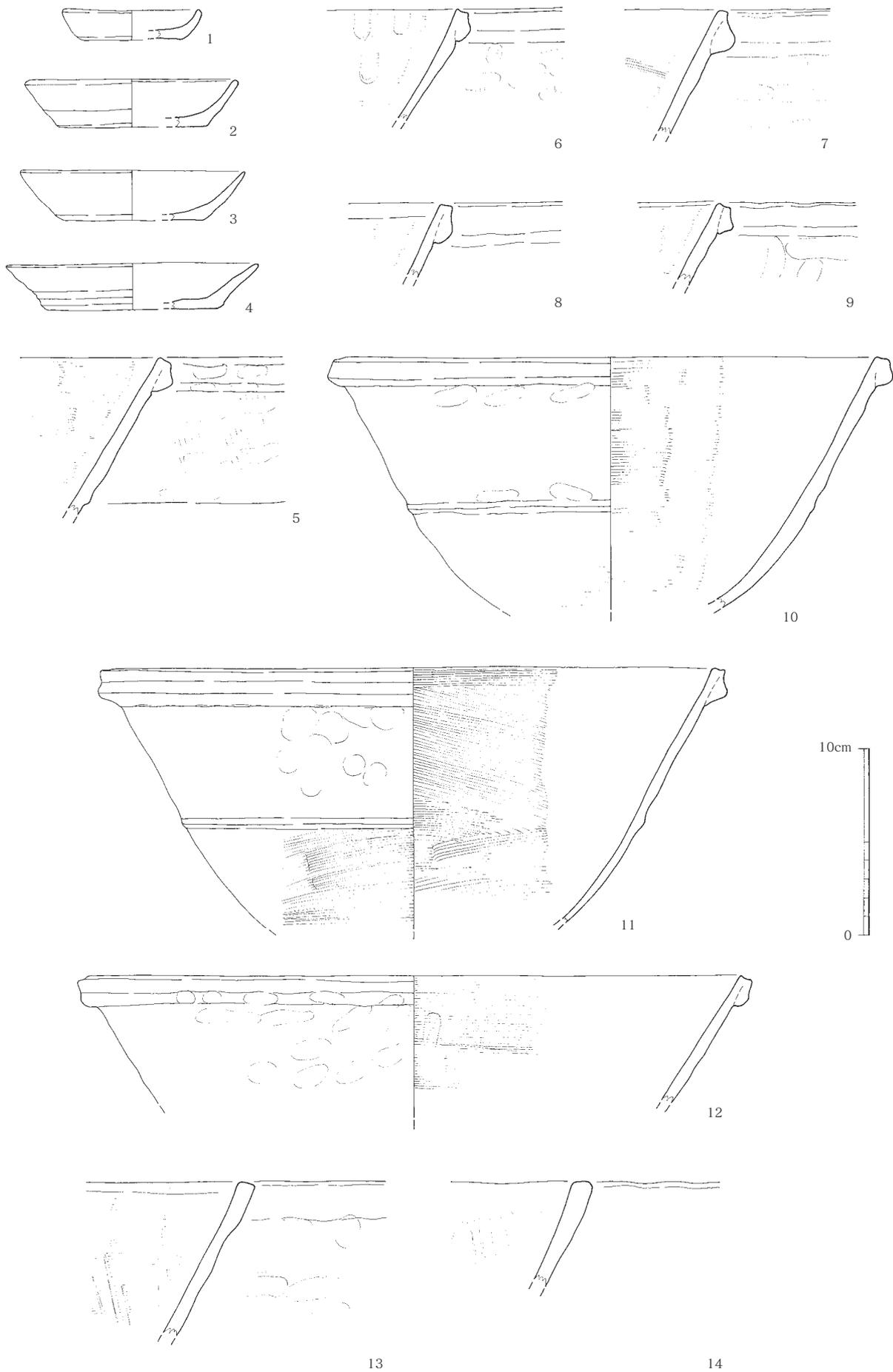
第 116 図 7 区溝 1 - vi、溝 1 - vii 出土遺物実測図 (1/3)

下層溝 1 - vii 出土遺物 (第 118 図)

1 は土師器小皿である。口径 7.4cm。2 ~ 4 は土師器皿である。2 は口径 11.4cm、3 は 12.0cm。4 は 13.4cm。5 ~ 12 は土師質鍋である。口縁部は全て玉縁状に肥厚するもの。内面はハケ目調整、外面はハケ目後にナデ調整を行うものが多い。10 は体部に不明瞭な稜線を有す。口径 30.0cm。11 は体部の稜が突帯状で比較的明瞭である。口径 33.4cm。12 は口径 39.4cm。13 ~ 16 は土師質播鉢である。13 ~ 15 は素口縁で、内面ハケ目、外面ナデ調整を行う。13・15 は外面のナデに先行するハケ目が見られる。15 は口径 30.4cm。16 は底径 12.6cm。17 は瓦質焼成の釜である。体部は偏球形で口縁部は短く直立する。鰐部は水平に短く伸びる。端部はどれも明瞭な稜を有しシャープに仕上げる。肩部には穿孔が 1ヶ所あり、また菊花文の印刻 3つを一ヶ所に固めて行っている。口径 16.0cm、鰐部径 29.6cm。



第 117 図 7区下層溝 1 - i、溝 1 - iv・v 間ベルト出土遺物実測図 (1/3)

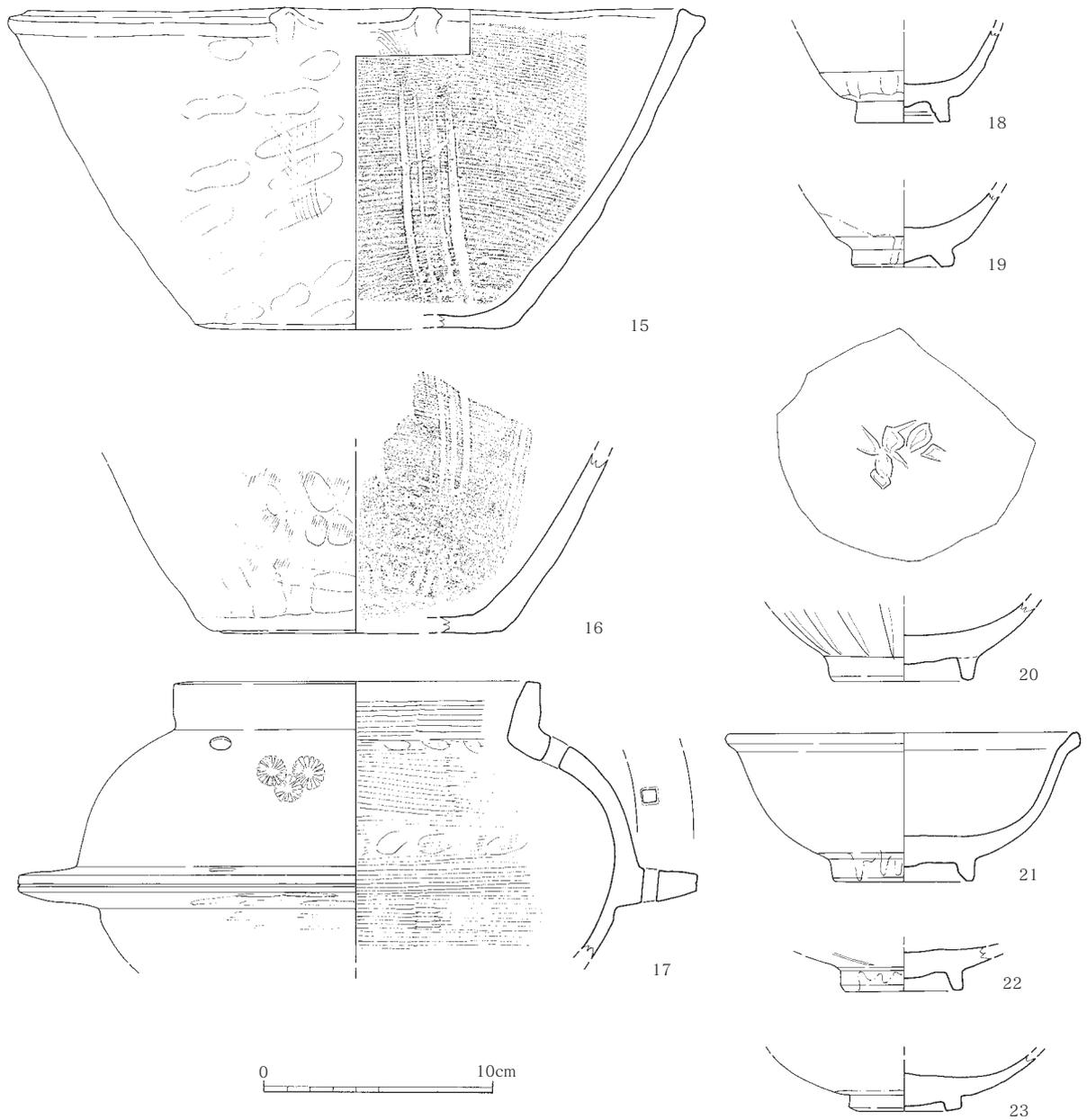


第 118 图 7 区下層溝 1 - vii 出土遺物実測図① (1/3)

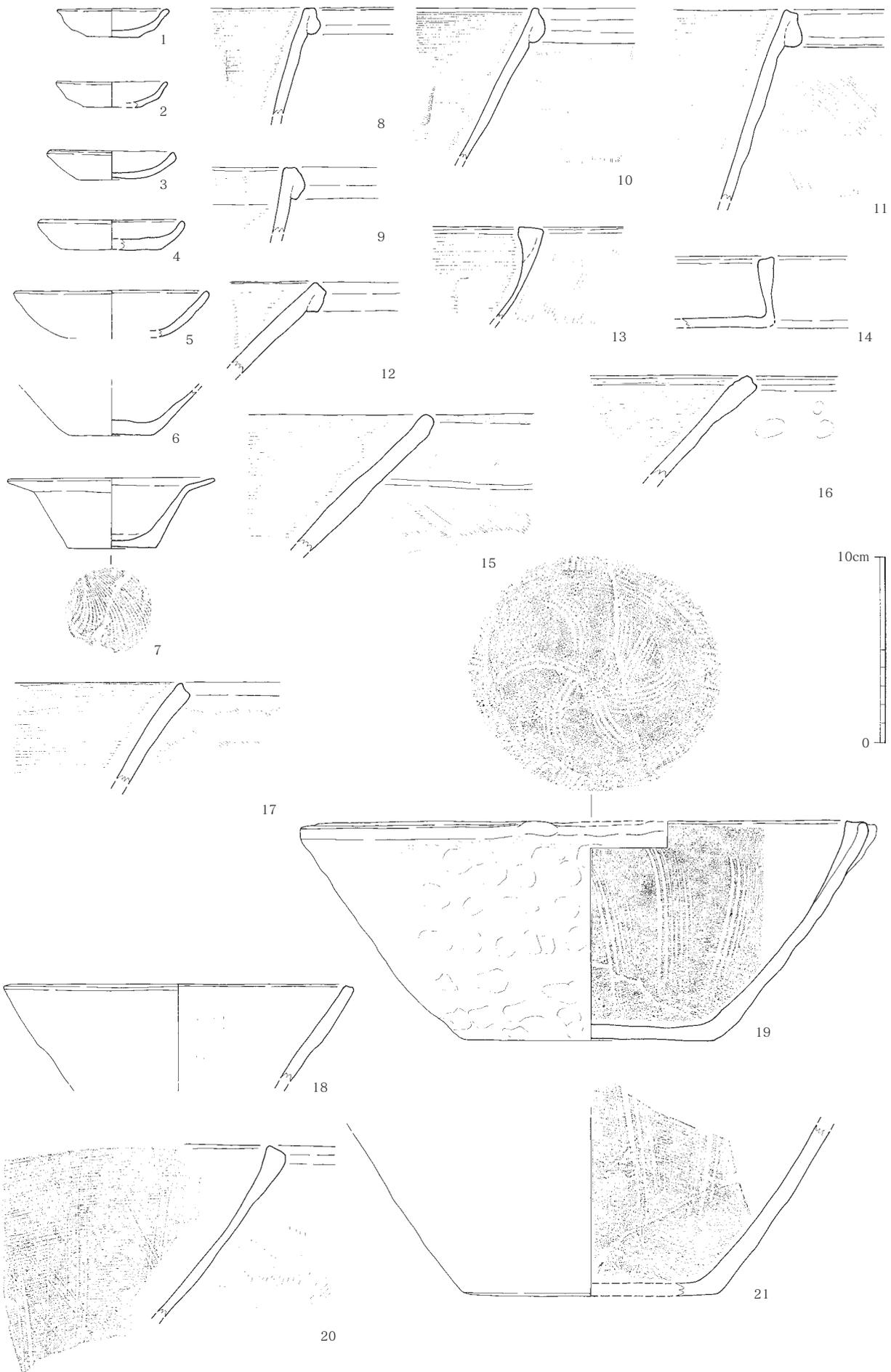
18・19は陶器碗である。18は鉄釉施釉で高台部径4.2cm、19は藁灰釉施釉で高台部径4.6cm。20～23は磁器である。20～22は青磁碗。20は内面見込みに花文、外面は蓮弁を片彫りする。高台部径6.4cm。21は口縁部が外反する器形となる。口径15.6cm。22は高台部径5.5cm。23は白磁碗で遺存する範囲では丸味を帯びた器形となる。高台部径4.8cm。

ピット出土遺物（図版30、第120・121図）

1～4は土師器小皿である。1は口径6.0cm。2は1とほぼ同形となる。3は口径7.0cm。4は口径8.0cm。5・6は土師器皿である。5は口径10.6cm、6は直線的に開いておりやや深い器形となるようである。底径4.4cm。7は鉢状の器形になる。体部は直線的に開き、口縁部が屈曲して開く。口径11.2cm、底径4.8cm。



第119図 7区下層溝1-vii出土遺物実測図② (1/3)



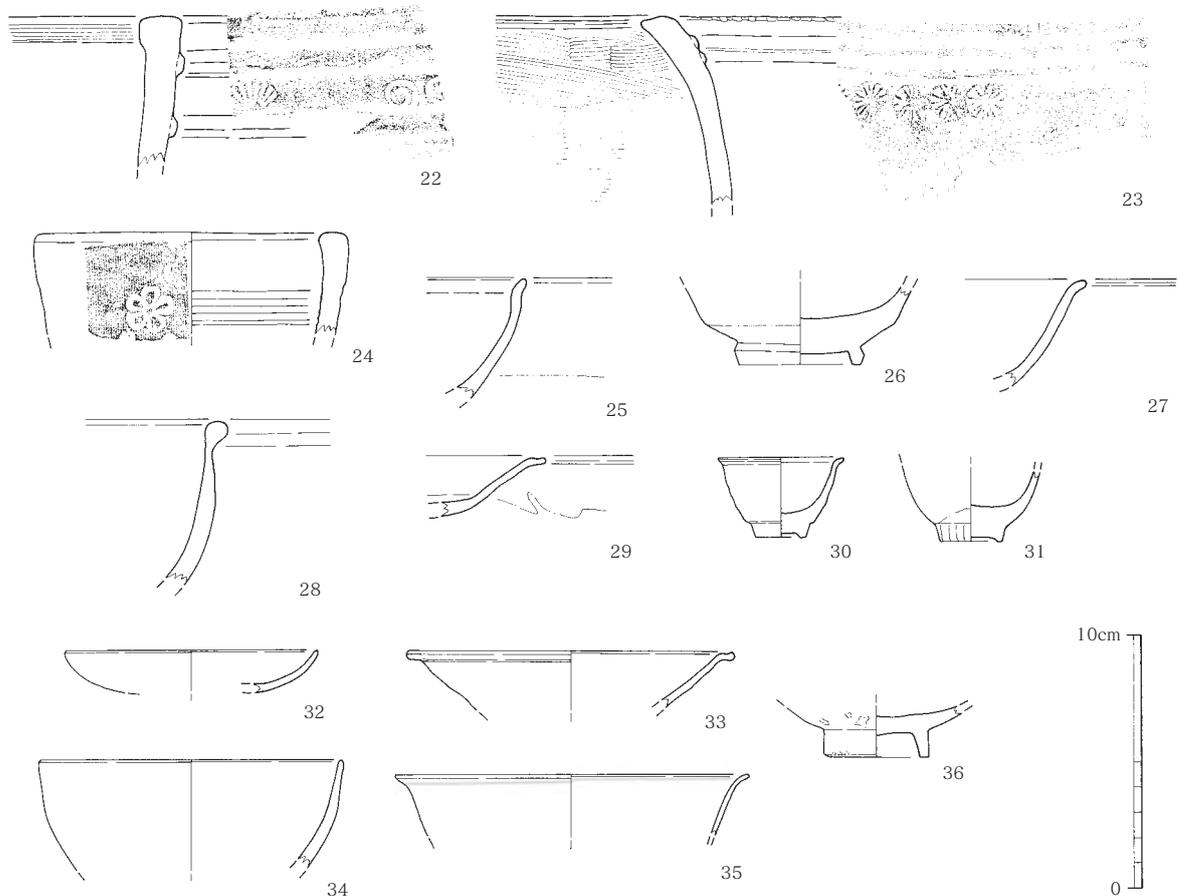
第 120 図 7 区ピット出土遺物実測図① (1/3)

8～11は土師質鍋である。どれも口縁部は玉縁状を呈し、内面ハケ目調整を行う。外面は8・9がナデ、他はハケ目調整。12～17は鉢である。12～16は土師質焼成。12は口縁部が玉縁状を呈す。13は器壁が薄く、口縁端部のみ極端に肥厚し上端が水平面をなす。14は底部と体部の境が明瞭に屈折し、体部が短く直立する形状の鉢である。口縁端部は水平面をなす。調整は内外面ナデ。15・16は素口縁の鉢で、内面ハケ目調整、外面は15がハケ目、16がナデ調整を行う。17は瓦質焼成の鉢である。内外面ハケ目調整。

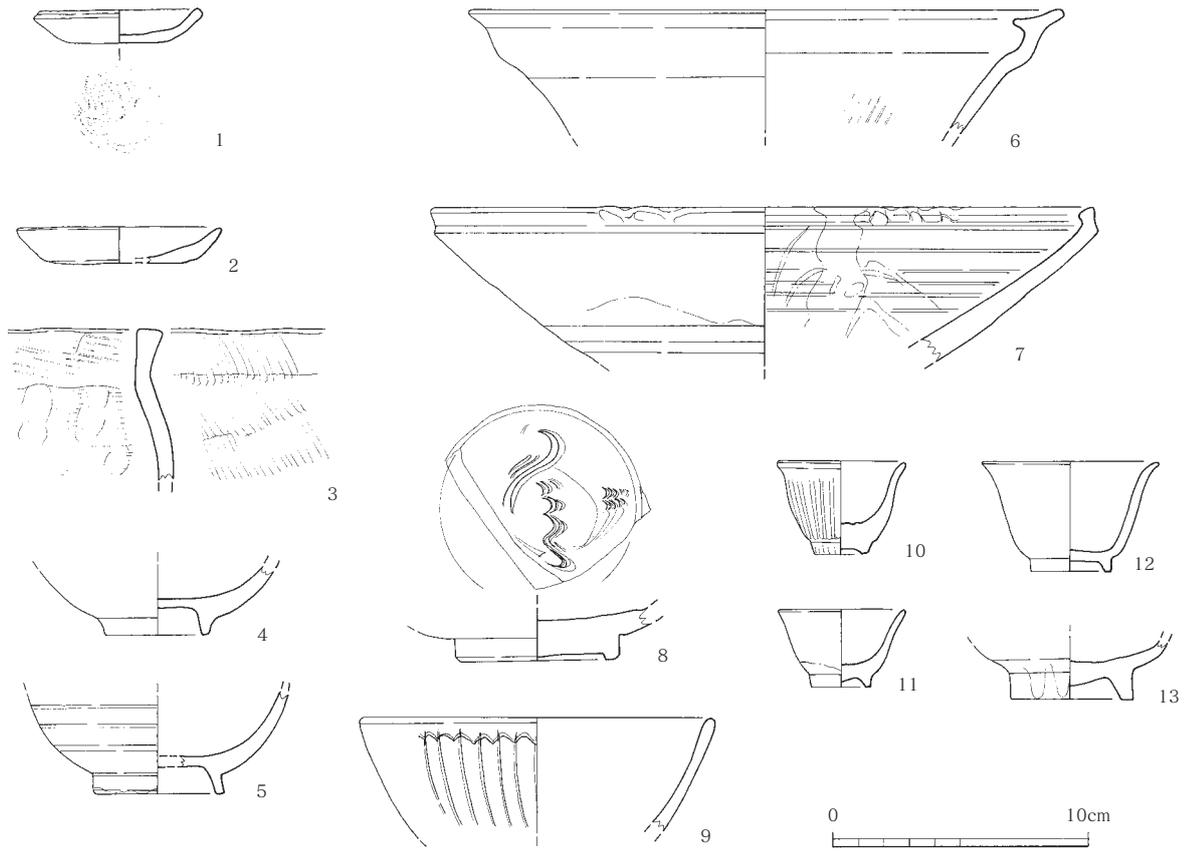
18～21は播鉢である。18・19は土師質焼成。18はやや小型の播鉢で、口径19.0cm。19は内面横ハケ目後、7本1単位の櫛目を施文する。外面はナデ調整で指圧痕が多数残る。口縁端部は丸味を帯びる。口径31.2cm。20・21は瓦質焼成である。20は体部の器壁に対して口縁部が厚くなる。内面の播目は5本1単位。21は底径14.0cm。

22・23は火鉢である。22は土師質焼成で、口縁部が直立する筒状の器形となる。外面口縁部下には2条の突帯が巡り、その間に印刻を行う。23は瓦質焼成で口縁部が内傾し丸味を帯びた器形となる。口縁端部は不明瞭な刻目状に施文する。外面の口縁部下には2条の突帯を巡らせ、その下に印刻を施文する。調整は内面ハケ目、外面ナデ。24は土師質香炉である。体部は筒状を呈し、外面には印刻を行う。口径12.2cm。

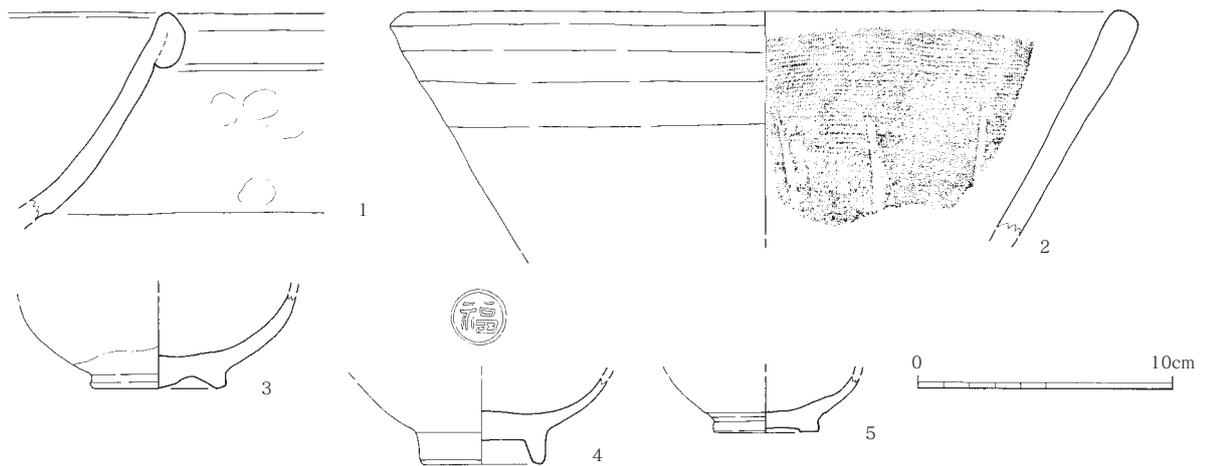
25～29は陶器である。25～27は碗である。25は口縁部を短く外反させる。釉は鉄釉。26は灰釉施釉で高台部径4.8cm。27は口縁部のみ透明釉、それ以外は緑色釉を施釉する。28は鉢で



第121図 7区ピット出土遺物実測図② (1/3)



第122図 7区下層ピット出土遺物実測図 (1/3)



第123図 7区遺構面出土遺物実測図 (1/3)

あろう。口縁端部が肥厚して玉縁状になる。鉄釉施釉。29は皿である。口縁部が大きく外反し、端部がわずかに上を向く。釉は灰釉。

30～36は磁器である。30・31は白磁小坏。30は細身の器形で口縁部が外反する。口径5.0cm。31は高台部外面にケズリ痕が残る。高台部径2.6cm。32・33は皿であろう。32は丸味を帯びた器形となる。口径10.0cm。33は直線的に開く器形で口縁端部のみ水平にまで開く。口径13.0cm。34は丸い器形の青磁碗で、口径12.0cm。35は口縁部が外反する器形となる。口径14.0cm。36は高台部の径が比較的小さく高めのもの。径4.2cm。

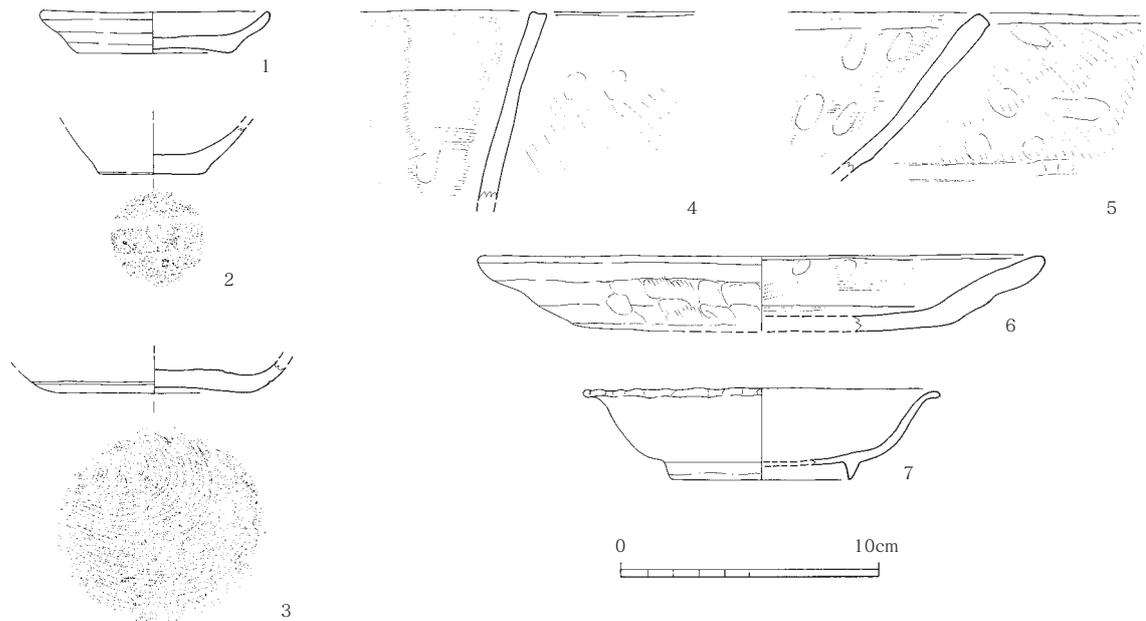
下層ピット出土遺物 (第122図)

1・2は土師器小皿である。1は口径6.7cm、2は口径8.0cm。3は瓦質焼成の釜であろうか。内外面ハケ目調整で端部は水平面をなす。4～7は陶器である。4・5は碗である。どちらも丸味を帯びた器形となる。4は透明釉を施釉する。高台部径4.0cm。5は白黄色釉を施有する。高台部径5.0cm。6は播鉢である。口縁部内面と外面全面に透明釉を施釉する。口径23.4cm。

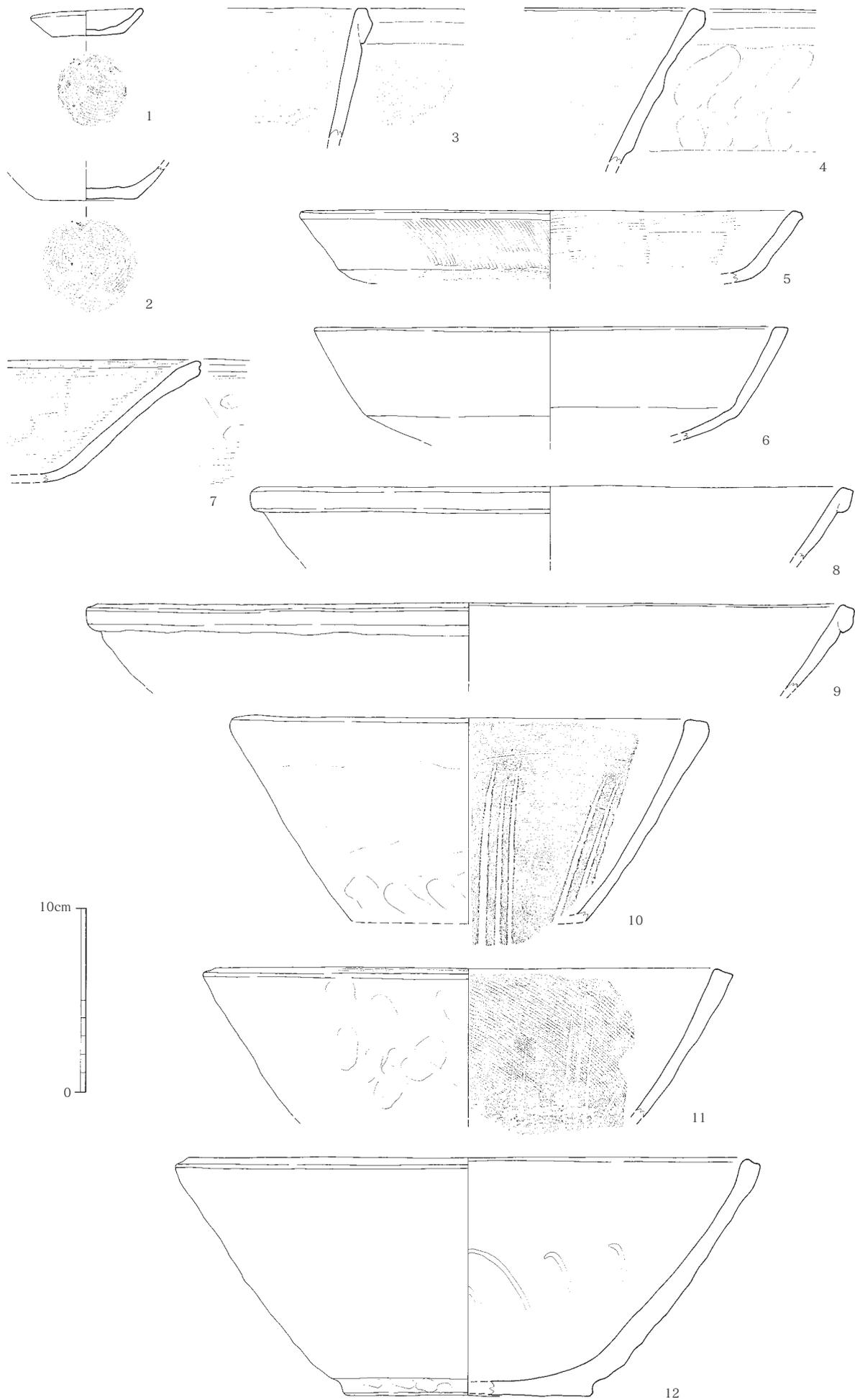
7は鉢である。体部は直線的に開き、口縁部は上方に屈曲する。口縁端部は全面ではなく一部を波状にする。口径26.2cm。

8・9は青磁碗である。8は内面見込みに櫛描き文様を施文する。9は外面に細い花卉状の文様を施文する。口径14.0cm。

10～13は白磁である。10～12は小坏。10は外面に縦方向の平行線を入れる。成形は恐らく型押しであろう。口径5.0cm。11は無文。口径5.0cm。12は口径7.0cm。13は碗であろう。高台部径4.6cm。



第124図 7区下層遺構面出土遺物実測図 (1/3)



第125図 7区トレンチ出土遺物実測図① (1/3)

遺構面出土遺物 (第 123 図)

1 は土師質鍋である。体部はわずかに内湾し、口縁部は玉縁状に肥厚する。内外面ナデ調整で外面には指圧痕が残る。2 は瓦質だが土師質に近い焼成の播鉢である。体部は丸味を帯びず直線的に開き、口縁部は素口縁となる。内面の播目はヘラ描きによる。口径 29.3cm。

3 は陶器碗である。釉は透明釉。高台部径 5.3cm。4 は青磁碗である。内面には「福」の印刻がある。高台部径 5.0cm。5 は白磁碗である。高台部径 4.0cm。

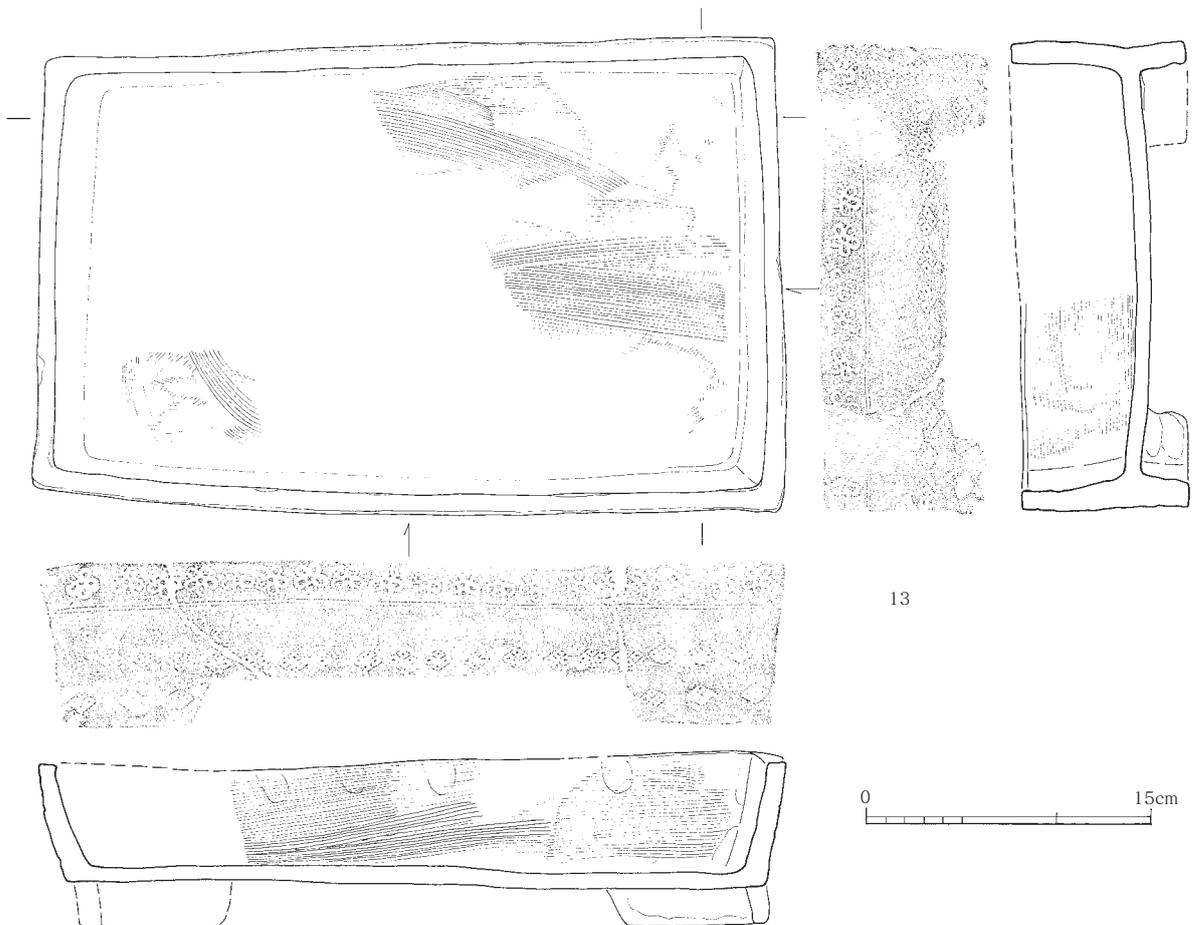
下層遺構面出土遺物 (第 124 図)

1～3 は土師器皿である。1 は口径 9.0cm。2 は底部と体部の境目が明瞭な稜を有す。底径 4.2cm。3 は底径 7.8cm。4・5 は土師質鍋である。どちらも素口縁で、内外面ハケ目調整を行う。6 は土師質鉢であるが、浅い器形で皿に近い形状となる。口径 22.2cm。

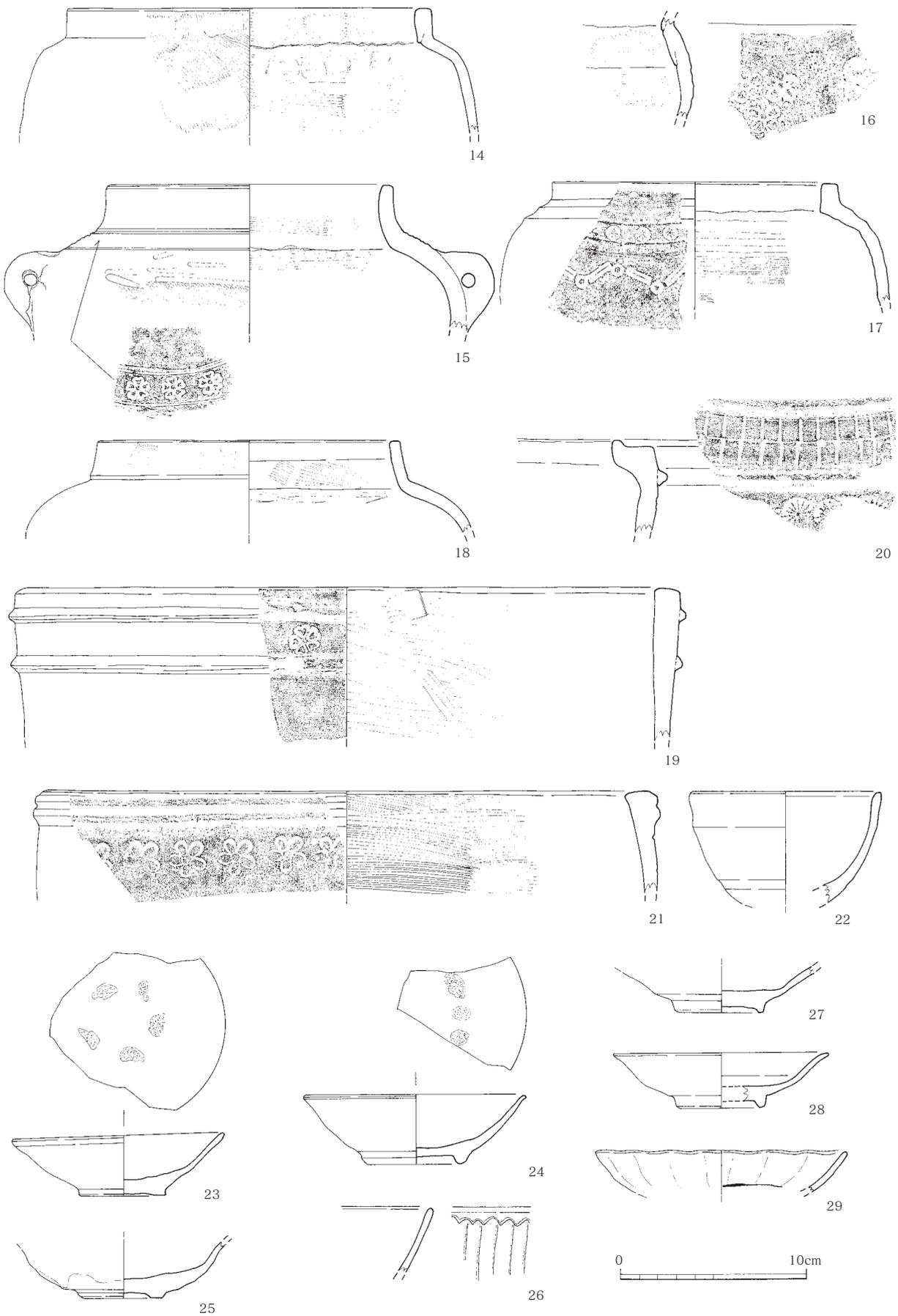
7 は白磁皿である。口縁部は外反し、端部は波状に仕上げる。口径 14.0cm。

トレンチ出土遺物 (第 125～127 図)

1 は土師器小皿である。口径 5.9cm。2 は土師器皿である。底径 5.2cm。3・4 は土師質の鍋である。3 は口縁部を玉縁状に肥厚させる。調整は内外面ハケ目調整。4 は素口縁となる。内面横ハ



第 126 図 7区トレンチ出土遺物実測図② (1/4)



第127図 7区トレンチ出土遺物実測図③ (1/3)

ケ目、外面ナデ調整で指圧痕が明瞭に残る。

5～9は鉢である。5～7は素口縁となる。5は内外面ハケ目調整を行う。口径27.4cm。6は内外面ナデ調整。口径25.8cm。7は瓦質焼成の鉢である。口縁端部に一条の沈線を巡らせる。調整は内外面ハケ目調整。8・9は口縁端部を玉縁状に仕上げるもので、傾きから鉢としたが鍋の可能性も残る。どちらも内外面ナデ調整。8は口径32.0cm、9は口径42.0cm。10～12は土師質播鉢である。10は体部と比較して口縁部が肥厚する。内面は横ハケ目後3本一単位の播目を入れる。外面はナデ。口径26.1cm。11は内面斜ハケ目後に3本一単位の播目を入れる。外面はかすかに斜ハケ目が見える。口径29.0cm。12は内外面ナデ調整で、内面にヘラ状工具による単線の播目を入れる。口径32.0cm、器高13.1cm。

13は箱形の鉢である。土師質焼成で外面には炭化物が付着するので、火鉢として使用したものか。内面はハケ目調整、外面は口縁部下に一条の沈線を巡らせ、その上位に一行、下方に二列の印刻を施文する。脚は四隅に付される。長軸長39.2cm、短軸長25.0cm、器高9.4cm。

14～18は鍋である。14～16は土師質焼成。14はあまり肩が張らず、頸部の締まりは弱く口縁部は短く直立する。調整は内外面ハケ目調整を行う。口径19.4cm。15は丸味を帯びた器形で口縁部は外反気味に立ち上がる。肩部には花文の印刻を行い、環状の耳部が付けられる。口径15.4cm。16は肩部の破片で、3つの花文の印刻が施文される。17・18は瓦質焼成である。17は肩部が丸味を帯び口縁部は短く直立する。口縁端部の稜はシャープである。肩部には二列の印刻を行う。口径15.4cm。18は丸く張った肩部を有し口縁部は内傾して立ち上がる。口径16.0cm。

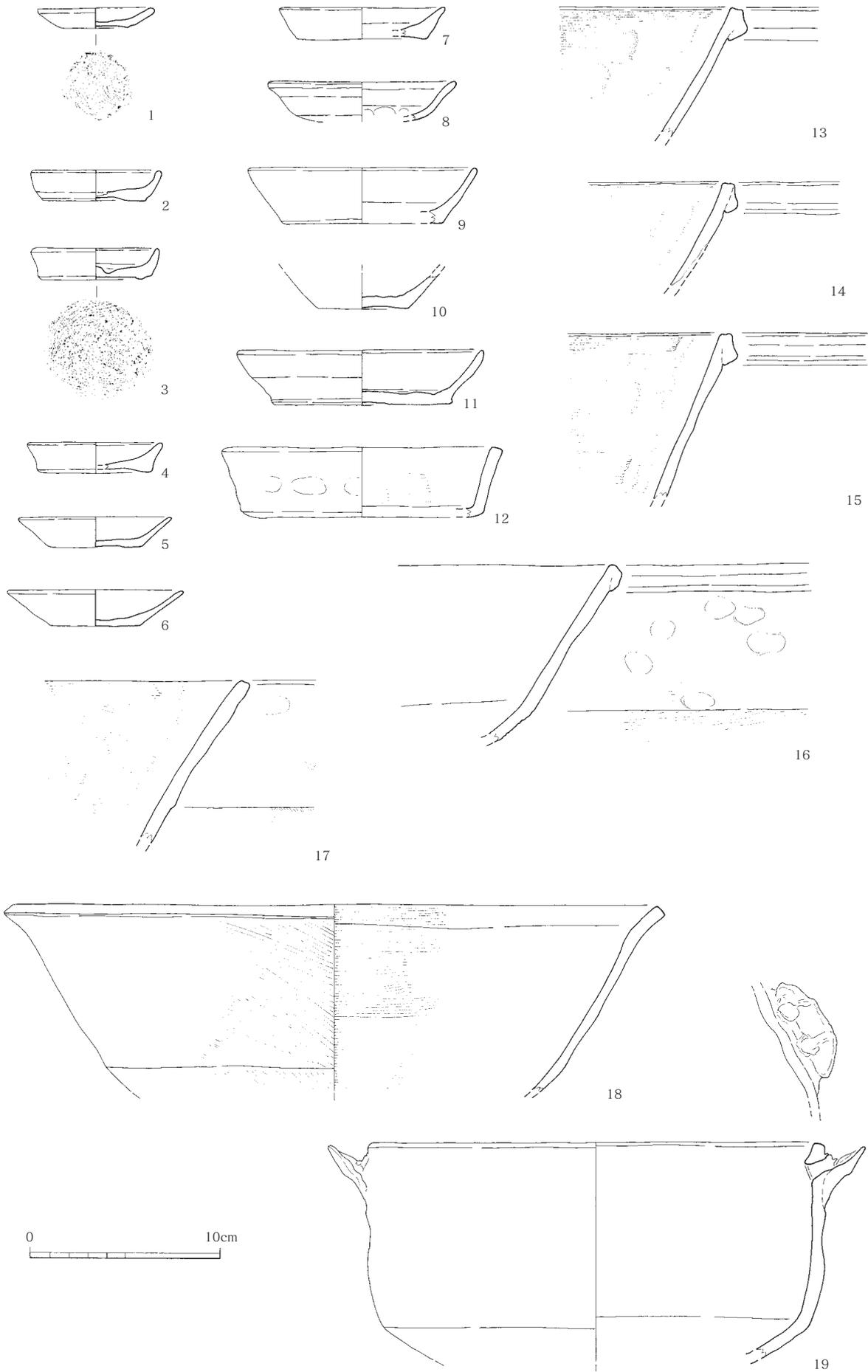
19～21は火鉢である。19は土師質焼成で、口縁部が直立し筒状の器形となる。外面口縁部下に二条の突帯を巡らせ、その間に印刻を行う。口径33.6cm。20・21は瓦質焼成である。20は口縁部が内側に屈折し、端部のみ上方に立ち上がる。口縁部上面と外端部には縦方向に刻目を施し、その下には三角突帯を巡らせ、さらにその下に印刻を行う。21は口縁部がやや内傾し、端部は丸く肥厚する。その端部外面には一条の沈線を巡らせる。口縁部下には花文の印刻を一行行う。口径30.8cm。

22～25は陶器である。22は天目茶碗である。口径10.0cm。

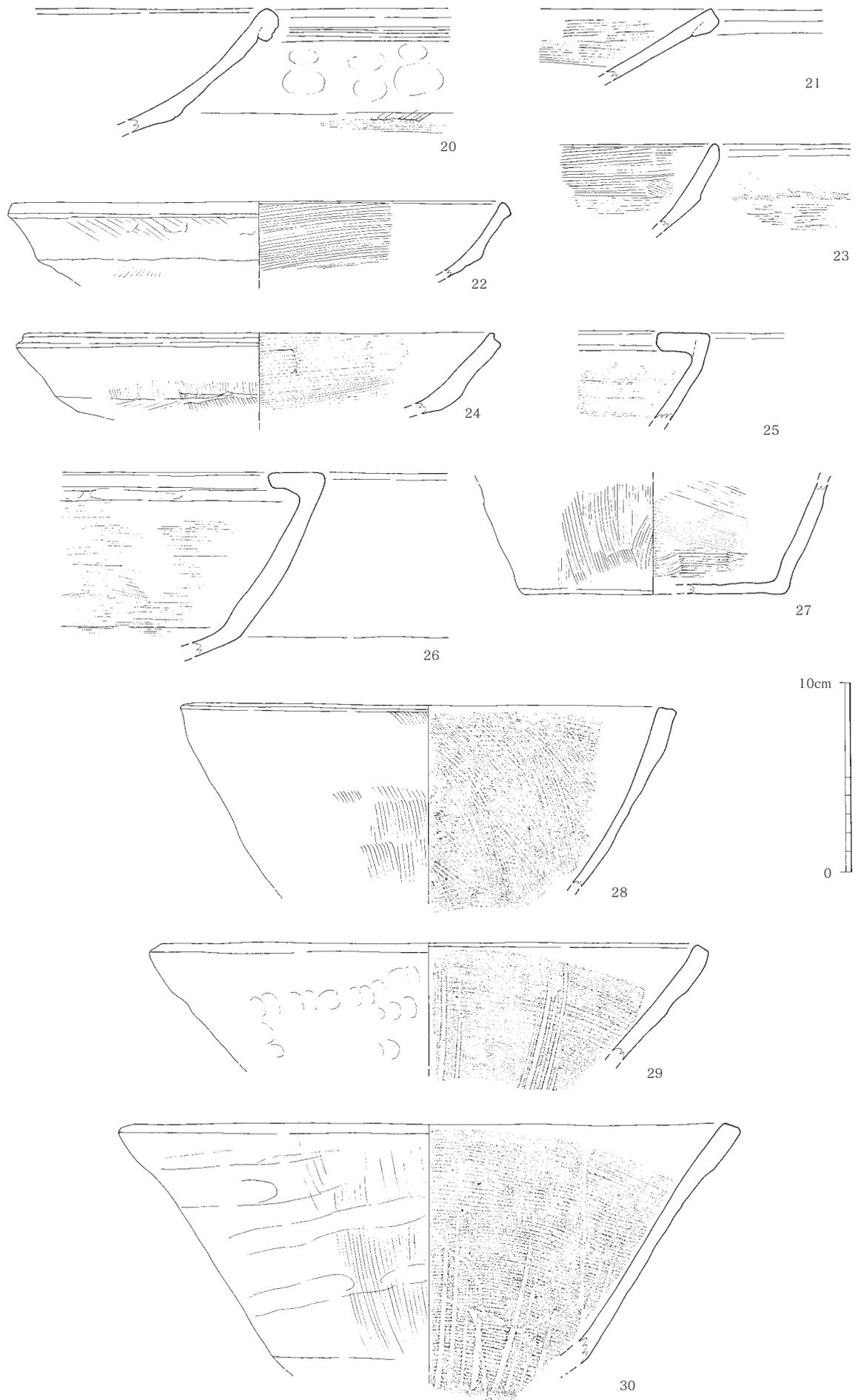
23～25は皿である。23・24は直線的に開く器形のもの。どちらも内面には目跡が明瞭に残る。23は灰釉施釉で口径11.4cm、24は藁灰釉施釉で口径12.0cm。25は口縁部が反転して外反する器形となるものである。釉は灰釉施釉。高台部径4.8cm。26・27は青磁である。26は外面に細い蓮弁を施文する碗である。27は皿であろうか。内面見込みの釉を剥ぎ取る。高台部径5.0cm。28は白磁皿である。28は体部上半が外反する器形となる。口径11.6cm。29は染付皿である。型押し整形で花卉状を呈す。口径13.5cm。

その他の出土遺物（図版30、第128～131図）

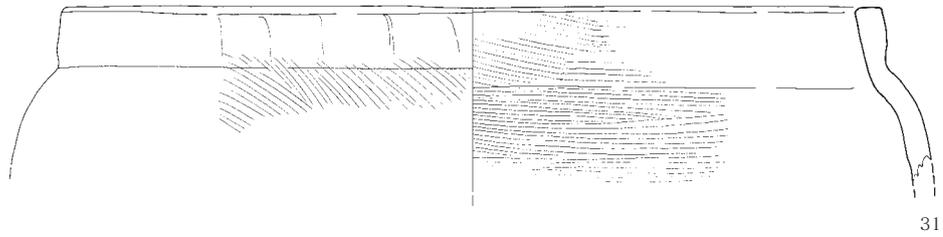
1～7は土師器小皿である。1は口径6.2cm、器高は1.1cmで浅い器形となる。2・3は体部が立ち気味に短く伸びる。2は口径7.0cm。3は口径6.8cm。4は体部があまり開かず外反気味に短く伸びる。口径7.2cm。5・6は体部がやや長く直線的に開く器形となる。5は口径8.0cm、6は口径9.4cm。7は口径9.0cm。8～12は土師器皿である。8は体部が外反気味に開く器形となる。口径10.0cm。9は口径12.2cm、底径8.4cm。10は底径4.8cm。11は口径13.2cm。12は異



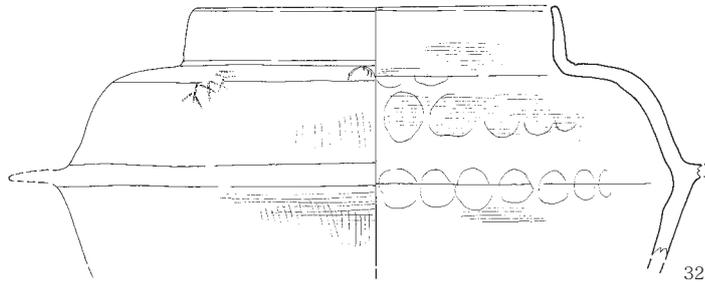
第128図 7区その他の遺物実測図① (1/3)



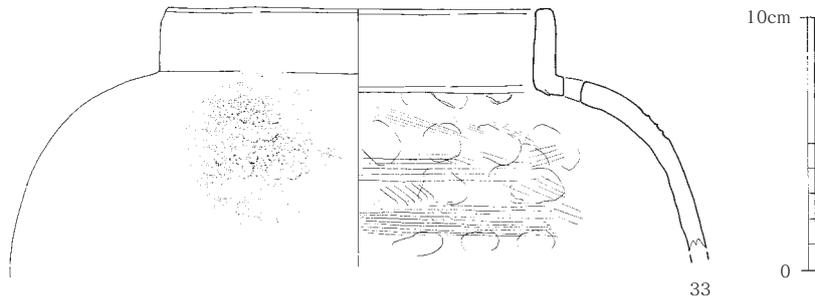
第 129 図 7区その他の遺物実測図② (1/3)



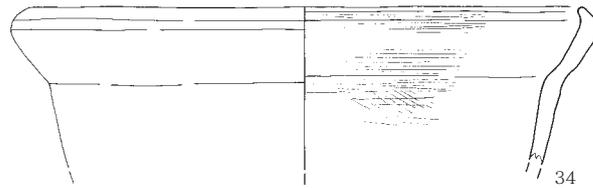
31



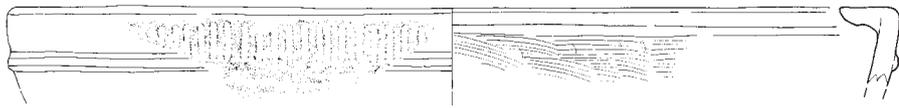
32



33



34



35



36

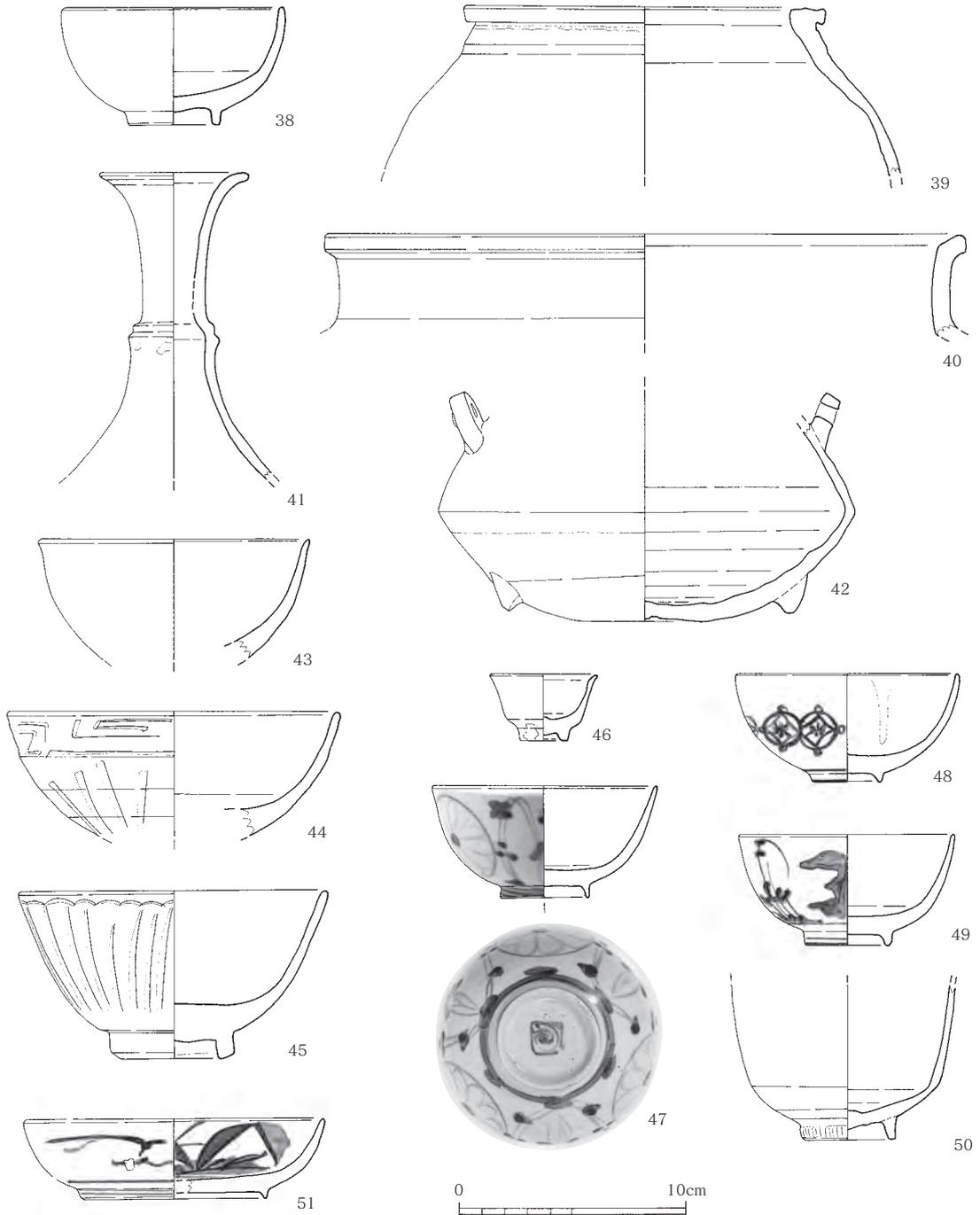


37

第130図 7区その他の遺物実測図③ (1/3)

質な形状の皿である。体部があまり開かず直線的に伸びている。端部は面をなす。内面ハケ目、外面ナデ調整。口径 15.0cm。

13～19は鍋である。13～16は土師質焼成で口縁部を玉縁状に肥厚させるものである。内面は横ハケ目、外面はナデ調整を行い、16は外面にナデに先行する横ハケ目が残る。17・18は土師質焼成の素口縁の鍋である。17は内面横ハケ目、外面ハケ目後ナデ調整。18は焼成がやや瓦質に近い。内面横ハケ目、外面斜ハケ目調整を行う。口径 34.8cm。19は瓦質焼成の耳鍋である。体部は直立しており、口縁部直下に耳を添付する。耳部の直上に二ヶ所穿孔を行う。口径 22.2cm。



第 131 図 7区その他の遺物実測図④ (1/3)

20～27は鉢である。20・21は端部を玉縁状に肥厚させる土師質焼成の鉢で、20は体部の屈曲部に不明瞭な段を有す。22～24は素口縁のもので、22・23は土師質焼成、24は瓦質焼成。22・23は外面口縁部下に稜を有す。調整は内面ハケ目、外面ハケ目後ナデ。22は口径23.6cm。24は端部に幅広の沈線を巡らせる。調整は内面ハケ目、外面ハケ目後ナデ。口径25.6cm。25・26は口縁部を内側に屈折させる瓦質焼成の鉢である。どちらも内面横ハケ目、外面ナデ調整を行う。27は瓦質焼成の鉢底部片。内外面ハケ目調整で底径14.0cm。

28～30は土師質焼成の挿鉢である。28は体部に対して口縁部付近が肥厚する。端部は明瞭な面をなす。口径26.2cm。29は外面ハケ目調整で指圧痕が多く残る。口径29.6cm。30は口縁部が外反気味に開き端部は明瞭な面をなす。調整は内外面ハケ目調整で、外面には長い指ナデ跡が残る。口径33.0cm。

31～33は釜である。31は土師質焼成で、頸部の締まりが弱く口縁部は内傾して短く伸びる。端部は水平面をなす。口径30.2cm。32・33は瓦質焼成である。32は肩が張った器形で口縁部はやや器壁が薄く、内傾気味に伸びる。調整は内外面ともハケ目後にナデ調整を行い、口縁部と肩部の境目には一条の沈線を巡らせ、また肩部には櫛状工具の刺突による綾杉状の文様を施文する。口径14.4cm。33は肩が丸く張り、口縁部は直立する。肩部には花文の印刻を一ヶ所に三個施文する。口径15.2cm。34は口縁部が開き、端部が内側に伸びる異質な形状のもので、鉢または鍋の類か。内面ハケ目、外面ナデ。外面に被熱の痕跡はない。口径23.0cm。

35～37は火鉢である。35は土師質焼成で、口縁端部が内側に長く伸びる器形となる。外面口縁部下には一条の突帯を巡らせ、その上位には縦方向の刻目を施文する。内面ハケ目、外面ナデ調整。口径35.0cm。36・37は瓦質焼成である。36は口縁端部が肥厚し上面が水平面をなす。内面横ハケ目、外面は二条の突帯を巡らせ、その上位には印刻、下位にはへら状工具押圧による刻目を施文する。37は底部片である。外面に二条の突帯を巡らせ、その間に印刻を行う。内面ハケ目、外面ナデ調整。底径35.0cm。

38～42は陶器である。38は灰釉施釉の陶器碗である。体部は半球形を呈し、釉は高台部畳付のみ露胎となる。口径9.6cm、高台部径4.0cm。39は褐色釉施釉の壺である。肩部から口縁部にかけて直線的に内傾し、端部のみ強く外反する。口径16.0cm。40は白色釉施釉の壺である。頸部は直立し端部は外折する。口径28.4cm。41は仏花器であろう。口縁部と裾部が大きく開いた長い鼓状を呈す。上半は褐色釉、下半は透明釉を施釉し、胎土は非常に精良である。口径6.6cm。42は褐色釉施釉の土瓶である。底部は丸味を帯び体部中に稜線を有し、上位は直線的に内傾する。底部には小さな脚が付く。

43～51は磁器である。43～45は青磁碗である。43は深い器形の碗である。口径12.0cm。44は外面口縁部下に雷文、その下に縦方向の沈線を施文する。口径14.8cm。45は外面に細い蓮弁を片彫りする碗である。口径7.8cm、器高7.5cm。46は白磁小坏である。細身の器形で口縁部がわずかに外反する。口径4.8cm。47～50は染付碗である。47は全体的に貫入が多い。口径10.0cm。48・49は丸味を帯びた器形となる。48は口径10.0cm、49は口径9.8cm。50は底部と体部の境目が屈折しており不明瞭な稜を有す。体部はあまり開かず直線的に伸びている。高台部径4.2cm。51は染付皿である。体部は丸味を有しあまり開かず立ち上がる。高台部は低くて小さい。口径13.4cm、高台部径8.2cm。

(9) 備蓄銭の調査

備蓄銭発見の経緯 (図版 24、第 132 図)

遺跡を調査していた 2008 年 10 月 30 日に道路建設用地の地権者の田中さんが現場にこられ、昔発見した備蓄銭を網取遺跡のそばに再埋納した旨の話を伺った。備蓄銭は田中さんの祖母が裏山の斜面に炭焼窯を掘削中に発見したとのこと。当時、学校の先生に見てもらい、その後、郷土誌那珂川に掲載されたが、裏山に祠を建てて再度埋納したとのことだった。

郷土誌那珂川には「網取の古貨」と題して一文が掲載されている。すこし長くなるが簡略に引用する。『網取という部落の一角で昭和 30 年 8 月 23 日、当地の田中力男が珍しい古銭を発掘した。縦横とも 40cm ほどの素焼きの壺に入れて、地下約 60cm に埋もれていた。100 枚ずつ繋がれていて約 3,000 枚（正確には 3,044 枚）重さにして 3 貫匁あった。古貨の種類は 20 種、一部朝鮮のものを除き、他は悉く中国の古貨であった。一番古いのは唐時代の開元通寶、次に宋時代の太平通寶がある。山田チエ子氏（当時那珂川町の教員）によると、鎌倉時代から室町時代にかけてこのあたりに寺院が存在したことを推測している。その後、田中家では故あって、古銭を元のところへ埋め戻された』とある。

このような経緯の後、地権者から出来れば県か町に寄贈したい旨の希望があり、2008 年 12 月 15 日、再埋納個所が県が調査した網取遺跡の調査地点に隣接していたことから、那珂川町教育委員会、地権者、県文化財保護課伊崎俊秋らによる立会いのもとで岡寺未幾、佐々木隆彦が重機により発掘調査を実施した。

地権者による再埋納は、網取遺跡のある丘陵直下の平坦面の奥である。調査の結果、コンクリート製の井戸枠を地下に埋め、中に磁器製の火鉢（肥前焼）に古銭を詰め込み染付け皿で蓋をしてビニールで包んだ状態で埋納し、その上に発見当時出土した素焼きの壺を置き、周囲に瓦片や円礫を充填した状態で、更にはその上にコンクリートで台座を造り石仏を奉っていた。

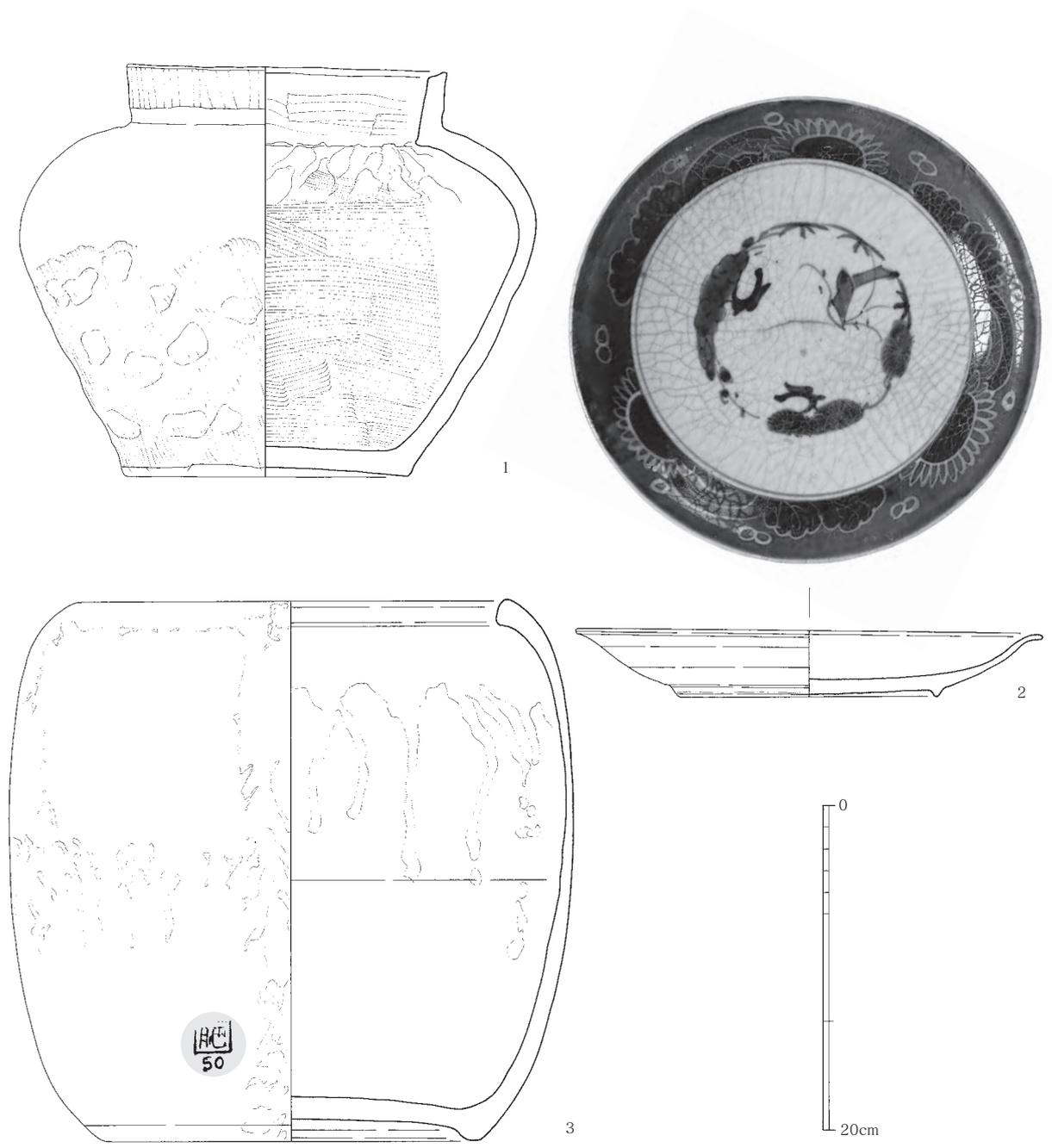
備蓄銭の容器 (図版 25、第 133 図)

古銭が納められていた磁器製の火鉢は白磁で新しく「肥」の印紋がある。蓋に使われた染付け皿は 17 世紀中頃のものである。口縁部は平坦に外反させ径が 21.2cm、径 12.0cm の低い高台が付く。口縁部内面は結界を境に三箇所に半菊文を配し、見込部には環状松竹梅文を巡らす。全面に貫入が入る。

素焼き壺は、器壁の厚い肩の張った直口壺で、大き目の上げ底をなす。口唇部は内傾し、口縁外面は縦方向の磨き状のナデと横ナデ、肩部はナデ、下半は指圧痕とハケで仕上げる。内面も指圧痕とハケである。この壺も染付け皿同様 17 世紀代の所産と考えられるが、本来の用途は骨壺の可能性が考えられる。口径は 14.6cm、底径 13.0cm、器高 18.9cm で胴部最大径は 23.5cm。壺には発見当時の様子が墨書で克明に書かれており、それによると『昭和卅年八月廿一日、田中家當代力男婦ヨシエ當家上山林ヨリ発掘。本土器ノ中永樂通寶外二十数種類三千枚入納シアリ、発掘に當り本器破損為、別器ニ納メ供養ヲ施シ再埋納 併 地藏菩薩祭』とある。

以上のことから、昭和 30 年に発見した時に、古銭が納められていた素焼きの壺が破損したため、別器、つまり磁器製の火鉢に入れ再埋納したことがわかる。また、出土した古銭の孔に針金が錆着していた。備蓄銭は、本来藁紐の銭縷で繋げているのが通常であるが、この時、銭縷が腐食してい

たので針金を使用したものであろう。このことから指摘できることとしては、埋納銭で最古の初鑄年が621年で、最新が世高通寶の1461年である。つまり、この古銭と埋納容器との年代差が問題である。通常、中世の備蓄銭の出土例では、古備前の甕や壺か常滑の甕、曲物、銭縵で直埋納などの例がある。ここでは中世頃に埋納し、最初に発見した江戸時代頃に、古備前か常滑の焼き物から素焼きの壺に入れ替え何らかの理由で再埋納し、昭和30年に再発見されてその後再々埋納されたものと考えるのが自然であろう。腐食しやすい曲物か銭縵での直埋納では、古銭の遺存状態が良すぎると考えるからである。



第133図 備蓄銭容器実測図 (1/4)

第2表 備蓄銭一覧①

NO	古銭名称	国名	初 鑄 年	日本年代	書 体	総数と書体ごとの枚数	備 考
1	開元通寶	唐	621(武徳4年)	古墳時代		132	背に下月・孕(はらみ)星・上月・左下月がある
2	乾元重寶	唐	758(乾元元年)	奈良時代		3	
3	周通元寶	後周	955(顯徳2年)	平安時代		1	背：下甲文
4	唐国通寶	南唐	959(中興2年)	〃	篆書	2	真書・篆書・隸書がある
5	宋通元寶	北宋	960(建隆元年)	〃		1	背：下甲文
6	太平通寶	〃	976(太平興国元年)	〃		20	
7	淳化元寶	〃	990(淳化元年)	〃	真・行・草	9(真4・行3・草2)	太宗年に鑄る
8	至道元寶	〃	995(至道元年)	〃	真・行・草	23(真6・行9・草8)	
9	咸平元寶	〃	998(咸平元年)	〃	真書	26	真宗年に鑄る、真書のみ
10	景德元寶	〃	1004(景德元年)	〃	〃	23	書体は真書のみ
11	祥符通寶	〃	1008(大中祥符元年)	〃		25	磨輪銭1枚
12	祥符元寶	〃	1008(大中祥符元年)	〃		32	磨輪銭1枚
13	天禧通寶	〃	1017(天禧元年)	〃	真書	37	書体は真書、磨輪銭1枚
14	天聖元寶	〃	1023(天聖元年)	〃	真・篆	70(真42・篆28)	仁宗が天聖と改元
15	明道元寶	〃	1032(明道元年)	〃	篆書	3	書体は真書と篆書がある
16	景祐元寶	〃	1034(景祐元年)	〃	真・篆	16(真9・篆7)	
17	皇宋通寶	〃	1038(寶元元年)	〃	〃	194(真111・篆83)	最も多く渡来
18	至和通寶	〃	1054(至和元年)	〃	篆書	1	真書と篆書、背錯範
19	至和元寶	〃	1054(至和元年)	〃	真・篆	8(真6・篆2)	至和通寶も同年鑄造
20	嘉祐元寶	〃	1056(嘉祐元年)	〃	〃	23(真13・篆10)	嘉祐通寶も同年鑄造
21	嘉祐通寶	〃	1056(嘉祐元年)	〃	〃	35(真26・篆9)	篆書に磨輪銭1枚
22	治平元寶	〃	1064(治平元年)	〃	〃	37(真16・篆21)	英宗が改元治平通寶も鑄る
23	治平通寶	〃	1064(治平元年)	〃	〃	3(真2・篆1)	背錯範
24	熙寧元寶	〃	1068(熙寧元年)	〃	〃	152(真90・篆62)	皇宋・元豊通寶の次に多い
25	元豊通寶	〃	1078(元豊元年)	〃	行・篆	187(行116・篆72)	1078～1086年に鑄造
26	元祐通寶	〃	1086(元祐元年)	〃	〃	112(行60・篆52)	背に星1点、磨輪銭1枚
27	紹聖元寶	〃	1094(紹聖元年)	〃	〃	58(行33・篆25)	磨輪銭2枚
28	元符通寶	〃	1098(元符元年)	〃	〃	21(行7・篆14)	稀に楷書あり
29	聖宋元寶	〃	1101(建中靖国元年)	〃	〃	70(行36・篆34)	書体は行書と篆書あり

第2表 備蓄銭一覧②

NO	古銭名称	国名	初 鑄 年	日本年代	書 体	総数と書体ごとの枚数	備 考
30	大観通寶	北宋	1107(大観元年)	平安時代		29	小平・折二・当三・五・十の種類がある
31	政和通寶	"	1111(政和元年)	"	隸・篆	76(隸45・篆31)	
32	宣和通寶	"	1119(宣和元年)	"	隸・篆	11(隸6・篆5)	小平銭と折二銭がある
33	正隆元寶	金	1157(正隆2年)	"		5	精巧なつくりの銭
34	乾道元寶	南宋	1165(乾道元年)	"	真書	2	真書と篆書あり、磨輪銭
35	淳熙元寶	"	1174(淳熙元年)	"	"	8	背に月星3・月2・十三・十四・十六、篆書もある
36	大定通寶	金	1178(大定18年)	"		7	5枚は無背、2枚は申か酉
37	紹熙元寶	南宋	1190	"		3	背文字は元から五までである
38	慶元通寶	"	1195	鎌倉時代		1	背下に四?元~六までである
39	嘉泰通寶	"	1201	"		2	背に元と三
40	開禧通寶	"	1205	"		1	背に二の文字
41	嘉定通寶	"	1208	"		10	背に無・二・五・九・十・十一・十二、背錯範1
42	紹定通寶	"	1228	"		5	折二銭出土例博多遺跡群 背文字：元・四・五・六
43	端平元寶	"	1234(端平元年)	"		1	背文字は元
44	嘉熙通寶	"	1237	"		1	背文字は不明
45	淳祐元寶	"	1241(嘉熙5年)	"		4	背文字は二・三・八・十
46	皇宋元寶	"	1253	"		4	
47	景定元寶	"	1260(景定元年)	"		4	背文字は元~三がある
48	咸淳元寶	"	1265(咸淳元年)	"		1	背は五、折二銭(磨輪銭)
49	至大通寶	元	1310(至大3年)	"		7	7の内2個は磨輪銭
50	大義通寶	漢	1360(至正20年)	南北朝時代		1	
51	大中通寶	明	1361(至正21年)	"		6	出土銭はすべて無背、裏文字は十種類ある
52	洪武通寶	"	1368(洪武元年)	"		589	背文字：無473・浙46・一銭53・福14・桂1・北平2
53	永楽通寶	"	1408(永楽6年)	室町時代		692	最も多い古銭
54	朝鮮通寶	朝鮮	1423	"	真書	66	書体は真書と八分書がある
55	宣徳通寶	明	1433(宣徳8年)	"		90	
56	大世通寶	琉球	1454	"		1	明の永楽通寶の再利用銭
57	世高通寶	"	1461	"		2	永楽通寶の永楽を削り鑄出す

第3表 備蓄錢法量一覽①

NO	古錢名称	錢径 (A)・(B)mm		内径 (A)・(B) mm		錢 厚 mm	量目 g
1-1	開元通寶	24.24	24.37	20.30	20.05	1.03 ~ 1.12	3.23
1-2	〃	24.97	24.92	21.77	21.44	1.18 ~ 1.26	3.66
1-3	〃	25.24	25.19	21.03	21.03	1.21 ~ 1.27	3.72
1-4	〃	24.16	24.37	19.77	19.68	0.96 ~ 1.00	3.04
2	乾元重寶	24.15	24.28	20.51	19.97	1.06 ~ 1.21	3.06
3	周通元寶	23.95	24.08	18.57	19.07	1.12 ~ 1.35	3.34
4	唐国通寶	24.33	24.26	19.72	18.79	0.87 ~ 0.95	2.66
5	宋通元寶	24.01	23.99	19.68	19.36	1.10 ~ 1.31	3.78
6	太平通寶	24.05	24.03	18.93	19.43	0.81 ~ 0.92	2.42
7-1	淳化元寶	24.56	24.88	18.34	18.86	1.09 ~ 1.14	3.58
7-2	〃	24.28	24.60	18.26	18.26	1.04 ~ 1.18	3.40
7-3	〃	22.99	22.92	18.63	18.86	0.92 ~ 1.04	2.60
8-1	至道元寶	23.58	23.80	18.90	19.03	1.15 ~ 1.23	3.40
8-2	〃	24.78	24.71	17.40	18.30	0.98 ~ 1.15	3.69
8-3	〃	24.56	24.44	18.54	18.28	0.93 ~ 1.04	3.21
9	咸平元寶	24.72	24.85	18.27	18.27	1.13 ~ 1.19	4.00
10	景德元寶	24.29	24.30	19.14	19.14	1.18 ~ 1.32	3.96
11-1	祥符通寶	21.95	21.76	19.65	19.14	1.11 ~ 1.18	2.32
11-2	〃	24.16	24.27	19.36	19.36	1.05 ~ 1.06	3.35
12-1	祥符元寶	24.75	24.83	18.02	17.77	0.96 ~ 1.11	3.24
12-2	〃	21.97	22.08	19.36	19.01	1.00 ~ 1.05	2.15
13-1	天禧通寶	22.40	22.56	20.22	19.96	0.93 ~ 1.08	2.43
13-2	〃	24.71	24.89	19.18	19.18	1.44 ~ 1.52	4.99
14-1	天聖元寶	24.29	24.31	19.83	20.38	1.02 ~ 1.09	3.06
14-2	〃	24.49	24.38	20.02	20.21	1.02 ~ 1.14	3.42
15	明道元寶	23.99	24.18	20.40	20.77	1.08 ~ 1.33	3.72
16-1	景祐元寶	24.74	24.67	20.96	20.61	0.97 ~ 1.18	3.20
16-2	〃	25.32	25.38	20.62	20.63	0.98 ~ 1.15	3.03
17-1	皇宋通寶	24.30	24.38	18.14	17.68	1.01 ~ 1.05	3.49

第3表 備蓄錢法量一覽②

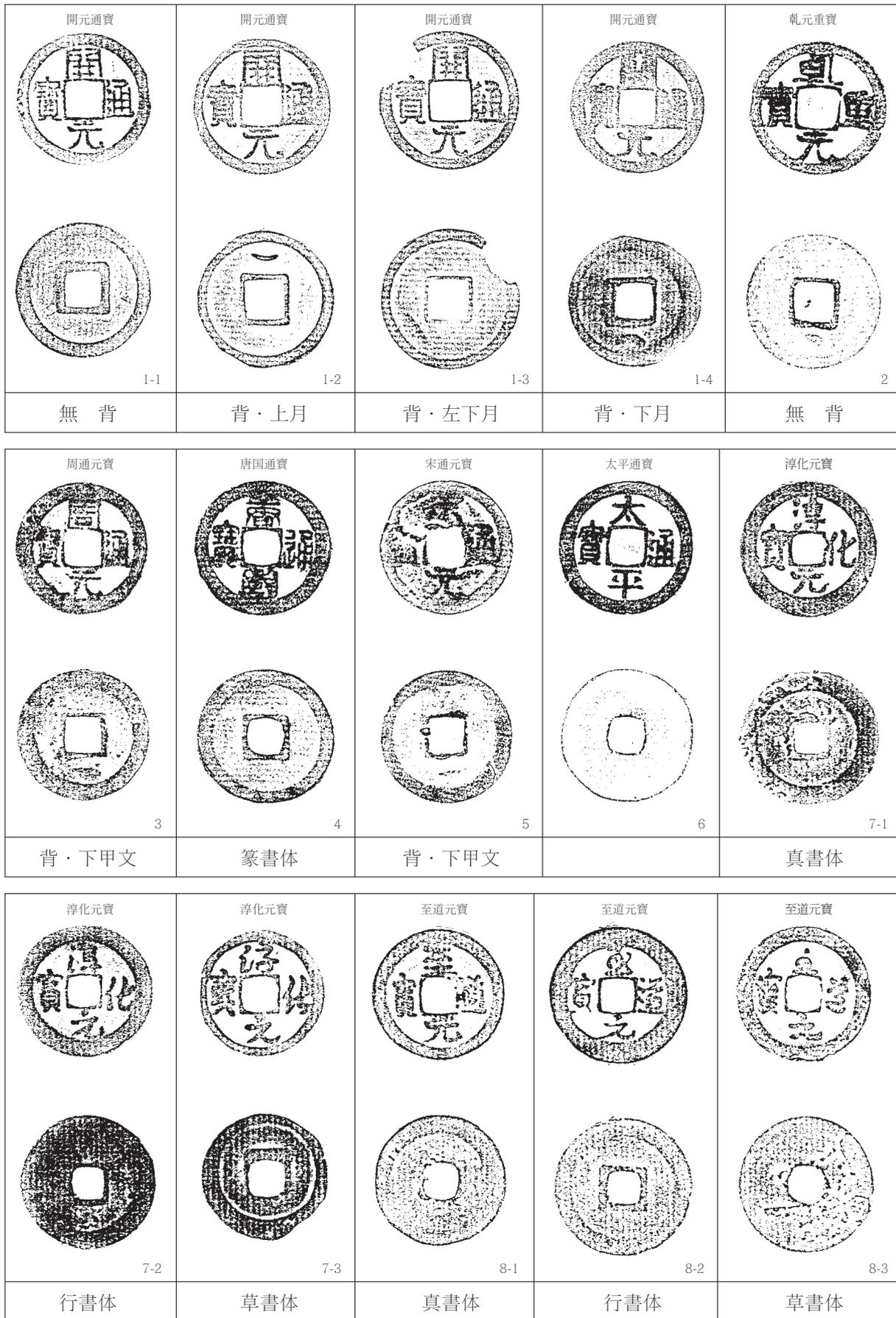
NO	古錢名稱	錢徑 (A)・(B)mm		內徑 (A)・(B) mm		錢 厚 mm	量目 g
17-2	皇宋通寶	24.95	25.03	19.51	19.51	1.27 ~ 1.43	3.97
17-3	〃	23.99	24.20	20.13	19.57	1.18 ~ 1.24	3.58
17-4	〃	24.87	24.91	20.74	20.81	1.19 ~ 1.34	4.03
18	至和通寶	24.57	24.80	18.66	18.66	1.13 ~ 1.25	3.92
19-1	至和元寶	23.83	23.63	17.77	17.77	1.08 ~ 1.44	3.93
19-2	〃	23.90	23.86	18.57	18.59	1.26 ~ 1.34	3.38
20-1	嘉祐元寶	23.87	23.59	18.30	18.66	1.17 ~ 1.42	3.94
20-2	〃	23.45	23.62	19.16	19.12	1.29 ~ 1.37	3.80
21-1	嘉祐通寶	24.91	25.06	19.43	19.35	0.99 ~ 1.08	3.44
21-2	〃	25.49	25.41	19.38	19.70	0.92 ~ 0.99	3.30
21-3	〃	22.50	22.23	19.60	19.40	0.92 ~ 1.05	2.44
22-1	治平元寶	23.49	23.49	19.39	19.39	1.35 ~ 1.48	3.81
22-2	〃	23.81	23.69	18.43	19.00	1.06 ~ 1.21	3.36
23-1	治平通寶	24.42	24.42	19.25	19.25	0.85 ~ 0.89	2.37
23-2	〃	24.23	24.70	19.93	19.51	1.20 ~ 1.36	3.58
24-1	熙寧元寶	24.81	24.78	20.63	20.42	0.96 ~ 1.08	3.78
24-2	〃	23.85	23.83	19.44	19.07	1.26 ~ 1.46	4.03
25-1	元豐通寶	24.49	24.32	18.23	18.39	0.97 ~ 1.15	3.28
25-2	〃	24.03	24.00	17.77	17.81	1.30 ~ 1.35	4.08
26-1	元祐通寶	24.76	24.63	20.03	20.12	1.32 ~ 1.40	4.18
26-2	〃	21.15	21.31	17.92	18.61	0.89 ~ 0.93	2.19
26-3	〃	24.23	24.05	19.34	19.34	1.33 ~ 1.42	3.66
27-1	紹聖元寶	24.46	24.32	19.67	19.23	1.06 ~ 1.34	3.54
27-2	〃	23.79	23.36	18.84	18.33	1.36 ~ 1.42	3.87
28-1	元符通寶	24.23	24.34	18.57	19.79	1.49 ~ 1.70	4.12
28-2	〃	24.34	24.40	19.33	19.62	0.91 ~ 0.94	3.28
29-1	聖宋元寶	23.22	23.01	19.61	19.19	1.17 ~ 2.23	3.36
29-2	〃	24.10	24.15	19.63	20.04	1.08 ~ 1.10	3.30
30	大觀通寶	24.17	24.15	21.46	21.45	1.02 ~ 1.18	3.44

第 3 表 備蓄錢法量一覽③

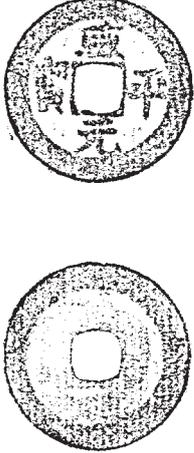
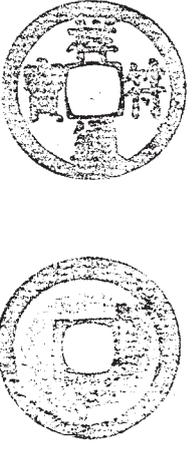
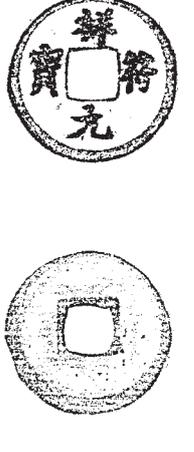
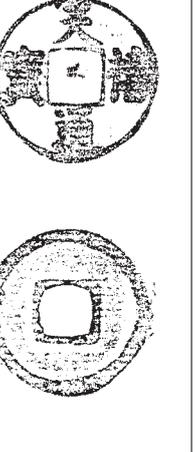
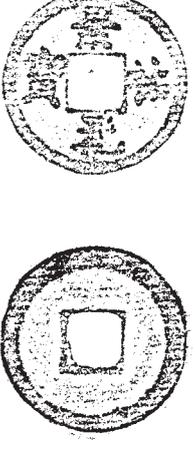
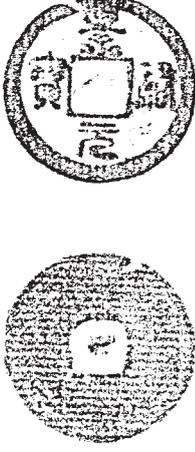
NO	古錢名稱	錢徑 (A)・(B)mm		內徑 (A)・(B) mm		錢 厚 mm	量目 g
31-1	政和通寶	24.40	24.47	20.37	20.21	1.07 ~ 1.16	3.62
31-2	〃	24.38	24.24	21.14	20.95	0.73 ~ 0.93	2.91
32-1	宣和通寶	23.50	23.72	19.87	19.87	0.83 ~ 0.88	3.08
32-2	〃	24.45	24.32	21.10	21.15	1.24 ~ 1.41	3.79
33	正隆元寶	24.62	24.57	21.31	20.85	1.23 ~ 1.45	3.14
34	乾道元寶	24.56	25.35	22.24	22.00	1.36 ~ 1.41	3.78
35-1	淳熙元寶	23.90	23.94	18.78	18.35	1.02 ~ 1.18	2.94
35-2	〃	24.27	23.84	18.75	19.08	1.14 ~ 1.27	3.65
35-3	〃	24.62	24.41	19.79	19.76	1.27 ~ 1.31	3.19
36-1	大定通寶	25.10	25.03	21.08	21.12	1.36 ~ 1.81	3.86
36-2	〃	24.71	24.86	20.70	21.46	1.25 ~ 1.40	3.30
37	紹熙元寶	23.79	23.63	18.75	18.64	1.19 ~ 1.40	3.72
38	慶元通寶	24.52	24.34	20.04	20.04	1.18 ~ 1.37	3.34
39-1	嘉泰通寶	23.86	23.94	19.98	20.30	1.03 ~ 1.18	2.92
39-2	〃	24.43	24.90	19.74	20.27	1.16 ~ 1.43	3.70
40	開禧通寶	24.21	24.19	21.31	20.67	1.09 ~ 1.11	3.28
41-1	嘉定通寶	23.73	23.90	19.35	19.97	0.92 ~ 1.13	3.06
41-2	〃	24.25	24.10	20.96	21.14	1.05 ~ 1.30	2.86
41-3	〃	23.72	23.91	20.21	19.99	1.14 ~ 1.31	3.46
41-4	〃	24.32	24.18	21.47	20.75	1.04 ~ 1.27	3.72
41-5	〃	24.17	24.41	20.67	20.68	1.08 ~ 1.13	2.65
41-6	〃	24.02	24.03	19.70	19.72	1.11 ~ 1.25	3.41
41-7	〃	23.78	23.78	20.20	20.30	1.16 ~ 1.27	3.39
42-1	紹定通寶	24.15	24.15	19.59	19.58	1.14 ~ 1.27	3.80
42-2	〃	23.22	23.53	19.84	20.13	1.18 ~ 1.23	3.19
42-3	〃	24.04	24.09	20.49	20.66	1.40 ~ 1.59	4.12
42-4	〃	24.28	24.35	20.06	19.90	1.12 ~ 1.23	3.62
42-5	〃	24.00	24.05	20.07	19.87	1.32 ~ 1.55	3.82
43	端平元寶	23.61	23.70	21.27	20.78	1.23 ~ 1.36	3.32

第3表 備蓄錢法量一覽④

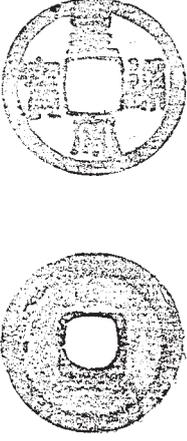
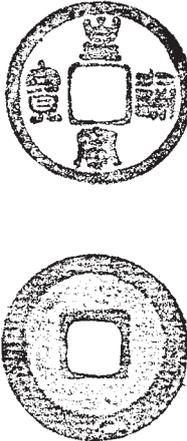
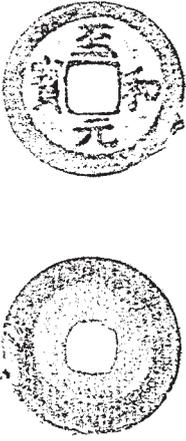
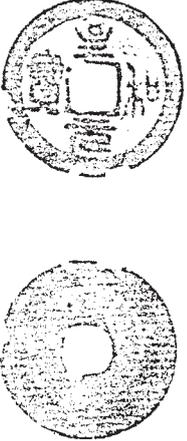
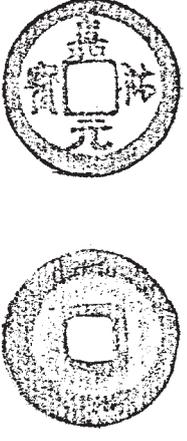
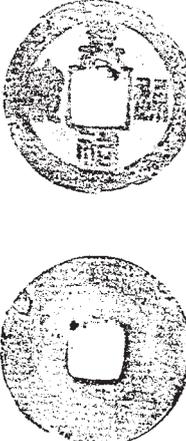
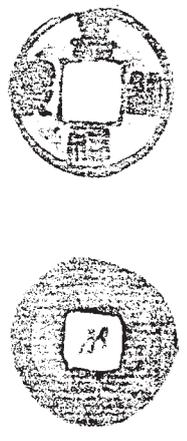
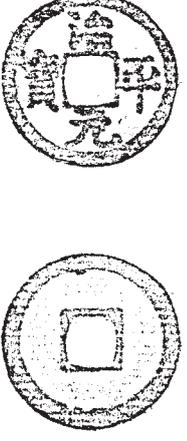
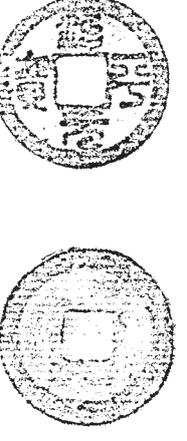
NO	古錢名稱	錢徑 (A)・(B)mm		內徑 (A)・(B) mm		錢 厚 mm	量目 g
44	嘉熙通寶	23.30	3.30	19.39	19.37	1.14 ~ 1.18	3.34
45-1	淳祐元寶	23.83	23.73	19.63	19.39	1.09 ~ 1.17	3.48
45-2	〃	23.87	23.81	19.18	20.08	1.35 ~ 1.42	4.01
45-3	〃	23.66	23.62	19.92	20.08	0.92 ~ 1.10	2.97
45-4	〃	24.10	24.24	20.16	19.94	0.97 ~ 1.06	2.89
46-1	皇宋元寶	24.64	24.52	19.87	19.56	1.03 ~ 1.24	3.93
46-2	〃	24.78	24.86	19.94	19.75	1.09 ~ 1.29	3.84
47-1	景定元寶	24.29	24.03	20.49	20.88	1.06 ~ 1.15	3.42
47-2	〃	24.47	24.42	20.57	21.20	0.98 ~ 1.12	3.28
47-3	〃	23.56	23.79	20.62	20.25	1.03 ~ 1.09	3.21
48	咸淳元寶	25.62	25.68	23.98	23.15	1.39 ~ 1.44	4.53
49-1	至大通寶	23.20	24.37	18.64	18.90	1.42 ~ 1.55	3.68
49-2	〃	22.66	22.59	18.29	19.13	1.47 ~ 1.79	3.93
50	大義通寶	24.05	24.07	19.80	20.16	1.64 ~ 1.72	4.73
51	大中通寶	24.25	24.06	20.14	20.14	1.69 ~ 1.78	5.43
52-1	洪武通寶	23.49	23.57	19.59	18.93	1.40 ~ 1.47	3.97
52-2	〃	22.88	22.78	18.21	18.38	1.22 ~ 1.52	3.54
52-3	〃	24.63	24.32	20.28	20.71	1.49 ~ 1.62	4.07
52-4	〃	23.68	23.82	20.41	19.98	1.15 ~ 1.30	3.20
52-5	〃	23.32	22.81	20.31	19.66	1.25 ~ 1.68	3.50
52-6	〃	23.36	23.17	20.38	19.68	1.15 ~ 1.41	3.28
53	永樂通寶	25.10	25.05	20.99	20.90	1.35 ~ 1.46	4.06
54	朝鮮通寶	24.05	24.01	19.87	19.87	1.34 ~ 1.48	3.81
55	宣德通寶	25.21	25.41	20.76	20.75	0.97 ~ 1.11	3.42
56	大世通寶	22.96	22.74	19.31	19.31	1.52 ~ 1.57	4.40
57	世高通寶	22.77	23.38	17.99	17.99	1.28 ~ 1.47	3.81



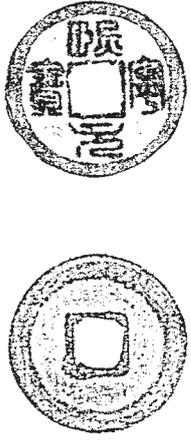
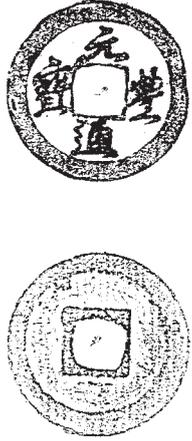
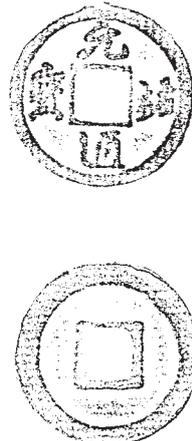
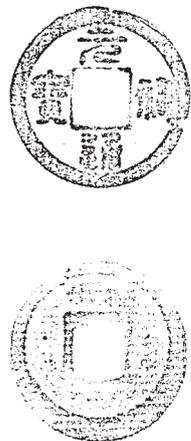
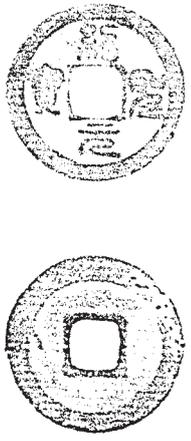
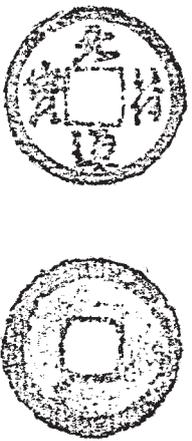
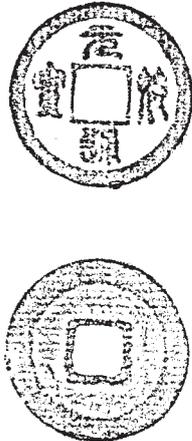
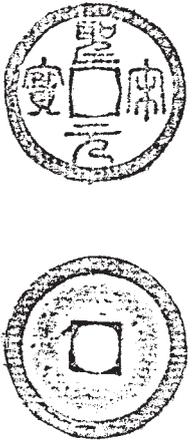
第 134 図 古銭の拓影① (実大)

咸平元寶  9	景德元寶  10	祥符通寶  11-1	祥符通寶  11-2	祥符元寶  12-1
真書体	真書体	磨輪銭		
祥符元寶  12-2	天禧通寶  13-1	天禧通寶  13-2	天聖元寶  14-1	天聖元寶  14-2
磨輪銭	真書体、磨輪銭	真書体	真書体	篆書体
明道元寶  15	景祐元寶  16-1	景祐元寶  16-2	皇宋通寶  17-1	皇宋通寶  17-2
篆書体	真書体	篆書体	真書体	真書体

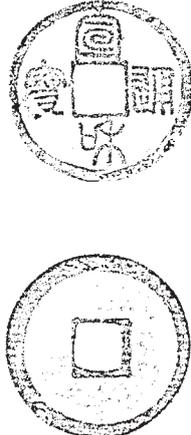
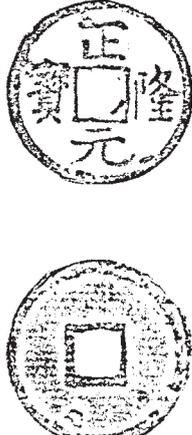
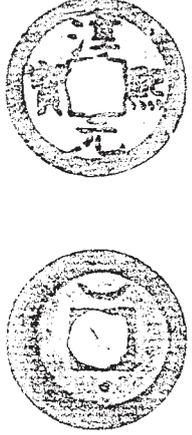
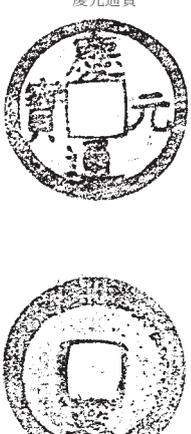
第 135 図 古銭の拓影② (実大)

<p>皇宋通寶</p>  <p>17-3</p> <p>篆書体</p>	<p>皇宋通寶</p>  <p>17-4</p> <p>篆書体</p>	<p>至和通寶</p>  <p>18</p> <p>篆書体、背・錯范</p>	<p>至和元寶</p>  <p>19-1</p> <p>真書体</p>	<p>至和元寶</p>  <p>19-2</p> <p>篆書体</p>
<p>嘉祐元寶</p>  <p>20-1</p> <p>真書体</p>	<p>嘉祐元寶</p>  <p>20-2</p> <p>篆書体</p>	<p>嘉祐通寶</p>  <p>21-1</p> <p>真書体</p>	<p>嘉祐通寶</p>  <p>21-2</p> <p>篆書体</p>	<p>嘉祐通寶</p>  <p>21-3</p> <p>篆書体、磨輪錢</p>
<p>治平元寶</p>  <p>22-1</p> <p>真書体</p>	<p>治平元寶</p>  <p>22-2</p> <p>篆書体</p>	<p>治平通寶</p>  <p>23-1</p> <p>真書体</p>	<p>治平通寶</p>  <p>23-2</p> <p>篆書体</p>	<p>熙寧元寶</p>  <p>24-1</p> <p>真書体</p>

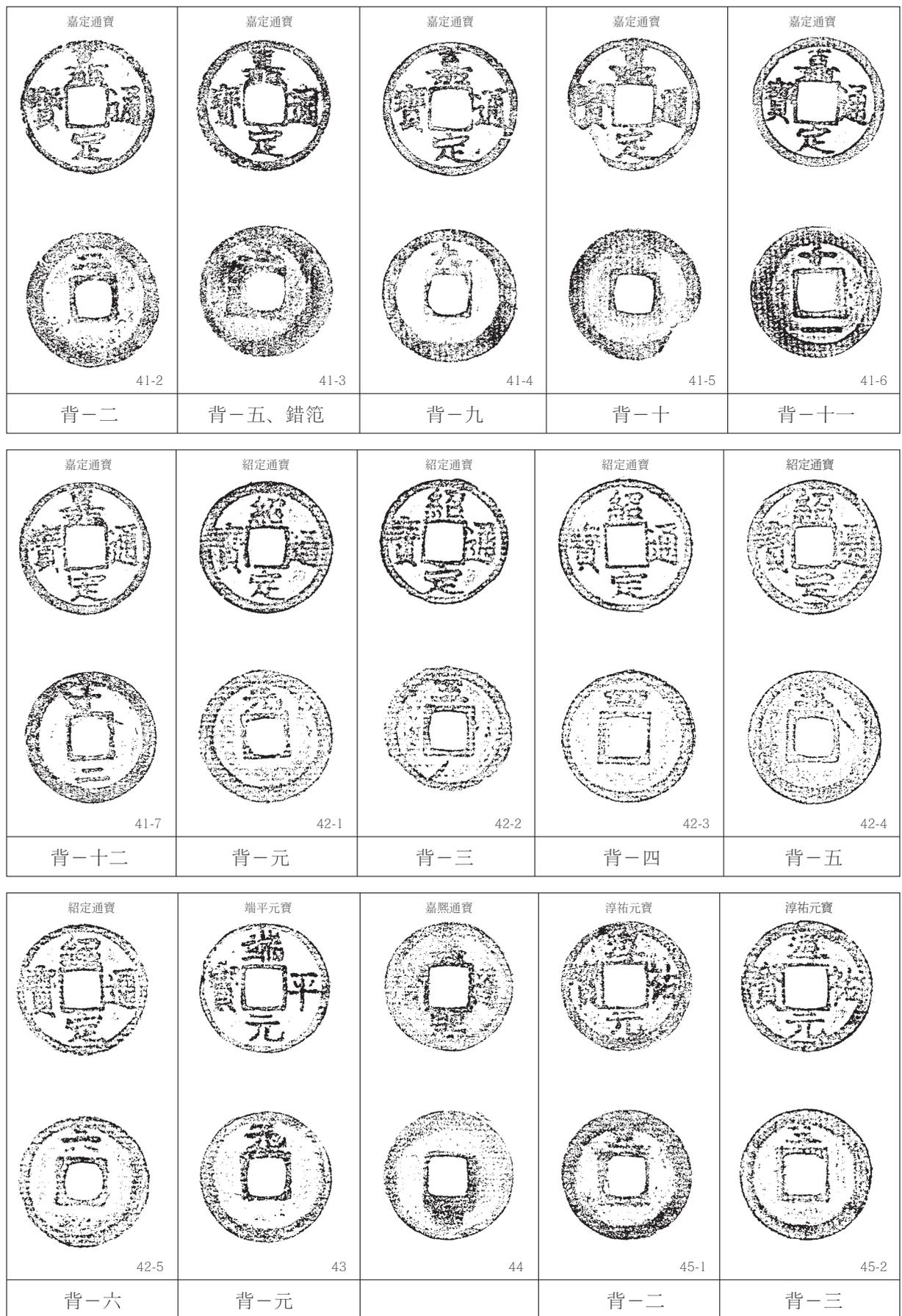
第 136 図 古銭の拓影③ (実大)

<p>熙寧元寶</p>  <p>24-2</p> <p>篆書体</p>	<p>元豐通寶</p>  <p>25-1</p> <p>行書体</p>	<p>元豐通寶</p>  <p>25-2</p> <p>篆書体</p>	<p>元祐通寶</p>  <p>26-1</p> <p>行書体</p>	<p>元祐通寶</p>  <p>26-2</p> <p>行書体、磨輪錢</p>
<p>元祐通寶</p>  <p>26-3</p> <p>篆書体</p>	<p>紹聖元寶</p>  <p>27-1</p> <p>行書体</p>	<p>紹聖元寶</p>  <p>27-2</p> <p>篆書体</p>	<p>元符通寶</p>  <p>28-1</p> <p>行書体</p>	<p>元符通寶</p>  <p>28-2</p> <p>篆書体</p>
<p>聖宗元寶</p>  <p>29-1</p> <p>行書体</p>	<p>聖宗元寶</p>  <p>29-2</p> <p>篆書体</p>	<p>大觀通寶</p>  <p>30</p> <p>篆書体</p>	<p>政和通寶</p>  <p>31-1</p> <p>隸書体</p>	<p>政和通寶</p>  <p>31-2</p> <p>篆書体</p>

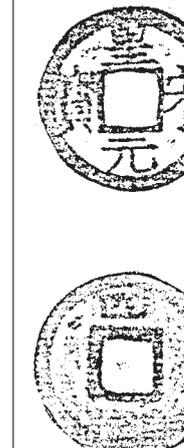
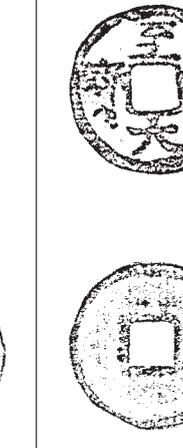
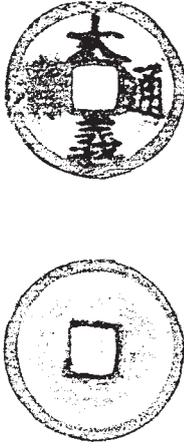
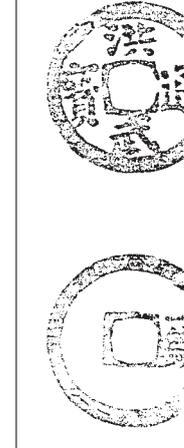
第 137 図 古銭の拓影④ (実大)

<p>宣和通寶</p>  <p>32-1</p> <p>隸書体</p>	<p>宣和通寶</p>  <p>32-2</p> <p>篆書体</p>	<p>正隆元寶</p>  <p>33</p> <p>真書体</p>	<p>乾道元寶</p>  <p>34</p> <p>真書体、磨輪錢</p>	<p>淳熙元寶</p>  <p>35-1</p> <p>真書体、背一月・星</p>
<p>淳熙元寶</p>  <p>35-2</p> <p>真書体、背一十四</p>	<p>淳熙元寶</p>  <p>35-3</p> <p>真書体、背一十六</p>	<p>大定通寶</p>  <p>36-1</p> <p>無 背</p>	<p>大定通寶</p>  <p>36-2</p> <p>背一酉</p>	<p>紹熙元寶</p>  <p>37</p> <p>背一四</p>
<p>慶元通寶</p>  <p>38</p> <p>背一四?</p>	<p>嘉泰通寶</p>  <p>39-1</p> <p>背一元</p>	<p>嘉泰通寶</p>  <p>39-2</p> <p>背一三</p>	<p>開禧通寶</p>  <p>40</p> <p>背一二</p>	<p>嘉定通寶</p>  <p>41-1</p> <p>無 背</p>

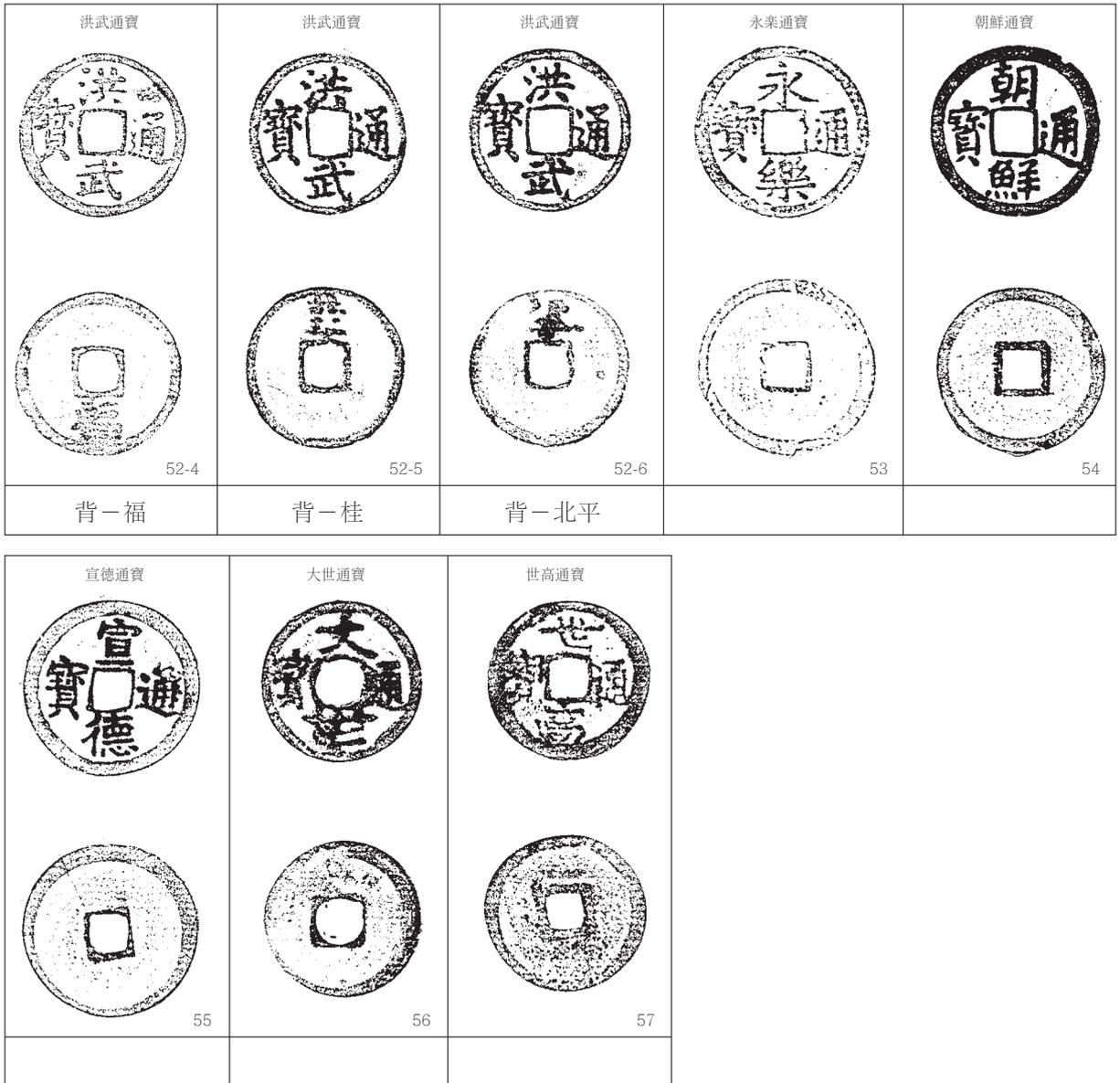
第 138 図 古銭の拓影⑤ (実大)



第 139 図 古銭の拓影⑥ (実大)

<p>淳祐元寶</p>  <p>45-3</p> <p>背一八</p>	<p>淳祐元寶</p>  <p>45-4</p> <p>背一十</p>	<p>皇宋元寶</p>  <p>46-1</p> <p>背一元</p>	<p>皇宋元寶</p>  <p>46-2</p> <p>背一四</p>	<p>景定元寶</p>  <p>47-1</p> <p>背一元</p>
<p>景定元寶</p>  <p>47-2</p> <p>背一二</p>	<p>景定元寶</p>  <p>47-3</p> <p>背一三</p>	<p>咸淳元寶</p>  <p>48</p> <p>背一五、磨輪錢</p>	<p>至大通寶</p>  <p>49-1</p> <p>磨輪錢</p>	<p>至大通寶</p>  <p>49-2</p> <p>磨輪錢</p>
<p>大義通寶</p>  <p>50</p>	<p>大中通寶</p>  <p>51</p>	<p>洪武通寶</p>  <p>52-1</p> <p>無背</p>	<p>洪武通寶</p>  <p>52-2</p> <p>背一一錢</p>	<p>洪武通寶</p>  <p>52-3</p> <p>背一浙</p>

第 140 図 古銭の拓影⑦ (実大)

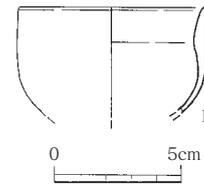


第 141 図 古銭の拓影⑧ (実大)

出土の古銭について（図版 26・27、第 134～141 図、第 2・3 表）

一般的に大量の出土銭を、備蓄銭、埋蔵銭、埋納銭と呼称している。本来備蓄銭は非常時に備えた銭のことである。この古銭を学術用語の中世における一括出土の大量貨銭（1,000 枚以上）を備蓄銭と規定すればよいとの指摘がある。今回出土した備蓄銭の発見枚数は 3,044 枚（山田チエ子蔵含む）を数える。その内訳は、枚数の多い順に永楽通寶 692 枚、洪武通寶の 589 枚、皇宋通寶の 194 枚の順で、最も少ないのは周通元寶・宋通元寶・至和通寶・慶元通寶・開禧通寶・端平元寶・嘉熙通寶・咸淳元寶・大義通寶・大世通寶の各 1 枚である。

個々の古銭については、備蓄銭一覧と法量一覧を参照されたいが、ここでは、若干の所見を述べる。古銭の書体は、真書・篆書・行書・草書・隸書体などが見られる。また、開元通寶の背には、無背の他上月・左下月・下月が、周通元寶は 1 枚で背に下甲文がある。宋通元寶にも同様のものがある。そのほか背に鑄出されたものとして、数字・漢字などがあり、至和通寶・治平通寶・嘉定通寶には背に錯範が見られる。さらには、縁を磨いた磨輪銭には、祥符通寶・祥符元寶・天禧通寶・嘉祐通寶・元祐通寶・紹聖元寶・乾道元寶・咸淳元寶（折二銭）・至大通寶などがある。15 世紀の琉球の古銭である大世通寶と世高通寶は、明国の永楽通寶の永楽を削り大世と世高を鑄出しているため書体がずれている。



第 142 図 備蓄銭掘方出土遺物実測図（1/3）

参考文献

那珂川町教育委員会「郷土誌 那珂川」昭和 51 年

永井久美男「新版 中世出土銭の分類図版」高志書院 2002

櫻木晋一「阿蘇郡長陽村出土の備蓄銭」九州帝京短期大学紀要第 6 号 1994

永井久美男「中世の出土銭」兵庫埋蔵銭調査会 1994

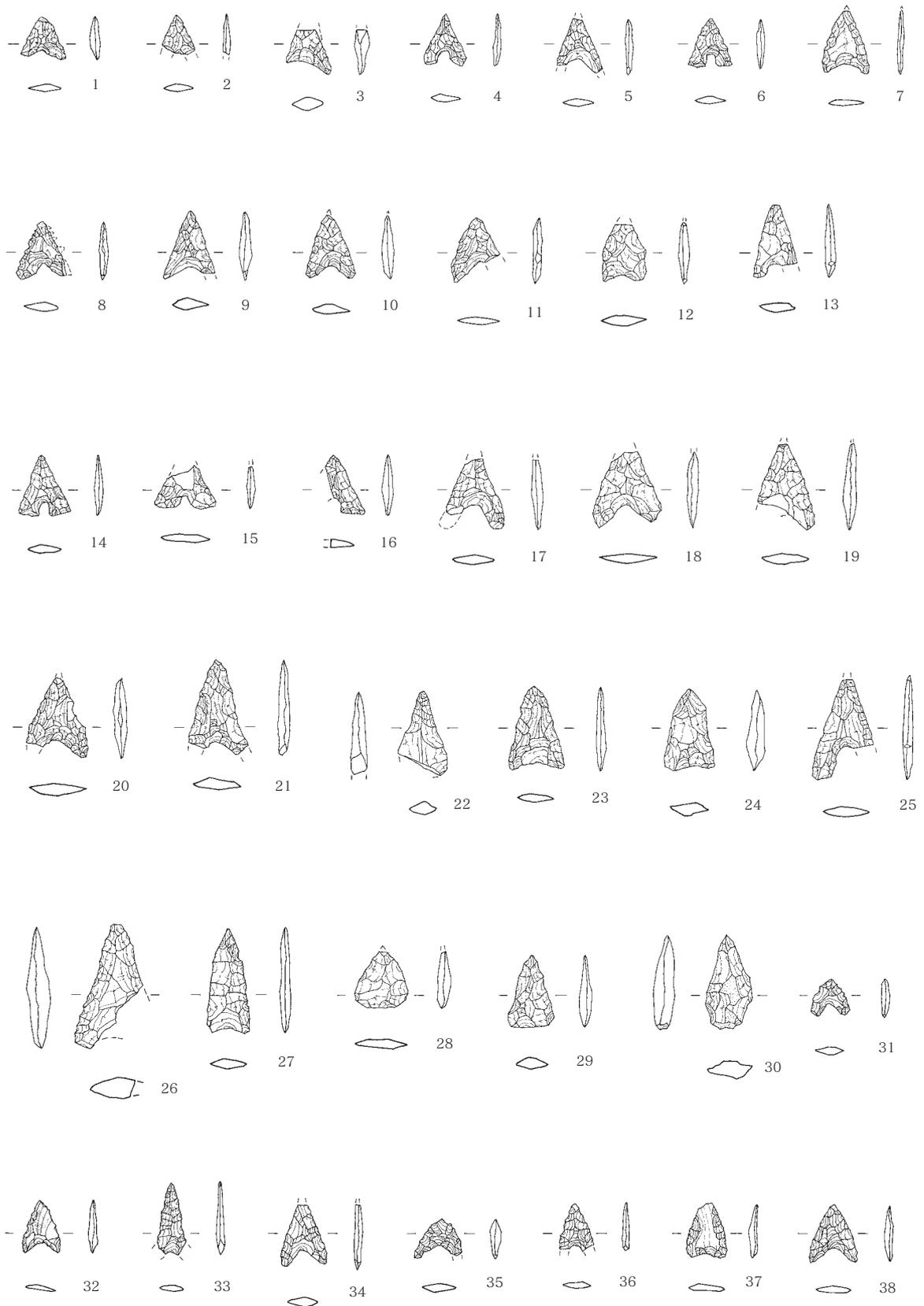
備蓄銭掘方出土遺物（第 142 図）

1 は近代期に属する磁器小碗である。下半は丸味を帯び、口縁部は直立して若干肥厚しており、内面口縁部下に稜線を有す。釉は透明釉を施釉する。口径 7.4cm。

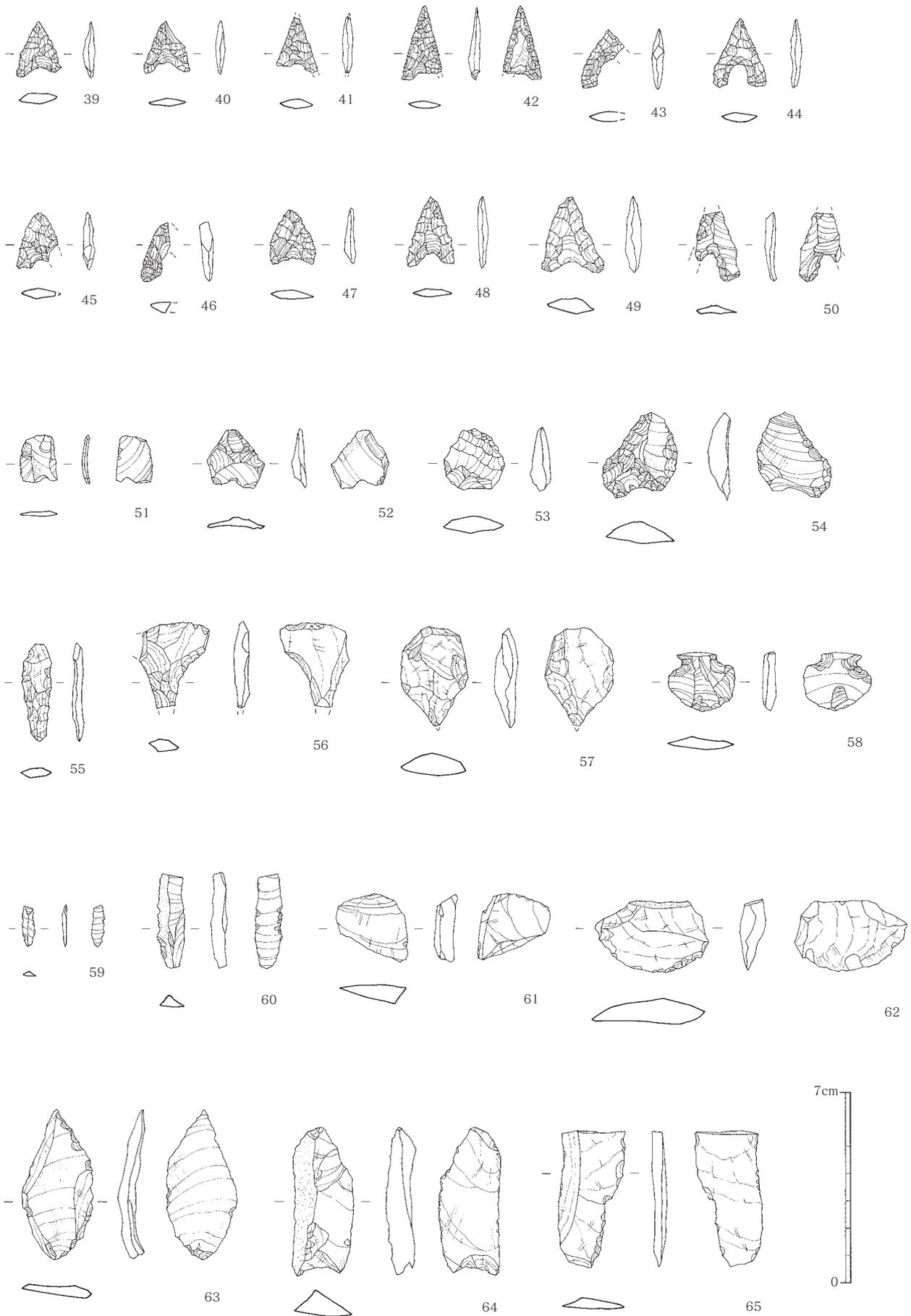
（10）その他の出土遺物

縄文時代の石器（図版 33、第 143～146 図）

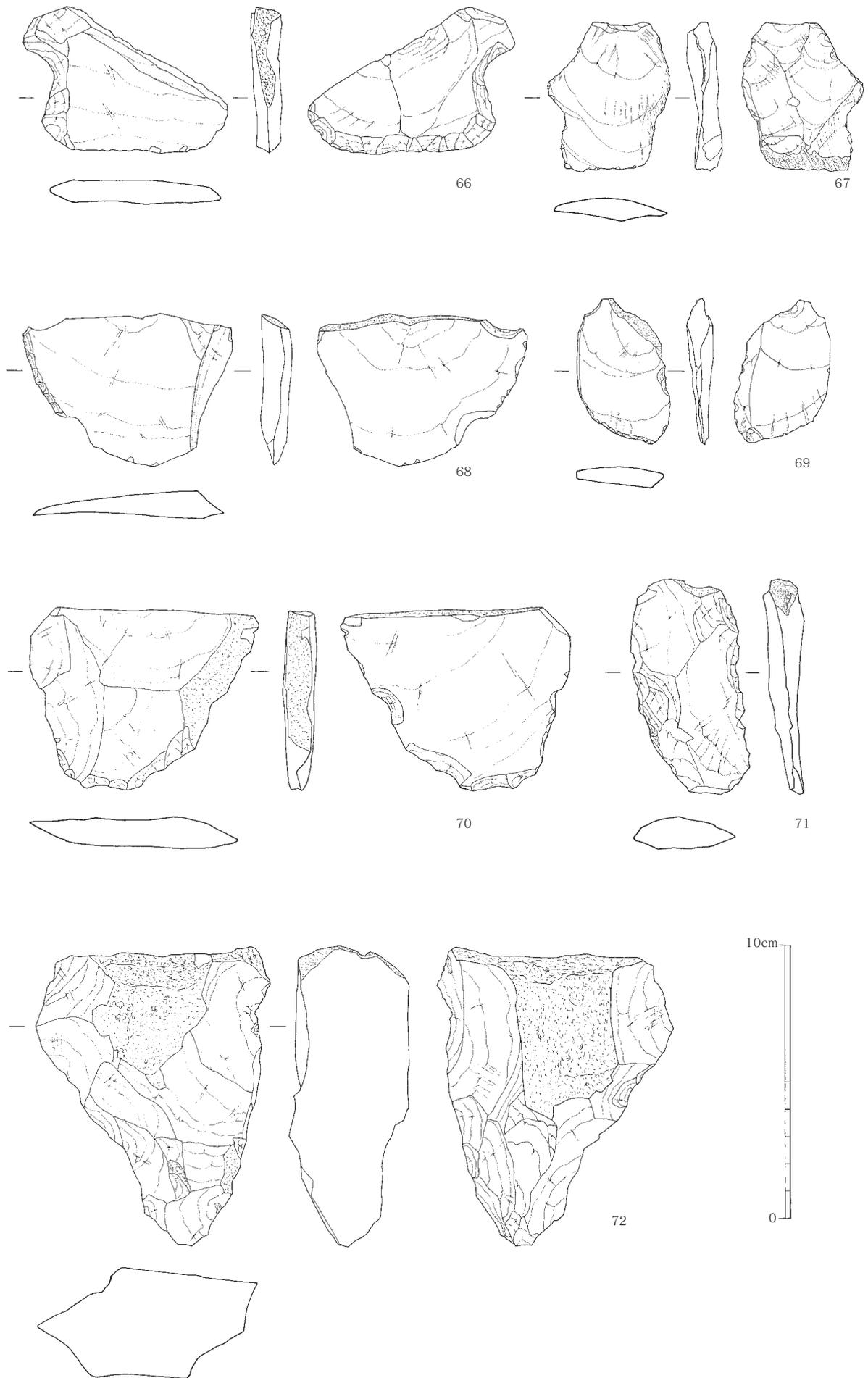
1～54 は石鏃である。1～30 はサヌカイト。1～8 は小型に属し中でも 1 や 2 は特に小型の部類に属する。1 は 4 区包含層出土。2 は 2 区 1 号竪穴建物出土。3 は 7 区下層包含層出土。4～6 は基部の挟りが深い。4 は 1 区竪穴建物 1 出土。5 は 4 区ピット出土。6 は 7 区ピット出土。7 は剥離調整が周縁部に留まる。7 区ピット出土。8 は 7 区遺構検出面出土。9～24 は中型に属す。9 や 10 は丁寧な作りで整った形状を呈す。9 は 2 区包含層出土。10・11 は 2 区竪穴建物 1 出土。12 は肩に稜を有し五角形を呈す。4 区溝出土。13 は 2 区包含層出土。14～16 は大きさや形状が類似する。14 は 7 区ピット出土。15 は 4 区包含層出土。16 は 7 区ピット出土。17 は 3 区遺構検出面出土。18 は 2 区包含層出土。19 は 4 区溝出土。20 は肩部が挟れた形状となる。4 区包含



第 143 図 縄文時代の石器実測図① (1/2)



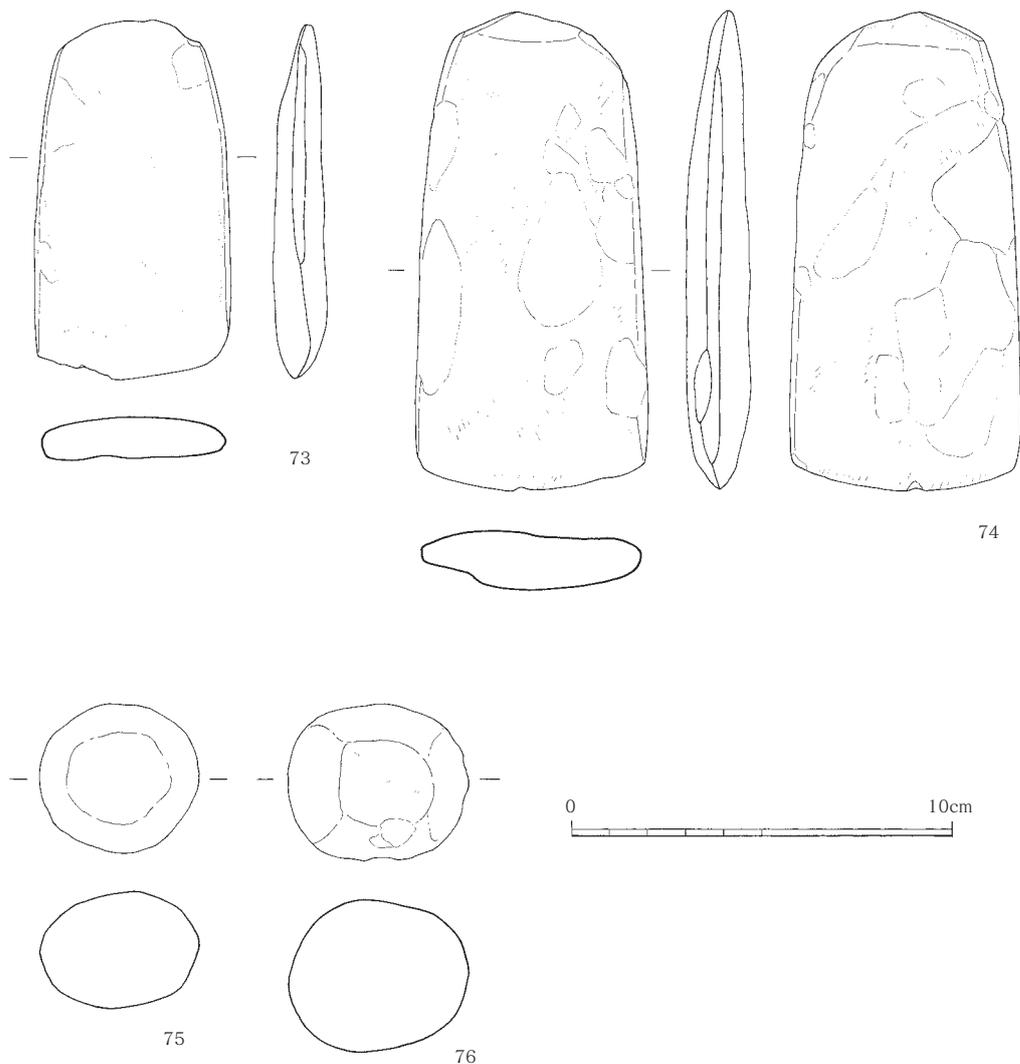
第 144 図 縄文時代の石器実測図② (1/2)



第 145 図 縄文時代の石器実測図③ (1/2)

層出土。21は縦長の形状をなす。4区溝出土。22～24は基部の抉りが浅い。22は7区ピット出土。23・24は7区下層出土。25～27は大型の部類に属す。25は基部の抉りが深く鋤形状を呈す。2区ピット出土。26は7区溝1－ii北出土。27は縦に長く基部の抉りが浅い。7区溝1－iv・v北出土。28・29は基部に抉りを入れないもの。28は丸味を帯びた三角形状となる。4区ピット出土。29は7区下層出土。30は尖頭器状を呈し、自然面を多く残し雑な調整を行う。7区下層出土。

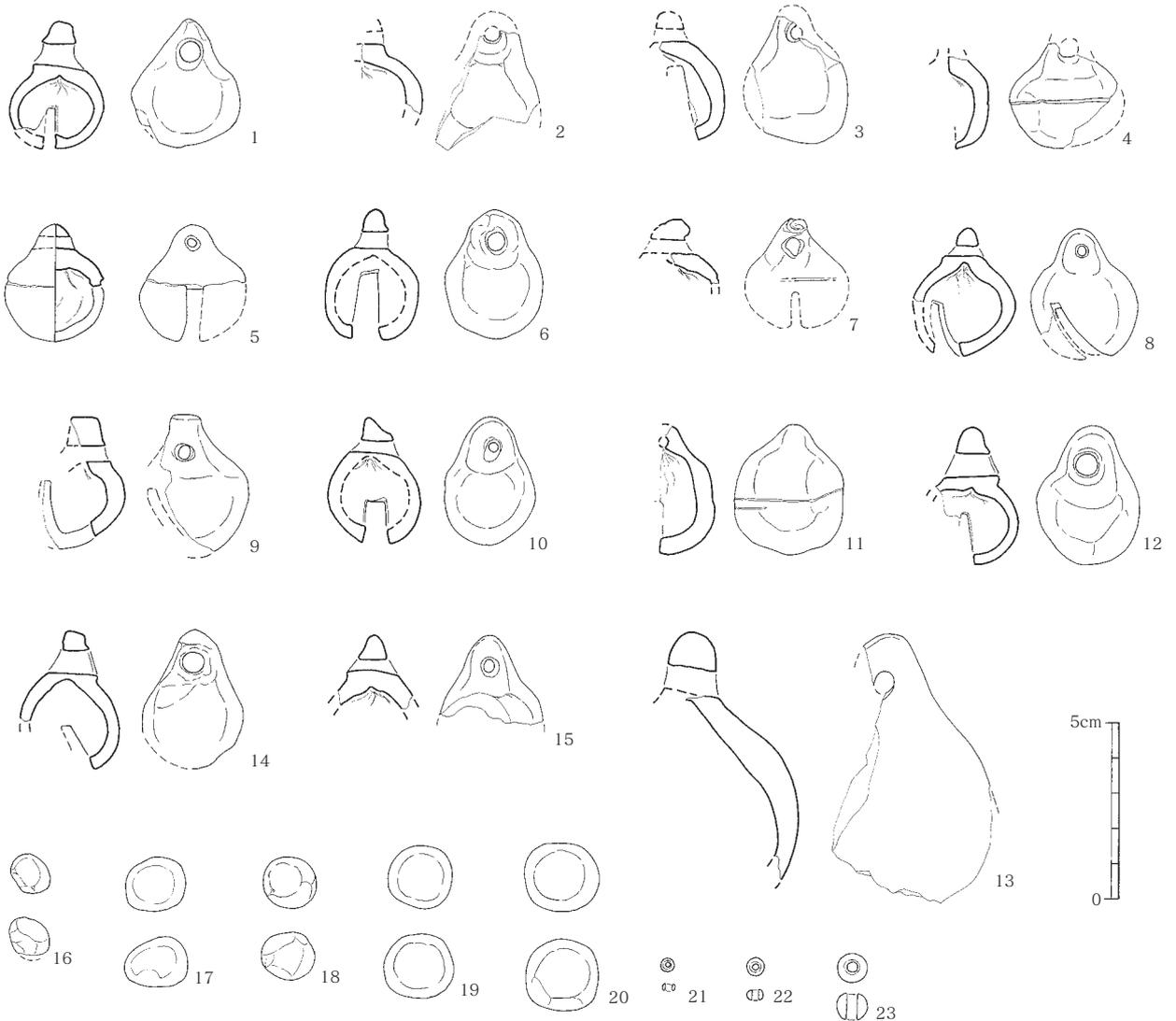
31～34は姫島産黒曜石製である。どれも小型に属し、31や32は特に小さい。31は三角形状を呈す。2区竪穴建物1出土。32は主剥離面を大きく残す。2区竪穴建物1出土。33は縦長の形状となる。7区下層遺構検出面出土。34は7区ピット出土。35～54は漆黒色黒曜石製。35～37は小型の部類に属する。35は脚が長く伸びる形状となる。7区ピット出土。36は7区下層出土。37は側縁のみ調整を行う。7区下層出土。38～47は中型に属する。38～40は類似した形状を呈す。38は4区出土。39は7区ピット出土。40・41は4区ピット出土。42は細かい剥離調整を行い整った形状を呈す。1区竪穴建物1出土。43は基部の抉りが極端に深い形状となる。4区包含層出土。44も基部の抉りが深い。4区包含層出土。45は2区竪穴建物1出土。46は1区竪穴建物1出土。47は3区ピット出土。48・49はやや大型品。48は3区遺構検出面出土。49は4区ピット出土。



第146図 縄文時代の石器実測図④ (1/2)

50～52は剥片鏃。50・51は1区ピット出土。52は1区竪穴建物1出土。53・54は未製品か。53は4区ピット出土。54は1区ピット出土。

55～57はサヌカイトドリルであろう。55は鏃の可能性もある。55は2区竪穴建物1出土。56は4区溝出土。57は2区包含層出土。58は黒色黒曜石のつまみ形石器。7区トレンチ出土。59や60は黒曜石縦長剥片である。細石刃の可能性もあるが風化が新しいように思われる。59は2区包含層出土。60は4区遺構検出面出土。61や62はサヌカイト剥片で、使用痕が認められる。61は4区溝出土。62は7区溝1－iii出土。63は黒曜石製の使用痕のある縦長剥片。4区ピット出土。64や65はサヌカイト縦長剥片。側縁に使用痕が認められる。64は4区溝出土。65は4区ピット出土。66はサヌカイト石匙。調整は粗い。3区ピット出土。67～72はサヌカイトスクレイパー。67は不整形の縦長剥片の側縁に使用痕が残る程度である。4区溝出土。68は横長の剥片の側縁に剥離調整を行う。2区竪穴建物1出土。69は縦長剥片の先端部分に剥離調整を行う。4区溝出土。70は粗い剥離調整を行っただけのもので、自然面が残る。2区ピット出土。71は調整は粗いが比較的整った形状を呈す。7区溝1－iv・v北出土。72は大型の石材に粗い調整を行ったもの。7区



第147図 土製品等実測図① (1/2)

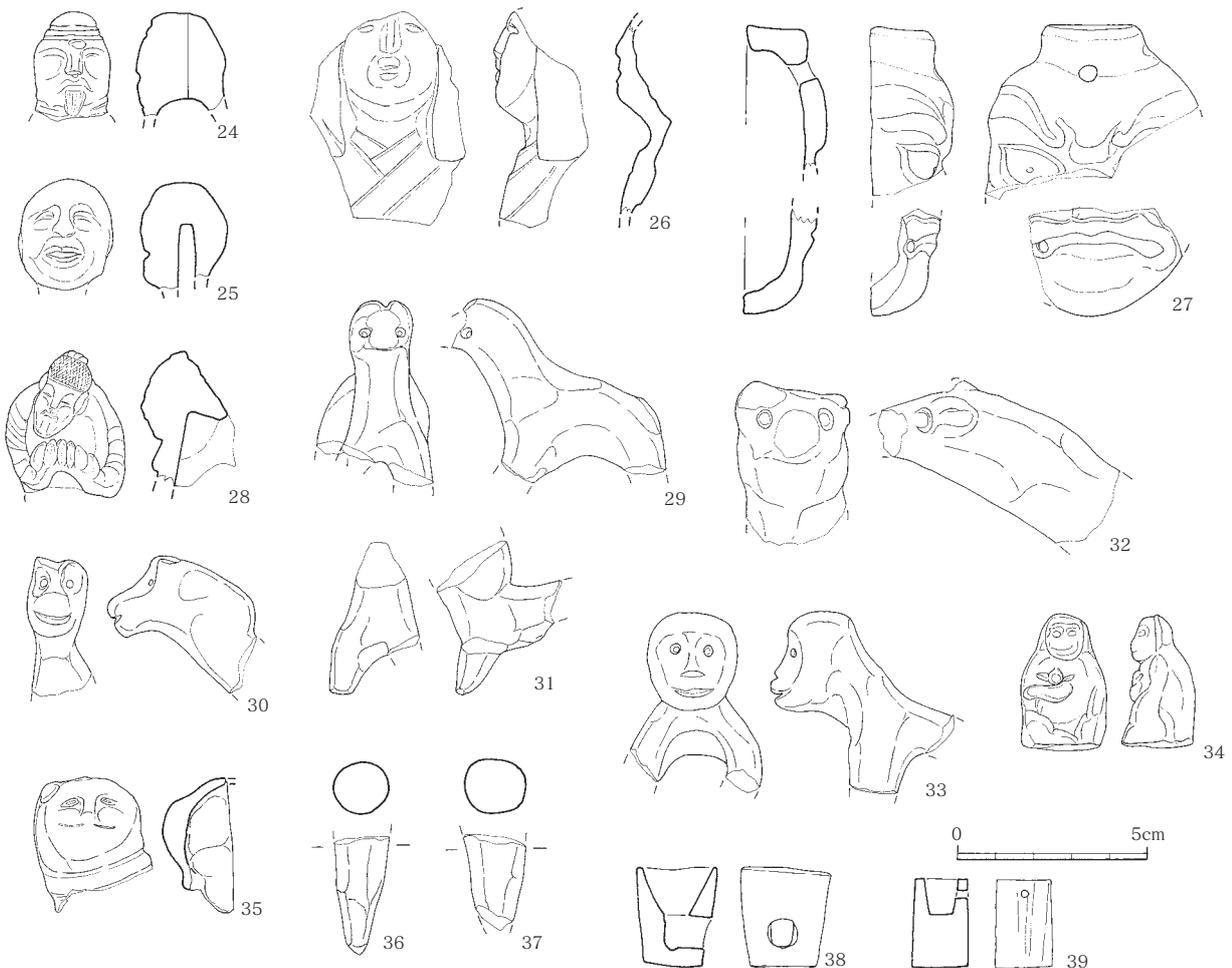
下層出土。

73・74 は蛇紋岩製磨製石斧である。どちらも扁平で比較的整った形状を呈す。73 は 2 区西側遺構検出面出土。74 は 4 区出土。75・76 は凝灰岩製磨石である。小型の丸い石材を使用し、使用痕はあまり顕著ではない。75 は 3 区ピット出土。76 は 7 区下層ピット出土。

中世以降のその他出土遺物

土製品等 (図版 34・35、第 147・148 図)

1 から 15 は土鈴。形態は似通っており、体部は卵形をなし、上部を摘み上げて穿孔を施す。上部内面にはシボリ痕が観察される。器高は 13 が 7.5cm を超える大形品である以外は、概ね 3.5cm から 4.0cm に収まる。体部に刀子状工具で方形の開口部を設ける。上部穿孔と直行して設けるものが多いが、5・7・11 は上部穿孔と同方向に設け、8 と 9 は上部穿孔と無関係の方向に設ける。4・5・11 は体部中央付近に弱い沈線を巡らせる。完形品である 6 と 10 の内部には径約 9mm の土玉が入っている。11 は瓦質で、7 も灰色を呈し瓦質に近い。それら以外は土師質で、灰黄色を呈する。出土地点は、1 は 1 区溝 3、2 は 1 区ピット、3・4 は 7 区溝 1 - iii、5 は 3 区ピット、6 は 4 区ピット、7 は 7 区溝 1 - i 東部、8 は 7 区溝 1 - ii 北、9・10 は 7 区溝 1 - iv、11 は 7 区溝 1 - iv トレンチ最下層、12 は 7 区清掃時、13 は 7 区ピット、14 は 7 区下層ピット、15 は 7 区下層である。



第 148 図 土製品等実測図② (1/2)

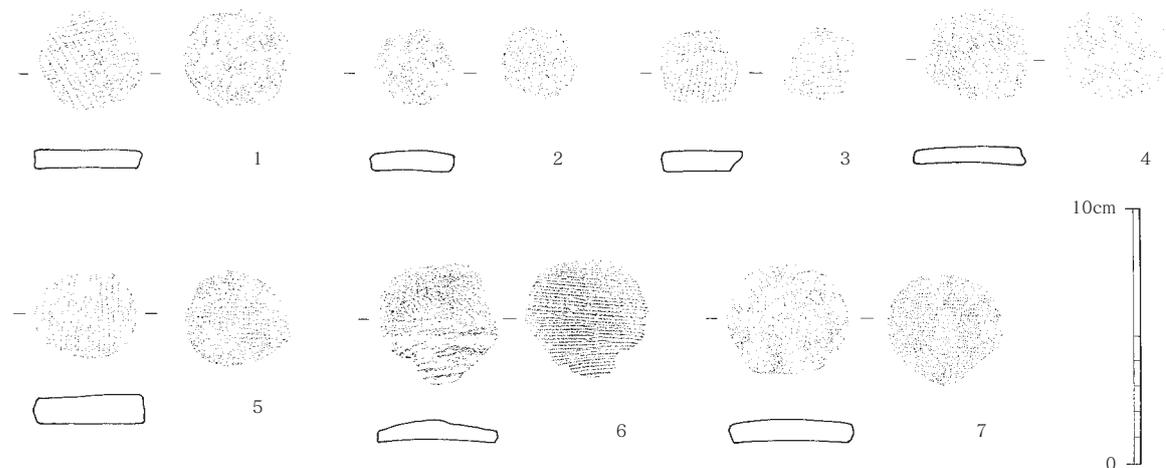
16 から 20 は土玉。いずれも土師質である。16 はややいびつな形状で径は 1.2cm。17・18 は径 1.5cm、19・20 は径 1.9cm を測る。16 は土鈴の玉の可能性はあるが、他は土鈴としては大き過ぎると思われる。出土地点は 16 は 1 区ピット、17 は 4 区土坑 1、18 は 7 区ピット、19 は 7 区ピット、20 は 7 区ピットである。

21 から 23 はガラス玉。21 は透明な緑色を呈するもので、径 3.8mm を測る。22 は緑色で質が悪いためか未発色部が多い。21・22 はいずれも 3 区土坑 9 からの出土。23 は黒色を呈するもので、球形に近い。4 区検出面で出土。

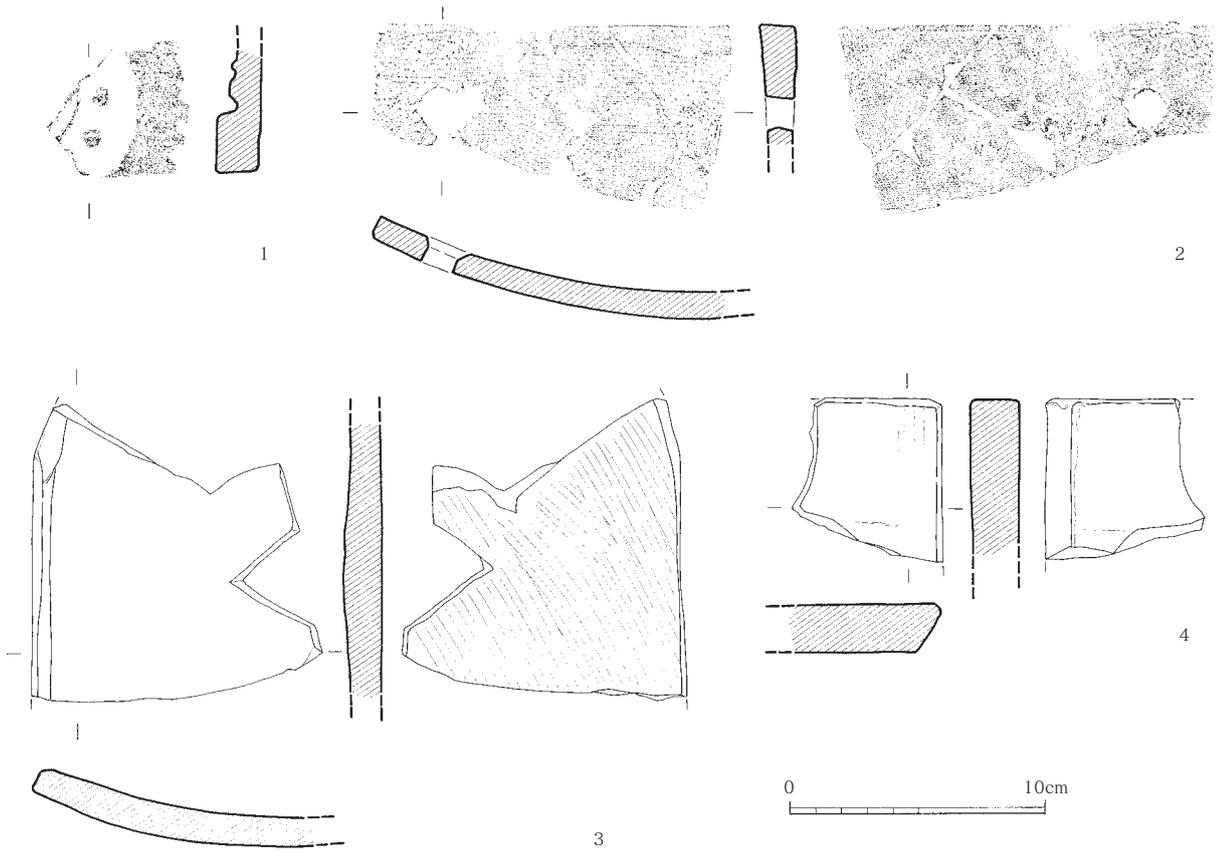
24 は型づくりの人形の頭部で土師質。賢人であろうか。前後の型を合わせた継ぎ目が明瞭で、後部は無紋。胴部は中空となる。7 区溝 1 - iii から出土。25 は坊主頭の人形頭部。土師質であるが黒灰色を呈する。中心部に棒状の空間があるが、胴部との接合のため軸が入られていたものであろうか。7 区下層溝 1 - vii から出土。26 は型づくりの人形。僧のような着物を着る。土師質。7 区ピットから出土。27 は型づくりの白磁人形。仁王のような表情である。額に穿孔があり、吊るすためのものであろうか。7 区溝 1 - i から出土。28 は白磁の人形で賢人を表現したものか。胴部の背面から円形に穿孔を施すようである。7 区ピットから出土。

29 から 35 は土師質の動物。29 は四脚と鼻部を欠損する頸の長い動物。頭頂部から頸背面にかけて溝を切ることにより耳を表現する。目は刺突による。尻部にわずかな貼り付けにより尾を表現する。7 区溝 1 - iv から出土。30 は手づくねにより耳・タテガミを表現し、馬と判断できる。目は刺突により、口は強く切り込まれる。4 区土坑 2 から出土。31 は随所を欠損するが、タテガミを表現することから馬と考えられる。7 区下層ピットから出土。32 は頸の長いもので、鼻部と胴部以下を欠損する。低い耳を表現し、目は太目の棒状工具による刺突でつくる。7 区溝 1 - i から出土。33 は顔面の表情から猿と考えられる。目は刺突により口や鼻を刀子状工具でつくるが、猿の特徴をよく捉えている。胴部中位以下を欠損する。7 区ピットから出土。34 は型づくりの猿。あぐらをかけたような姿勢で、右手には桃か宝珠とみられるものをもつ。7 区ピットから出土。35 は型づくりの人形の前面部。筋の通った鼻を表現しており人物のようにも見えるが、目・口の表現が弱く動物のような表情をみせる。7 区溝 1 - iv から出土。

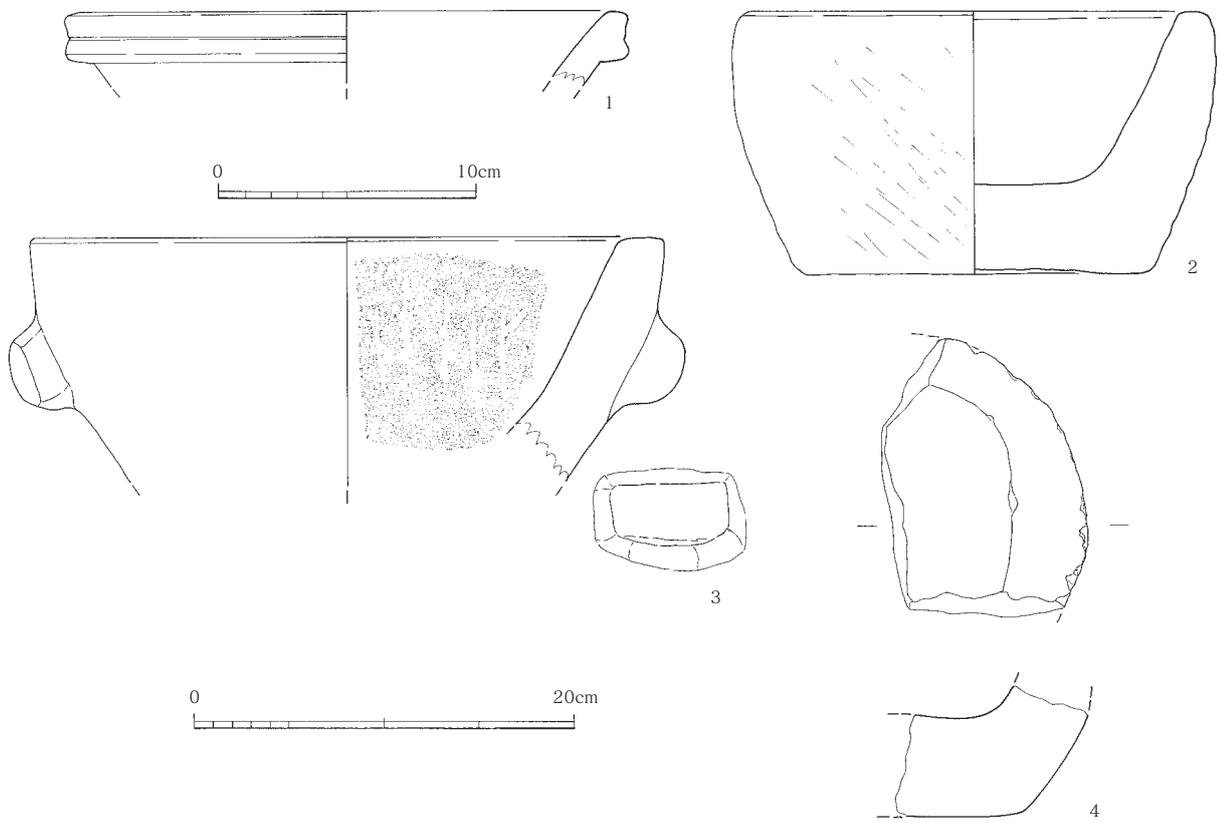
36・37 は手づくねの円錐形をなすもの。土師質で土製動物の脚であろうか。36 は 7 区ピット、



第 149 図 土器片円盤実測図 (1/3)



第 150 図 瓦実測図 (1/3)



第 151 図 石製品実測図① (1 : 1/3、2 ~ 4 : 1/4)

37は4区土坑2から出土。

38は陶器製のキセル。上面から円錐形に窪ませ、体部の側面からの穿孔と繋げる。3区ピットから出土。

39は硬玉製の円柱形の石製品で淡緑色を呈する。軸の端部の飾りと考えられ、固定用の釘穴が側面から穿たれる。3区ピットから出土。

土器片円盤（第149図）

1～7は中近世の土器片を再利用した土器片円盤である。直径4～5cmの大きさである。1は瓦質播鉢使用。1区ピット出土。2は土師質の土器を使用。1区ピット出土。3は瓦質の土器を使用。5区出土。4も瓦質の土器を使用。4区ピット出土。5は土師質の土器を使用。1区ピット出土。6は土師質鍋または鉢の口縁部片を使用。3区遺構面出土。7は瓦質の土器を使用する。7区溝1－iii出土。

瓦（第150図）

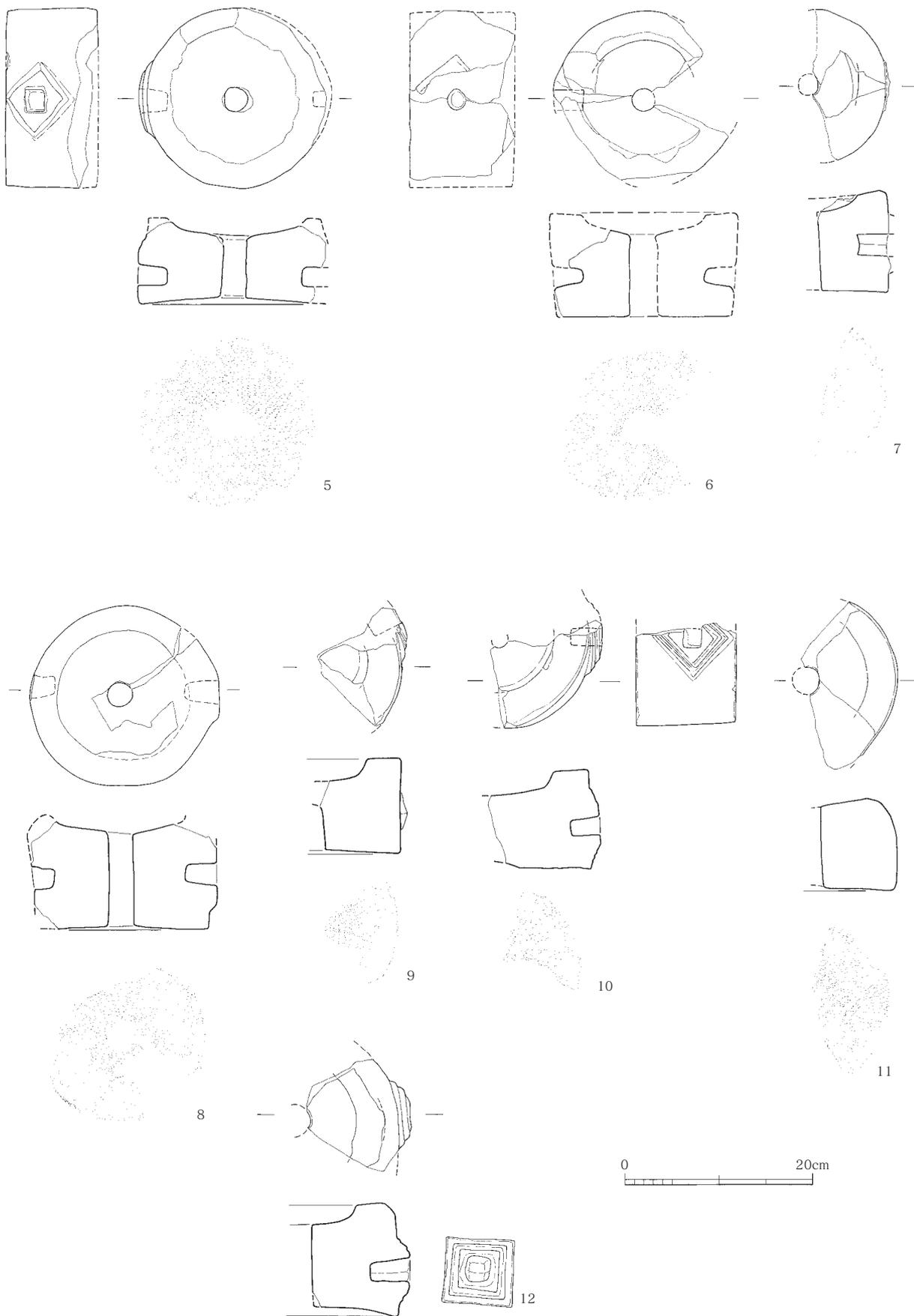
1は巴文軒丸瓦片である。7区溝1－ii出土。2～4は平瓦である。2は土師質焼成で内面ハケ目、外面は布目圧痕。釘穴が一ヶ所ある。3は内面ナデ、外面ハケ目。4も土師質で内外面ナデ調整を行う。2～4は5区の同一ピットから出土。

石製品（図版36、第151～159図）

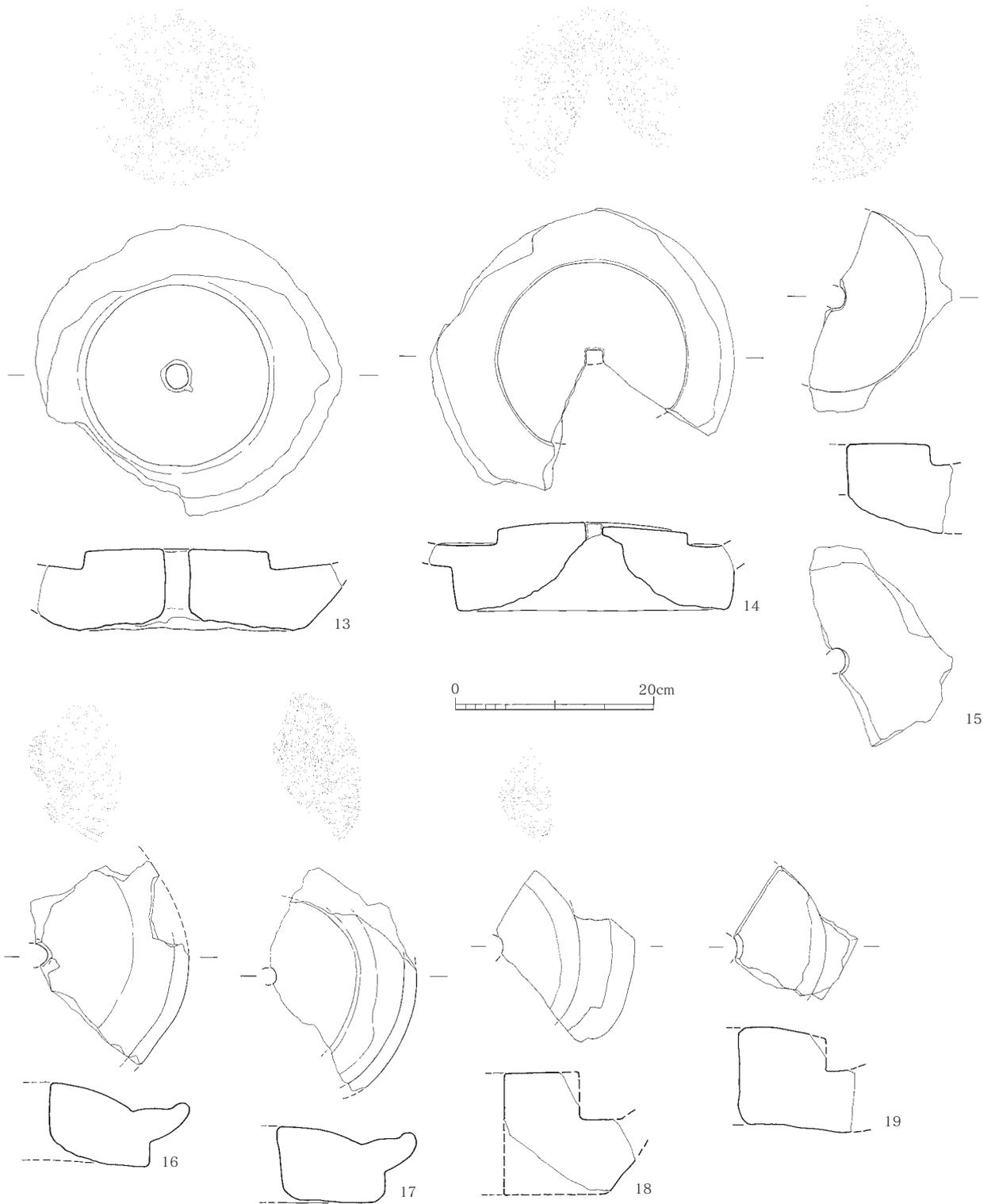
1は滑石製石鍋である。口縁部直下に断面三角形の突帯が巡る。口径20.8cm。7区溝1－iv出土。2～4は凝灰岩製容器である。2は丸味を帯びた器形で口縁部は丸く仕上げる。外面には加工痕がかすかに残る。口径24.6cm、器高13.9cm、底径19.0cm。3区土坑2出土。3は内面に播目があり、播鉢か。体部は丸味を帯びた器形で口縁部は水平面をなす。外面の二ヶ所に方形状の耳部が付く。口径35.4cm。7区溝1－i西部出土。4は内面の屈曲から推察すると小判形の平面形となるようである。3区ピット出土。

5～11は茶白の上白である。5はほぼ完形品で、直径19.0cm。把手のホゾ穴周囲には菱形の浮き彫りが行われる。7区出土。6は直径18.5cm。7区溝1－ii北出土。7は半分以上を欠失する。ホゾ穴周囲の装飾は欠失する。直径18cm前後になると思われる。7区トレンチ出土。8はホゾ穴周囲の浮き彫り装飾は見られない。直径19.0cm。7区溝1－iv北出土。9はホゾ穴周囲に三段の浮き彫りを行う。7区トレンチ出土。10もホゾ穴周囲に三段の菱形浮き彫りを行う。3区ピット出土。11は7区溝1－iv出土。12はホゾ穴周囲の装飾部分の破片で、菱形ではなく方形の浮き彫りを行う。7区出土。

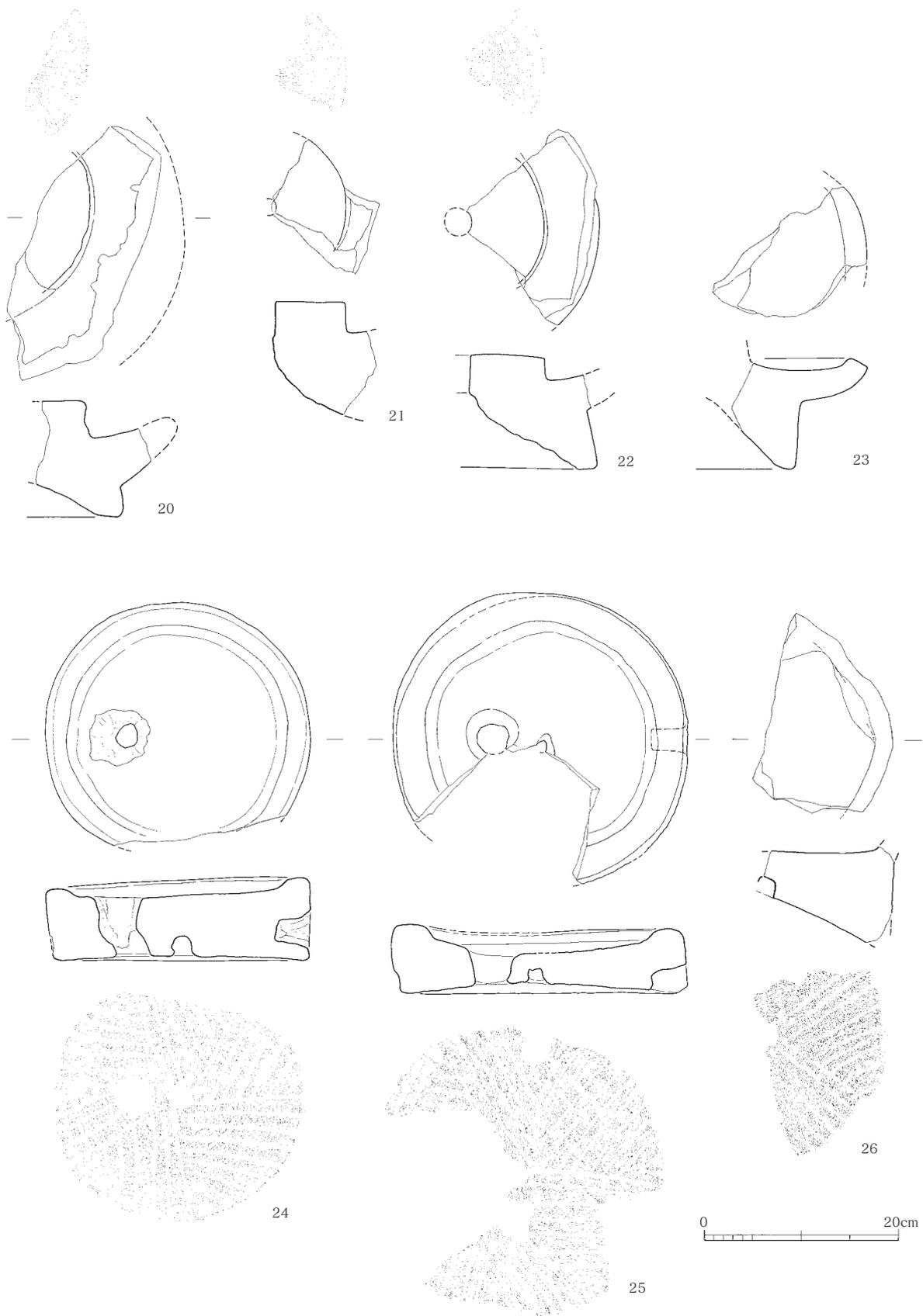
13～23は茶白の下白である。13は受皿部分を欠失するが、白の部分は完存しており、直径18.5cmを測る。7区出土。14は背面の底部と受皿部分の境が段を有しており、また白部分の背面は大きく削り込んでいる。白部の直径19.5cm。7区トレンチ出土。15は白部の直径が19.0cm程度になる。7区溝1－ii出土。16・17は白部が半球状に盛り上がった形状をなす。受皿部分の縁は丸く肥厚する。16は7区溝1－i東部出土。17は7区溝1－v出土。18は7区ピット出土。19は7区溝1－vii出土。20は7区下層ピット出土。21は7区トレンチ出土。22は7区溝1－



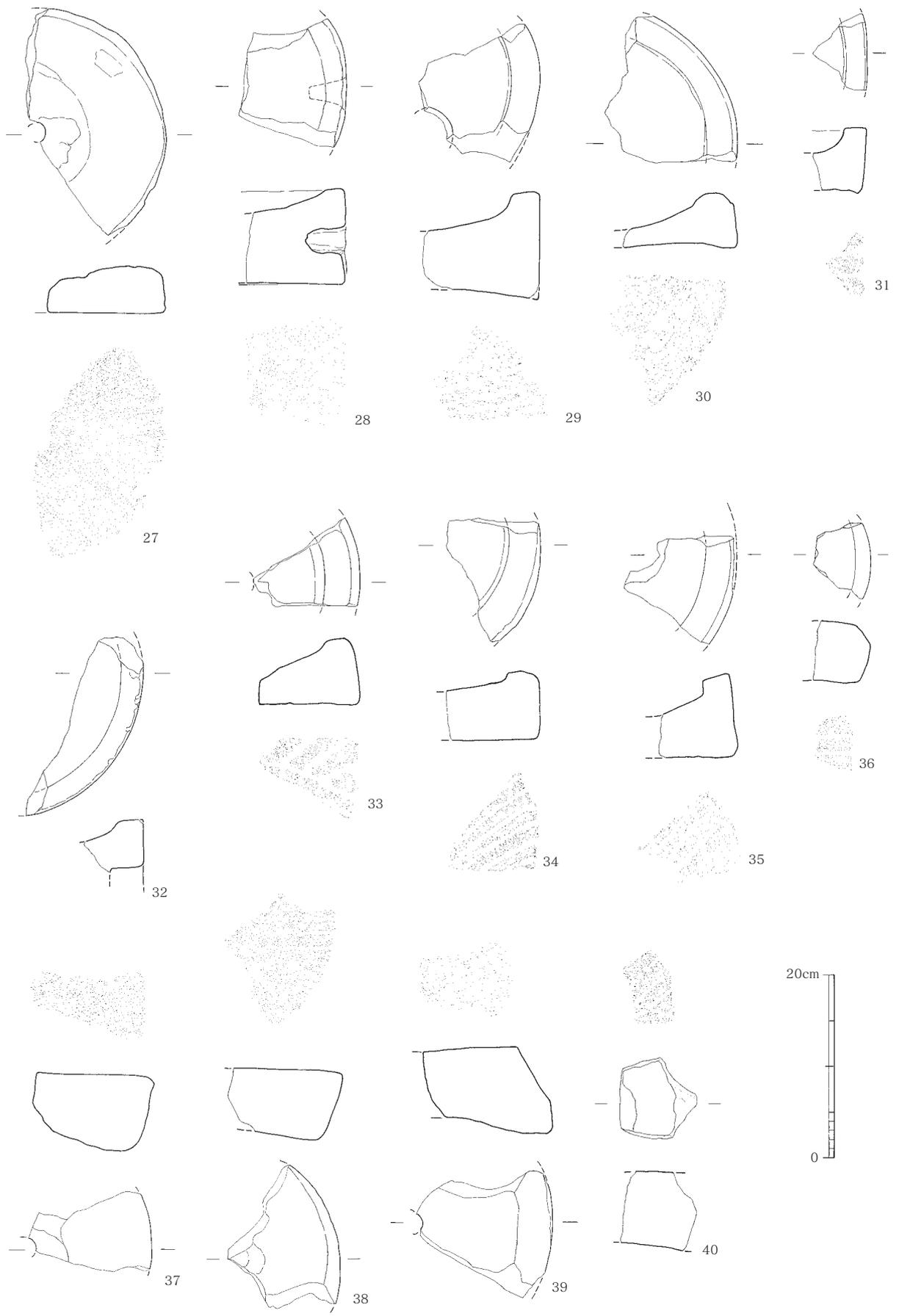
第152图 石製品実測図② (1/6)



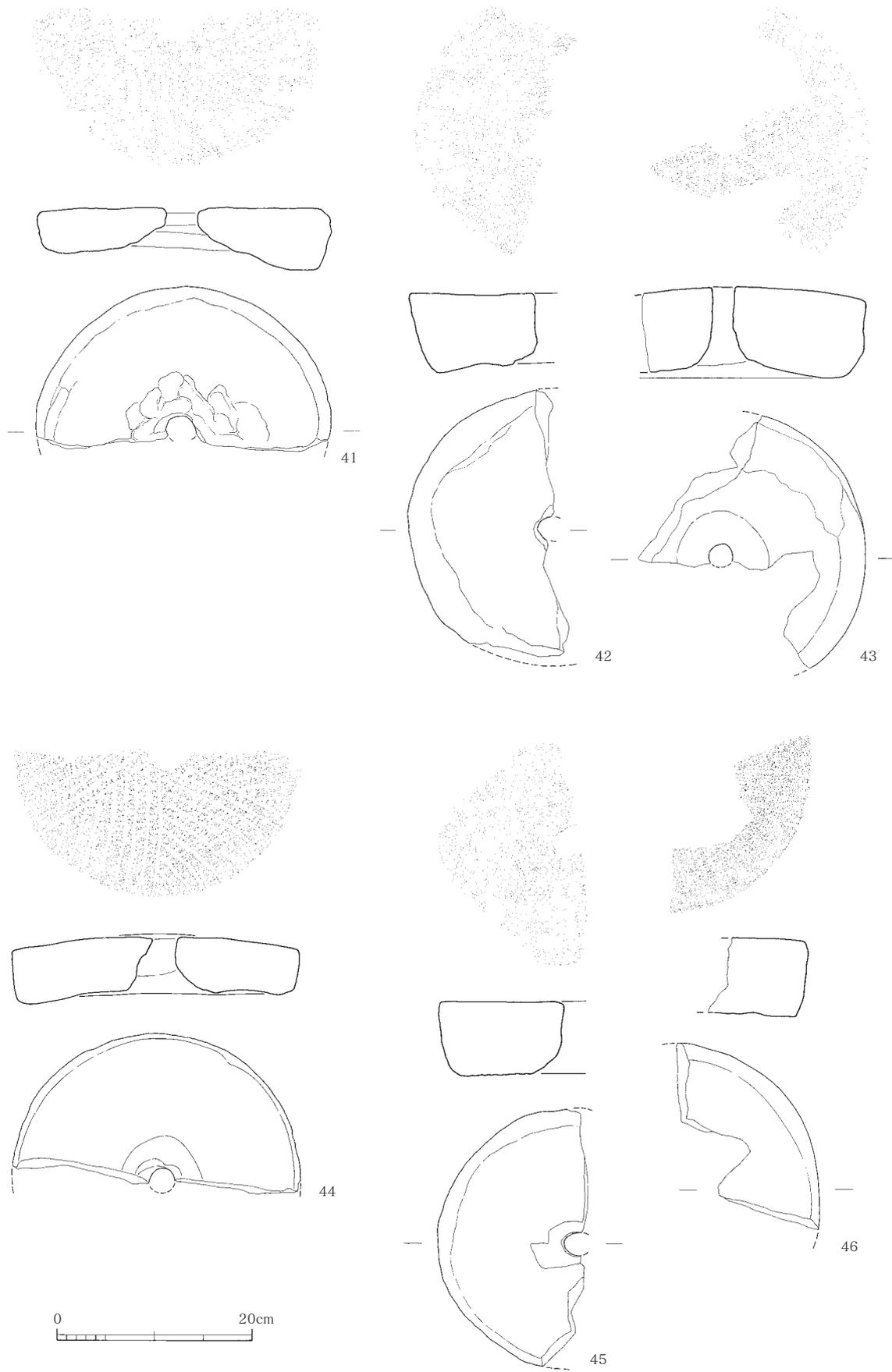
第 153 図 石製品実測図③ (1/6)



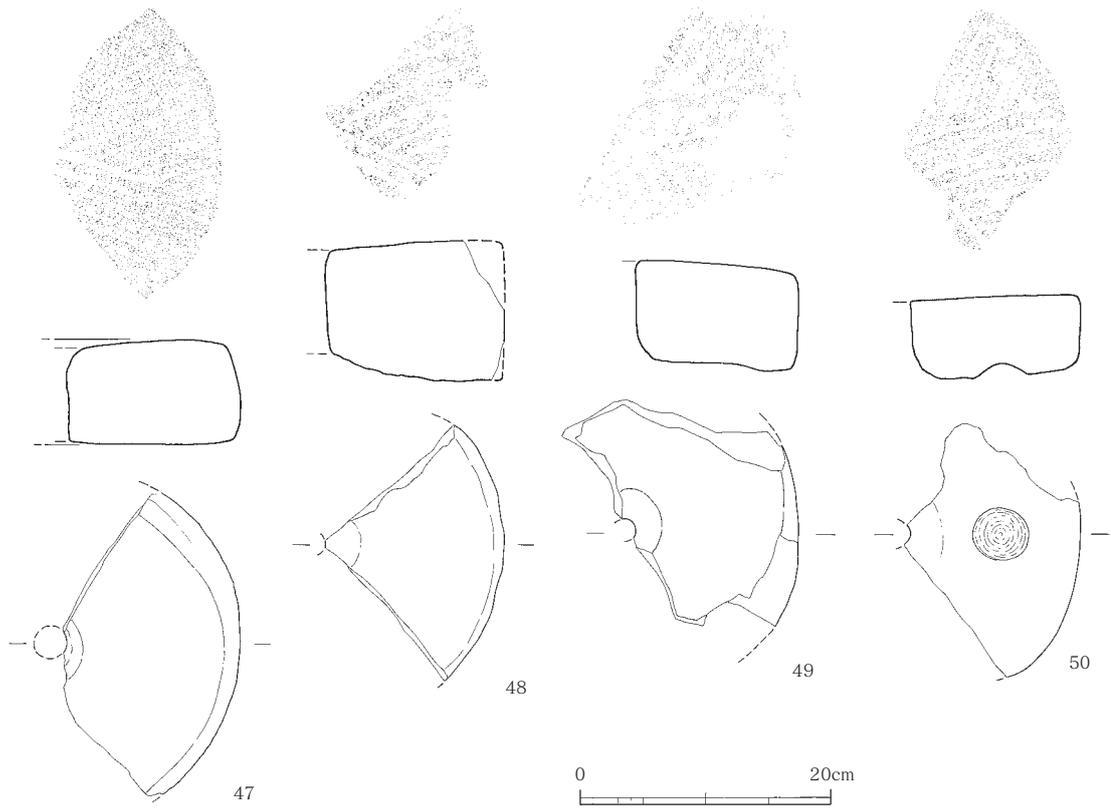
第 154 图 石製品実測図④ (1/6)



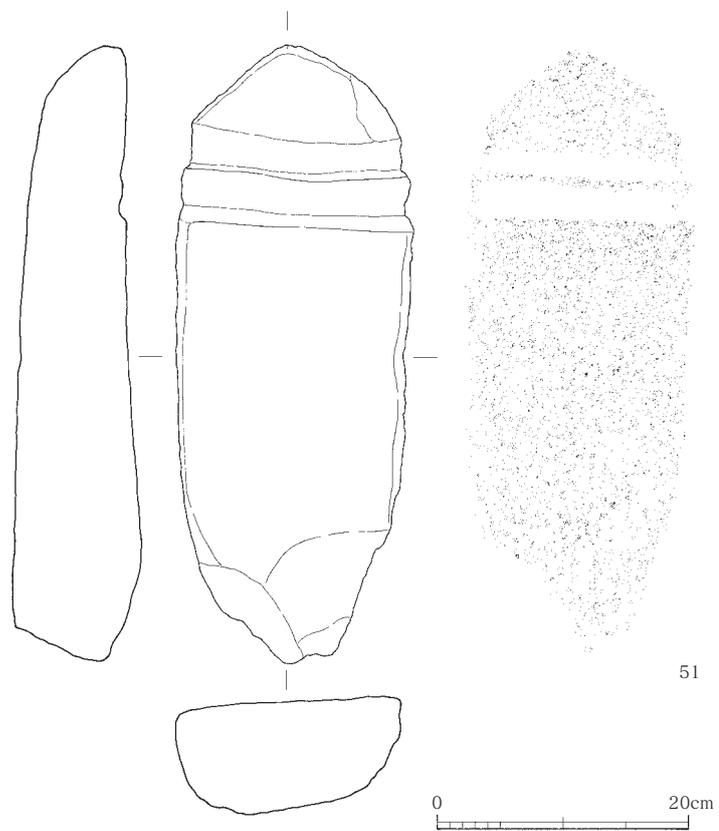
第 155 図 石製品実測図⑤ (1/6)



第 156 図 石製品実測図⑥ (1/6)



第 157 図 石製品実測図⑦ (1/6)



第 158 図 石製品実測図⑧ (1/6)

iv北側出土。23は4区土坑1出土。

24～36は石臼の上臼である。24は完形品で、直径25.5cm、厚さ8.5cmを測る。7区溝1－v出土。25は直径30.3cm。7区出土。26は7区溝1－iv出土。27は厚さ5.5cmと薄い。7区溝1－ii北出土。28は3区土坑8出土。29は縁部付近の厚さ11.5cmを測る。30は表面の風化が著しい。7区溝1－ii北出土。31は7区石垣出土。32は7区出土。33は7区下層北側遺構面出土。34は7区トレンチ出土。35は7区下層北側遺構面出土。36は7区溝1－ii北側出土。

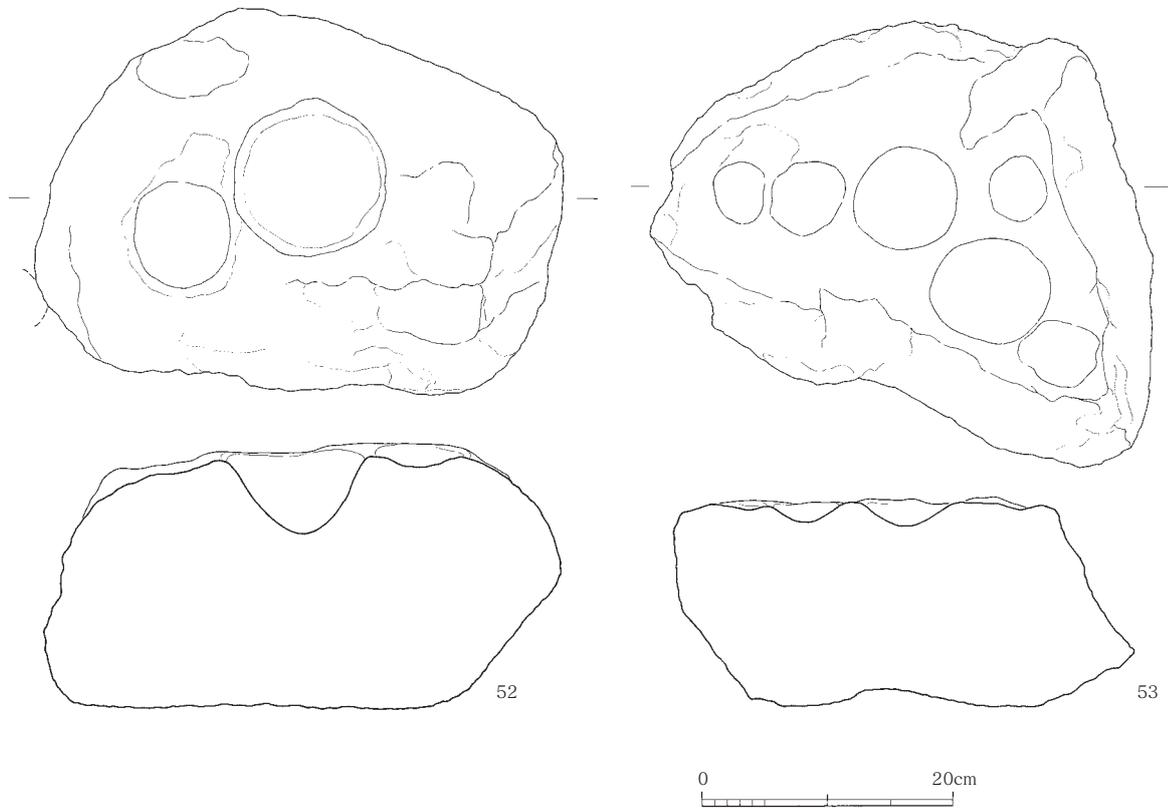
37～50は石臼の下臼である。37は7区溝1－ii北側出土。38は7区溝1－iv北側出土。39は7区出土。40は7区トレンチ出土。41は直径30.0cmを測る。3区出土。42は縁がいびつな形状となり、直径28.5cm前後を測る。3区土坑8出土。43は直径29.0cmを測る。7区出土。44は厚さ6cmと薄い。直径29.5cmを測る。45は3区土坑8出土。46は7区溝1－iv北側出土。47は7区溝1－iv出土。48・49は7区出土。50は背面に浅い穿孔痕があり、何かに転用したものと思われる。7区溝1－iv出土。

51は花崗岩製板碑である。柱状の花崗岩の一則縁を平坦に加工し、上部に二条の段を配しただけの形状である。長さ49.6cm、幅18.1cm、厚さ9.0cm。7区出土。

52・53は花崗岩の表面に円形の窪みが複数あるもので、いわゆる杯状穴と呼ばれるものである。52は3ヶ所、53は6ヶ所の窪みが見られる。どちらも7区溝1－iv出土。

砥石（図版37・38、第160～162図）

1～32は砥石である。1は片岩か。4区ピット出土。2は砂岩製。7区ピット出土。3は砂岩製。



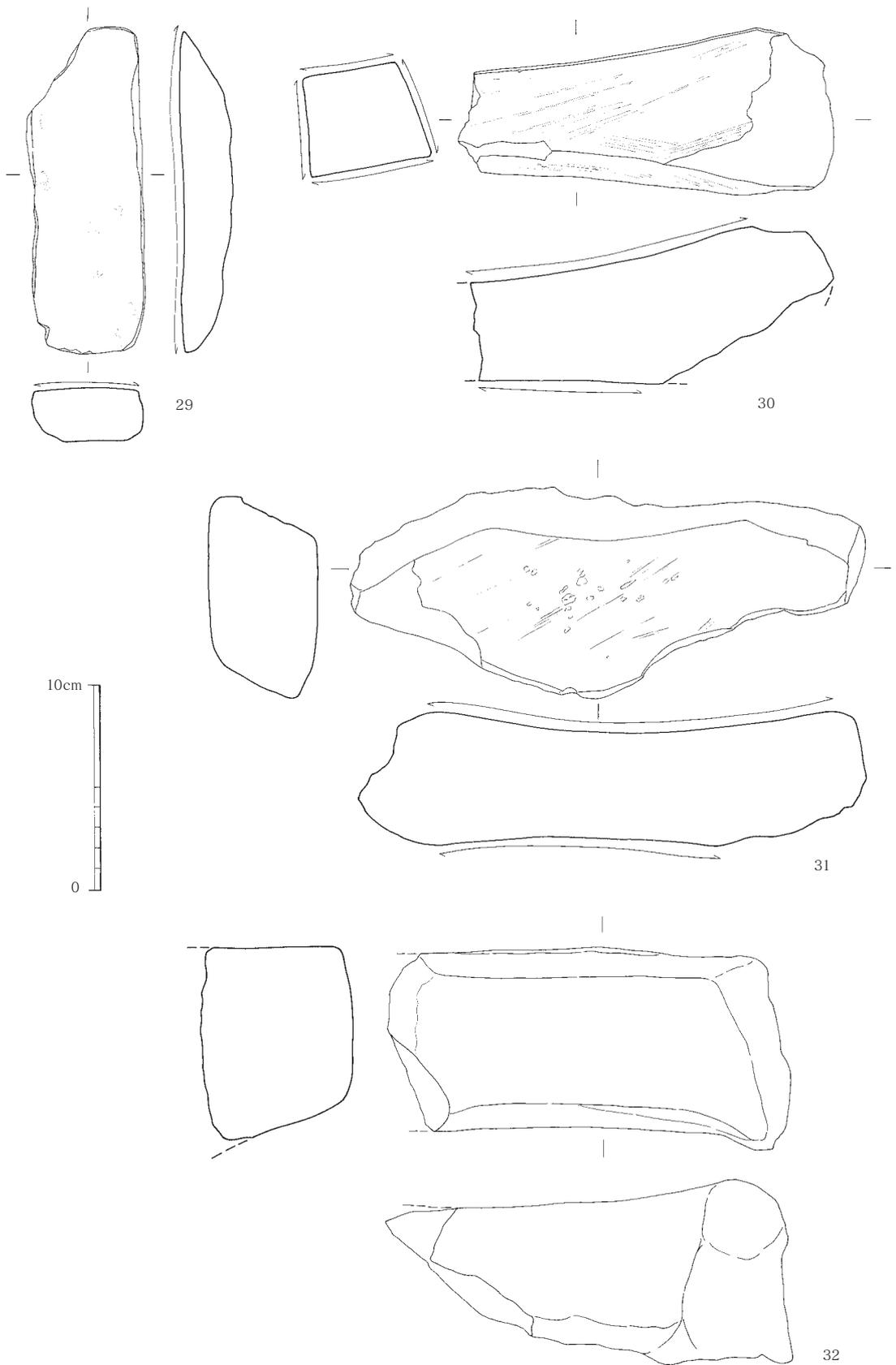
第159図 石製品実測図⑨（1/6）



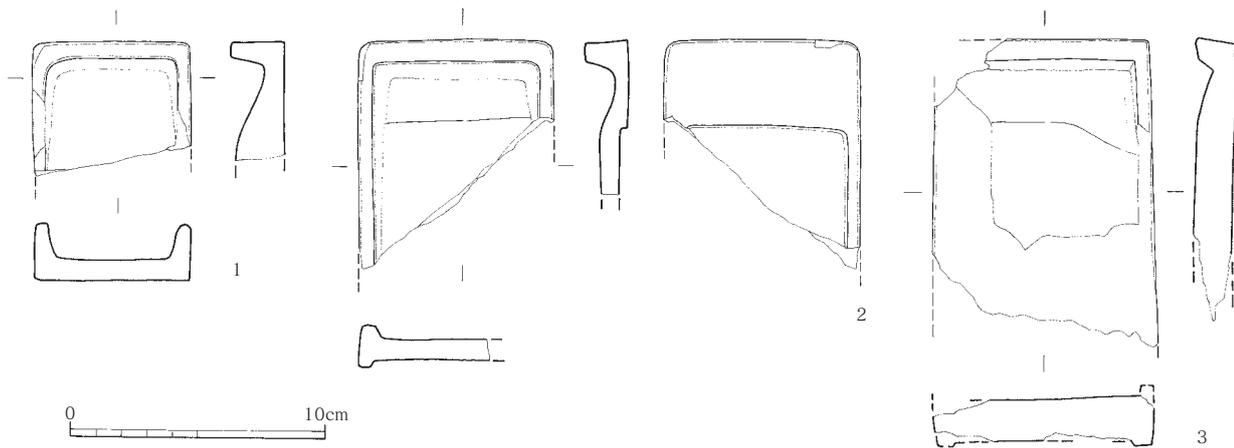
第160图 砥石实测图① (1/3)



第 161 图 砥石实测图② (1/3)



第 162 図 砥石実測図③ (1/3)



第 163 図 硯実測図 (1/3)

7 区下層遺構面出土。4 は凝灰岩製。7 区下層ピット出土。5 は頁岩製で整った形状を呈す。やや肌理が粗い。3 区ピット出土。6 は棒状を呈し、よく使い込まれている。粘板岩製。5 区ピット出土。7 は砂岩製でよく使い込まれている。4 区土坑 2 出土。8 は整った形状を呈し表面には擦痕が多く残る。3 区ピット出土。9 は頁岩製で使い込まれている。7 区溝 1 - ii 出土。10 は斑岩か。ほぼ完形。1 区ピット出土。11 は粘板岩製。7 区ピット出土。12 は砂岩製で 1 区ピット出土。13 は砂岩製で 3 区出土。14 は頁岩製で非常によく使い込まれている。5 区ピット出土。15 は砂岩製で 7 区ピット出土。16 も砂岩製で 7 区ピット出土。17 は砂岩製で 7 区溝 1 - vi 出土。

18 は砂岩製で 7 区溝 1 - vi 出土。19 は砂岩製で柱状を呈す。7 区トレンチ出土。20 は砂岩製で 7 区ピット出土。21 は砂岩製で貫通していない穿孔が一ヶ所ある。7 区下層ピット出土。22 は砂岩製で 7 区溝 1 - iv 出土。23 は片岩製で表面に太めの擦痕が残る。3 区ピット出土。24 は砂岩製でほぼ完形。良く使い込まれており表面には太めの擦痕が明瞭に残る。7 区溝 1 - ii 出土。25 は砂岩製で 4 区土坑 2 出土。26 は砂岩製で非常に良く使い込まれている。7 区溝 1 - ii 出土。27 は斑岩か。7 区溝 1 - iii 出土。28 は泥岩製で 7 区溝 1 - vi 出土。

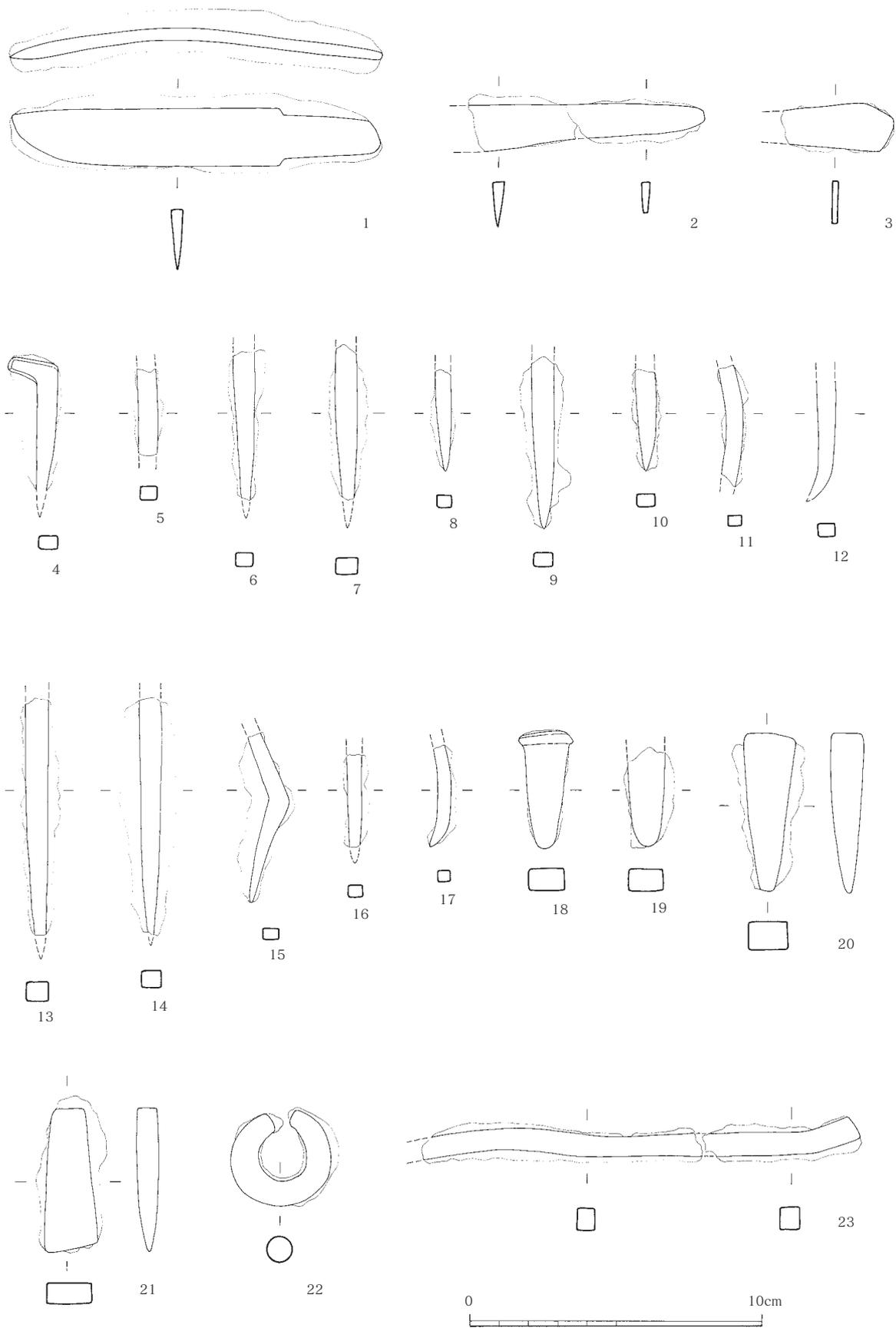
29 ~ 32 は据え付けて使用したと思われる大型品である。29 は頁岩製か。砥面は一面のみ。5 区ピット出土。30 は斑岩製か。砥面には擦痕が多く残る。溝 1 - iv 出土。31 は砂岩製で砥面は二面。7 区溝 1 - ii 出土。32 は五輪塔の火輪を砥石に転用したものである。凝灰岩製。7 区出土。

硯 (図版 39、第 163 図)

1 ~ 3 は硯である。1 は石製で幅 6.2cm、厚さ 2.2cm。5 区出土。2 は陶製で幅 7.6cm、厚さ 1.8cm。底部は平坦ではなく陸部の背面は 3mm 程の深さで抉り込んでいる。5 区出土。3 は石製で幅 8.8cm。海部は浅くて狭い。7 区トレンチ出土。

金属製品 (図版 39・40、第 164・165 図)

1・2 は刀子である。1 は錆が著しく全体の形状に曖昧な点が多く残るが、長さ 12.7cm、刃部長 9.4cm、身幅 2.0cm、背部厚 4mm を測る。7 区トレンチ出土。2 は刃部の大半を欠損するが、現存長 8.0cm、身幅 1.6cm、背部厚 4mm を測る。7 区溝 1 - i 東部出土。3 は板状の鉄製品で、刀

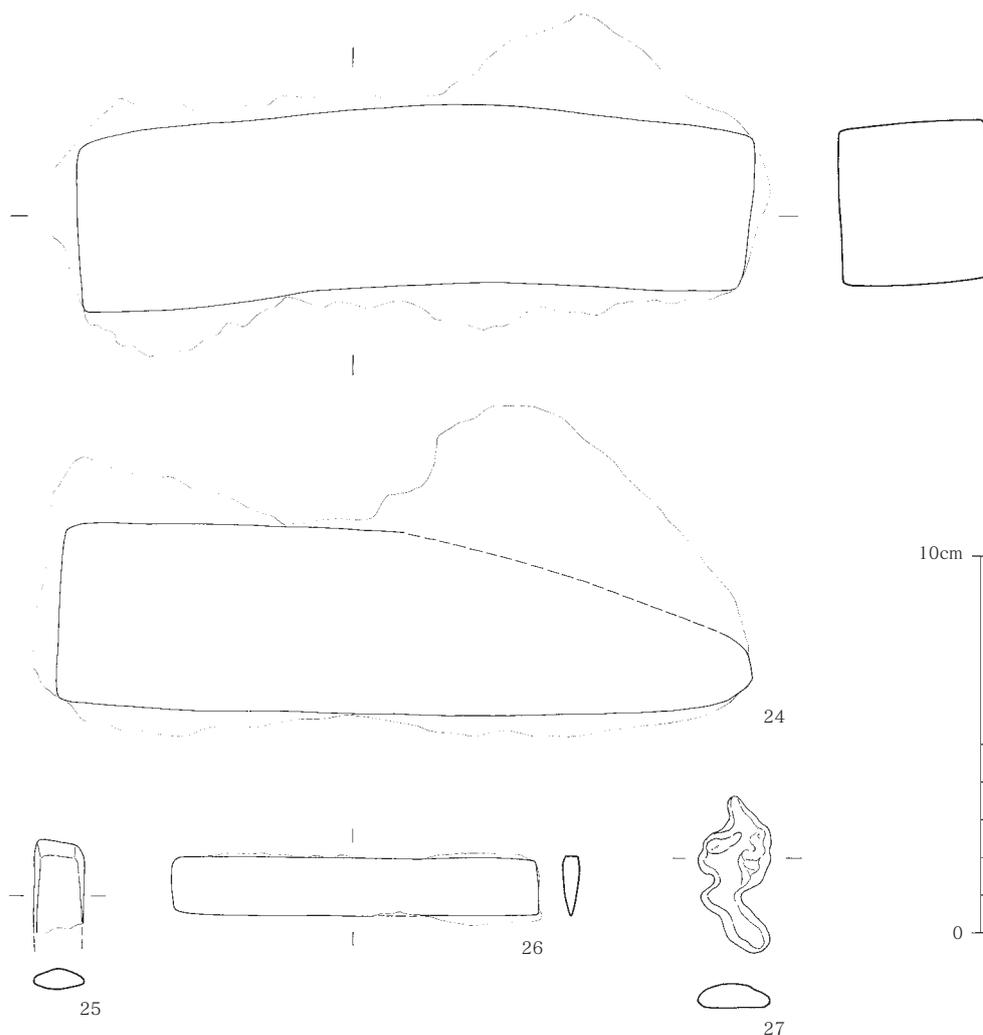


第 164 图 金属製品実測図① (1/2)

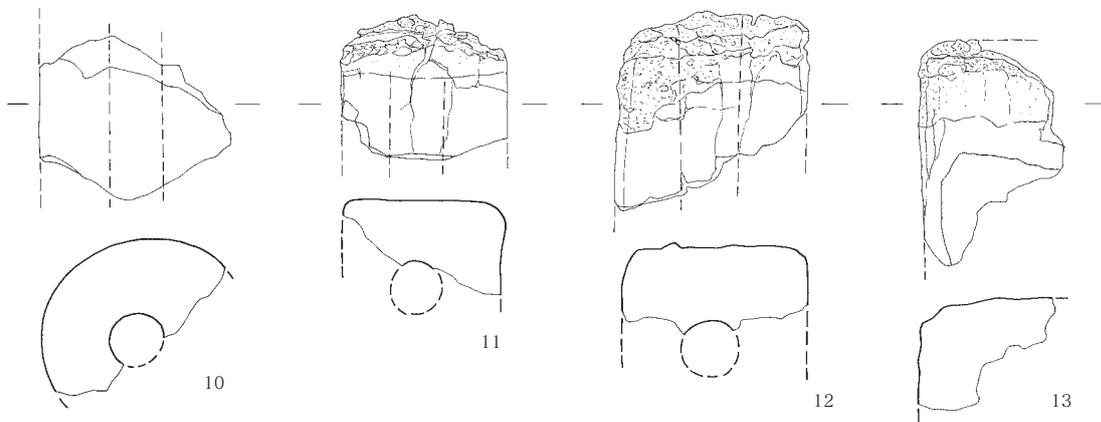
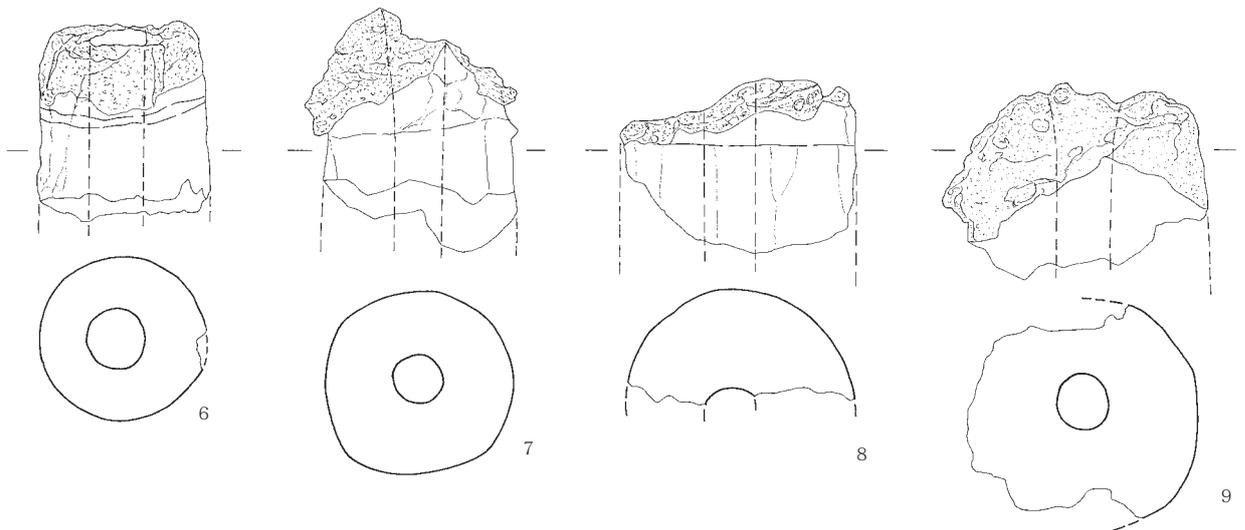
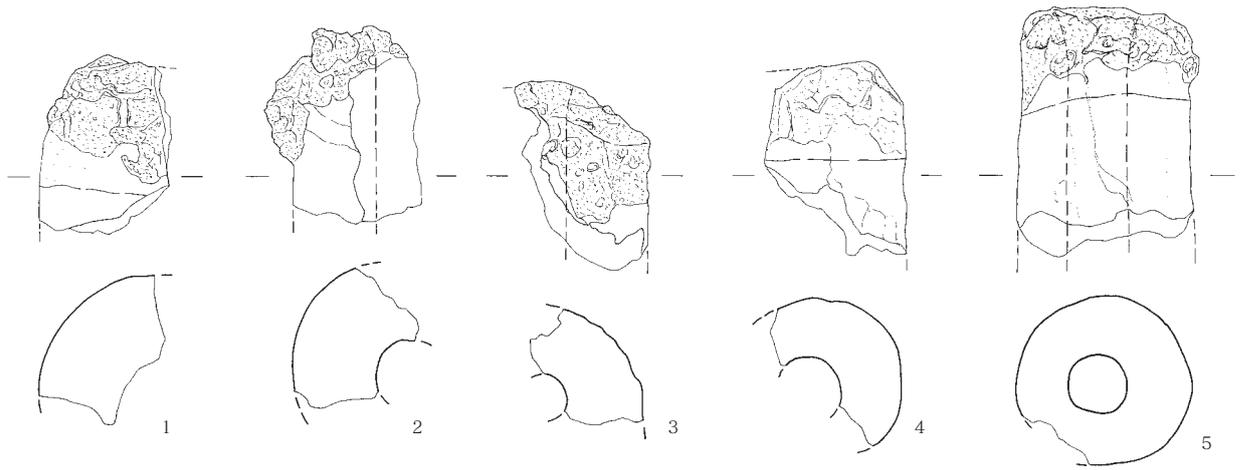
子の茎部と考えた。厚さ 2mm、幅 1.6cm を測る。7 区溝 1 - i 東部出土。

4 ~ 17 は鉄釘である。4 は長さが短い釘で、現存長 4.6cm。4 区ピット出土。5 ~ 17 は全て頭部を欠失するものである。幅 6 ~ 8mm のものが多い。13 や 14 は比較的長く遺存しており、13 は 8.3cm、14 は 8.4cm。15 は途中で鈍角に曲がっている。5 は 4 区ピット出土。6 は 7 区溝 1 - iv 最北上層出土。7 は 7 区溝 1 - iv 最北上層出土。8 は 7 区溝 1 - iii 出土。9 は 7 区溝 1 - iii 出土。10 は 7 区溝 1 - iii 出土。11 は 7 区溝 1 - iii 出土。12 は 7 区溝 1 - i 東部出土。13 は 7 区溝 1 - iv 最北上層出土。14 は 7 区溝 1 - iv・v 間トレンチ出土。15 は 7 区溝 1 - iii 出土。16 は 7 区溝 1 - i 東部出土。17 は 7 区溝 1 - iii 出土。

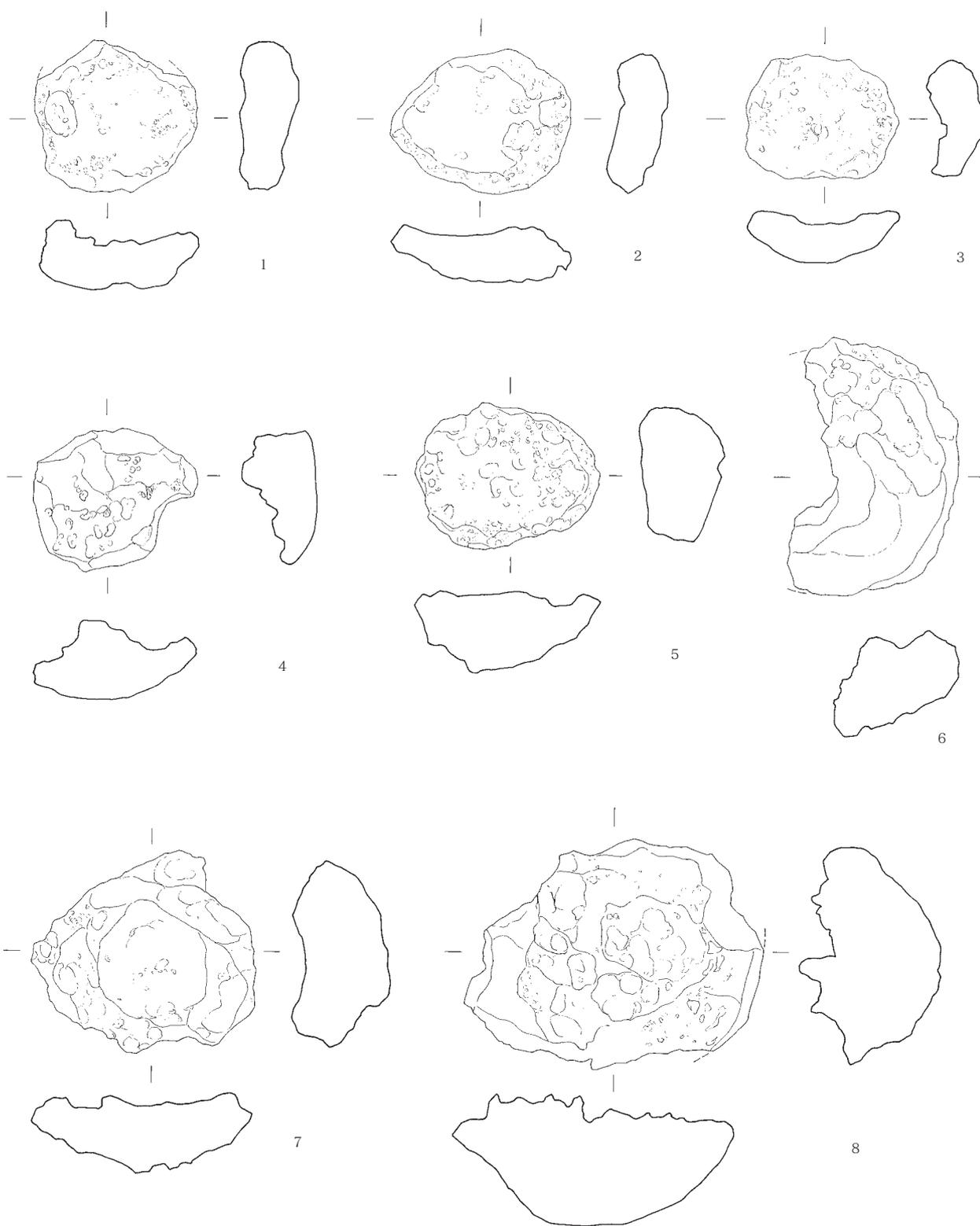
18 ~ 20 は楔であろう。18 は頭部が張り出している。全長 4.1cm。7 区溝 1 - i 中部出土。19 は頭部を欠失する。現存長 3.4cm。7 区溝 1 - iii 出土。20 は身が厚く、或いは楔ではないかもしれない。頭部の張り出しも見られない。7 区ピット出土。21 は小型の斧か。撥形に開く刃部を形成する。全長 5.0cm。7 区溝 1 - iii 出土。22 は環状の鉄製品である。直径 3.5cm 程で端部は接触せず、ちょうど古墳時代の耳環に類似する。断面は直径 9mm の円形を呈す。23 は棒状の鉄製品である。長さ 15.2cm、断面は一辺 7mm の方形を呈す。7 区溝 1 - ii 北側出土。



第 165 図 金属製品実測図② (1/2)



第 166 图 鞆羽口実測图 (1/3)



0 20cm

第 167 図 鉄滓実測図 (1/4)

24 は大型の鉄製品である。長さ 18.0cm、断面は一辺 4cm 前後の方形を呈す。片方の端が薄く作られている。7 区溝 1 - iv 中央出土。

25・26 は青銅製品である。25 は断面が中膨らみとなる形状の棒状品である。長さ 2.5cm、幅 1.4cm、厚さ 5.05cm。7 区溝 1 - iii 出土。26 は長い板状の製品で、一方の長端部に刃部が形成される。長さ 9.7cm、幅 1.6cm、厚さ 5mm。7 区溝 1 - i 東部出土。27 は液状化した後に固化した金属物である。鉄や青銅ではなく表面は白色に風化する。長さ 4.1cm、幅 1.9cm、厚さ 0.6cm。2・3 区溝 2 から出土。

韃羽口 (図版 41、第 166 図)

1 ~ 13 は韃羽口である。1 ~ 10 は断面円形のもの。1 は先端が溶解しガラス状になる。7 区溝 1 - i 出土。2 は先端部に鉄分の付着が見られる。7 区溝 1 - ii 出土。3 は先端部が赤褐色を呈す。7 区溝 1 - ii 出土。4 は付着物が非常に少ない。7 区溝 1 - iii 出土。5 はもとの形状をよく留めている。7 区溝 1 - i 出土。6 は先端部に鉄分付着。7 区溝 1 - iii 出土。7 は先端部が溶解しガラス状の付着物が見られる。7 区溝 1 - ii 出土。8 は先端部が炉内で破損したためか、鉄分の付着が先端部の一部に留まる。7 区溝 1 - i 出土。9 は黒色ガラス状の付着物が見られる。7 区溝 1 - iv・v 出土。10 は基部付近の破片。7 区ピット出土。

11 ~ 13 は断面方形のもの。11 は先端部にガラス状の付着物が見られ、その下は剥離が顕著である。胎土は非常に緻密である。7 区ピット出土。12 はガラス状の付着物が見られる。7 区溝 1 - iv・v 出土。13 は先端部が黒変するのみで被熱は顕著ではない。7 区溝 1 - ii 出土。

鉄滓 (図版 42、第 167 図)

1 ~ 8 は碗形滓である。1 は表面のガラス化が進み、気泡が少なく砂礫を多く含む。7 区溝 1 - i 出土。2 は 7 区溝 1 - iv 出土。3 は砂礫を多く含み表面の気泡が多い。7 区溝 1 - ii 出土。4 は木炭片を多く含み鉄分は少ない。7 区溝 1 - ii 出土。5 は砂礫を多く含みガラス化は見られない。7 区溝 1 - ii 出土。6 は気泡が少なく鉄分が多い。7 区溝 1 - iv 出土。7 は気泡が少なく砂礫若干含む。7 区溝 1 - ii 出土。8 は比較的大きい。表面には気泡が多く見られる。7 区溝 1 - vi 出土。

(11) 小結

縄文時代

これまで五ヶ山網取遺跡周辺の縄文時代については、遺跡の北側山麓に位置する縄文後晩期集落の那珂川町山田西遺跡や、背振ダム付近に位置する福岡市早良区板屋遺跡で縄文早期押型文土器、貝殻条痕文土器や石器が知られていたが、今回の調査ではそれらの時期をつなぐ縄文時代早期押型文土器および後期の貝殻条痕文土器の時期の集落遺跡が確認された。

今回の調査で確認された遺構は、押型文土器を中心とする時期である。押型文の時期に属する遺構は1区竪穴建物1・2で比較的小型の方形を呈する。住居西側では石材や調整剥片に混じって多数の剥片が検出されたことから、石器製作の最終工程が当集落で行われていたことが想定される。石器は、全時期を通してサヌカイトと黒曜石がみられ、黒曜石には姫島産のものが含まれる。

また、条痕文土器の遺構については、2区の大型円形を呈する竪穴建物と集石遺構、7区小型の方形の竪穴建物、方形土坑、土坑があげられる。2区の建物は、6.34mと非常に大型の円形プランを呈するのに対し、7区の建物は小型の方形を呈することから、条痕文については時期を区分できる可能性もあり、今後さらに検討を深める必要がある。また、7区では無数の小型の方形土坑が見つまっていることも特徴である。

また遺構に伴わないが型式を特定できる遺物として、4区では塞ノ神式（早期）、曾畑式（前期）が、また7区では春日式（前期）が確認される。

以上のことから、五ヶ山網取遺跡では主に縄文時代早期前葉から前期前葉、また後期を中心とする時期に集落が営まれたことがうかがえる。福岡平野から佐賀平野への尾根伝いのルート上にあることが、この地に集落が作られた要因であるといえよう。

中近世

今回の調査では、中近世以降の集落の痕跡が確認された。確認された掘立柱建物は11棟であるが、特に西側の3区では数多くのピットが確認され、山の上に立地する集落でありながら、往時には複数の建物が立ち並ぶ大規模な集落であったことがうかがい知られる。

1区および3～5・7区で15世紀から現代までの遺物が確認されている。特に陶磁器は朝鮮半島の李朝のものや、中国産陶磁器では、龍泉窯の青磁から、明の磁器が混在し、中近世における網取集落の最盛ぶりを反映した組成となっている。集落全体の傾向として15～16世紀にピークを迎え、17世紀を境に現在の形に近く、遺構の数も集落の規模も収斂していく様相が見て取れる。

とくに溝1は15～16世紀が主体で17世紀頭に廃絶されたと考えられるが、この溝は集落全体を、コ字形に囲繞する大規模な区画溝である。規模は、東西方向に最大幅1～3m、南北方向に最大幅2.1～8m、常時5～6mの幅であったと想定される。少なくとも6度にわたる掘り直しが想定される。コ字形の溝により区画される平坦面の規模は、北側は東西7～10m×南北22mを、西側は東西10m、南北16mを測る。溝1は西側で、3区溝1につながる可能性が、また南側は4区土坑3につながる可能性がある。また4区溝1・1区溝1や溝6なども、一連の区画溝になる可能性があるが、ここでは可能性を指摘しておくに留める。

溝1の南北方向は調査区外を挟み明らかでないが、4区および1区で東西に走る溝へとつながる可能性が高い。以上から最盛期には1・3～5および7区が一体の大規模な集落として機能してい

た可能性が指摘できる。17世紀にはこの濠は廃絶され、石垣が築かれる。その後、南側は畑地として利用され、3・7区は西側へと縮小し調査時前の集落の規模へ変化したものと考えられる。

特徴としては、5区では矢穴が刻まれた採石遺構や、石組の井戸及び周辺施設が確認され、岩がちな山地で巨石を巧みに利用して集落が営まれていることが分かる。また1区では鍛冶遺構が、また7区溝1-iより数多くの鉄滓が出土しており、1区において鍛冶遺構が出土していることや、多数の碗型鍛冶滓や鞆羽口の存在から鍛冶が行われていたことが言える。

また遺物層を見ると、播鉢や火鉢をはじめとする中世において日常よく見られる土器類のほかに龍泉窯の青磁をはじめとして、産地も器種も多様な陶磁器が入っていることや経軸や硯、土鈴が存在する。また多くの石臼が確認されたが、その中には茶臼も混在している。このことは『筑前国続風土記』に「五箇山は山中境内せはく、田圃すくなけれ共、人民多し。茶を多く植て家産とす。五ヶ山茶とて、是を用ゆ」とあり、茶の栽培が記されているが、これを裏付ける資料となろう。また今回の調査では、板碑も一点表採されている。

以上より五ヶ山網取遺跡においては、一般の集落にはとどまらぬ有力層の存在を垣間見ることができる。出土遺物の特殊性や山向こうの南側の集落との関係などから、信仰に関わる集落としての性格が想定されよう。今回の調査では、集落の西の山すそに埋納された備蓄銭の調査を行うことができた。この調査によって確認された3,044枚を数える備蓄銭は、本来集落の裏山に埋納されたものを調査時の場所に再々埋納しており、そのような特殊な性格の集落であればこそ、裏山に備蓄銭が埋納されることとなったのではないかと思われる。

また、中世において五ヶ山網取遺跡に大規模な集落が成立した背景には、筑前肥前街道に位置し、北に一ノ岳城、亀ノ尾城、南に白土城が置かれるという、筑前と肥前に抜ける交通の重要なルートに位置したことが第一の要因としてあげられよう。またそれだけでなく南へ脊振山を登ると山頂には上宮東門寺、山を越えた坂本峠には中宮靈仙寺が存在する。これらの山岳寺院との関係こそむしろ深いものと想定されるが、その検討については今後の課題としたい。

参考文献

九州縄文研究会・宮崎考古学会 2003 『九州縄文時代の集石遺構と炉穴』

九州縄文研究会 2008 『九州の縄文住居II』

九州山岳霊場遺跡研究会・九州歴史資料館 2012 『脊振山系の山岳霊場遺跡—脊振山・雷山・恰土七ヶ寺 資料集』

福岡県教育委員会 2008 『福岡県営五ヶ山ダム関係文化財調査報告I 五ヶ山・小川内』 福岡県文化財調査報告書第215集

IV おわりに

今回の調査では、縄文時代については押型文および、条痕文時代の遺構を確認することができ、早期から前期にかけての様相をうかがい知ることができた。

中近世については、五ヶ山大野遺跡および五ヶ山川口遺跡では、五輪塔が確認された。また、五ヶ山網取遺跡は、いわば五ヶ山の福岡平野北側の入口にあたり、15～16世紀を中心とする時期の濠に囲まれた往時の集落の立派な姿をとらえることができた。これらは、五ヶ山の信仰に関わる性格を端的に表しているのではないかと考えられる。また、今回地権者の方々のご好意により、備蓄銭の調査を行うことができた。網取の歴史を考える上で非常に重要な資料であり、今後の研究に大きく寄与するものと思われる。ここに記して感謝したい。

現在も五ヶ山ダム建設に伴い、倉谷、東小川内地区について埋蔵文化財発掘調査が行われている。今後の調査によって、脊振山地の豊かな自然と歴史にはぐくまれた五ヶ山の姿の生き生きとした過去の姿が引きつづき明らかにされることを期待したい。

図 版



1. 五ヶ山網取遺跡 1 区
完掘状況 (西上空から)



2. 2 区完掘状況
(西上空から)



1. 3区完掘状況
(東上空から)



2. 4区完掘状況
(南上空から)

1. 5区完掘状況
(東上空から)

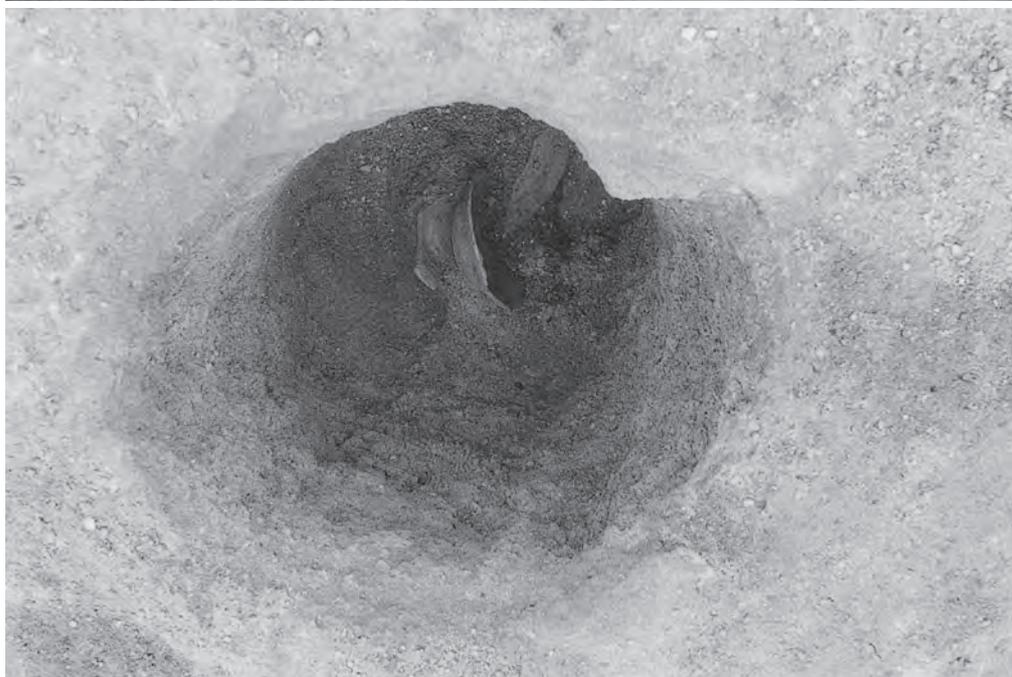


2. 7区完掘状況
(東上空から)





1. 1区縄文竪穴建物1・2
(東から)



2. 1区土坑3 (東から)



3. 1区土坑4 (東から)

1. 2区北壁土層断面図
(南から)



2. 2区縄文竪穴建物1土層
(東から)



3. 2区縄文竪穴建物1
完掘状況 (北から)





1. 2区縄文竪穴建物1遺物
出土状況



2. 2区集石遺構1(東から)



3. 2区土坑1(東から)



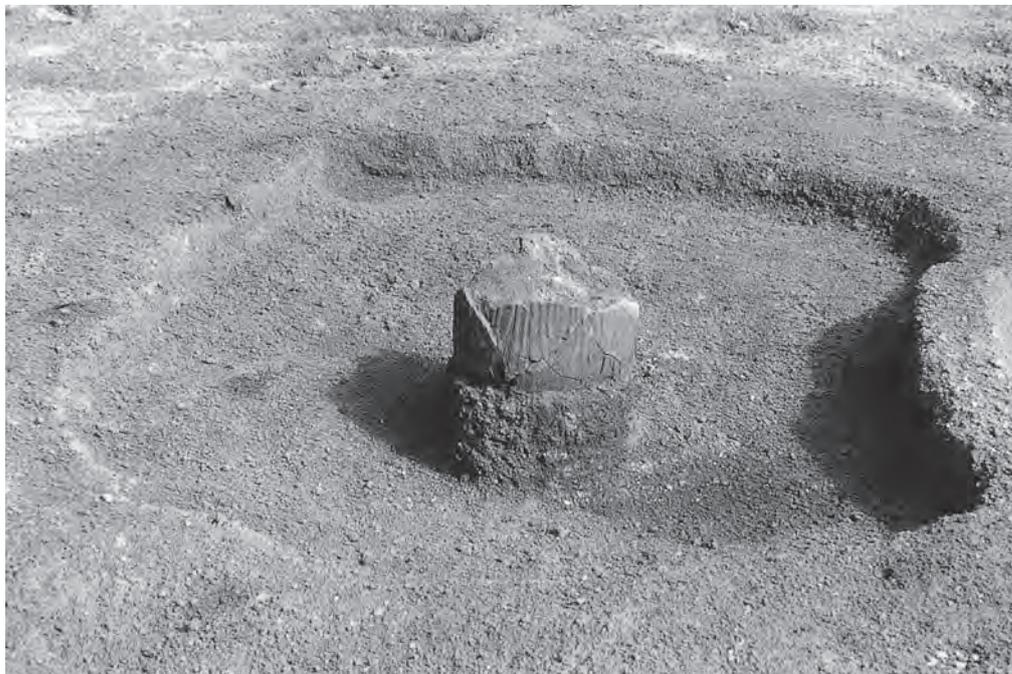
1. 3区土坑2 (西から)



2. 3区土坑3 (南から)



3. 3区土坑6 (北から)



1. 3区土坑7 (南から)



2. 3区土坑8 (西から)



3. 3区溝2 (南から)



1. 4区土坑3 (西から)



2. 4区土坑4 (東から)



3. 5区北壁 (北から)



1. 5区土坑1 (西から)



2. 5区土坑2 (西から)



3. 5区埋甕 (南から)



1. 5区井戸2 (北から)



2. 5区井戸2 (西から)



3. 5区井戸3 (西から)



1. 6区完掘状況（北から）



2. 6区完掘状況（東から）



3. 7区北壁（東から）



1. 7区縄文1号住(東から)



2. 7区縄文1号住土層断面(東から)



3. 7区縄文方形土坑6・7(東から)



1. 7区縄文方形土坑 10
(南から)



2. 7区縄文方形土坑 11
(東から)



3. 7区縄文方形土坑 14
(東から)

1. 7区溝 1 b-b' 断面
(南から)



2. 7区埋甕 (南から)



3. 7区土坑 3 (南から)





1. 7区土坑4 (北から)



2. 7区土坑5 (南から)



3. 7区土坑12 (南から)



1. 備蓄銭再々埋納の祠



2. 祠下層の井戸枠



3. 備蓄銭の埋納状態



第 133 图-1

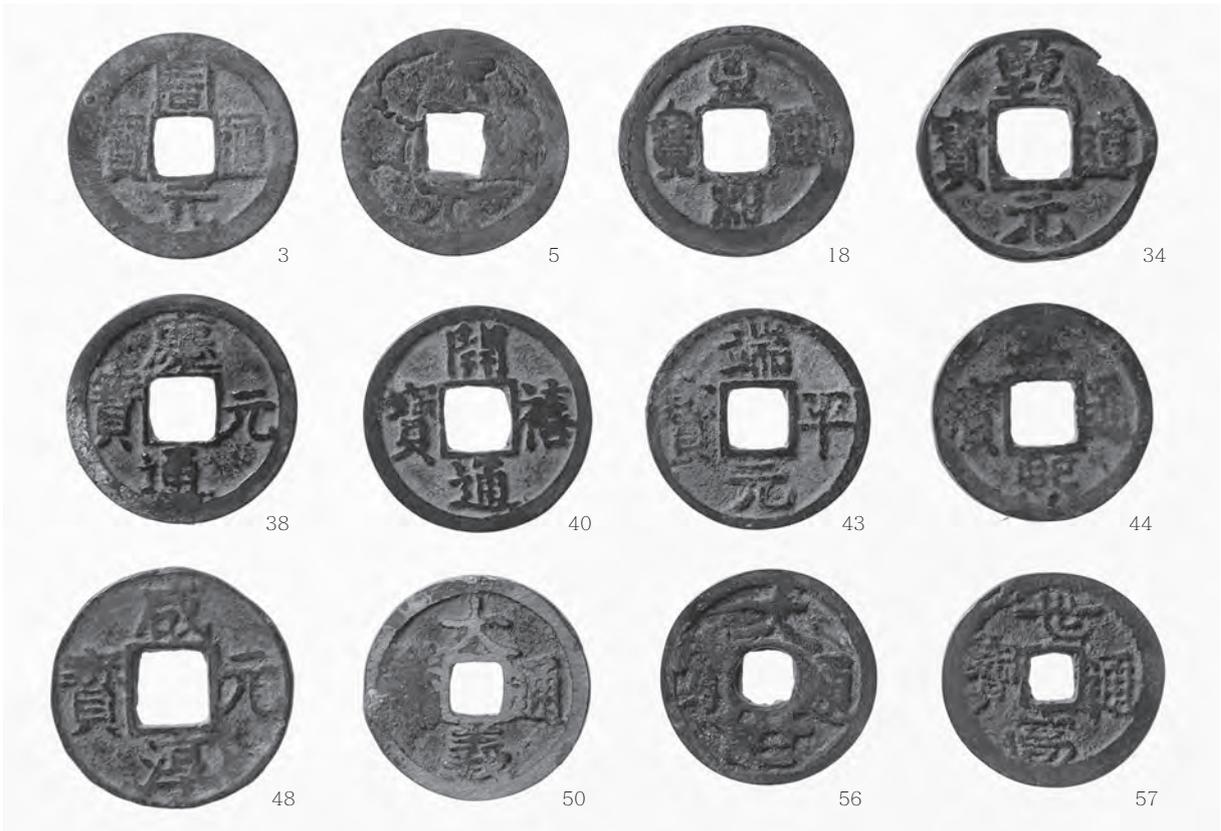


第 133 图-3



第 133 图-2

備蓄錢埋納容器類



1. 各種の古銭（番号は第2表による）



2. 皇宋通寶



1. 洪武通寶



2. 永樂通寶



第 30 图-12



第 46 图-17



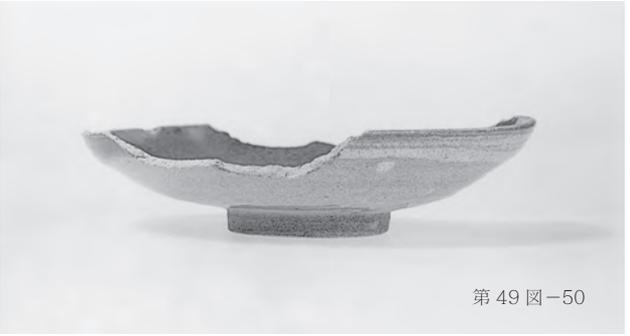
第 31 图-1



第 48 图-1



第 31 图-2



第 49 图-50



第 31 图-10



第 51 图-13



第 31 图-11



第 57 图-6



第 46 图-8



第 58 图-13





第 97 图-39



第 117 图-6



第 102 图-13 ①



第 120 图-19



第 102 图-13 ②



第 126 图-13



第 114 图-17



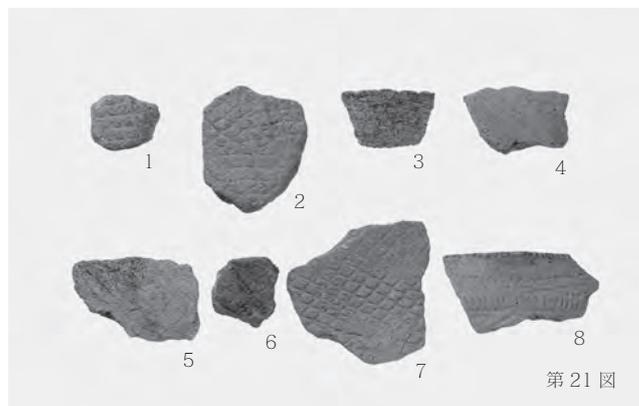
第 130 图-33 ①



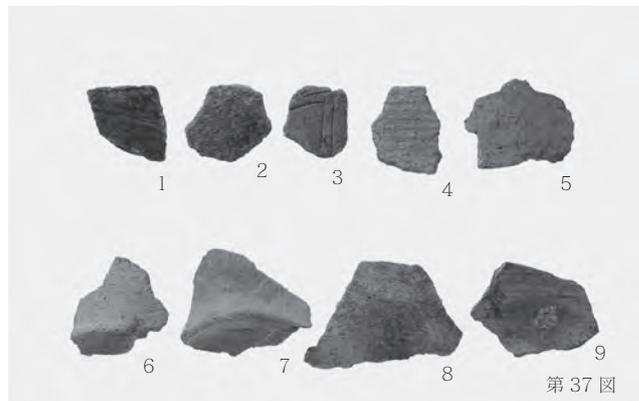
第 117 图-5



第 130 图-33 ②



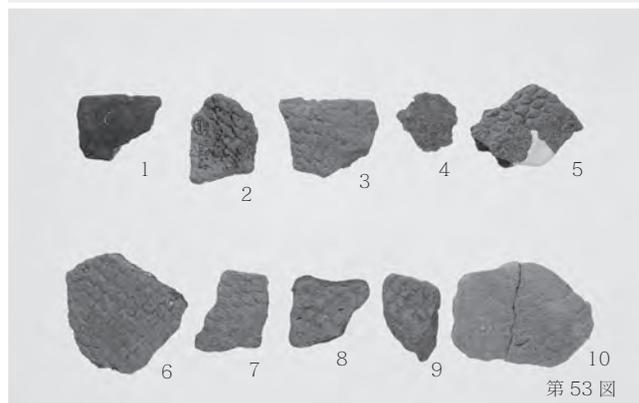
第 21 図



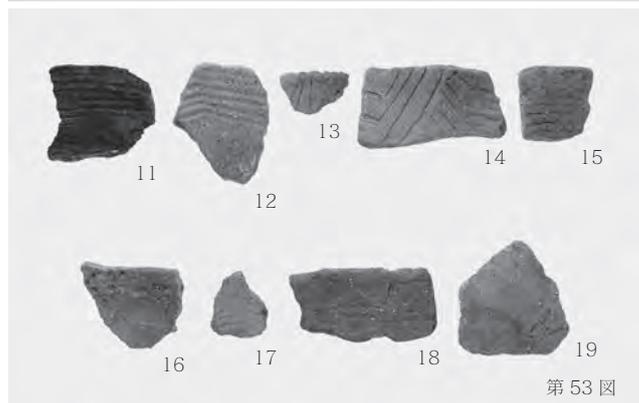
第 37 図



第 40 図

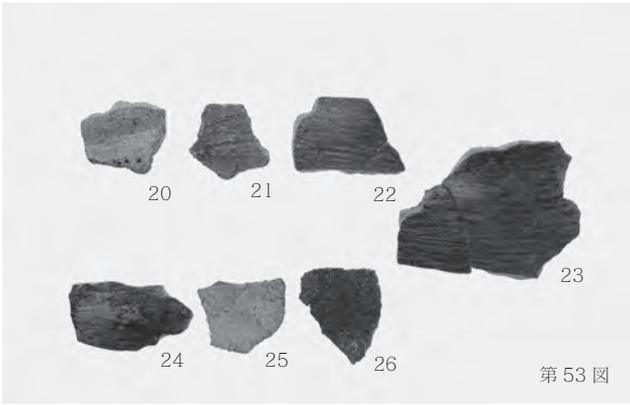


第 53 図

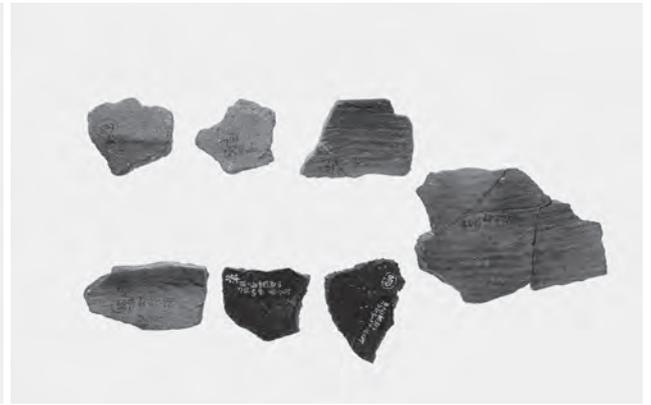


第 53 図

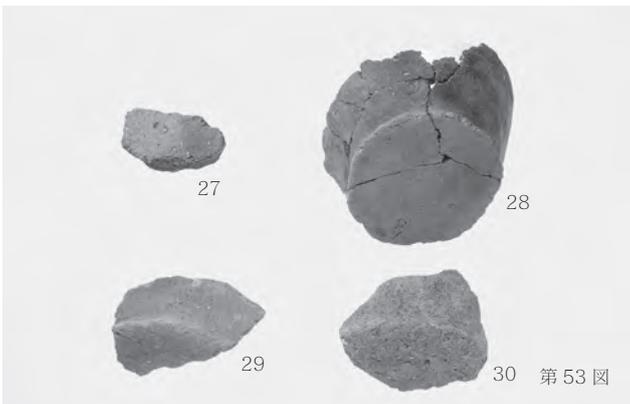




第 53 図



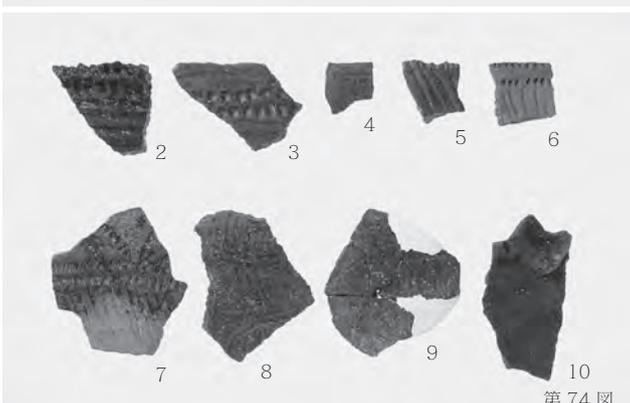
第 53 図



第 53 図



第 74 図

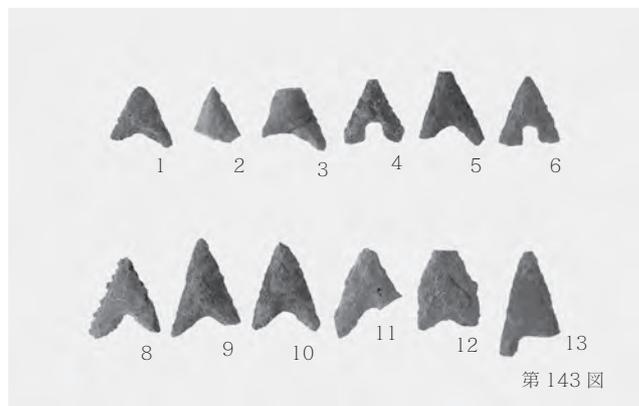


第 74 図

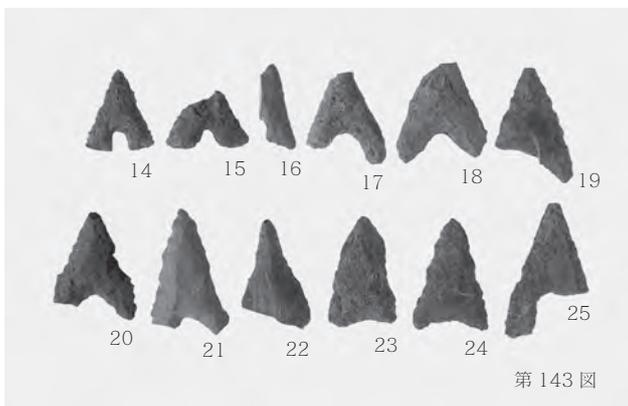


第 74 図

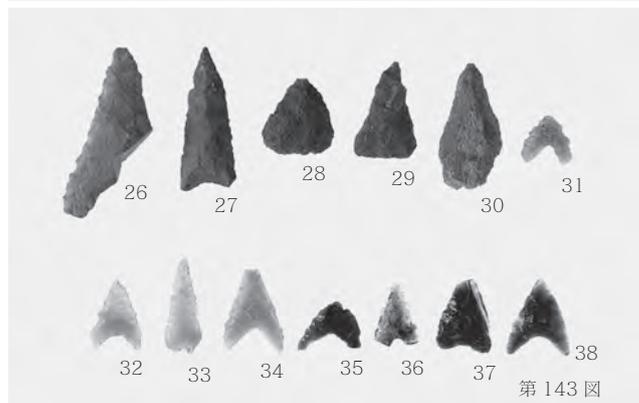




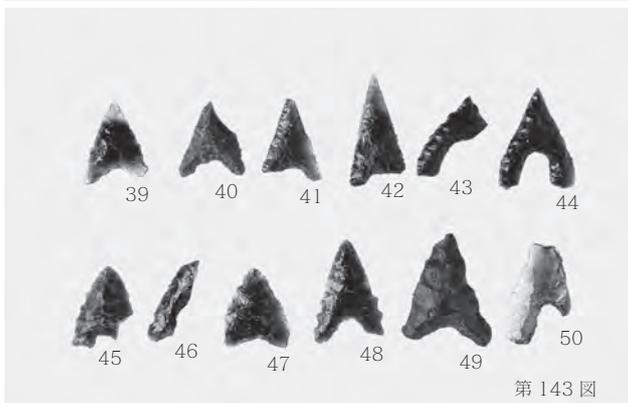
第 143 図



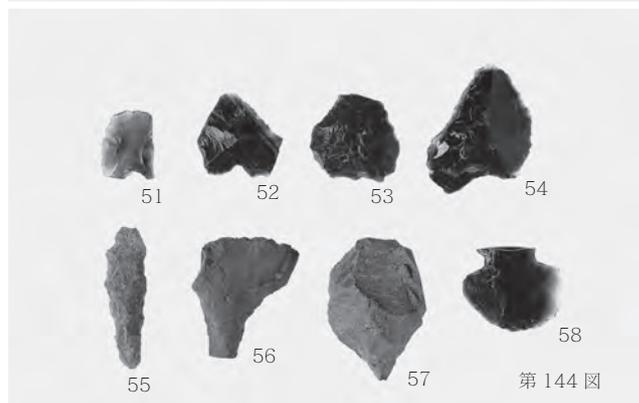
第 143 図



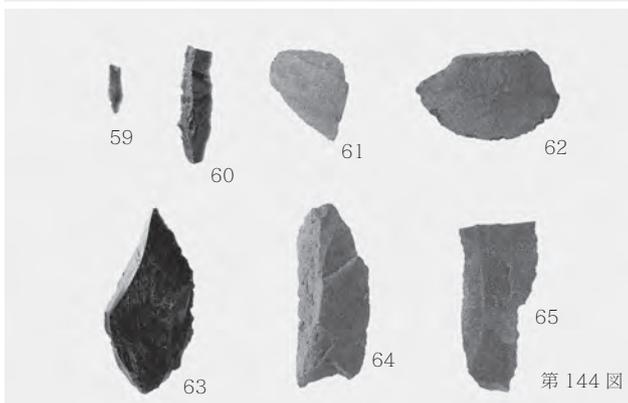
第 143 図



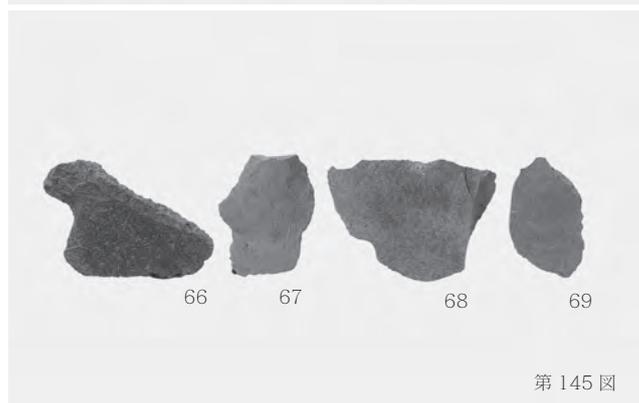
第 143 図



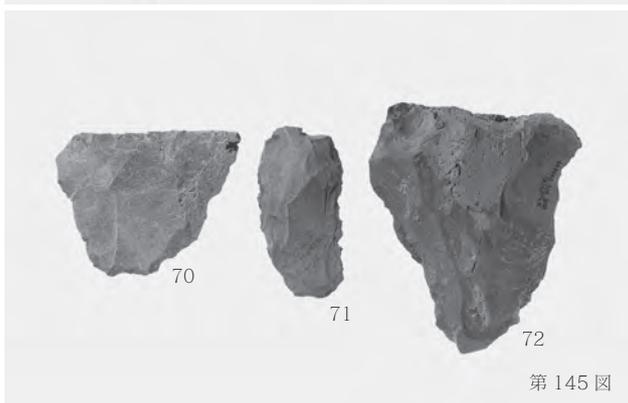
第 144 図



第 144 図



第 145 図



第 145 図



第 146 図



第 146 図



土製品等①



第 148 图-24



第 148 图-25



第 148 图-26



第 148 图-27



第 148 图-28



第 148 图-35



第 148 图-29



第 148 图-32



第 148 图-30



第 148 图-33



第 148 图-34



第 153 図-13 ①



第 153 図-13 ②



第 154 図-24 ②



第 154 図-24 ①



第 158 図



第 154 図-24 ③

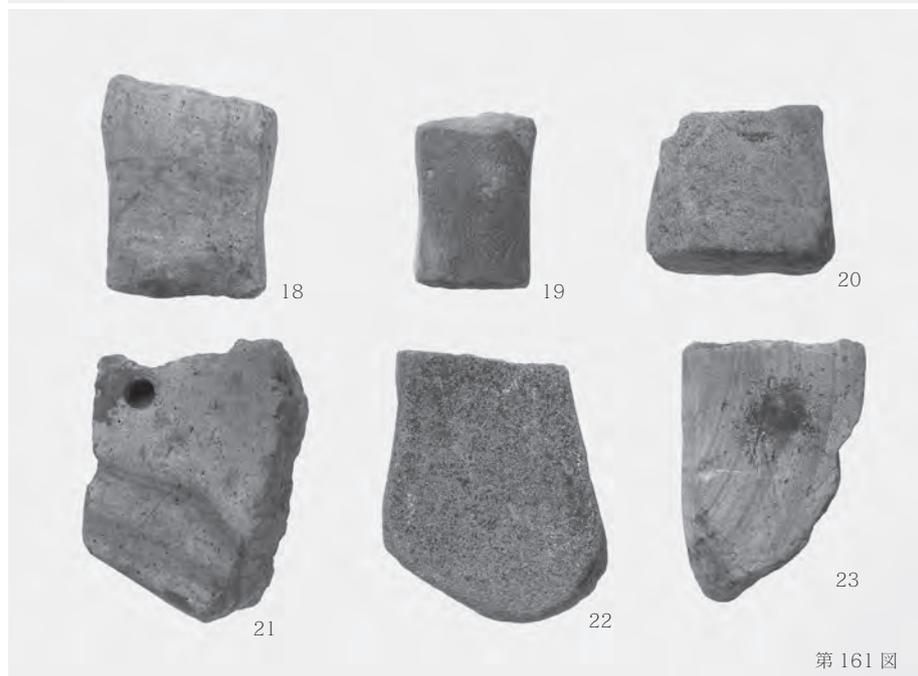
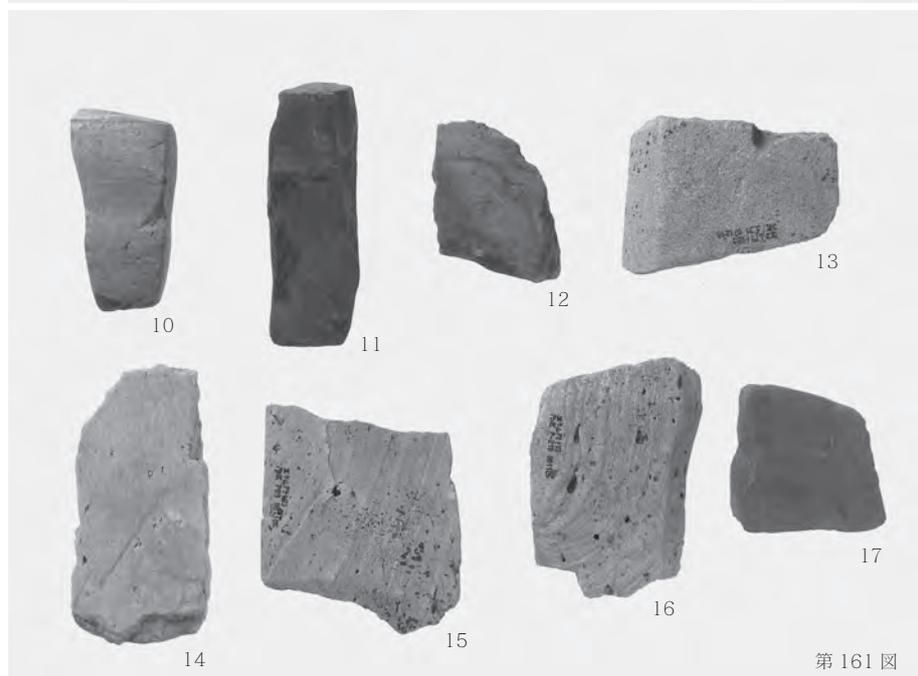
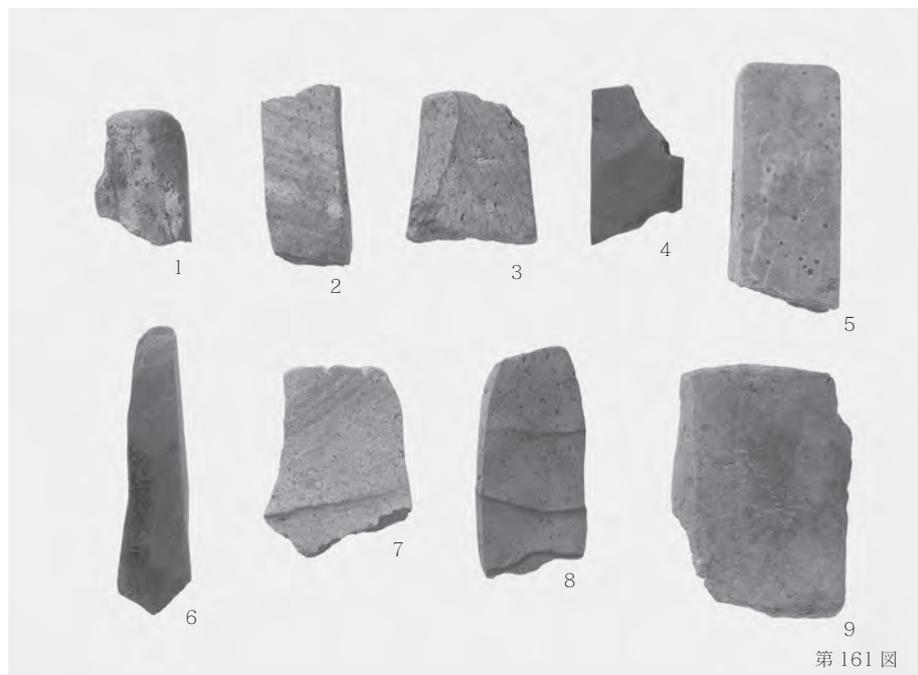


第 159 図-52



第 159 図-53

石製品等



砥石①



第 161 图

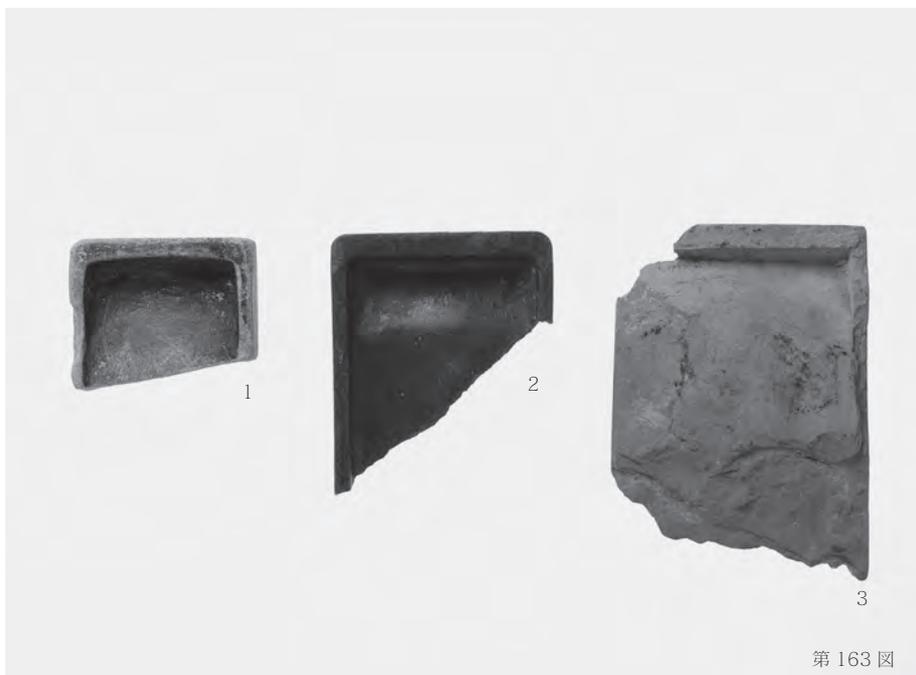


第 162 图



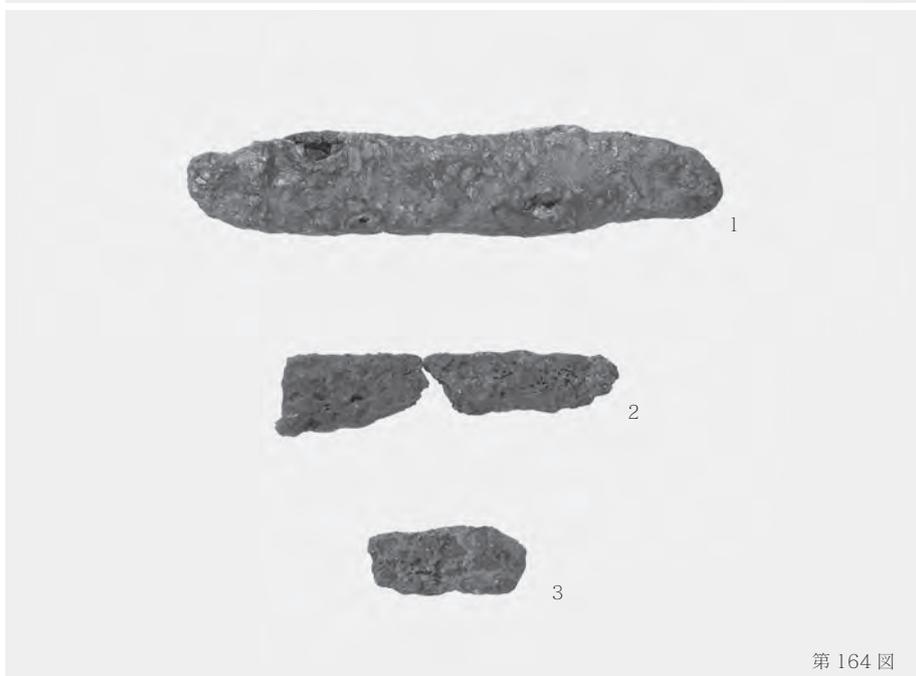
第 162 图

砥石②

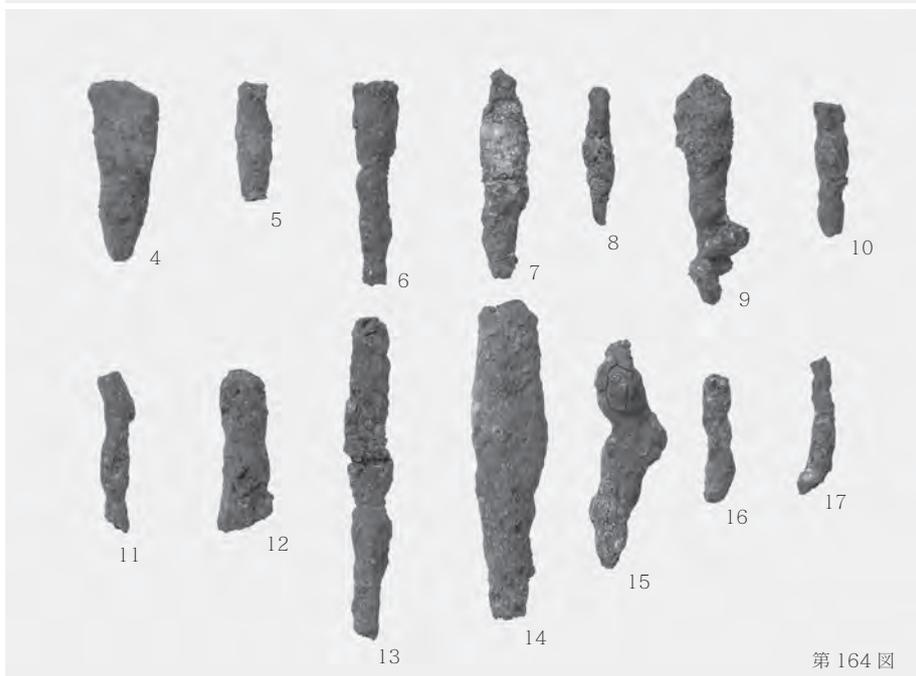


第 163 図

硯

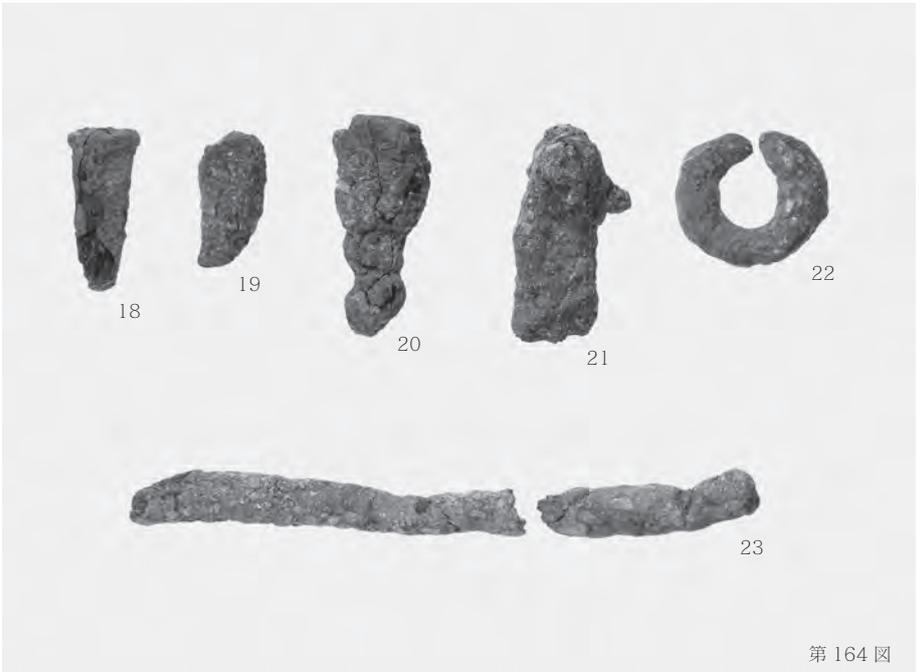


第 164 図



第 164 図

鉄製品



第 164 図



第 165 図

鉄製品

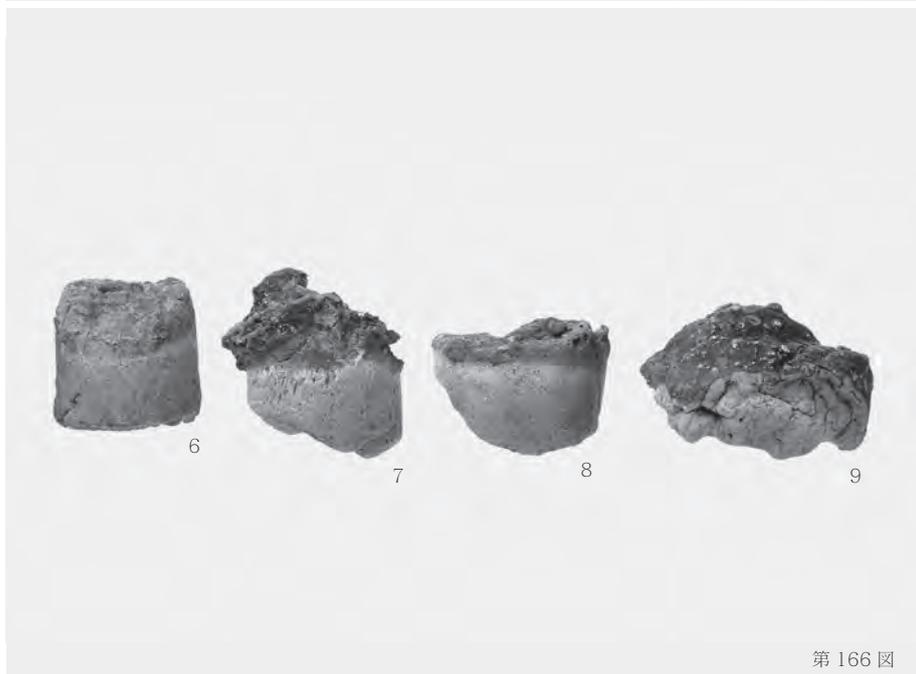


第 165 図

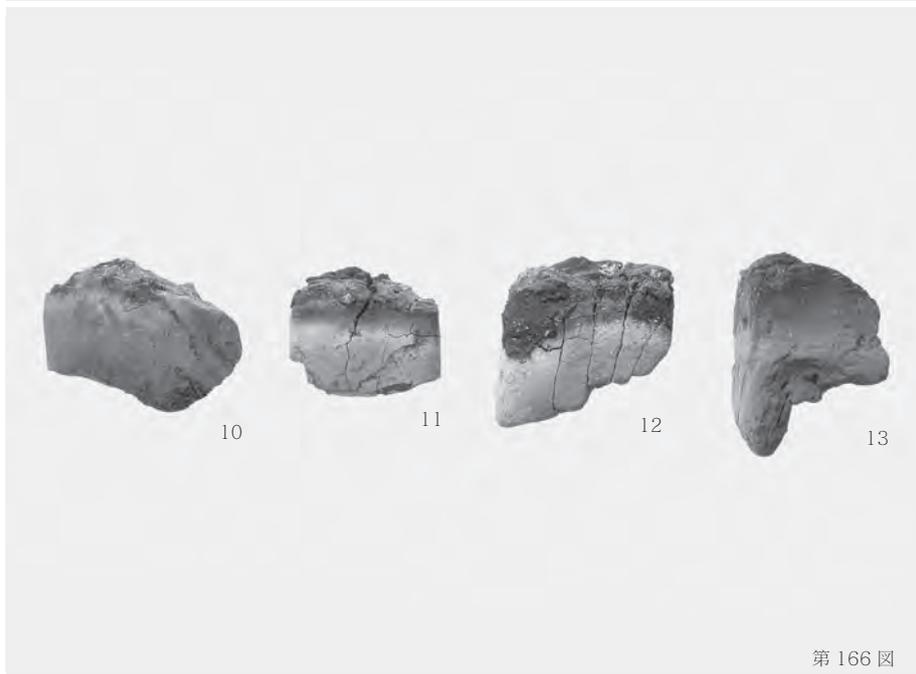
他の金属製品



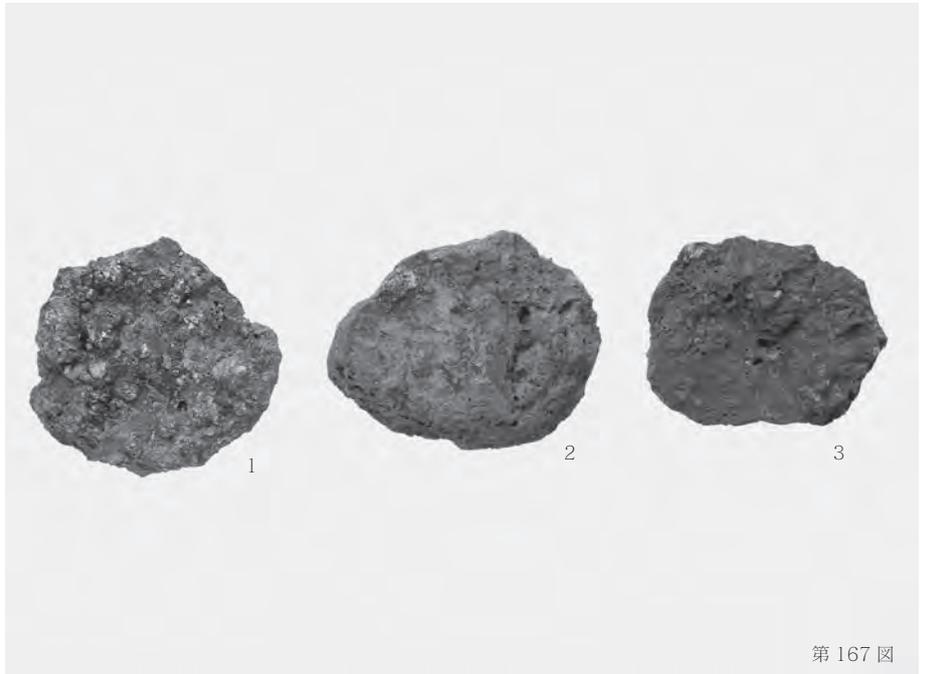
第 166 图



第 166 图



第 166 图



第 167 図



第 167 図



第 167 図

鉄滓

報告書抄録

ふりがな	ごかやまいち							
書名	五ヶ山 I							
副書名	福岡県営五ヶ山ダム関係文化財調査報告 II							
巻次								
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 2 3 7 集							
編著者名	今井涼子・岡寺未幾・岸本圭・佐々木隆彦・飛野博文・吉田東明							
編集機関	九州歴史資料館							
所在地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3							
発行年月日	2013年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		(㎡)	
ごかやまおおいせき 五ヶ山大野遺跡	ふくおかけんちくしぐんなかがわまち ごかやまあざなかのはる 福岡県筑紫郡那珂川町五ヶ山字中ノ原28番地・36番地	403059	220541 0325	33° 24' 8"	130° 24' 35"	2005.01.25 ～ 2005.03.04	160	福岡県営五ヶ山ダム建設
ごかやまかわぐちいせき 五ヶ山川口遺跡	ふくおかけんちくしぐんなかがわまち ごかやまあざかわぐち 福岡県筑紫郡那珂川町五ヶ山字川口	403059	0327	33° 25' 16"	130° 25' 17"	2005.08.11 ～ 2005.09.13	3,190	
ごかやまあみとりいせき 五ヶ山網取遺跡	ふくおかけんちくしぐんなかがわまち ごかやまあざあみとり 福岡県筑紫郡那珂川町五ヶ山字網取	403059	0326	33° 25' 28"	130° 25' 12"	2006.04.19 ～ 2009.2.27	300	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
五ヶ山大野遺跡	石造物	近世	盛土・石造物	土師器・陶磁器				
五ヶ山川口遺跡	石造物	近世	土坑・集石	五輪塔				
五ヶ山網取遺跡	集落跡	縄文時代	包含層・竪穴建物・方形土坑・土坑・集石遺構	縄文土器・石器				
		中世・近世	掘立柱建物・柵列・土坑・溝・井戸・石列・鍛冶遺構・採石遺構・備蓄銭・埋甕	土器・陶磁器・石製品・土製品・金属製品		区画溝 備蓄銭		
概 要	五ヶ山大野遺跡・五ヶ山川口遺跡では石造物の調査を実施した。五ヶ山網取遺跡では縄文時代早期・後期の竪穴建物の発掘調査を実施した。また中近世集落跡の発掘調査を実施し、数多くの遺構、遺物に恵まれた。再埋納された備蓄銭の調査も実施した。							

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年度 24	登録番号 0008

五ヶ山 I

福岡県文化財調査報告書 第237集

平成25年3月31日

発行 九州歴史資料館
福岡県小都市三沢5208-3

印刷 株式会社 三光
福岡市博多区山王1丁目14-4